SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL
2008.8.15. No.101
JOURNAL

★ 目　次 ★

シリーズ 世界の遺跡・日本の遺跡22　ショーヴェ洞窟 ―フランス―……1
古の道具箱　細石刃……堤　隆……2
発掘された道路状遺構……尾見智志……4
考古学雑記……中島芳榮……8
編集後記……8

世界の遺跡・日本の遺跡22

ショーヴェ洞窟

―フランス―

1994年12月18日、洞窟の名ともなったショーヴェら３人の洞穴学者によってフランス南部アルデシュ県で発見されたのが、後期旧石器時代のショーヴェ洞窟である。

そのキャンバスに描かれた壁画のすばらしさもさることながら、その年代がきわめて大きな議論を学会に巻き起こした。放射性炭素年代によって約３万2000年前の測定結果が出されたからである。

有名なフランスのラスコーの洞窟壁画は、１万5000年前ほどの年代でとらえられているが、その倍以上の古さをはじき出したショーヴェ洞窟は、驚愕そのものといえた。この年代を採用するなら、後期旧石器時代の開始期より人々は洞窟のキャンバスに絵を描いていたことになる。

ショーベ洞窟の壁画は、分かっているだけで260の動物画があり、それ以外の絵も含めると総数は300点を超すものとみられる。

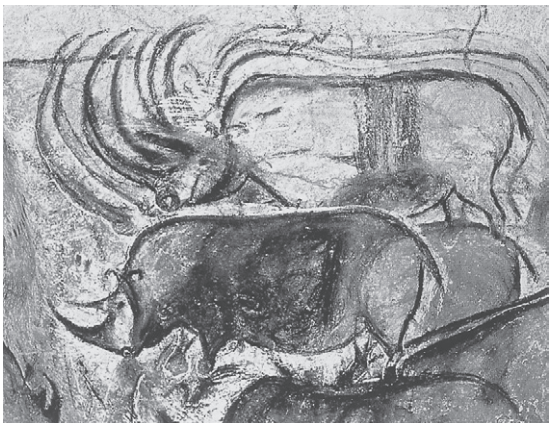
また、クマの頭蓋骨が置かれた祭壇？なども発見されている。

描かれている動物の種類をまとめると13になり、マンモスやサイ、ライオンのほか、フクロウやハイエナやヒョウなど、これまでの氷河時代の壁画にはあまり見られなかった動物も含まれている。どのような意図をもって、これらの動物が描かれたのか。

ライオンの頬は、ボカシの手法を使ってまるで本物の膨らみのように立体感がある。サイは、今にも動き出しそうなほど躍動感がある。

フランス・ショーベの３万年前の画家たちは、20世紀パリのモンマルトルに住んだピカソやゴッホ、マティスらの画家たちに負けず劣らず、すばらしい絵画を今に伝えてくれているのである。

ショーヴェ洞窟のライオン



ショーヴェ洞窟のサイ

Data

細石刃（さいせきじん）

- 時　代　旧石器時代末（14,000年前）
- 出土地　中ッ原５Ｂ遺跡
- 大きさ　幅１㎝未満　長さ１～４㎝
- 用　途　道具の刃

氷河時代、野辺山の草原を駆け抜けた狩人のたちが携えていたのが、細石刃と呼ばれる道具である。

カミソリの刃のような小型石器、この石器をいくつか細い軸にはさみ込んで、槍やナイフとして使ったらしい。今から14,000年前の道具で、素材には黒曜石などが好んで用いられた。

この細い石の刃を、はがし取るのは至難の業で、押圧剥離（おうあつはくり）と呼ばれる技法が用いられた。押圧剥離とは、石に角（つの）などを押し付けて、圧力で薄いカケラをはがし取る方法である。

細石刃の遺跡は、野辺山の矢出川（やでがわ）遺跡で、昭和28年に発見されたのを皮切りに、いまでは1,800か所に達する遺跡が、鹿児島から北海道まで全国各地で発見されている。

佐久地方の細石刃の遺跡には、野辺山高原の矢出川遺跡や中ッ原５Ｂ遺跡、中ッ原１Ｇ遺跡のほか、佐久市志賀の天神尾根遺跡などがある。

※　前回までのシリーズ「考古逸品」にかわり、新シリーズ「古の道具箱」を101号よりスタートします。

先人たちの道具箱を拝見し、使われてきた道具の数々から、人々の暮らしをさぐるシリーズです。

細石刃（さいせきじん）

堤　隆

細石刃（野辺山中ッ原５Ｂ遺跡）

発掘された道路状遺構

上田市教育委員会　尾見智志

1　道路状遺構とは

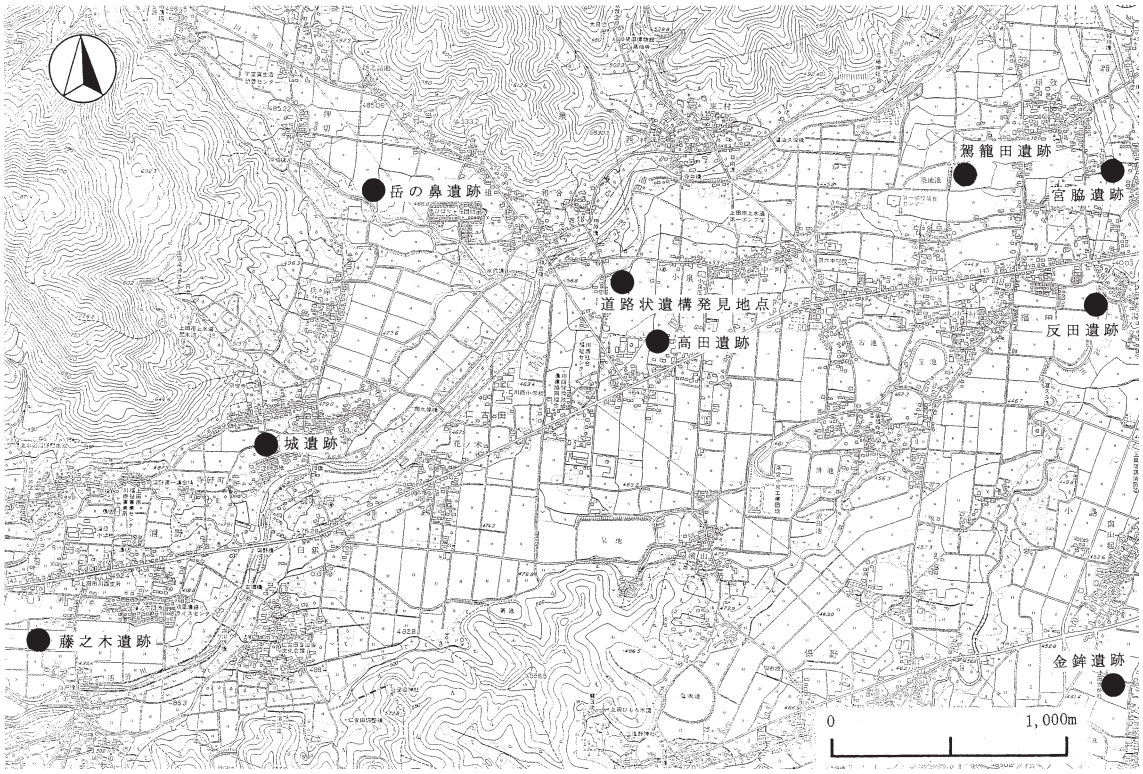
人々は生活の痕跡を遺構として土中に残しています。竪穴住居跡などはこの遺構と呼ばれるものの代表例です。道もその重要な遺構の一つです。どのようなものを考古学的に道路状遺構（道路跡）とすることができるのでしょうか。まず、道とはどういったものか考えてみると、自然発生的な「踏み分け道」と道普請を伴った「造り道」に大きく分けることができると思います。「造り道」には目的地や用途などの建設目的があることが予想されます。

次に、古代の「造り道」と推定するにはどのような検討課題があるのか考えてみたいと思います。古代の「造り道」は、国家などの公権力により政治的に造られた公道であると想定されることから、現代の道路と同様に建設・維持管理に手間も費用もかかったことでしょう。この「造り道」が公道（官道）として認識される為には平行性・直進性・普請性・規格性について検討する必要があると考えます。具体的な条件としては、①溝状遺構がほぼ平行に延びていること（平行性）②遺構が直線的に長く延びていること（直進性）③道路面を意図的に埋め戻して平坦面を造っていること（普請性）④道路面と思われる埋土に硬化面があること（普請性）⑤両側溝の心々距離に一定の規格性があること（規格性）が検討されなければならないと思います。また、⑥遺構の年代の推定⑦道の来し方・行く先についての考察が必要になると考えます。

2　小泉条里水田跡遺跡の道路状遺構

さて、上田市大字小泉に所在する小泉条里水田跡遺跡では、民間のアパート建設を原因としたトレンチ調査を実施したところ、僅か552㎡の土地から「造り道（道路状遺構）」が確認されました。この道路状遺構を前節で想定した条件に沿って検討してみます。

試掘調査については、当初は条里水田跡遺跡ということから、通常どおりバックホーによりトレンチを掘削しようとしましたが、重機のオペレーターから土が硬く重機の爪が耕作土から下に入っていかないという報告がありました。まず、その面で掘削を止めてトレンチを拡げることとしました。すぐに、第一の溝跡が



第１図　遺跡位置図

姿を現し、さらに硬化面も続いていることが確認されました。この付近は東山道通過地点に比定されていることから、道路状遺構の可能性があることが思い浮かびました。そこで、巻き尺で第一の溝跡から12mを測った地点に第二の溝跡の検出を期待したところ、予測どおり確認されました。

遺構は、側溝付きの道路跡を約６ｍにわたって確認しました。道路幅は、両側溝の心々距離が約12mでした。側溝は、幅1.7～2.0mで断面形は舟底状を呈し、確認面からの深さは31cmありました。道路面については上部を水田耕作等により削平されていると思われますが、叩き締められていました。この硬化面の土壌は砂と黄褐色土が混じった人工的なものでした。道路状遺構の構造は土層観察から、地山を掘削した窪地に均質な砂と土の混じった土を入れて叩き締めて硬化面を形成した後に、側溝を造っていると思われます。（トレンチの北端では検出面と同じレベルから地山が確認されています。）この遺構発見地点は浦野川の河岸段丘上の崖に沿った場所で渡河地点付近である可能性があることと、道が段丘上から渡河地点に下る直前の場所に位置することから土砂の流失を抑える構造になっているとも考えることができます。

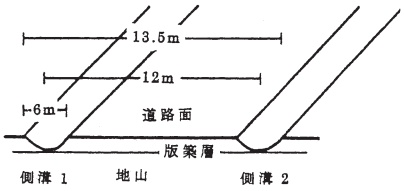
また、この道路状遺構の時代を特定するものは確認されていませんが、側溝跡の埋土からは土師器と弥生土器の小破片が出土していることから、土師器の所属する時代以降の側溝であることが考えられます。すなわち、古代の遺構の可能性が高いことが考えられます。

このように、小泉条里水田跡遺跡の道路状遺構では、調査範囲が狭いものの、①溝状遺構がほぼ平行に延びていること（平行性）②遺構が直線的に長く延びていること（直進性）③道路面を意図的に埋め戻して平坦面を造っていること（普請性）④道路面と思われる埋土に硬化面があること（普請性）⑤両側溝の心々距離が約12mという規格性があること（規格性）を確認することができました。また、⑥道路状遺構の所属時代については、年代を特定するものは確認されていませんが、古代以降の「造り道」であることが想定されることから東山道の遺構の可能性が高いことが考えられます。

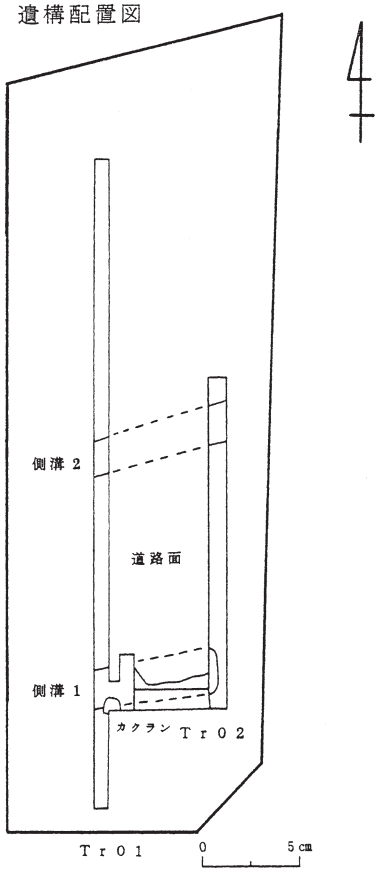
３　県内の事例

長野県内における東山道については考古学的な検証

遺構模式図



遺構配置図



第２図　小泉条里水田跡遺跡の道路状遺構

が行われた事例は数えるほどですが、まず、県内の奈良・平安時代に所属すると思われる道路状遺構の様相を確認してみます。

箕輪町の大道上遺跡では、春日街道に沿って道路状遺構が確認されています。ここでは、側溝と思われる溝跡一本と道路面と思われる硬化面の一部が確認されています。僅かに確認されているもう一本の溝跡を側溝と仮定すると、心々距離約９ｍのものとなります。側溝の幅は約２ｍでした。

青木村では、昭和63年の秋に保福寺道の街道筋で東山道の道筋と推定されている「せばっと」地点が発掘調査されました。私も実際に遺構の実測を行いましたので、当時の所見を述べておきたいと思います。調査地区は幅約2.8mを約30mにわたって細長く調査を行いました。私が実測を行った時には、すでに礫群が露出してしまっており、道路状遺構としての原形は不明でした。確認された遺構としては、路底に配置された礫群・路面の両脇に位置する側溝でした。僅かに残る側溝の痕跡と土層断面から、幅は両側溝心々距離約２ｍ・溝を含めた幅は約3.2m・側溝の幅は約60～70㎝・溝の断面形は舟底状を呈すると思われます。また、土層の断面観察から道路面と思われる土層は他の土層と比べて締まりがある状態でした。検出された礫群は側溝との位置関係から、路面を形成している土砂の流失を防ぐためのものと考えられました。また、この道路状遺構の所属する時代を判断する遺物等は確認できなかったものの、山間部の地形に手を加えて窪地を造ったり、道路に側溝を設置したり、礫を埋め込むなどの路面の形成に手間のかかる普請を行っていたことが確認されました。

上田市の駕籠田遺跡では、奈良から平安時代にかけての掘立柱建物集落を通過すると思われる道路状遺構が確認されています。幅は両側溝心々距離約4.5m・両側溝を含めた幅は約６ｍの二本の平行した溝跡が約15mにわたって確認されました。残存する痕跡をつなぎ合わせると約40mになります。重機による表土剥ぎの時に確認された側溝の痕跡からすると、西側はわずかに北西に曲がって延びているようにみえました。路面は土地の削平により確認できませんでした。側溝の幅は約90㎝・断面形はＵ字状を呈しています。道路状遺構は、他の遺構がほとんど無く、地盤の固い場所を通過していました。ただ、道路状遺構は八世紀中頃の竪穴住居を切っていることから、それ以降のものと考えることができます。また、付近を推定東山道が通過していることから、そこから枝分かれした支道とみることができます。

上田市の国分遺跡群の堂浦地籍（堂浦遺跡）では、幅が両側の溝心々距離約９ｍ・両側溝を含めた幅は約10mの二本の平行した溝跡が約15mにわたって確認されています。路面は削平により確認できていませんが、僅かに土層断面に道路面を形成していたと思われる堅緻な土層が報告されています。側溝の幅は約140㎝・断面形は舟底状を呈しています。道路状遺構は、掘立柱建物の間で、他の遺構があまりない場所を通過しています。また、この遺構は、南は信濃国分寺の瓦窯跡の西側の傾斜地に到達して段丘面を下ると思われます。しかし、そのまま南進すると瓦窯跡の作業空間（窯の周辺には瓦の製作場や瓦・薪などの保管施設等が必要になると思われます。）を縦断してしまうと思われることと、南進ルートを少し西に移動させても、尼寺跡にぶつかってしまうことから、尼寺を大きく迂回して西側から信濃国分寺の正面にでるルートが妥当であろうと思われます。

このように、これまでの長野県における道路状遺構の事例は削平が著しく、その状況は不明確なものでした。そこで、より詳細な事例を県外に探してみたいと思います。

４　県外の事例

関東地方では東山道と推定されている道路状遺構の事例が多数確認されています。そのため、道路状遺構の様相についてはかなり詳しくわかってきています。次に、道の規格を中心に主な遺跡を取り上げて比較してみたいと思います。

群馬県新田町の下原宿遺跡では道路は両側溝心々距離約12mです。側溝の幅は1.7～2.4mで側溝の断面形は舟底状を呈しています。

栃木県宇都宮市の杉村遺跡では道路は両側溝心々距離が段丘上で約15m・低地で12～13mです。側溝の幅は1.8～2.1mで側溝の断面形は舟底状を呈しています。

栃木県南那須町の厩久保遺跡でも「将軍道」と呼ばれていた幅２ｍ程の小道が発掘調査により、東山道に比定できる道であることがわかりました。この遺跡では、八世紀代の路面幅は4.7～5.5mで九世紀前半は5.25～6.3mでした。

また、東山道武蔵路と推定される東京都国分寺市の武蔵国分寺跡北西地区では両側溝心々距離約12mの道路状遺構が約９ｍのものに改修された状況が確認されています。側溝の断面形は、逆台形状を呈しています。

道路の規格は、関東地方の事例でも地形の制約などにより多少の幅をもっています。しかし、小泉条里水田跡遺跡の道路状遺構の規格も、その範疇に含まれる値であることから、ほぼ似た規格で造られていたことがわかります。そう考えると、今回発見された道が関東地方まで続いていたことが現実味をおびてくるように感じられます。

5　東山道との関係

以上、小泉条里水田跡遺跡の道路状遺構について検討を行い、当該道路状遺構が古代の道路跡であった可能性が高いことがはっきりしてきました。次に、この道路状遺構が東山道である可能性についてａ遺構の規格・構造、ｂ遺構の所属時期、ｃ遺構の位置関係からまとめておきたいと思います。

ａ遺構の規格・構造は、関東地方を中心とした平野部を通過する推定東山道の遺構とほぼ同一のものであることがわかります。このことは、律令体制下での統一した方針で道造りを実施させていたことになります。ただし、青木村の「せばっと」地点のような山間部の峠道は、３ｍ前後の狭い規格となっていることも想定されます。ｂ遺構の所属時期については、決定的な証拠はないものの、側溝跡の埋土から出土した土器片から古代以降に属する遺構であることが推定されます。また、ｃ遺構の位置（立地）について考えると、北は小泉の山塊が浦野川付近まで迫り、蛇行した河川は河岸段丘を形成しており、広く直進性をもった道を造ることは困難な場所です。南は高田遺跡という奈良から平安時代にかけての集落が発掘調査されていますが、道路状遺構は確認されていません。残された場所として、段丘崖から高田遺跡の間の200ｍ程しかない段丘崖に沿った当該地しかありません。そう考えると、この場所に東山道が通過しているとしても不思議はありません。また､当該地から一段下の河岸段丘上には｢大道下」と呼ばれる地籍が隣接しています。「大道」とは「東山道」のことを指していることから、この土地のことを「大道下」と呼んでいたと考えると納得がいきます。なお、大道下地籍にも遺跡（大道下遺跡）が存在しますが、発掘調査の結果から奈良・平安時代の遺構は確認されませんでした。

これらのことから、小泉条里水田跡遺跡の道路状遺構は奈良時代から平安時代にかけて川西地方を通過していた東山道の一部である可能性が高いと思われます。

6　東山道のルート

東山道のルートについては、黒坂周平氏の論考（吉川弘文館『東山道の実証的研究』1992）が知られています。黒坂氏は、川西地方のルートについては築地・町小泉・和合を経て浦野川を渡りその河岸段丘上に上って岡・浦野各地区を結んでいたのではないかと推定していますが、具体的な路線については不明な点が多くありました。従って、小泉条里水田跡遺跡の道路状遺構は推定東山道の起点となり得る発見です。ここから東方へは駕籠田遺跡の北側を通過して、近世の保福寺道に一部が重なりながら延びていると思われます。西方へは、浦野川を渡り岡城跡の北側を通過して、保福寺峠へと向かうものと思われます。この推定ルートに沿うように高田遺跡・駕籠田遺跡・宮脇遺跡などの掘立柱建物を計画的に配置した集落がみられます。

川西地方は、細長い平坦部と河川に制約された地形の中に実際に発掘調査がされた遺跡が点在していることから、おおよそのルートの推定が可能となりました。今後は、この仮説をより確実かつ詳細に解明することが必要になってくると思われます。

7　おわりに

本論では川西地方で確認された道路状遺構について①～⑦の検討課題を設定して、東山道の可能性を確認してきました。さらに、そのルートについても推測してみました。その結果、この道路状遺構が東山道である可能性が高いことを確認できました。

しかし、依然としてはっきりとしないことが多く、推定の域を出ません。小泉条里水田跡遺跡の道路状遺構は東山道を考える上での重要な発見になるとは思いますが、調査範囲も狭く、この発見は一つの点に過ぎません。しかし、ここを起点として調査を進めることにより点が増えて線となり、東山道のルートが解明されることが期待されます。そして、駅や国分寺・国府を含めた古代史の実態に迫ることができればと思います。

参考・引用文献

青木村誌刊行会　1994『青木村誌 歴史編 上』
上田市教育委員会　2006『平成十七年度・市内遺跡』
上田市教育委員会　1999『駕籠田遺跡』
上田市教育委員会　2002『国分遺跡群』
上田市教育委員会　1991『大道下』
上田市教育委員会　1991『高田』
上田市教育委員会　1994『高田Ⅱ』
上田市教育委員会　1999『高田Ⅲ』
上田市教育委員会　1998『浦田Ａ・宮脇遺跡』
上田市立信濃国分寺資料館　1997『東山道と国分寺』
黒坂周平　1992『東山道の実証的研究』吉川弘文館
古代交通研究会　1998『古代交通研究第８号』
古代交通研究会　2000『古代交通研究第10号』
古代交通研究会　1999『古代交通研究会第９回大会発表要旨』
財團法人古代學協會　1997『古代文化　特集東山道をさぐる』
箕輪町教育委員会　1996『大道上遺跡』
尾見智志　2006「発掘された道路状遺構について」『千曲』第130号

考古学雑記

中島芳榮

野辺山暮らしが23年、沼津の暮らし、東京の暮らしの年月を越えてどこよりも長くなりました。

山の暮らしがしたくて野辺山に来たところ、ここが旧石器の故郷と分かった時の驚き。東京で暮らしていた時は、埼玉や千葉方面に古墳を見にいったり縄文土器を拾いに行ったりと考古学に興味津々でした。そのうちに石器の勉強がしたくなって無理やり明治大学の聴講生にして戴いたのに、行ってみたら鏡の授業でチンプンカンプン、見事数回で挫折しました。

さて野辺山に越した当時、知り合いは誰もいませんでした。毎日自転車で村中を走ったり歩いたりしていましたが、一番近くの家まで歩いて20分かかります。その人から私のことを聞いたと始めて村の人が尋ねてきました。それが土屋忠芳さんです。しばらくしてお宅に伺ったところ見事な石器類がいきなり目に飛び込んできました。数日後表採に連れて行って頂き、私はすっかり石器の虜。土屋さんの若夫婦とはどれだけあちこちの表採にご一緒したかわかりません。

15年近く前は本当によく拾えました。もちろんもっと昔はザックザックとあったのでしょうが。一時は夢のように本当に興奮するほどありました。

忠芳さんのお勧めで佐久考古学会に入れて頂き今日に至りますが、やはりただ興味があるだけで入っていていいものかと最近は考えてしまいます。

ここ数年で由井茂也さんや由井昭さん忠芳さんが亡くなり寂しくなりました。晩年になって茂也さんと昭さんと、私の運転で昔の思いでを語りながらあちこちの遺跡を巡る機会がありまして、私はこんなに贅沢な時間があって良いものかと感動の一日を過ごしたことがあります。茂也さんは両手を使いながら饒舌に考古学への思いを語って下さいましたし、昭さんの表採の話しもとても面白く聞かせて頂きました。

南牧村の旧石器の発掘は、堤さんらの八ヶ岳旧石器グループの調査に積極的に参加しました。手弁当の発掘によくあれだけ集まるもので、考古学好きというのは特別な熱い感情があるように思えてなりません。

さて、野辺山に越してから数年で動植物の宝庫であった我が家に近い高原がまたたく間に畑に開墾されてしまいました。歩いて数分の所です。珍しい植物が群生していましたし、野鳥の営巣地としても知られていました。その一面緑の高原がまる裸に変わったのです。あのショックは今だに忘れられません。すぐにでも引っ越したいと思ったほどですが、もちろん貧乏人ですからそんなことができるわけがありません。

しばらくしてあちこちの表採も少なくなったと思案中に、畑の収穫が終わった頃、記念碑の上の畑を歩いたら土器片が散らばっているではありませんか。矢尻も須恵器のかけらも黒耀石の剥片も、甕の一部等々も。それから畑に日参です。何しろ歩いて数分ですから。旧石器ではないのですが行けば何かしらの遺物がありました。しかし量的にはそれほど多くはありません。そのうちに旧石器時代の遺物はここにはないのかと思いつつ記念碑の下の畑を一枚ずつ丁寧に歩きましたが、何しろ広大な土地ですので何日もかかりました。

しかし矢尻は拾うのですがここからは土器片が見つかりません。何日目かして諦めようした時、腰を抜かすほどびっくりするとはこのことかと……。大きな黒耀石かけらが畑のあちこちにあるではありませんか。今まで私が見たことがないものです。ここにも又何日も何日も通いました。いっいっても畑から顔を出しているのです。もう数年も通っているので最近は小さい物が目立ちますが、時にはまだどきっとするようなものもあります。私は研究者ではありませんのでこの石器らしき物が一体いつ頃の時代でこれが何なのかわかりませんし、今まで南牧での黒耀石の遺物では見たことが無いような気もします。その上この畑でしか拾えないのです。これらの黒耀石の運命はどうなるのでしょうか。ちょっと気になるこの頃です。

♪　編集後記　♪

考古学とは何か。「社会の役に立たない学問」誰かが答えた。よく考えると役に立たないどころか、世の中の迷惑になっているふしがある。開発事業のたびに工事がストップし、倒産したところもあるという。私の背中には開発者の積年の恨みがのしかかっている。

温故知新などときれい事をいっても、差し迫った開発業者の耳には響かない。さすれば文化財保護法を盾に発掘をこなすしかないのだ。

膨大な金がつぎ込んでなされる発掘調査の必要性についての説明責任を、私たちはほんとうにはたしているのだろうか。　（堤）

佐久考古通信　№101

発行所　佐　久　考　古　学　会

〒384-0091 小諸市御影新田1945-6
桜井　秀雄　方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267（22）8536

発行者　藤　沢　平　治
編集者　堤　　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL JOURNAL
2009. 1. 23.　No.102

★ 目　次 ★

シリーズ 日本の遺跡・世界の遺跡23　海尻城 —長野県—……1
信濃の道後、坂東の道口—小諸市宮ノ反Ａ遺跡の可能性—……田 中 広 明……2
浅間山南麓の東山道を歩く……高 橋 陽 一……7
首都大学東京による北相木村の洞窟・岩陰遺跡調査……藤 森 英 二……11
新刊紹介『考古学が語る 佐久の古代史』……12

世界の遺跡・日本の遺跡23

海　尻　城

—長野県—

一昨年のＮＨＫ大河ドラマでは、戦国時代の信州が大いに取り上げられた。ここ佐久地域も当然舞台となったが、ご存知の通り佐久は武田氏に蹂躙されるといった歴史を持っている。

さてドラマなどでは、若き武田晴信（信玄）が、初陣にて平賀源心（玄信）の守る海ノ口城（南牧村）を攻略する場面が華々しく語られたりもするが、これは平賀源心という人物の存在も含め、史実かどうか疑わしい。実際はその規模などから、海ノ口城は対岸の海尻城（南牧村）の支城という見方が多い。

八ヶ岳の尾根が千曲川に落ち込む東端に位置する海尻城は、北は大月川による深い谷、南も谷底の湿地といった、天然の堀により守られていた山城である。さらに尾根の続く西側には深い堀切が造られ、今もその痕跡が残されている。

また尾根上の本曲輪（主郭）までの遊歩道も整備され、現海尻集落から日陰窪医王院・諏訪神社を含んだ、城の構造を体感することが出来る。詳しい説明版が設置されているのもありがたい。

もともとの城主については諸説あり、伴野系、あるは佐久に進出した村上の出城ともいわれているが、佐久側（信州側）のいずれかではあろう。しかし天文９年（1540年）の武田による佐久侵攻以降は、武田側の信州進出における足がかりとされ、武田につく井出氏が城主となったと考えられている。

いずれにせよ甲州と信州を結ぶ交通の要衝であり、攻める側にとっても守る側にとっても、重要な地点だったことは想像に難くない。幾多の人馬がこの地を駆け抜けたのだろう。

今は城の面影を残しつつも、戦国の風雲をよそに、ひっそりと千曲川を見下ろしている。ぜひ訪ねてみたい山城である。

主郭とされる尾根の先端部付近

南側の湿地（田）から見た大堀切

信濃の道後、坂東の道口

―小諸市宮ノ反Ａ遺跡の可能性―

田中広明

はじめに

信濃の国は、路の国である。西から東山道が東に向かい、北へ北国街道、南へ遠州街道が向かう。路は、人が行き交い、物資が行き交い、情報が行き交う。この路の建設と整備には、今も昔も国家と地域の戦略的な思惑が介在する。

７世紀後半、古代国家は、地域を評としてまとめ、いくつかの評（郡）をまとめて国を建て、都から国司を派遣した。国司や勅使は、通過する国の入り口となる道口の郡、出口となる道後の郡を通過する。

そして、道口、道後の郡は、国境で行われた儀式、「境迎え」に重要な役割を果たした。道口、道後の郡は、さまざまな負担があったが、その中心となったのが、駅家と郡家であった。

さて、信濃国では、伊那郡が道口、佐久郡が道後の郡に当たり、伊那郡では、飯田市恒川遺跡が郡（評）家とされる。しかし、佐久郡は、未だ郡（評）家に直結する建物群の発見はない。

けれども、ここに取り上げる小諸市宮ノ反Ａ遺跡を始め、佐久市聖原遺跡や前田遺跡などでは、集落内の掘立柱建物の比率が高く、郡家の機能を一部補完していたと考えられている。とくに宮ノ反Ａ遺跡群は、発掘調査の当初から、古代の官衙か豪族の居宅とされた遺跡である。

この宮ノ反Ａ遺跡には、忘れられない思い出がある。いまから15年前の夏の昼下がり、長野県埋蔵文化財センターの上田事務所で、調査担当者の宇賀神誠司氏から「この遺跡には、望楼や大形建物があり、高麗尺を用いた区画や建物群のあとに、唐尺を用いた区画や建物群に転換します。これは官衙ですか、豪族の居宅ですか。」と熱い質問を浴びせられ、答えに窮した。

時は過ぎ、平成20年の現在、私は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団から長野県埋蔵文化財センターに派遣され、佐久市西近津遺跡群を調査する好機を与えられた。西近津遺跡群を調査しつつも宇賀神氏のことばは、棘のように心に刺さり、いつも抜きたく思っていた。

さいわい、櫻井秀雄氏の紹介によって、この宿題の答えを、本紙に啓上させていただくこととなった。

さて、本稿では、まず宮ノ反Ａ遺跡群の構造を宇賀神氏の考察に基づき解明し、そこから古代佐久郡の諸問題を考える糸口としたい。そして、信濃国の道後である佐久郡が、坂東の道口であるという特殊性を浮き彫りにしてみたい。

１、宮ノ反Ａ遺跡群の特徴

小諸市御影新田の宮ノ反Ａ遺跡群は、宇賀神氏によって、「居館跡」または、「官衙跡」としてまとめられた。まず、長野県埋蔵文化財センターの『年報10』（宇賀神 1993）では、「居館跡」の理由として、

①「方形囲繞施設」によって囲まれる。
②「貧相な四脚門」を構える。
③角柱の主屋（平地式建物）と脇屋がある。
④掘り方の深い「望楼的施設」がある。
⑤造営尺が、高麗尺の段階と唐尺の段階がある。

等が、簡潔で短い文章の中に鋭く指摘された。これが、正式の調査報告書（宇賀神 1999）では、「旧官衙」「新官衙」（以後、通例に従い「Ⅰ期官衙」「Ⅱ期官衙」とする）として報告されていく。その過程には、筆者の計り知れないさまざまな曲折があったようである。

そこで、宇賀神氏の着目した五つの特徴について、７世紀末から８世紀前半の東国古代社会という枠組みのなかで、再検討することとする。

⑴　方形区画溝

まず、「方形囲繞施設」である。私は、単に「区画施設」または「方形区画」、あるいは「院」と呼んでいる。宮ノ反Ａ遺跡群は、方形だけの区画（Ⅰ期官衙）から、前面にもう一つの空間を増築した（Ⅱ期官衙）という。しかも高麗尺を用いた150尺（52.5m）から、唐尺を用いた200尺（60m）＋100尺（30m）と報告されている。

西側の区画溝や区画の角部が未調査のため、東西幅は明確ではないが、唐尺200尺は超える。

ところで、宮ノ反Ａ遺跡群の区画施設と共通する遺跡として、群馬県前橋市と高崎市にまたがる下東西・清水上遺跡がある。溝で方形の区画と前面の区画を作り出す。やはり、７世紀末から８世紀前半と共通する。

区画溝は、二重の平行する溝であり、築地の存在した可能性が高い。また、南側に牛池川があり、その複雑な地形も空間の編成に関係しているといえる。

岡山県岡山市津寺遺跡も共通点が多い。津寺遺跡は、土壙を連続したような区画溝（通称「繭溝」）が、方形にめぐる。やはり、７世紀末から８世紀初頭に作られている。こちらは、一重の溝であることから低い土塁か垣根と考えられている。

さて、宮ノ反Ａ遺跡群であるが、高麗尺、唐尺の問

題はひとまずおき、区画溝の構造について考えたい。報告書によると北辺の６号溝は、東西の中央付近で二条になり、土層断面図では、掘り直しの痕跡が確認できる。つまり、本来、４･５号溝に対応する細い（旧）６号溝があり、太く直線的な２・３号溝の開削にともない直線的で太い（新）６号溝を開削したと考えたい。

なお、５号溝は、津寺遺跡のような繭溝である。このような溝は、官衙遺跡によくみられる。掘削作業の単位（工区、人区）といわれる。

また、１から３号溝は、土層観察によって北側に土塁を築いていたことが確認されている。６号溝も南側に土塁の存在を予測できる。それは、６号溝と平行して作られた９世紀第Ⅰ四半期の79号竪穴住居が、ヒントとなる。この住居のカマドの煙道が、土塁に立ち上がるからである。この点から土塁の幅は３ｍとなる。

さらにⅠ期官衙の４・５号溝は、「ブロック層」で人為的に埋め戻されていた。宮ノ反Ａ遺跡群に与えられた歴史的役割が、大きく転換したことが読み取れる。

⑵　門

門は、官衙や寺院には、欠かせない建築物である。なぜならば、門こそ､官衙や寺院の格を表象する「顔」だからである。

ただし、地方官衙や豪族の家で門の登場は、７世紀末まで下る。一般的に門の規模は、施設の格に匹敵する。郡家や城柵、国府などの政庁院は八脚門、官人の宿泊する館（たち）は八脚門か四脚門、正倉院は二脚の棟門（むなもん）か冠木門（かぶきもん）である。また、都城の貴族の邸宅は四脚門であり、地方豪族の家も四脚門か棟門であった。

さて、宮ノ反Ａ遺跡群の門は、四本の角柱を30㎝前後、打ち込んで作られていた。このような門は、他に類例が無い。あえて見つけるならば、郡家正倉院の土橋状となる位置に小穴を穿ち、門とする事例である。

東京都北区御殿前遺跡（武蔵国豊島郡家）、福岡県御井郡大刀洗町上高橋･下高橋遺跡（筑後国御井郡家）、茨城県つくば市中原遺跡（常陸国河内郡家）などにみられる。

その柱穴からは、大きな門柱を建てて門扉を取り付けたような門は想定できない。細い柱を建て、標（しめ）をはった社の入り口のような門であろう。『北野天神縁起絵巻』に登場する富豪の家の入り口が、参考となる。門からは、宮ノ反Ａ遺跡は、地方官衙の正倉か豪族の家がふさわしい。

⑶　主屋と脇屋

報告によると、Ⅰ期官衙では66号掘立柱建物、Ⅱ期官衙では72号掘立柱建物が「主屋」とされ、63～65号掘立柱建物がⅠ期官衙の「脇屋」、73号掘立柱建物がⅡ期官衙の「脇屋」とされた。

主屋と脇屋の判断は、区画溝の入り口（門）を中心とした建物を主屋、それ以外を脇屋としている。

まず、建物の変遷を推定したい。Ⅰ期官衙は、四棟の三間屋が並列するが、66号掘立柱建物と63号掘立柱建物の隣棟間隔が広く、ここにもう１棟、将来建てる

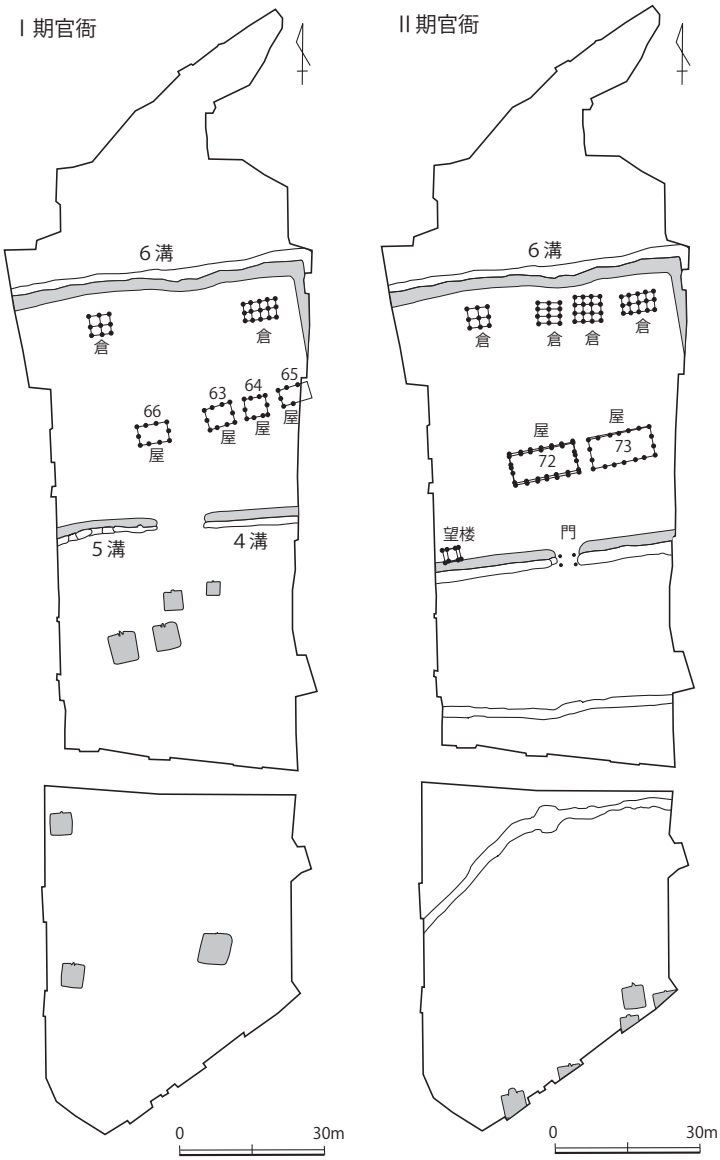


図１　宮ノ反Ａ遺跡の変遷

計画をしていたらしい。四棟の並びに76号竪穴住居がある。須恵器の盤を模倣した黒色土器が出土したことから、Ⅰ期官衙の竪穴住居とすると、66号掘立柱建物との間に１棟建てる余地が残る。

しかし、66号掘立柱建物から64号掘立柱建物の３棟は、柱が抜き取られているが、65号掘立柱建物の柱は、抜き取られず柱痕跡を残す。これは、Ⅰ期官衙の四棟に次ぐ第５棟を建てる前に、Ⅱ期官衙の編成が始まり、72号掘立柱建物を建てる必要性が生じたのである。六間屋（梁間３間×桁行６間）は、Ⅰ期官衙の建物群と近く、互いの軒が当たるため併存は難しい。

ではなぜ、六間屋がこの位置に建てられたのであろう。それは、２棟の六間屋の南桁行きが、南辺溝の１号溝と北辺溝の６号溝の中間に一致するように建てたためである。つまり報告のように、唐尺300尺の二分の一に並行して六間屋を建てたのである。

また、72号掘立柱建物は、一回建て替えて柱が抜き取られていたが、73号掘立柱建物は、建て替えず、柱も抜き取られなかった。このことは、建物群の西側に存在する余地を含めると、72号（旧）掘立柱建物の後、73号掘立柱建物が建てられ、72号（新）掘立柱建物を建てたと考えられる。

その後、西側に第３棟を建てる計画でいたか、72号（旧）掘立柱建物の後、72号（新）掘立柱建物を建て、73号掘立柱建物を建てた後、余地を残しながらこの場から移転したと考えたい。

いずれにせよ掘立柱建物群は、区画の東側に寄って建てられ、西側に余地が残る。門の南側の区画も東側に掘立柱建物群、西側に竪穴住居群という編成である。

さらに、北辺の６号溝に接して、総柱の倉庫が４棟確認できる。Ⅰ期官衙２棟、Ⅱ期官衙２棟が作られた。４棟が、同時に存在した可能性もある。倉庫は、３間、または４間の総柱建物である。豪族の家の倉庫は、二間倉が多いので明らかに格が異なる。地方官衙の正倉に匹敵する。しかし、郡家の正倉ならば多数の倉庫が、連続して造営されたはずである。

大形の六間屋も郡家の正倉院に総柱建物群とともに登場する大形の「屋（おく）」と共通する。大形総柱建物が、永年蓄稲（えいねんちくとう）を目的とした不動倉（ふどうそう）とするならば、大形六間屋は、出挙（すいこ）や賑給（しんごう）を目的とした動用倉（どうようそう）といわれている。

宮ノ反Ａ遺跡の大形六間屋も動用倉と考えておきたい。宮ノ反Ａ遺跡は、大形屋や倉庫からも豪族の家より郡家の正倉に近いといえる。

⑷　望　楼

「望楼」とされる建物は、ほぼ同一の場所に建て替えられた。73号竪穴住居跡（７世紀末）が埋没した後に建てられたため、Ⅱ期官衙にかかわる遺構といえる。35号掘立柱建物は、柱が抜き取られ、34号掘立柱建物は、柱痕跡を残すことから、35号→34号という変遷をたどれる。「望楼」とは「１間×１間の掘立柱建物としては非常に深い柱穴の掘方（80cmを超える）」を根拠としている。

ところで、古代の建物で「楼」と表現される建物は、重層、２階建て以上の建物をさす。なかでも、「楼閣」には、重層階に日常上がった形跡はない。たとえば法隆寺の中門、金堂などは、２階に床を張らず階段もない。著名な楼閣としては、大阪府大阪市の難波宮八角楼、奈良県橿原市の藤原宮東西楼などがある。

なお、平城京では、営繕令（えいぜんりょう）で「凡私第宅、皆不レ得下起二楼閣一臨中視人家上」と規定され、楼閣の建築は制限されていた。ちなみに藤原仲麻呂は、彼の邸宅「田村第」に楼閣を建て孝謙天皇の宮殿を臨んだことで、厳しく非難を浴び、恵美押勝（えみのおしかつ）の乱につながった。

また、京都府大山崎町に営まれた第四次山城国府には、「三間楼一宇」があった。これは、『朝野群載（ちょうやぐんさい）』の延喜８年（908）11月11日太政官符で、河陽離宮（かやりきゅう）の「雑舎四宇」が、山城国府の官舎として下され、その中の１棟に三間楼が登場するからである。三間楼とは、梁間、桁行きとも３間の重層建物である。

さて、宮ノ反Ａ遺跡で「望楼」とした建物は、柱を埋めた掘り方が深かったことから、一般の建物よりも高い建物が想定されていたのだが、以上のような重層建物ではなく、物見やぐらのような「遠くを観察する建物」であったと考えたい。

しかし、東北地方の城柵にみられる外郭土塁に取り付いた「櫓」とは異なる。東北地方のように軍事的に緊張した地域社会を背景に立てられた「櫓」は、周囲を監視、観察する「望楼」が必要であろうが、信濃国佐久郡のような比較的安定した地域社会では、必要はない。あえて、高い場所から遠くを観察する必要があるならば、駅路を往来する派遣官の点検や、「烽火（とぶひ）」の観察などである。

ところで、菅原道真の漢詩を集めた『菅家文草』に「駅楼」ということばがある。菅原道真が、讃岐国守として下向する途中、播磨国明石駅（兵庫県明石市）に立ち寄ったとき、「題二驛楼一壁」という詩（第243番）を詠んでいる。明石の「駅楼」は、明石駅家に設置された壁のある重層建物ということとなる。駅楼は見晴らしが良いため、漢詩を詠む絶景のビューポイントだったのであろう。

宮ノ反Ａ遺跡群の「望楼」が、この「駅楼」的な施設とすれば、区画の西側に主要な交通路や景観が、存在したのかもしれない。

⑸　集落の変遷

図２は、宮ノ反Ａ遺跡の竪穴住居数の変化を示した。まず、６世紀後葉から竪穴住居のみの集落が始まる。

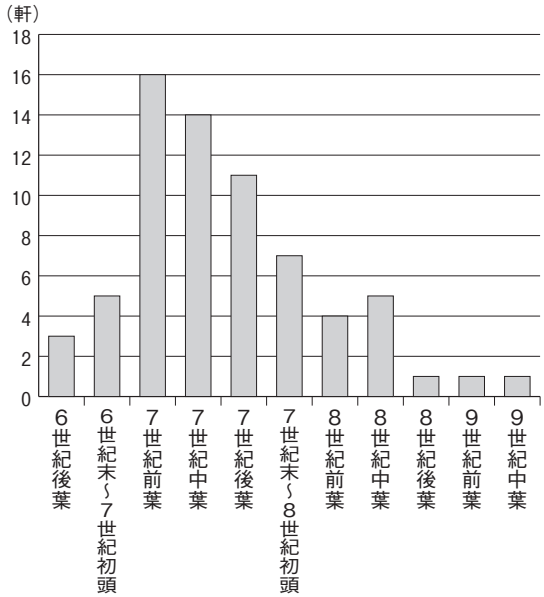


図２　宮ノ反Ａ遺跡の竪穴住居数

７世紀初頭までは、小さな集落であったが、７世紀前葉に爆発的な成長を遂げる。その後、徐々に竪穴住居数を減らしていった。

それが、Ⅰ期官衙の登場した７世紀末から８世紀初頭になると、住居数は最盛期の半数となる。このグラフからは、竪穴住居数が、次第に減少し、集落が衰退したようにみえるが、集落は官衙域から排除され、調査区の南側に編成されたためである。

単純な集落から官衙へ変貌したため、竪穴住居も単なる農村集落ではなく、官衙機能を展開する役割が負わされた。具体的には、館の厨（くりや）や郡家の厨家（くりや）などの給食、駅子や雑任などの居住などである。

８世紀後葉以降は、Ⅱ期官衙の消滅とともに宮ノ反Ａ遺跡は、急速に衰退する。官衙としての機能が移転したのである。宮ノ反Ａ遺跡は、その後、班田農村として生き残ったが、８世紀後葉には、徐々に解体していった。

⑹　墨書土器「長倉寺」

墨書土器や木簡の出土は、官衙遺跡の性格を論証する有効な手段となる。しかし、宮ノ反Ａ遺跡は、一般的に墨書土器の出土が増加する８世紀中葉を待たずに消滅、または移転した。

ところで、宮ノ反Ａ遺跡群の東方の佐久市前田遺跡から、「長倉寺」または「長倉□」と書かれた墨書土器が出土した。この土器は、９世紀第Ⅰ四半期の黒色土器であるが、墨書文字は、草書体に近く、仮名文字の可能性を残す。他の墨書土器と明らかに異なり、仮名文字を伝習した知識人や僧侶の可能性が高い。

ところで、『延喜式』には、信濃国東山道第十一駅「長倉駅」、御牧として登場する「長倉牧」、「神名帳」の佐久郡三座の一つ「長倉神社」がみられる。墨書土器の「長倉寺」は、この「長倉」と一致する地名である。堤隆氏は、軽井沢町長倉に御牧の「長倉牧」、佐久市小田井の「上ノ駅」「中ノ駅」「下ノ駅」付近に東山道の「長倉駅」、御代田町鋳師屋遺跡群をその駅戸の集落と指摘された（堤 1998）。

また、『吾妻鏡』仁治２年（1241）の「信濃国長倉保」、軽井沢町追分諏訪神社の『紙本墨書大般若経』（応永17〔1410〕年）に「信州佐久郡大井荘長倉郷追分大明神之御宝」とあり、この「長倉」地域は、佐久郡大井郷内の地名とされる。

この大井郷については、佐久市長土呂の西近津遺跡群から、多数の「大井」とかかれた墨書、刻書土器が、発見されており、西近津遺跡群に郷の拠点や、「大井」という集団が居住していたことを指摘できる。

ところで、「長倉寺」等の元となった「長倉」とは、どのような倉であろうか。一般的に古代の倉は、総柱の方形建物であるが、「長倉」は、桁行きの長い大形の倉庫を指すと考えたい。集落内の象徴的な倉、あるいは古代国家が設置した郡家正倉や駅倉などの象徴的な倉と考えたい。

「長倉」の具体像として、宮ノ反Ａ遺跡で発見された六間屋をこれとしたい。この六間屋が、永年蓄稲を目的とした不動倉の総柱建物ではなく、収納物の出し入れに容易な側柱建物であることから、駅家の運営を支えた駅稲を貯えた倉庫（駅倉）と考えたい。

東山道駅路が、８世紀前半に整備にかかわり、宮ノ反Ａ遺跡に巨大な「長倉」を造営し、この「長倉」にちなみ、ここを「長倉」と呼んだのであろう。

２、信濃国佐久郡の宮ノ反Ａ遺跡

前述のとおり、宮ノ反Ａ遺跡の諸施設は、郡家の正倉や豪族の居宅というよりも、「長倉」という地に置かれた佐久郡家の正倉別院（郡内に別置された正倉、郷倉）か、長倉駅家を運営する「駅倉」である。

なお、方形の区画を仮に「駅倉院」とすると、その南面の区画は、駅子の家屋、あるいは、官人たちへ食事を提供する「厨院」、そして掘立柱建物群の集中する東側は、その実務棟群となる。

そして、宮ノ反Ａ遺跡と佐久郡家との関係、佐久市前田遺跡や御代田町野火付遺跡、同町前田遺跡から出土した墨書土器「倉」「大工」「大田」との関係、駅馬と牛馬の焼印などが、新たな課題として浮上する。

⑴　佐久郡家と宮ノ反Ａ遺跡

佐久郡家は、従来から川原寺式軒丸瓦の出土した佐久市長土呂付近が有望視されていた。ここ数年、近くの西近津遺跡群が発掘調査され、佐久郡家とのかかわ

りが議論されている。しかし、郡家の政庁や正倉群などの発見には、まだ至っていない。

かりに瓦の出土地が、郡領層の営んだ古代寺院の跡とすると、近くに郡家や郡司たちの居宅、郡家を支えた郡雑任たちの私宅などが、あったと考えられる。また、西近津遺跡群から多数出土する「大井」の文字史料は、佐久郡家を支えた「郡家郷」である「大井郷」の中心的な集落であることを如実に語っている。

郷名の「大井」は、この郷のどこかにあった象徴的な大井戸（井泉）に由来するのであろう。井戸にかかわる地名伝承は、『常陸国風土記』にも倭建命の伝説とともに頻出する。四度の使い、調庸の運京などで都鄙を往反する人々にとって、水はまさに命の源であった。

おそらく、佐久地方特有の田切りの谷津頭や崖線から浅間山麓の伏流水が、尽きることなく滾々と湧き出る井泉があり、そこを「大井」と呼んだのであろう。そこはまた、地域を束ねる郡領層の手中にあり、神聖な水を用いた祭りの場であった。

そして、大井郷が、佐久郡家にかかわる食事の供給を担っていたとすると、「大井」の土器は、佐久郡家、あるいは大井郷家の厨家で管理されたことになる。

とするならば、大井郷の厨には、別の郷からの土器が供出されていた可能性がある。佐久市上久保田向遺跡から出土した墨書土器「刑部」は、大井郷内の遺跡でありながら、千曲川の対岸にあった刑部郷から大井郷に向けて運ばれた土器と理解したい。

このように大井郷は、古東山道のオアシスとして古墳時代から成長し、千曲川に沿って越後へ向かう北国街道と東山道がＴ字路で分岐する場所に長倉駅家が置かれ、その駅家を経営するために設置された「駅倉院」が、宮ノ反Ａ遺跡群と考えたい。

⑵　墨書土器「大工」「大田」「田後□」「倉」

佐久市前田遺跡、御代田町野火付遺跡からは、「大田」という墨書土器が出土した。「大田」は、屯倉の耕作にかかわる大田部や屯倉の「御田」を示す。前田遺跡や野火付遺跡に王家の「大田」があったこととなる。

「大田」があるならば、収穫された稲を貯蔵、運用する倉、「御倉」も近くにあったはずである。やや離れるが、小諸市鋳物師屋遺跡の小形倉庫群は、郷倉とも指摘された遺跡である。倉庫群の周囲を方形の区画溝がめぐる「倉院」である。

宮ノ反Ａ遺跡周辺で、このように屯倉や駅家にかかわる遺跡や墨書土器が発見されるのは、古代国家が地域支配を推進していく拠点であったからと考えたい。

かりに平川南氏が指摘したように（平川 1996）、屋代木簡の示す初期の国府が、千曲市更埴条里遺跡周辺に存在していたならば、宮ノ反Ａ遺跡付近から西へ向かう道は、東山道の支路（「科野路」）ということとなる。

ところで、古墳時代後期の佐久地方を見わたすと、大形前方後円墳や大形方墳など強大な地域権力の存在は確認できない。また、群馬県西部の生産に窯業製品の一部は依存していた。佐久地方は、強大な群馬県西部の経済的地域圏に組み込まれていたのである。

しかし、古代国家は、令制国の編成に当たり、佐久地域を上毛野国としてくくるのではなく、科野国としてその道後の郡とした。ところが、奈良時代になっても経済的には、群馬県西部との結びつきが強かった。現在でも「関東の玄関」といわれるように、経済的に佐久郡は、「坂東の道口」の郡であり続けたのである。

⑶　「長倉駅」と牛馬の焼印

駅家で用いた駅馬は、「厩牧令」によって中中戸の駅子が、飼育することとなっていた。そして、中路である東山道は、長倉駅に10頭の駅馬を置き、佐久郡家に国府や他の郡家との連絡用に５頭の伝馬を置くこととなっていた。

さらに、佐久地域では、中央の左右馬寮へ官馬、王臣家や貴族の厩へ私馬を送る負担を課せられた。当然のことだが、これら義務的な馬の飼育以上、私的に馬を飼育していたと考えられる。この豊富な馬の飼育は、浅間山麓に展開した「牧」を背景に進められた。

家と馬のかかわりを示すひとつの資料が、牛馬にも押した「焼印」である。鉄製の角棒の一端を敲き、ハート形にして文字の一部を作り、複数の鉄棒を組み合わせて複雑な印文を作る。反対側を木製の柄に挿入して焼印は完成する。焼印の文字は、地名やウジ名、役所名の一部を用いる。

ことに宮ノ反Ａ遺跡の近くでは、焼印がまとまって４点出土している。このような集中は、他国にもみられない。焼印は聖原遺跡、芝宮遺跡群（下曽根遺跡）、栗毛坂遺跡群、中原遺跡群から出土した。聖原遺跡では「金」、中原遺跡群では「止」、下曽根遺跡では「入」という文字が判読できる。

しかも、当該遺跡の墨書土器に、同一の文字が確認できる。焼印の文字は、同一集落の同一集団が、共有する文字であった。それは、「家号」ともいえる。

しかもこの４遺跡は、大井郷内の遺跡である。この点を踏まえると、近接する集落で保有する馬が、他の馬と混用されることや馬盗人を防ぎ、あるいは「市」では、商標としての目的があったと考えられる。

ただし、自らが育てた家畜やペットならば、顔つきや毛並み、斑点などで個体識別はできるだろう。この表示は、国家が必要とする駅馬や軍団の馬、左右馬寮に送る馬などで個体識別が、必要とされるときである。ちなみに古代国家は、「牧牛馬帳」に基づいて牛馬の全国把握に努めていた。

ところで、多数の馬を葬った土壙が発見された御代田町野火付遺跡を始めとし、佐久地域の古代遺跡では、相当数の馬の埋葬土壙が確認されている。駅家や牧でも「金」や「止」、「入」などの焼印を押された馬が、使役されていたと考えられる。

ま と め

小諸市宮ノ反Ａ遺跡は、豪族の居宅や地方官衙とされながら、その歴史的位置付けが曖昧だった。本稿では、発見された遺構群を宇賀神氏の分析に基づき検証した。その結果、同遺跡が、東山道長倉駅の「駅倉」であった可能性を指摘した。

その答えを導く手続きとして、この遺跡を特徴付ける方形区画、建物群、門、望楼などの遺構が、どのような地方官衙や豪族の居宅と共通するかを検討した。また、近隣の遺跡から出土した墨書土器を検討し、「長倉」とかかわる遺跡であることを指摘した。

宮ノ反Ａ遺跡をこのように考えることで、『延喜式』以前の東山道駅路と信濃国府への道（科野路）との結節点、佐久郡の政治的中心となった大井郷と駅家（郷）、さらに浅間山麓に展開した「牧」とのかかわりなどが明らかとなった。

しかし、上信越自動車道や長野新幹線の路線が、東山道駅路やいわゆる古東山道を横切るはずだが、現在の道路や田切りと重なるのか、古代道路の遺構は発見されていない。

また、駅家にかかわる諸施設、駅館や駅馬の厩舎、秣（まぐさ）の倉庫、駅子の家なども明らかではない。ただし、駅倉（えきそう）が、古代道路に付帯する必然性は無い。むしろ駅の運営にかかわる駅田（駅起田）の近くに設置されたはずである。

屯倉の御田などが、駅田の前身だった場合も考えられよう。佐久市前田遺跡から出土した「大田」の墨書土器は、示唆的である。

ところで、宮ノ反Ａ遺跡の「望楼」と呼ぶ遺構は、はたして物見やぐらの機能を持っていたのか。そもそも「駅楼」は、重層の建物であるから、このような貧弱な柱穴の建物ではないかもしれない。

さらに、宮ノ反Ａ遺跡の消滅も考えなくてはいけない。８世紀前半、諏方国の消滅、信濃国分寺の建立や信濃国府の移転などによって、流通や人の動きが上田市周辺に集まった。東山道駅路の路線変更や長倉駅の移転も考えられる。この一連の動きが、倉庫の建設余地を残しながら、「未完の官衙」のまま宮ノ反Ａ遺跡を廃絶した直接の原因であろう。

以上、宮ノ反Ａ遺跡の分析を通じ、「信濃国の道後、坂東の道口」となる佐久郡の地域性について、若干の考察を試みた。本稿は、土地勘の無い私には、無謀な挑戦だった。大勢の方のご叱正を乞いたい。今後も、群馬県西部の土器や東濃産灰釉陶器などを通じ、佐久地域や信濃国の問題に取り組んでみたい。

参考文献

宇賀神誠司　1999『宮ノ反Ａ遺跡他』長野県埋蔵文化財センター

小林真寿　2005『聖原』佐久市教育委員会

堤　　隆　1987『前田遺跡』御代田町教育委員会

堤　　隆　1998『御代田町誌』歴史編上 原始・古代・中世　御代田町誌編纂委員会

林　幸彦　1989『前田遺跡』佐久市教育委員会

平川　南　1996『長野県屋代遺跡群出土木簡』長野県埋蔵文化財センター

藤原直人　1999『芝宮遺跡群、中原遺跡群』長野県埋蔵文化財センター

浅間山南麓の東山道を歩く

高橋陽一

1　浅間山南麓の東山道

上田方面から東進してきた東山道（ここでは駅路を問題とする）は、小諸市諸区に推定されている清水駅を通過し、次の駅である長倉駅に向って浅間山南麓を横断するとされているが、そのルートについては主な候補が３つある。㈳長野県文化財保護協会編『信濃の東山道』や『御代田町誌』歴史編上には、３ルートについて詳細な記述があり、まとめると次のようになる。

1. 塩野ルート　　小諸市の石峠・藤塚、御代田町塩野という順に通過し、軽井沢町追分に向うルート。
2. 馬瀬口ルート　小諸市の加増から八満、乗瀬、もしくは加増から平原、御代田町馬瀬口という順に通過し、軽井沢町追分に向うルート。
3. 小田井ルート　で小諸市の乙女、三岡、御影新田、佐久市西屋敷、御代田町小田井という順に通過し、軽井沢町追分に向うルート。

それぞれ地名や地割りなどを根拠としているが、今だ道路上遺構の発見がないため、実態はつかめていない。

写真１　一志茂樹氏による清水駅推定地

写真２　弁天の泉（小諸市諸区）

そういった話を佐久考古学会でお世話になっている桜井秀雄さんとしているうちに、「実際に３つのルートを歩いてみよう。」ということになり、まず手始めとして塩野ルートを検証してみるということで、清水の駅推定地からルート上にある真楽寺まで踏査を行った。

もっとも、今回は踏査というより散歩といったほうが良いかもしれないが、歩きながら今現在の風景を観察するなかで、見たこと感じたことを、まとめてみようと思う。

２　塩野ルートについて

塩野ルートは浅間山南麓の斜面を東西に横断するルートで、かねてから東山道として有力視されている。たとえば『長野県史』通史編には、「石峠をへて藤塚を通り、北佐久郡御代田町に入り、塩野・清万をへて、北佐久郡軽井沢町の追分に続く。この道は東西に直線状にはしり、小諸市・御代田町の地籍図によると、道筋はすべてといってよいほど小字界になっている。（中略）なかでも小諸市藤塚では、平岡・前林・下林などの小字は道筋に沿って細長く続き、その東方小字夫婦岩付近には、東山道遺跡と伝える小道もある。これらの状況から、この道筋を佐久東山道のもっとも有力な道筋と想定することができよう。」とあり、また、日本歴史地名体系第20巻『長野県の地名』には、「石峠・藤塚近辺には清水駅から長倉駅に通じる古代の官道東山道の道筋に当たる。」という記述がある。

その他、高速道路と古代の官道の一致を発見し、全国を踏査した武部健一氏も著書『完全踏査古代の道』の中で「清水駅から東は、中山道や国道18号線、しなの鉄道などが千曲川とその支流に沿って南に迂回するのに対して、東山道はほぼ東北東の方向に、石峠から塩野を経て次第に標高を高めて進む。ほぼ現在の主要地方道80号小諸軽井沢線が踏襲している古い道筋である。」と記述しており、塩野ルートを東山道跡とみていることが窺える。

一方で、塩野ルートは塩野牧の推定範囲内を横断することになるから、このルートを疑問視する意見もあり、松崎岩夫氏は長野県史の指摘に対し著書『史料・地名・踏査に基づく長野県の東山道』の中で、「論拠として、二、三の地名以外には指摘が無いうえに、これらの地名も、とくに、よりどころになるようには思わない。さらに、浅間山麓の南面する急傾斜地を、西から東へ横断することは容易ではない。（中略）この地域の自然環境に詳しい道路設計に携わる技術者の意見として、このコースは往昔、水利を得るのが難しかったとみられるとされる。」と反論している。

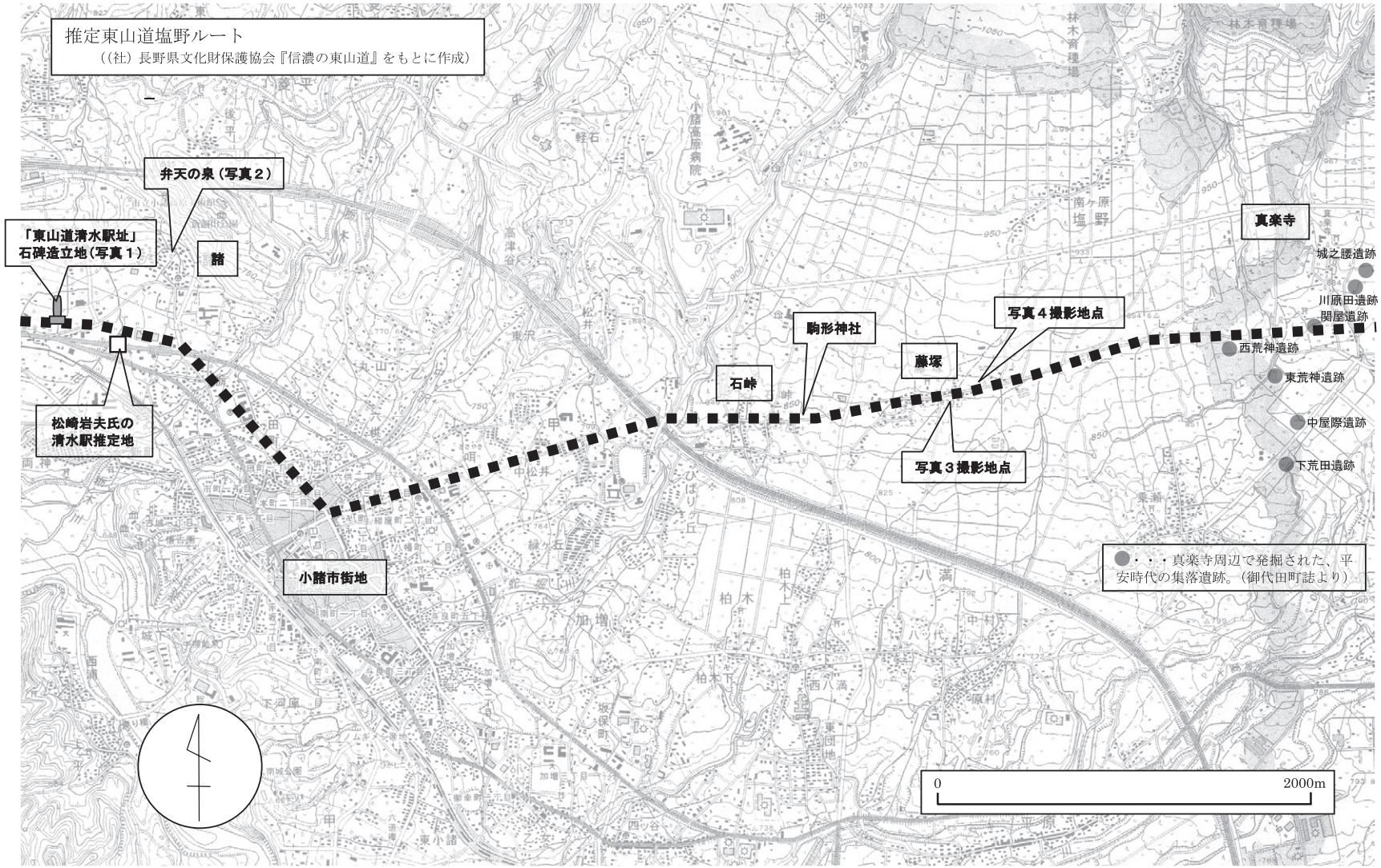
次に、遺跡の発掘事例についてみてみると、石峠・藤塚の付近にはこれといって奈良・平安時代の遺跡は発見されていない。一方、塩野付近に目をやると、奈良時代の遺跡は発見されていないが真楽寺周辺にいくつか平安時代の集落遺跡が発見されてり、この一帯は平安時代に入ってから集落経営が始まったことが窺える。中でも真楽寺の東にある川原田遺跡では、10世紀前半頃の仏堂と思われる礎石建物のほか、多くの転用硯や、「大内寺」、「大平寺」と書かれた墨書土器、そして鉄鉢形土器が出土して注目される。なお、塩野東側は天仁元（1108）年の浅間山大噴火による「追分火砕流」によって大被害を受けており、分厚い噴出物に埋もれたせいか、遺跡については発見されていない。

３　清水駅推定地

今回、踏査の出発点として清水駅推定地を選び、小諸市諸区の南端、国道18号線と国道141号線が分岐する西原交差点の北側付近の、「東山道清水駅跡」と刻まれた石碑の立つ場所に向った。

実際のところ清水駅の具体的な場所については、未だ発掘調査が行われておらず、駅家が発見されていないため不明であるが、この石碑が建つ場所は、一志茂樹氏が小字名や地割りなどから清水駅が存在したと断定した場所である（一志茂樹「清水駅址考」）。

この説に対して松崎岩夫氏は前掲著書の中で、地形等から水利の難点を指摘し、現在は18号線の下に埋没しているが、諸区の西端を流れる花川と国道18号線が


推定東山道塩野ルート
（（社）長野県文化財保護協会『信濃の東山道』をもとに作成）
弁天の泉（写真２）
「東山道清水駅址」
石碑造立地（写真１）
諏
松崎岩夫氏の
清水駅推定地
小諸市街地
石峠
駒形神社
藤塚
写真４撮影地点
写真３撮影地点
真楽寺
城之腰遺跡
川原田遺跡
関屋遺跡
西荒神遺跡
東荒神遺跡
中屋際遺跡
下荒田遺跡
・・・真楽寺周辺で発掘された、平安時代の集落遺跡。（御代田町誌より）
0
2000m

交差するあたりに駅家があったと論じている。

また、木下良氏は水利の点から「弁天の泉」付近を想定しているようである。(『完全踏査古代の道』のなかで著者が木下良氏の見解を紹介している。)

「弁天の泉」は諸区の住宅地の中にあり、良質の水が湧き出ていることで有名で、多くの人が水を汲みに訪れている。また、地元の方も生活の中で利用しており、我々が行ったときには地元の方が泉の水で洗たくをしていた。

清水駅の推定地については３者とも異なった場所を指摘しているが、いずれの意見も諸区に清水駅があったと考えているようである。なお、諸区の住宅地は、飯綱山の南斜面にあるため勾配があり、逆に清水駅の石碑がある周辺のほうが平坦で、駅家を設置するのに適しているような印象も受ける。

４　石峠から真楽寺まで

清水駅を出たあとのルートについては『信濃の東山道』にある地図をみると、清水駅から南東に位置する小諸市街地に入り、そこからほぼ真東へ進み石峠区に入るようになっている。

清水駅推定地付近の標高は約650m、小諸市街地の標高は約680m、石峠区入口付近の標高は約840mを測り、小諸市街地から石峠区までは勾配のきつい坂を登っていくことになるが、石峠区に入るとほぼ平坦になる。区内に県道80号線が通っており、今回はこの道を辿りながら周囲の環境を観察した。

県道80号線は石峠区の住宅地内に入るとほぼ直線になる。車どおりが多い道で、この道を東に進むと住宅地の境に駒形神社がある。ここに祀られている駒形石について『長野県町村誌』東信編には「里老伝曰、此地古昔の官道にして、此奇石あるより、石峠の名あり、けだし塩野牧の境にありて、古昔駒方社の神体となして祭りたるものなりと云ふ」という説明がある。駒形石と東山道とは特に関係があるわけではないと思うが、昔、ここに官道が通っていたという話は興味深い。

駒形神社を過ぎ、しばらく進むと藤塚区の住宅地に

写真３　小諸市藤塚付近

写真４　藤塚から塩野へ向かう道

入る。藤塚区の標高は約870mほどで、石峠区よりはやや標高の高い地帯である。藤塚区の住宅地を過ぎると、北側に浅間山を臨み、南側には佐久平を眺望できる風光明媚な地帯を進むことになる。坂道ではあるが緩やかに上がっていくので、歩いていても坂道であることを感じさせなかった。浅間山の南斜面とはいえ、この一帯の地形は東西にも南北にも比較的平坦で、歩きやすい。

県道80号線は小諸市と御代田町の境界あたりで蛇行し、そのまま進んでいけば真楽寺の参道入口に至る。なお、定かではないものの、真楽寺の参道を東山道の痕跡と伝えられている道が横切っており、この付近で関家遺跡の発掘調査が行われ、10世紀初頭の住居址２軒と掘立柱建物跡１棟が検出されている。

今回の踏査は、真楽寺に到着した時点で終了した。

５　今後について

当日は同会員で友人の佐藤貴彦君と望月博史君も誘って、地図を片手に４人で歩いてみたのだが、もちろん、ほんの少し歩いただけで何か判るというものではない。今後も諸々の史料等を分析し、継続的に踏査を行っていくことで、東山道が何処を通っていたか明らかにし、少しでも当時の歴史的環境を感じ取ることができたら幸いと考えている。

引用文献

㈳長野県文化財保護協会　2005『信濃の東山道』

御代田町誌編纂委員会　1998『御代田町誌』歴史編上—原始・古代・中世—

長野県　1989『長野県史』通史編　第１巻原始・古代

日本歴史地名体系第20巻『長野県の地名』　1979

武部健一　2004『完全踏査古代の道』—畿内・東海道・東山道・北陸道—　吉川弘文館

松崎岩夫　1997『史料・地名・踏査に基づく長野県の東山道』　信濃古代文化研究所

一志茂樹　1949「清水駅址考」『信濃』１巻５号

長野県　1936『長野県町村誌』東信篇

首都大学東京による北相木村の洞窟・岩陰遺跡調査

藤森英二

八ヶ岳起源の泥流の分布する南佐久一帯には、洞窟・岩陰地形が数多く分布する。このうち北相木村の相木川流域では、利渉氏の研究によると大小100を超える岩陰地形が存在する（利渉 2001）。

既にこの地帯では幾つかの考古学的調査がなされている。先ずは1965年に調査が始まった北相木村の栃原岩陰遺跡がある（西村 1982・1993など）。また後年国の史跡に指定される際、隣接する開口部も含まれ、こちらについてはトレンチ調査が行われている（大参 1984・北相木村教育委員会 2002）。さらに１㎞ほど下った小海町の天狗岩岩陰遺跡では、本会会員でもある堤・中沢氏らが調査を行った（天狗岩洞穴発掘調査団 1999）

これらを踏まえると、栃原岩陰遺跡を含む岩陰遺跡群では、縄文時代初期から近世まで、実に幅広い時期に及ぶ遺物が見られることが分かる。山間部の生活史を考える上でも、重要な意味を持つものである（藤森 2008）。

このような前提の中、一昨年（2007年）より、山田昌久教授率いる首都大学東京の考古学研究室による相木川流域の洞窟・岩陰調査が始まった。2007年には分布調査が行われた。これは先に紹介した利渉氏の調査を踏まえ、さらに考古学的見地から踏査や簡易測量を行ったもので、既に概報が出ている（亀井・山田他 2008）。

そして2008年には、分布調査の成果から、遺跡としての立地や実際に調査可能な地形等を考慮し、ノンコ岩１岩陰遺跡の調査を行った。場所は栃原岩陰遺跡の北東約50m、標高では50mほど上部に位置する岩陰である。過去の村内分布調査では、「石割用の鉄矢」などが採集されたとされる（北相木村教育委員会 1980）。

2008年９月16日から25日まで行われた発掘調査では、この岩陰内にグリッドを設定し、そのうちのいくつかについて、表面から数十㎝まで掘り込みを入れている。

出土品としては小動物の骨に加え、シカの臼歯が１点あり、人為的な行為が予想されている。また土を水洗し、ウォーターフローテーションによる微細な遺物

首都大学によるノンコ岩１岩陰遺跡の発掘調査

も取り上げており、これらについては国立大学法人総合研究大学院大学と共同で分析が継続中である。

栃原岩陰遺跡の一部を調査した経験からすると、現在大学の掘った深さの砂交じりの土層は、おそらく近世などの新しい堆積土である。この先、さらに深く掘り進むことで、より古い時代の層を見ることが出来るだろう。但し、この泥流地帯の発掘では、土中にある巨大な落盤が大きな障害となる。今回の調査でもそれは当てはまってしまった。この克服は難しいであろうが、知恵を出し合いたい。

一個人としては、行政の立場から見守る側であるが、岩陰遺跡群としての調査の、新たな第一歩になればと期待している。

参考文献

大参義一編　1984『栃原岩陰遺跡発掘調査報告書―昭和58年度―』　北相木村教育委員会

亀井　翼・山田昌久・首都大学東京考古学研究室洞窟岩陰遺跡調査団　2008「北相木村における岩陰地形分布調査」『長野県考古学会誌』123号

北相木村教育委員会　1980『遺跡詳細分布調査報告書』

北相木村教育委員会　2002『国史跡　栃原岩陰遺跡・天狗岩岩陰』北相木村教育委員会

天狗岩洞穴発掘調査団（中沢道彦・堤　隆）　1999「天狗岩洞穴の発掘調査」―弥生時代の洞穴利用―『佐久考古通信』№75

西沢寿晃　1982「栃原岩陰遺跡」『長野県史考古資料編(1)　東信地区』

西沢寿晃・藤田　敬　1993『栃原岩陰遺跡』　北相木村考古博物館

藤森英二　2008「佐久地域の洞窟・岩陰遺跡について」『長野県考古学会誌』123号

利渉幾多郎　2001「ノッチの形成史から復元される古水文史―長野県千曲川上流，北相木川のノッチと段丘を例に」『第四紀』

新＊刊＊紹＊介

『考古学が語る　佐久の古代史』

堤　隆・藤森英二・小山岳夫・冨沢一明・桜井秀雄・森泉かよ子 著

私が埼玉から佐久に移り住んだのは平成７年の３月末。まだ新幹線は無く、上信越高速道は確か小諸止まりだった。

十余年が過ぎて、佐久は大きく変わった。佐久平周辺は言うまでもないが、私の住む南佐久にだってコンビニが増えた。さらに中部横断道も建設中だ。

しかしご承知のように、この裏では多くの遺跡が消滅している。本会の中にも、そのための調査に汗した方が少なからずおられるだろう。当然、膨大な数の考古資料が生まれた。

本書はそのような資料をもとに、本会会員である６人の執筆者により、佐久の歴史を綴った一般向けの書である。旧石器から縄文、弥生、古墳時代を経て奈良平安時代、そして中世まで、駆け足ではあるが佐久の歴史をダイナミックに描き出している。個別の報告書からでは見えにくい歴史の営みを、ぜひ体験して頂きたい。

優れた石器石材による旧石器時代からの道。「焼町土器」に代表される、現れては消える縄文土器型式。「赤い土器」を育んだ弥生時代の大集落。形象埴輪さえ生み出した後期古墳と馬との係り。８つの郷、３つの御牧、東山道、そして佐久郡衙の謎に迫ろうとする古代。「国宝一遍上人絵伝」を彷彿とさせる遺跡から甲斐武田に関連する山城の数々。時代を問わず、ここ佐久には魅力的なテーマが数多く存在することに驚かされる。

また、11月23日には、出版を記念したフォーラムが御代田町浅間縄文ミュージアムで開かれたが、佐久の特徴を問われた各発表者（著者陣）は一様に「各地の文物が見られる、路と路の重なる地域」「絶対的な権力者の不在」という答えを述べた。本書でもそれはキーワードとなっているが、時代を超えての共通項として大変興味深いものがある。

現在県内と各地を結ぶ高速交通網が整いつつあるなかでも、その重要な中継点となる佐久地域。いっそう進むであろう情報共有化社会にあっては、この先どんな特色が見出せるのだろうか？

週末、佐久平付近のショッピングセンターに集う老若男女にも、ぜひ読んでもらいたい本である。これまで遺跡に係った多くの方々に感謝を捧げつつ、会員の皆様からも、ぜひ宣伝のほどを。　（藤森）

Ａ５判／294頁／定価1,800円（税別）
ほおずき書籍㈱

♪　編集後記　♪

個人的なことではあるが、一昨年来、遺跡や山城などを訪ね、佐久の歴史を見直す機会に恵まれた。不勉強な自分にはいい刺激になったが、新しい発見はまだまだ続く気配だ。休んではいられそうにない。佐久は恵まれていると知人に言われた。県内でなお発掘調査が盛んなのは佐久だけではないかと。ある面ではそれも事実であろうが、それだけでは考古学に未来は無い。これを活かすかどうかは、その後次第。埋蔵文化財行政に携わるものとして、その責任は大きいと、改めて思う次第である。　（藤森）

佐久考古通信　No.102

発行所　佐　久　考　古　学　会
〒384-0091 小諸市御影新田1945-6
桜　井　秀　雄　方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267（22）8536

発行者　藤　沢　平　治
編集者　堤　　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL
2009.6.10.　No.103
JOURNAL

★　木内捷さん追悼号　★

木内捷　元事務局長を偲んで……佐久考古学会……1
父　木内捷のこと……木内一徳……2
昭和46年の木内さんと私……桐原　健……3
私の生きる道標……林　幸彦……4
学生時代からのおつき合い……臼田武正……5
捷さんとの思い出……森泉かよ子……6
始まりはプレハブ……小山岳夫……7
木内さんからもらったライター……桜井秀雄……7
ボスと水割りと考古学……堤　隆……8

木内　捷（ちかし）
元事務局長を偲んで

木内捷さんは、平成19年10月13日、69歳にてご逝去されました。

学会に対する幾多のご功労を偲び、謹んで哀悼の誠を捧げます。

木内さんは、昭和14年２月７日に生まれ、佐久市志賀で育ち、昭和41年に佐久市役所に入られ、佐久市教育委員会において黎明期の佐久市の文化財保護行政を担うとともに、佐久市行政の諸分野を歩まれました。

また、昭和45年には、佐久考古学会創設にかかわり、佐久地方の考古学研究の大きな推進力となられ、今日に至っています。

木内さんの手がけられた発掘調査は数えきれませんが、昭和46年の佐久市東一本柳古墳では、黄金に煌めく杏葉が出土し注目すべき学術的成果を挙げました。また市道（いちみち）遺跡では、原位置論に基づく厳密な発掘調査がなされ、考古学の方法論上の大きな問いかけが、学界より注目を浴びています。市道の調査で、木内さんが寝食をともにし、面倒をみた大勢の学生たちは、いまでは50代のリーダーとして、東日本のいくつかの地域で埋蔵文化財行政を担っています。

その後は、佐久埋蔵文化財調査センターを立ち上げ、大開発時代の埋蔵文化財保護の礎を築かれました。また、佐久市では総務部長の要職まで歴任し、佐久市民の暮らしを担う行政のトップランナーとしても力量を発揮されました。

12年にわたる佐久考古学会事務局長時代には、故由井茂也会長とともに矢出川遺跡の保存問題にも取り組み、努力が結実して、矢出川は今日国史跡として保護されています。川上村のゴルフ場建設では、開発担当のゼネコンと渡り合って、三沢遺跡の慎重な記録保存調査が実施されるに至りました。

圧倒的な指導力をもとに、佐久考古学を牽引された木内さんの貢献は計り知れません。ここに生前ご指導をいただいた会員が筆をとり、追悼号としてその業績を偲ぶこととさせていただきます。

（佐久考古学会）

木内　捷さん

父　木内捷のこと

木内一徳

父にはじめて発掘調査に連れて行ってもらったのは３歳か４歳くらいのころだったように思います。子煩悩だった父は、仕事に行くにも（その頃は今の浅間会館で公民館の仕事をしていたので、そんなことができたのだと思う）、遊びに行くにも、どこかに行くときは私か姉を一緒に連れて行きました。

公民館の宿直に行って、親父が酒を飲んで寝てしまい、トイレに行きたいのだけれど、怖くて宿直室から出られず、何度起こしても起きずに、窓からおしっこをしたのを覚えています。大きい体に似合わずにとてもフットワークが軽く、休みになるとどこかに連れて行ってくれました。その中で私がとても楽しみにしていたのは、発掘の現場に連れて行ってもらうことでした。

発掘の現場に行くと若いひとからおじいちゃん、おばあちゃんまでたくさんの人がいて、小さい私と遊んでくれました。私の一番楽しみは、みんなが調査をしている最中に、誰もいなくなったテントの中でお菓子を盗み食いすることでした。親父は顔は怖かったけれど、良い意味で放任主義（あれはするな、これはするなと言われたことがありませんでした）だったので、のびのびと幼少期を過ごしていました。

現場には長髪のお兄ちゃん達、昼から一杯あおっているおじちゃん達、男まさりなおねえちゃん達、くせのありそうなおじいちゃん達など個性的な人がたくさんいました。みんな、現代の若者にはみられないすごいパワーがあった様に思います。現場には活気があって、とても楽しそうで、それでいて、今の社会からはとても想像できない何だかのんびりしていて、和気あいあいとした風景を覚えています。

たぶん父は、考古学も好きだったのだろうけれど、そういった仲間の人たちやその人たちと過ごす時間が好きで、考古学の活動にはまっていったのではないかと思います。実際、専門的な知識はそんなになかったように思います。

父が癌で死んだとき、考古学の仲間の人達が駆けつけてくれて、葬儀の手伝いまでしていただきました。関係の深さをあらためて実感するとともに、皆様の好意にとても感謝しています。

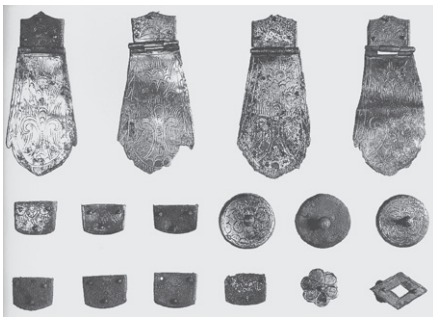
今回の「佐久考古学通信」で父の追悼号を刊行していただける聞き、佐久考古学会の会員の皆様に深くお礼を申し上げます。

天国（？）の父もとても喜んでいると思います。たぶんあの世で一杯やりながら、好きだった土いじりをしているんだろうな……

ボクも発掘のお手伝い（幼い日の一徳さん）

愛娘のあゆみちゃんと（臼田・青木・武藤・花岡氏ら）

“金さん、まァ一杯”（木内・高畑課長・武藤）



東一本柳古墳の杏葉

昭和46年の木内さんと私

桐原　健

木内さんの印象を語れと云われて挙げられるのは、眼鏡をかけていたことと上背のあること。それなのに木内さんは忘れられない人として私の心の中に一ぱいに迫ってくる。

共有している記憶が一つある。木内さんの車に同乗の折、対向車にサイドミラーを飛ばされてしまった。車に無縁な私は何も感ぜず、彼も何も言わなかったが、考えてみれば大事に至る事故なので後日その旨を申したら「覚えている」との答えがあった。

歳は二歳下だが全面的に寄りかかり得る兄貴のようなお人柄で教員から轉じたばかりの行政マンにとって木内さんとの出合いはまことに有難いことだった。

以下、出合いの切掛を生んだ佐久での出来事を述べてみる。昭和46年、この年佐久市は成立10年目、７月には県教委に文化課創立、木内捷36、桐原健38歳。

文化課勤務を命ぜられ埋文担当となった私に与えられたのは「農業振興地域等開発地域埋蔵文化財緊急分布調査」の佐久市域で、南北佐久郡に亙る200平方キロもの広範囲を15日で仕上げる。調査員は４人。判らないこと、足りない点は佐久市教委にお聞きしろとのこと。上司に15年前に作成した『信濃史料、遺跡地名表』があるからと云う意識の存したことは否めない。報告書をみると古墳を含めて716遺跡が帰されている。『信濃史料』は176遺跡、162基の古墳だから頑張ったものである。それにしても無茶な話で、佐久市教委、直接的には木内さんに大きな負担をかけてしまった。

抱っこすればおんぶで、この年、佐久市教委にはもう一つ厄介な仕事をお願いしている。５月に３日間の日程で「埋蔵文化財発掘調査実地講習会」を佐久市で開催しよう。実習だからその時に合わせて手頃な古墳を発掘しようという計画をたてた。古墳は湯川の北の段丘上、佐久税務署長官舎の東隣り、『地名表』にも載っていない座布団古墳で石室に露呈し天井石は落ち込んでいる。この石室を清掃しよう。調査期間は一週間、調査費は15万円、古墳名は東一本柳古墳、主催者は佐久市教委、担当者は竹内恒。

仔細は土屋長久氏の報文（「佐久市岩村田東一本柳古墳緊急発掘調査報告」長野県考古学会誌13、19、72）に譲る。石室内の清掃で数顆の臼玉、小玉の出土があれば上出来との予想を覆して金鍍金の杏葉、辻金具、帯金具、儀刀、勾玉、轡、金環、と金ピカ物のオンパレード、参会者は大満足だったが後の始末は佐久市教委にお願いして終った。

平成17年10月、保存修理の為これを遺物一括に対面、往時回想感無量、木内さんの訃をきいたのはそれから２年後のことだった。

東一本柳古墳の調査メンバー（後列左から３人目が桐原、その右が木内さん）

私の生きる道標

林　幸彦

昭和48年上の城遺跡と西一里塚遺跡の調査は、木内さんが社会教育係で私は一学生だった。

藤澤平治調査団長を筆頭に佐久考古学会五人衆・地元の参加者・学生が予算と期間の限界で汗を流していた。考古学の魅力にとりつかれた五人衆と学生との間のバランスをものの見事に保ち、強いチームワークを醸し出してくれたのが、まだ、34歳の木内さんだった。この年の調査がきっかけとなり、佐久外から実に多様な学生が佐久に集うようになった。

その後、今井西原遺跡･横尾遺跡の調査を経て、「原位置論」の実践をと市道遺跡の調査が始まった。現場調査と整理方法については、調査団内で激しい葛藤があった。藤澤先生・青木幸男さん・高村博文さんの理解と努力、そして、陰に日向に木内さんのご尽力が、地方の調査では異色の傑出した市道遺跡調査とその報告書刊行となった。

昭和50～60年度の10年間の長きに渡り佐久考古学会事務局長を務められ、学習会を例会に発展させ、年一回の研修旅行も定着させ、大いに学会の活動が盛り上がった。

※

木内さんや多くの方々のお力添えで、昭和54年から木内さんと同じ屋根の下で仕事させていただけることになった。当時遺跡の保護協議は、熾烈を極めた。経費と期間で、行政内でも開発部局とのトラブル続きであったし、担当者が１人で高速自動車道・圃場整備等多発する開発に完全にお手上げの状況になった。難航する現場での悩み、上司との軋轢で八方塞がりなとき、何故か電話をいただいた。

幾度となく、決まって絶体絶命の時「俺に何か言うことねえか？」「最近音沙汰がねえじゃねえか」と。しぶしぶ顔を出すと、たいがい夜は酒になった。楽しかった、そして、解決した。

極めつけは、全国で異例の初例の社団法人佐久埋蔵文化財調査センターの設置で、自ら初代所長に就任された。人員増の解決策として、教育委員会では定数増は不可能ということでの苦肉の策であった。

昭和61・62年度前田遺跡調査は社会教育課長と部下、初めてご一緒に仕事ができた。

「担当の係長を呼べ！」

「向こうは依頼者だ。おめえが出向くことはねえ」

この一言で佐久市の遺跡保護協議は、一変した。昭和57・58年度の遺跡詳細分布調査で、開発部局が遺跡の存在を知らなかったとはいえない状況は、つくりだせていた。が、開発計画の把握は困難であった。昭和63年木内さんは異動した。折しも大規模公共事業が続発していた。10万㎡の長土呂佐久流通業務団地（聖原遺跡）、６万7,000㎡の小田井工場団地（金井城跡）等々である。違う部局から木内さんが言った。「あと、何人居ればいいだ？」「話つけるから､心当たりを教えろ」そして、翌年５人が採用され、担当者が倍増の10人となった。

※

平成の三浦市政の下で木内さんは、庶務課長、秘書課長、浅間病院事務長、総務部長を歴任された。一方私は、皮肉にも木内さんと対局する市職労委員長の立場となった。１泊２日の17市職員スポーツ大会でいつも一緒だった。当局役員が設定した私の席順を見て「市職労委員長の席が違うじゃねえか！」と、隣席に呼んでくれた。幾度となく持たれた団体交渉も目線で様々なことを示してくれた。

公的な立場や私的な立場を問わずいつも大勢の人の中心に木内さんがいた。様々な人の集まりの中に旗頭として木内さんがいた。いくつかのことで時間と空間を共有でき、様々な場面で進むべき道を示唆していただいた。相手が建設省でも文化庁でも県教委でも、考古学の大先生でも大部ふてぶしさを伴いながら真っ向から話をされていた数々の場面は、私の生きるための道標である。

昭和49年後家山古墳の発掘で

後列左から井上行雄･林幸彦･大橋広行･森泉定勝･三石延雄
前列左から武藤金・土屋長久・木内捷

学生時代からのおつき合い

臼田武正

昭和49年岩宿遺跡への研修旅行

木内捷さんと初めてお会いしたのは、昭和46年（1971年）５月、東一本柳古墳の発掘調査においてでした。当時、わたしは大学２年生で、桐原健先生と土屋長久さんに導かれて古墳の調査の初体験をすることになりました。その時、木内さんは、佐久市教育委員会の社会教育係として毎日現場に赴いては発掘調査に携わっていました。短い調査期間ではありましたが、金銅製の杏葉が出土するなど貴重な成果が上がったことは周知のとおりです。以来30数年の長きにわたり、木内さんには公私共に大変お世話になってきました。

学生時代はその後、この東一本柳古墳の調査が契機となり、木内さんの紹介で、西近津・中道・北近津・北一本柳・下前田原古墳・餅田・上の城・西一里塚・三塚・今井西原・市道・後家山古墳・東池下古墳など、佐久市を中心に数多くの発掘調査に携わることとなり、今思うと、木内さんとの出会いが自分の人生を方向付けることにつながったように思います。

当時は、わたしも含め多くの学生が佐久の発掘調査に参加していましたが、木内さんは折に触れてわたし達貧乏学生を食事や飲み会に誘うなど、数々の心遣いをしていただきました。自宅にも度々招いていただき、ご迷惑をおかけすることばかりでしたが、奥様をはじめご家族の皆様には本当に親身になってお付き合いをしていただきました。ある年の夏には、わたしや友人を海水浴に誘っていただき、ご家族とご一緒に谷浜の海の家で楽しくアットホームなひとときを過ごしたことが懐かしく思い出されます。

社会人になってからも、長野県埋蔵文化財センター勤務時代は、佐久調査事務所の開設や関係機関との交渉に関して、行政の立場で大所高所からアドバイスや事前調整をしていただくなど、並々ならぬお力添えをいただきました。時には、県と市の埋蔵文化財関係者同士が交流や親睦を深めようと、野球やソフトボールで汗を流し、お花見会を開いて意気投合したのも木内さんの発案でした。佐久での上信越自動車道や北陸新幹線にかかわる発掘調査が、大きなトラブルもなくスムーズに計画どおり実施できたのは、様々な場面で木内さんのバックアップがあったからです。

佐久考古学会の活動に関しても、木内さんの長年にわたる事務局長時代は、佐久考古通信の発刊をはじめ、周年事業の実施や矢出川遺跡の保存運動など、その精力的な取り組みは、その後の自分が事務局の仕事を進めることになったときの目標となったのは言うまでもありません。

木内さんには、学ぶこと、仕事をすること、遊ぶこと、人を育てること、そして生きることの意味を実践を通して教えていただきました。今はただただ感謝するばかりです。ここに改めてご冥福をお祈りし、木内さんのご恩に報いるべく精進することを誓って、追悼の言葉とします。

佐久市後沢遺跡の発掘で

宮城県多賀城への研修旅行

捷さんとの思い出

森泉かよ子

捷さんが病気であると聞いた時、そんな事はないでしょうと言い切ってしまった。

しかし、奥さんの靖子さんが騒がないで静かに見守ってほしいとのこと。本当なのかと半信半疑のままにいると突然の訃報である。最後のお顔も見ることなく別れてしまった。

大柄な身体に太い声。しかし、誰よりも繊細で、気遣いの人である。面倒みの良さから多くの方がその後を慕って追いかけているのを目の当たりにしていた。生活に追われる私が会うのは、総会や会員の葬儀の際など主な機会なのだが、距離を感じさせることなく話をしてくれる。

佐久考古会員ということで、いや多分そうでなくても、うろうろしているだけで、旧知のように待遇してくれるであろう。家を新築したときに隅々まで奥さんが案内してくださり、先輩方の若い頃の武勇伝を兄が弟をみるように、少し偉そうに、可愛い存在として語るのである。

そういえば、独身であった30年ほど前、昼間は現場、夜は報告書を作っていた。その合間の暑気払いやお疲れ払い、喧嘩払いと頻繁に酒盛りをしていた。その折の食堂や焼鳥屋の後、理由などなく「光苔」なる捷さん行き付けのスナックにいた。佐久考古学会事務局長というだけで我々は複数で押しかけては多分にご馳走になっていた。

今ちょうど昭和46年調査の一本柳遺跡の図面や書類をひっくり返しているが、藤沢・土屋・臼田・高村などの佐久の諸氏の名前が出てくる。そのときの事務局に木内捷の名がある。佐久のメンバーで臨んだ本格的発掘調査である。

発掘調査が組織化した現在でも決して発掘調査を行うことは容易ではない。予算が少なく、道具は揃わず、重機を使わず、という頃の事務局とは大変であったろう。その重責の機動力が捷さんだと聞かされている。

困難を感じさせないその大物なところが佐久考古学会では伝説になっている。

また、家庭人としても、靖子さんを愛し、子供達を慈しんでいた。お子さんの自慢話、孫の話をあの大きな身体でするから、かわいいのである。

この文は敢えて敬語は使わないで書いている。寂しがり家で周囲にいつも仲間おいていた捷さん。親しい一人のように語ってみた。顔を見ながら、世間話、一度くらい一杯ご馳走しなければいけなかった。

佐久町宮の本遺跡調査からの帰路（羽黒下駅にて、左から三石延雄・高村博文・森泉定勝・木内捷）

始まりはプレハブ

小山岳夫

「俺が管財課に居たころは、家になんか帰れなかったよ」。10年ほど前に木内さんがしみじみと言った。佐久市が現在の天神堂、旧岩村田小学校跡地を売却しようとしていた昭和40年代後半のこと、当時としてはかなり高額の売り出し値であったこともあり売却は難航、当時管財係長であった木内さんに不良資産化しかけた土地の売却がゆだねられた。

毎晩のように繰り返された土地の売り込みが功を奏し、天神堂の土地は完売した。男木内はこの功績を高く評価され、以後一般行政職の最高峰総務部長にまで昇りつめる。

木内さんとお付き合いし始めたのは私が郷里に帰った23歳の頃。出来が悪いにも係らず怠け者で就職試験に受かることがなかった。にもかかわらず木内さんに希望を聞かれると「どうしても発掘関係の仕事がしたい」とわがままを言っていた。

「俺に任せろ」と言って、木内さんは佐久市開発公社に「佐久埋蔵文化財調査センター」を作り、出来の悪い自分を押し込んでくれた。昭和58年25歳の春のことであった。

※

埋文センターでは、木内さんが所長。最初はプレハブ住まいであったが楽しい毎日だった。平成３年春、いくつかの不幸が重なり５年11ヶ月で開発公社を去り、御代田町で仕事をすることになった。

大恩のある木内さんには顔向けが出来ない状態だった。移籍初日の４月１日「お祝いやらザ」木内さんから電話がかかってきた。木内さんは私を攻めることなく「がんばれ」と激励してくれた。

御代田では埋蔵文化財、エコールという文化施設建設、学校教育を経験した後、現在は国保、特定健診を担当している。発掘にこだわっていた自分が不思議なことにいつの間にか全く畑違いの仕事に必死で取り組んでいる。土地開発公社、教育委員会、税務課、庶務課、秘書課など多様な職責を歴任しながら、常にその中心的な役割を果たしてきた木内さんの背中を見ていたからだと思う。

堤君と臨終の数日前に木内さんを見舞うことが出来た。手を握り「苦しいだろうけど頑張って！」と声を掛けると手を握り返して答えてくれた。

木内さんが亡くなって半年後、不思議な縁で私は木内さんの息子一徳君と共に仕事をすることになった。

木内さんからもらったライター

桜井秀雄

あれは小山岳夫さんの結婚式の日でしたから、もう15年ほど前のことです。披露宴が終わったところで、木内さんや臼田武正さんを中心とした佐久考古学会員数名で２次会は木内さん行きつけの岩村田の焼鳥屋でやろうということになり、私もご一緒しました。

そこで私たちはもう一度大いに盛り上がったわけですが、その席上で、上機嫌の木内さんから、「これを君にあげよう！」と、ご自身の使っていた金色のライターをいただきました。

煙草を吸わない私がどういう話の流れで木内さんのライターをいただくことになったのか、酔いと経年で詳細は思い出せないのですが、私もうれしい限りでありがたくいただいたことを、あの時の木内さんの笑顔とともに今でも鮮明に覚えています。

私が佐久考古学会へ入会した時にはすでに、木内さんは事務局長を退任されており、地区委員の立場で会を支えておられました。役員会や総会・懇親会でのお姿が思いおこされます。いうまでもないことですが、木内さんは12年にわたり事務局長を務められ、木内事務局長時代に当会の礎は築かれました。

※

私が事務局長になった年の暮、由井茂也さんのお葬式の帰りでしたが、そんな大先達である木内さんから「事務局の方、がんばれよ」と激励の言葉をかけていただき、大変勇気づけられたことが思い出されます。木内さんにはとうてい及びませんが、これからも精一杯、責務を果たしていきたいと思っています。

唯一、今でも申し訳なく思っていることがあります。それは平成18年の役員改選の際ですが、今回も引き続いて地区役員をお願いしたい旨で木内さんにお電話したところ、「もう降ろさせてほしい。次は若い人にやってもらってほしい」と、いつもと違い元気のない口調で固辞されました。今にして思えば、体調が思わしくなかった時期だったのでしょう。ところがそんなこととは知らない私は、電話口で再三にわたり地区役員留任をお願いしてしまいました。結局、この年で退任されることになったわけですが、木内さんのご都合・ご事情も聞かずに無理にお願いし続けてしまったことは、申し訳なさでいっぱいです。

佐久考古学会も来年には創立40年を迎えます。どうか、木内さん、これからも私たちを見守っていてください。

ボスと水割りと考古学

堤　　隆

粉々に砕いた氷をグラスに入れる。私はウイスキーは少なめ、水をたっぷりと注いでマドラーを回した。ボス流の水割りの出来上がりである。いつも木内さんの水割りを作るときの決め事だ。

“ボス”木内捷さんが、こう呼ばれるようになったのは、たぶん市役所の要職につき采配をふるった頃からだろう。おそらく、「太陽にほえろ」の石原裕次郎演じるところの七曲署のボス＝藤堂捜査一係長になぞらえてのことだ。まさにピッタリである。

ボスが木内さんなら、部下であったマカロニ・ジーパン・テキサスなどの若い刑事は、さしずめ活きのいい林・臼田・高村さんということになろうか??

とにかく木内さんの親分肌はとどろいていた。明治大学の戸沢先生も奈文研の坪井先生も、保存運動などに信頼を置いていたのは間違いない。

※

私が生まれて始めて出会った考古学関係者が、木内さんである。中学２年の時、市内の発掘報告書が欲しくて佐久市教育委員会を訪ねると、プレハブの仮庁舎に黒メガネのオジサンがいて一束の報告書をくれた。

そして、こんど太鼓楼（旧中込学校）で土器の展示をするから、見に来いという。後日木内さんを訪ねると、恥ずかしいくらいに目立つあの空色の市役所カーに乗せられ、太鼓楼の土器展を案内してくれた。持参していた父親の２眼のカメラを渡すと、バシャ・バシャと土器の写真を撮ってくれた。色あせはしたが、その時の写真は今でも大切に引き出しの中にある。

その後、中佐都の家地頭１号古墳の発掘があり、中学生の私も発掘に参加した。木内さんは休みの日に、おそらくまだ保育園児だったお子さん、あゆみちゃんや一徳君をつれてきた。今や一徳君も大人になって、御代田町職員としてバリバリと働いている。

亡くなられる２、３年前、木内さんは何度か、一徳君の子供を連れて浅間縄文ミュージアムに来てくださり、お孫さんと一緒に勾玉づくりなどをした。一徳君のお子さんがまた、幼い日の一徳君にそっくりで、父の後をついて回った小さな一徳君を思い出させるのだ。

※

大学４年の２月のある朝、神奈川県大和市のアパートの電話が鳴った。２年ぶりくらいに聞いた木内さんのドスのきいた声だった。

「御代田町で発掘のできる職員を探している。やってみないか」

そんな内容だった。私はすぐには答えかねた。大学の後半の２年間は、相模野台地の旧石器発掘に没頭し、夏休みなども佐久にはあまり帰らなくなっていた。旧石器の調査ができる神奈川で就職し、骨をうずめたいと思っていたからだ。彼女も神奈川にいた。ただ、その年の採用試験は落ちており、不安な状況だった。

「明日まで考えさせてください」

私はこう返事をしたが、電話でお断りしようと思っていた。翌日、木内さんのダイアルを回すと……

「そうか、やっと決心がついたか」

いきなりその一言、お断りするきっかけを全く失ってしまったのだった。

その後、いろいろゴタゴタとあったのだが、結局、その年、昭和59年の４月には御代田の発掘現場に私は立っていた。忘れもしない野火付遺跡である。団長は由井茂也さんに、副団長は木内さんにお願いした。発掘期間が大幅に延びたり、予算がたりなかったりと、てんやわんやの事業だったが、木内さんがバックにいてくれたおかげで、調査を無事終了できた。その時、私の帰郷をいちばんに喜んでくれたのは、その５年後に亡くなったばあちゃんだった。

その調査からもう25年、20代前半だった青年は、いまや50近いオッサンである。一から始めて苦労も多かったが、現在の御代田の職場環境にはとても満足している。考古学でメシを食えているのも、就職を親身に世話してくださった木内さんのおかげである。

※

木内さん、あなたが私に琥珀色の液体を注いでくれたのは確か高校１年の時でした。その液体はその後１年も欠かすことなく私の身体に注がれています。帰郷してからは、中込の“旅”で、岩村田の“苔”でグラスを交わし、過ごした楽しい時間がよみがえります。

今晩、氷のたっぷり入った水割りを作り、木内さんのことを思い出してみます。

さようならではなく、木内さんと乾杯をするために。

佐久考古通信　№103

発行所　佐　久　考　古　学　会

〒384-0091 小諸市御影新田1945-6
桜井　秀雄　方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267 (22) 8536

発行者　藤　沢　平　治
編集者　堤　　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL
2009.11.10.　No.104
JOURNAL

★ 目　次 ★

シリーズ 世界の遺跡・日本の遺跡24　月明沢遺跡 ―長野県―……1
古の道具箱　骨製釣針……藤森英二……2
偶感・北西の久保の形象埴輪……桐原　健……4
首都大学東京・総研大による北相木村の岩陰遺跡調査―その２―……藤森英二……7
新刊紹介『文化としての縄文土器型式』・『旧石器時代ガイドブック』……8
編集後記……8

世界の遺跡・日本の遺跡24

月明沢遺跡

― 長野県 ―

佐久市前山。佐久平と浅間山を一望出来る風光明媚な場所である。

1965年、地元の人々により10数体分の人骨、土器、石斧、鹿角等が、前山の小さな洞窟状地形から発見された。この報を受けた信州大学医学部はその一部を鑑定。その後1971年に西沢寿晃氏、小松虔氏らによって発掘調査が行われている。

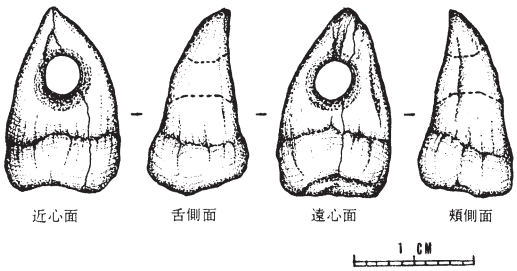
遺跡は八ヶ岳北端蓼科山起源の火山噴出物の末端に位置し、その足下は千曲川の支流片貝川の沖積地に接する。東流する沢や小河川が岩肌を浸食した絶壁の崖には、いくつもの洞窟状地形が並ぶ。この遺跡も例外ではなく、垂直に近い崖面に位置している。標高約730mで河床からの比高は約20m。ほぼ東向きに開口し、幅約4m、奥行きは約1.5mである。

人のいる小さな開口部が遺跡である

1971年の調査でも土器片の他、抜歯や焼かれたものを含む人骨、穿孔された人歯が出土した。土器について報告者は「貝殻腹線による条痕文土器」としているが、近年では付近の遺跡でも弥生前期の条痕文土器が出土している。

「急峻な岩壁中の、蹲踞の動作をも憚られる狭隘な岩陰に埋葬された、集積的な人骨群は、一部焼骨を含む内容からも、二次的な改葬による墓所（崖葬墓）としての性格を有する」と報告にあるが、その後、外山和夫氏らは列島各地の例を挙げ、再葬とそれに伴う洞窟・岩陰の利用法を想定している。月明沢遺跡の例は、穿孔された人歯の存在や、土器が弥生前期～中期初頭と考えられることも、これにちょうど合致する。また、佐久地域で再葬墓とされる遺構等が散見されることも含めると、当地域に弥生再葬墓が普及しており、その関連施設としての洞窟・岩陰が存在したと考えられるだろう。

現在もこの急峻な崖はそのままであるが、付近には中部横断道が通る予定である。



人間の臼歯に穿孔した加工品が出土している

山国信州では、骨角器の発見は少ないが、北相木村の栃原岩陰遺跡では、豊富な出土品を見ることが出来る。

この中には、現在の道具と見間違うばかりの釣針も含まれていた。どんな釣果が望めたのだろうか。

興水利雄、新村薫の両氏により発見され、信州大学を中心とした調査団により発掘調査が行われた北相木村栃原岩陰遺跡では、主に縄文時代草創期から早期の大量の遺物が出土している。

岩陰内の温度湿度が変化しにくいことに加え、当時大量に燃やした木の灰により、多量の有機質遺物が残されていた。

シカやイノシシの四肢骨から作られたと思われる釣針は、返しがないこと以外、現在の道具とほとんど変わらない。しかも製作途中のものや、途中で放棄されたと思われるものがあり、その製作工程を復元することが出来る。

対象は目の前の相木川を泳ぐイワナやヤマメだろうか？

Data

骨製釣針

○ 時　代：縄文時代草創期末（約10,000年前）

○ 出土地：北相木村栃原岩陰遺跡

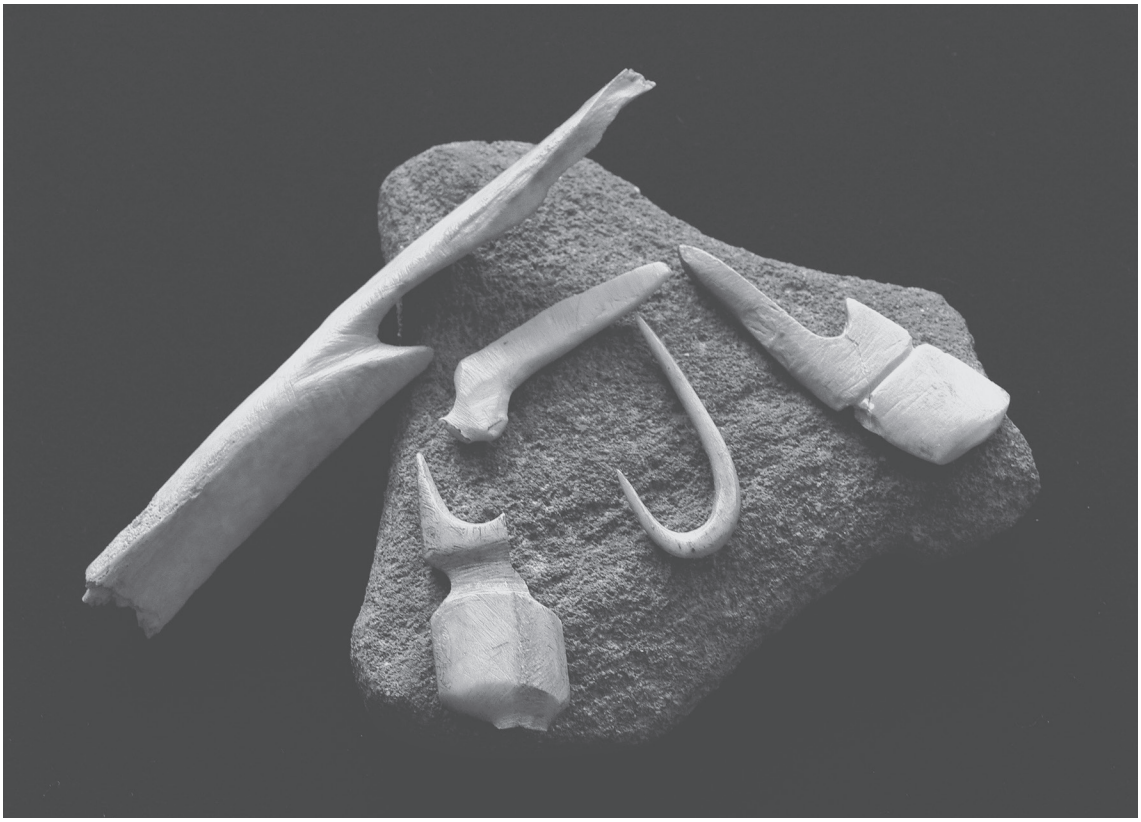
○ 大きさ：長さ約３㎝

○ 用　途：河川での魚釣りか

○ 特　徴：完成品だけでなく、未成品も残されていた

骨製釣針

藤森英二



栃原岩陰遺跡出土の釣針と加工途中の品（但し完成品の出土層位は調査中）。
バックは砥石の可能性が指摘される砂岩製の石器。

偶感・北西の久保の形象埴輪

桐原　健

10年程前に開催された『信濃の埴輪展』は森将軍塚の円筒や器財がメインだったから見学に来た一児童は「ハニワちゃん」が居ないと不満を漏らした。信濃の古墳総数3,531基に対し埴輪ある古墳は140基、形象埴輪が立った古墳は16基。隣接している群馬県が埴輪王国なので殊にも貧弱さが目立つ。しかし馬形埴輪の全国集成を見ると出土のない県がかなりある。

信濃の形象埴輪は人物が12、馬形は土馬・陶馬を含めて９、猪・鹿は各１墳からの出土（第１表）。

これらを２期に分けてみる。

形象埴輪のうちで最も後出するのが人物で馬形が僅かに先行、この中でも飾り馬が優先、裸馬は後出するという。応仁陵の馬形には鑣銜の表現があって畿内では５世紀後半に盛行している。東国では畿内と同時に馬の飼育が行われたとされているが殉殺された馬の墓の初見は５世紀後半。同時期の福島・天王壇古墳からは土馬の出土があって馬形埴輪の代用品と解釈されている。大形で工程複雑な馬形の製作は地方では未だ困難だったのだろうか。この解釈を大室162号墳の土馬に適用してみる。同墳は積石円墳で合掌式石室を内部主体としている。大室古墳群の核を為すもので大塚初重は５世紀後半に置いている。

陶馬を出土した神送り塚は規模大な円墳で横穴式石室を内蔵している。六鈴鏡・三角板鋲留短甲・矛２・剣１・張ら切先の直刀８口という副葬品の内容からすれば５世紀末、下っても６世紀初頭、従って信濃の馬形埴輪の年代は６世紀代となる。

従来の考察からすると前半は高岡１号墳、中葉にかけては松島王墓、下諏訪の青塚。人物埴輪でまず出現するのは巫女なので古式古墳が多い鮎川流域で石室不分明な天塚１号墳も前半に加えたい。残りの10基は６世紀後半の築造となる。

２期区分に墳形を重ねると前半は前方後円墳と円墳各３基、後半は円墳10基。地域で分けると前半は諏訪湖に発する天竜川流域と北信濃、後半は佐久・小県地域。横穴式石室の構造では前半の高岡１号墳と後半の二子塚が繋がっている。飯伊地域の横穴式石室墳には畿内型などの四型式があって、その一つに側壁下部に磐石の面を立ち並べ上部の空隙部は平石の横積みで閉塞するタイプがある。白石太一郎はｄ類石室として飯田松川以北の３古墳が採用しておるも隣接地域には見当たらずとし、楠元哲夫は韓国大邸の古墳に同例を見出した。

その後の調査で他郡の後期古墳中に採用例のあることが判った。その１基が二子塚である。なお、この種の石室は大室の積石円墳中にも２基存在する。

佐久・北西の久保には弥生の集落がありその上に重なって周溝17基が検出された。円墳にともなうものでマウンドは既に平夷されてしまっている。17号周溝の内径、即ち封土の径は16.6m、周溝は幅4.2m、深さは0.64mと計られている。内径の内から古墳に係る施設・遺物は検出されなかったが周溝内からは埴輪破片と須恵器、土師器が出土している。円筒は50点が復元されたが実際はこの４倍は存したとのこと、朝顔形円筒は７点が復元、円筒５につき１の割合で立てられていたとすると、40点はあった。形象埴輪は器財（盾７・太刀１・靫１）・家１・動物（飾り馬２・裸馬１・鹿１・猪１）・人物（女子４・男子４・不明３）。女子の中には挙手姿勢が２体ありうち１体は鈴鏡を佩している。小型な鷹の造形があるので鷹匠も居たらしい。馬の脚は円筒形で丈高い。裸馬には片手綱、飾り馬の銜にはＦ字形鏡板、胸繋・尻繋には馬鈴が付いている（第１図）。

６世紀代、関東の古墳では埴輪の樹立が盛行する。後半になると前方後円墳のみならず径20・10m代の円墳の中段・墳麓に囲繞される。埴輪の意義に変化が生じて涅外からの人の目を意識している。このような需要の増大に応えて製作は簡畧化・類型化の傾向を辿らざるを得ず、馬形に例をとると側面重視・大型化で脚に蹄の表現は無くなり大きさを誇示すべく円筒は太く長くなる。

関東の人物埴輪の特徴は巫女中心の群像表現で各人物は様々な動作を行っている。動作は腕の形状で示されるがその腕は体部に比して矮小で、まさに取って付けた状態である。

かかる関東の馬形や人物埴輪が北西の久保17周溝・加増４号墳・二子塚・八幡山古墳・上五明で発見されている。

６世紀後半代、佐久の古墳に毛野の古墳の影響が及んでいたこと、佐久にとどまらず小県・更級にまで波及していたことは明断してよい。

筆者は大和政権の上毛野国造への懐柔策の一つとして挙げている前方後円形の墳丘使用許可を墳形に限らず鈴鏡を採物とする巫女中心の殯から埴輪の樹立に亙る葬送儀礼全般に亙る使用の許可とする広義の解釈をとっている。この許可は他の国造にも与えられたふし

第１表　信濃出土形象埴輪一覧表

番号	古墳名		墳形		規模（m）							内部主体				副葬品									埴輪							時期			備考
			前方後円	円	10以上	20以上	30以上	40以上	50以上	60以上	70以上	竪穴式	横穴式	その他	不明	鏡	武具	直刀	鉄鏃	馬具	金環	玉類	土器	その他	円筒	朝顔	家	器材	人物	動物（馬）	その他	5C後	6C前	6C後	
1	高井	大室168号		○	○									○									○	刀子							土馬	○			積石円墳
2	高井	天塚１号		○											○										○		○		○ 巫女				○		
3	更級	上五明																												(○)					流路跡出土
4	更級	清水坂		○											○			○				○	○						○						
5	小県	八幡山		○									○					○	○						○	○	○		○ 武人					○	
6	小県	二子塚		○	○								○								○	○		金銅金具	○	○		○ 鈴釧	○ 武人	○ (○)				○	
7	小県	八幡社前		○	○								○					○	○	○	○	○			○				○					○	
8	佐久	加増４号		○									○					○	○	○		○	○		○				○					○	弾琴像
9	佐久	北西の久保17号		○	○									○									○		○	○	○	○	○ 巫女他	○ (○)				○	周溝内出土
10	佐久	家地頭１号		○	○								○						○	○		○			○			○	○					○	
11	諏訪	青塚	○							○			○												○				○ 武人	(○)				○	古文献記載
12	諏訪	松島王墓	○						○						○								○ ?		○			○	○	(○)			○		
13	伊那	高岡１号	○								○		○							○	○	○			○		○	○	○	(○)			○		
14	伊那	神送り塚		○									○			○ 六鈴	○	○	○					剣・矛							陶馬		○		
15	伊那	中井田１号		○	○								○					○		○		○	○						○ ?						
16	伊那	里原４号		○											○								○		○					(○)					

があり、葬送を司る土師直（部）は武蔵や上総にも定着している。力のある上毛野国造はこの許可権を管下の中小豪族にも行使していたらしい。

懐柔策をとる反面、毛野君が勢力を彊域外に伸張した場合この排除に努めたことは安閑元（534）年紀の武蔵国造の乱に見える通りである。この世紀に上毛野は千曲川流域にも勢力を波及させている。

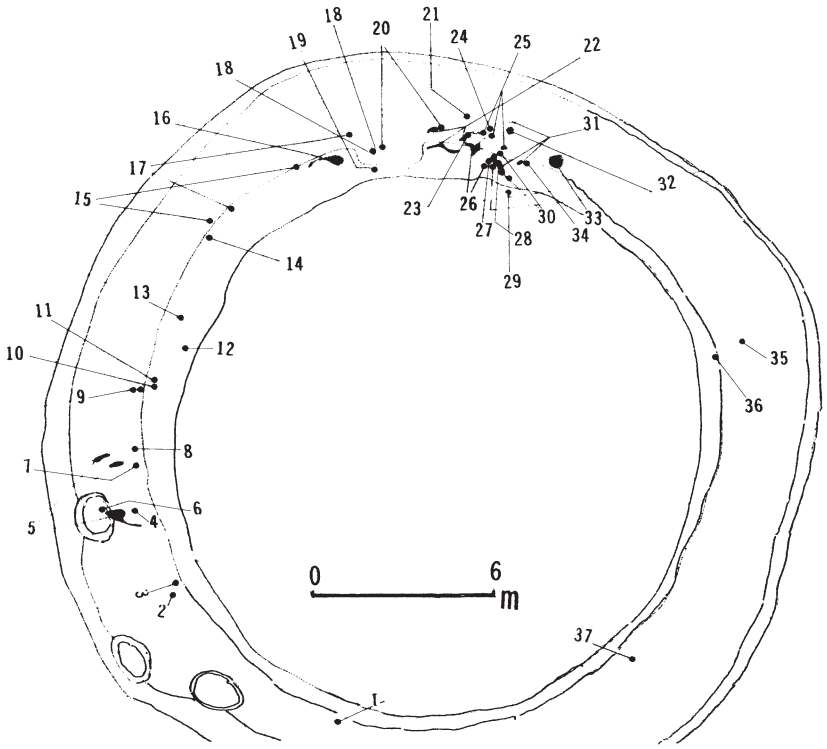
大和政権は信濃を東国との緩衝地域に擬している。その地域への上毛侵入は黙視できず、当然に対策が講ぜられる。次世紀に郡司となる大阪氏の佐久定置で、出自本貫は明確を欠くも、佐久平の中央、東縁に終末期古墳を築いている以上大和政権子飼いの畿内豪族に違いない。

屯田村居も作られた。濁川流域の聖原にはこの世紀に忽然として大集落が出現する。６世紀中葉から７世紀初頭にかけての住居は110軒。鉄器が残存していた家は24軒。このうち鉄鏃出土12、刀子出土７、鉄鏃・刀子ともに出土した住居は1軒で、84％が武器を所有していた。

以上は自分なりに書き上げたストーリーで、信濃の形象埴輪を片や前方後円墳片や円墳周溝からの出土品、両者間に時間的差異を認めさせ後者に上毛との関係をつけさせた。だが上毛の影響は千曲川流域が限界で信濃全域―飯伊の古墳にまでは及ぼしていない。

何故なのか。考えてみた。

同種資料であってもそれに接した人の年齢によって軽重の差異が生ずるのではないか。学生の頃に接した資料と一応の考察を済ませ定年間近かに接した資料。市村咸人が昭和30年に報告した高岡１号墳の巫女の胸部破片と、30年後に緊急発掘で出土した80余点の埴輪群像とを虚心に見比べた時、どちらに軸足を置いて考想をたてるか、若い人ならば当然後者に置くだろう。それなのに筆者は前者の１点に拘泥しているようである。



1　円　筒	9　円　筒	17　裸　馬	25　人　物	33　鶏
2　円　筒	10　円　筒	18　飾り馬と人物	26　家　形	34　円　筒
3　朝　顔	11　円　筒	19　鈴	27　大　刀	35
4　円　筒	12　家　形	20　円　筒	28　鳥（鷹）	36　靫
5　朝　顔	13　円　筒	21　円　筒	29　円　筒	37　盾
6　鹿	14　円　筒	22　飾り馬	30　靫	
7　円　筒	15　円　筒	23	31　挙手する女子	
8　人物の腕	16　円　筒	24　帽　子	32　女　子	

第１図　北西の久保17号周溝埴輪出土状況（『北西の久保Ｉ次発掘調査報告書』より転載）

首都大学東京・総研大による北相木村の洞窟・岩陰遺跡調査

—その２—

藤森英二

本誌102号において、昨年行われた北相木村ノンコ岩１岩陰遺跡の調査についてお知らせした。今年も首都大学東京と総合研究大学院大学による発掘調査が行われている。今回はこの様子をレポートしたい。

まずは９月７日から３日間、地元業者の協力により、落盤の除去作業が行なわれた。昨年の調査では、岩陰最奥部が浅い堆積である可能性が浮上し、本年は崖側に近い部分を調査対象としたのである。しかしここには巨大な落盤が累々としており、まずはこれを除去する必要があった。削岩機で落盤を砕き、これを遺跡の外に運び出す作業が続いた。この結果、調査予定地約７㎡について、ほぼ120㎝ほどを掘り下げることが出来た。そこはようやく現代の遺物（コーラの缶など）が途切れるかどうかという具合であった。

15日からは両大学に加え東京大学のメンバーも加わった調査団が到着。本格的な調査が始まった。しかしやはり、大小の落盤を、時にはツルハシで割りながらの厳しい作業であった。それでも若いメンバーは、遺構遺物の発見を目指し掘り下げていく。

また調査では、微細な骨片や植物種子等を拾い出すべく、土壌のウォーターフローテーション分析も実施している。今年は顕微鏡観察も同時進行で行われた。分析に有効な必要最小限のサンプル量を見極めるという目的も含まれている。

調査期間中、シカを始めとする動物骨の出土が続いたが、人工遺物は出ない。しかし22日には「灰層が出た」という報告があった。白色の灰と炭化物・動物骨が集中する箇所が数ヶ所見つかっている。

削岩機による泥流落盤の除去作業。

グリッド単位の掘り下げ作業が続く。

結局、23日までの調査期間では、地表下約200㎝まで掘り下げられた。今後実施される炭化物の年代測定の結果と、来年以降の調査に期待である。

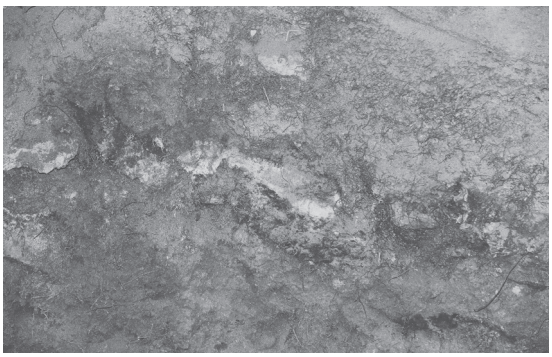
期間中本会会員はじめ、多くの方の見学とご指導を頂いた。そして、厳しい状況下の調査と自炊の生活、参加した皆さんに心から敬意を表したい。

参考文献

藤森英二　2009「首都大学東京による北相木村洞窟・岩陰遺跡の調査」『佐久考古通信』№102

亀井　翼他　2009「2007年度北相木村における岩陰地形分布調査『人類誌集報2006・2007』

顕微鏡を用いて慎重に遺物を選び出す。



見出された灰と炭化物の層。年代測定が待たれる。

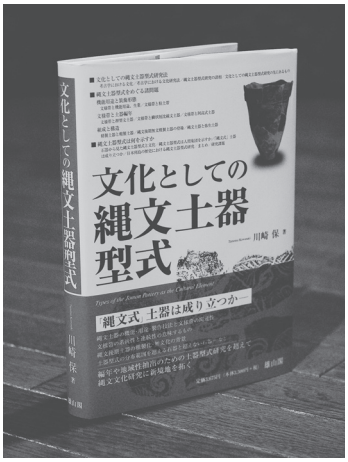
新　刊　紹　介

川崎　保 著
『文化としての縄文土器型式』

本会会員であり長野県内の遺跡を掘り続けている、川崎保氏による縄文土器型式研究の意味を掘り下げた意欲作。

氏は本書で、縄文時代研究における土器型式の意味を改めて問う。「文様帯」をキーワードにしていくつかの実例を挙げながら、単に時間の尺度ではない土器型式研究を披露する。それは列島全体の時代の推移にも言及した、スケールの大きい論に及ぶ。「クリ文化」と「ドングリアク抜き文化」の対比や変遷は非常に興味深いものである。

また本書の中では、ケーススタディーとして、氏のいう「鱗状短沈線文土器」が挙げられている。これは縄文時代中期後半の主に北佐久地域に多くみられる土器で、かつて百瀬忠幸氏が「佐久系土器」と呼んだものを含む。その後小諸市郷土遺跡の調査報告を行った桜井秀雄氏は「郷土式」という土器型式の提唱を行った。川崎氏も将来的には一型式として提唱可能としている。



その意味でも、佐久の研究者は必読であると言えよう。

雄山閣
定価 3,675 円

堤　　隆 著　『シリーズ「遺跡を学ぶ」別冊 02 ビジュアル版　旧石器時代ガイドブック』

本会を代表する旧石器時代研究者、堤隆氏による日本の旧石器時代を網羅したガイドブック。

本書は、一つの遺跡を取り上げこれを紹介する一般向けの書「シリーズ遺跡に学ぶ」の別巻という位置づけである。平易な文章と言葉遣い、そして豊富な図や写真、あるいは復元画などのビジュアルによって、誰もが簡単に、旧石器時代の世界に入り込める内容となっている。

しかし少し読み進めれば分かるように、本書は単に一般向けではなく、研究者でも新たな驚きや発見を味わうことが出来る。これは単に私の勉強不足だけが原因ではあるまい。

堤氏の八ヶ岳をフィールドとした研究は言うまでもないが、氏がこの時代を広く深く探り、さらには人間そのものを研究対象とする姿勢が伝わってくる。また、日本中を震撼させたあの「前期旧石器捏造事件」に対する堤氏の思い、そして日本列島における前期旧石器の有無についての考えは、個人的にも興味深いものであった。

新泉社
定価 1,575 円

♪　編集後記　♪

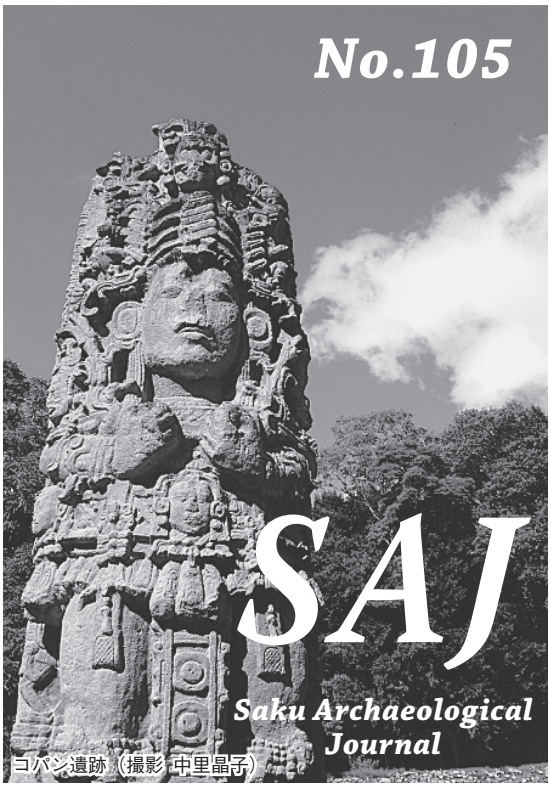
今号では、本会会員の著作を２点紹介することが出来た。何とも嬉しい記事だ。さて、ここ数年、過去に調査された著名な遺跡の報告書刊行が相次いでいる。県内でも神子柴然り、曽根然りである。県外では上黒岩などもそうだ。私の勤め先である村にも、言わずと知れた栃原岩陰遺跡があり、これまた言わずと知れたように、報告書未刊行である。時が経てばたつほど、多くの人の思いが交錯して、報告書刊行は難しくもなる。しかしその分、新しい考えや分析の技術は蓄積されているはずだ。それらを付け加えて今の世の中に出していければ、と考えている。　（藤森）

佐久考古通信　No.104

発行所　佐　久　考　古　学　会
〒384-0091 小諸市御影新田1945-6
桜 井　秀 雄　方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267（22）8536

発行者　藤　沢　平　治
編集者　藤　森　英　二
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク



コパン遺跡（撮影 中里晶子）

佐久考古通信

■ 遺跡と考古学を学ぶためのコミュニケーション誌 ■

2010.6.1　佐久考古学会

特集 中南米の遺跡

メキシコのテオティワカンの太陽と月のピラミッド、マチュピチュ、ナスカの地上絵、イースター島、中南米には不可思議なたくさんの世界遺産がある。

いずれも信州を遠く離れた地球の裏側の遺跡である。

過去、この地域でどんな歴史が展開していたか。

今回、中南米の考古学特集をお届けする。

★ 目　次 ★

インカ帝国の旅……中田秀一…2
文化遺産を守る……佐々木　毅　9
コパン遺跡の大地に立って……中里晶子　10
イースター島とモアイ……12
編集後記……12

中米とは、北米大陸と南米大陸とをつなぐブリッヂのような場所で、パナマ、コスタリカ、グアテマラ、エルサルバドル、ニカラグア、ホンジュラスなどの国々からなる。南米は、ブラジル、ペルー、ボリビア、チリ、アルゼンチンなどの諸国がある。

中米大陸に初めて私たちの祖先のホモ・サピエンスが足を踏み入れたのは、日本で言う縄文草創期のころ、１万数千年前のことらしい。以来、人々はコロンブスがやってくるまで、さまざまな生活を謳歌し、文化を育んできた。

うち、中米のホンジュラスについては、世界遺産でもあるコパン遺跡や人々の暮らしなどを、現地で青年海外協力隊として活動された佐々木毅さんと中里晶子さんに執筆いただいた。

南米ペルーのクスコやマチュピチュ遺跡については、須坂市にいる民俗楽器制作家の中田秀一さんに、いくどもなく訪れたこれらの遺跡について語っていただいた。この他、チリ領のイースター島のモアイ像などについてもふれてみた。

一度は訪ねてみたい遺跡のいくつかは、そんな気持ちにさせてくれるだろう。

インカ帝国の旅

アンデス民俗音楽・楽器制作者
中田秀一

クスコの旅

旅のはじまり

1991年４月早朝、首都リマ空港を飛び立った翼は、太平洋のペルー沖を旋回して急峻な山岳地帯の上空を飛行していく。眼下には万年雪を戴いた白い山嶺が朝日に輝き神々しい。

１時間後、マチュピチュの上空に差しかかった、瞬間、遺跡の石積みがわずかだが見えた。上空から眺めると、深山幽谷の険しい山岳地帯にインカ帝国が繁栄したことに改めて驚かされた。

私がペルー共和国インカ帝国の都であったクスコを初めて旅したのは、今から20年ほど前の1991年のこと。以来私は、アンデスの大地を幾度か踏みしめることになった。

ペルーアンデスの南部山岳地方、5,000mを超す山々に周囲を囲まれた標高3,400mの盆地にインカ帝国の古都クスコはある。歴史的には、13世紀からスペインによって侵略された16世紀までアンデス文化の中心地として栄えた都である。インカ帝国は農業社会国家で、高原地帯には、ジャガイモ、トウモロコシ栽培に代表される高度な農業が発展し、帝国の基盤を支えた。

現代のペルー国土は、大きく３つの地域に区分され、太平洋に面した海岸地方コスタ、アンデス山岳地方シエラ、内陸の熱帯雨林ペルーアマゾンのセルバからなる。古都クスコはシエラに属する。

古都クスコ

昔日のインカの古都クスコ、搭乗機のタラップを降りると濃いブルーの空がどこまでも広がっている。澄んだアンデスの空気を胸一杯に吸い込む。滑走路の傍らを赤い帽子をかぶり美しいアルパカ織りの民俗衣装をまとった女性達がゆっくりと歩いていく。みると背中には、カラフルな織物で背負われた赤ん坊が穏やかな顔で眠っていた。

空港の周囲には、ついさっきまで上空から見ていた聖なる山々が聳えている。街路には、鮮やかな荷を担いだケチュア族の人々が、寡黙な表情で行き交う。

そうだ、私は長年の夢であったインカの大地に、今初めて立っているのだ。震えるような感動が全身を包んだ。

混迷にあったペルー

当時ペルーでは、日本でもなじみの深いフジモリ政権が２年目を迎えていたが、国内的には大きな問題を抱えていたといっていい。

前年末頃から流行し始めたコレラが猖獗を極め、政治的にはペルー国軍と極左ゲリラとの闘争が激しさを増していた。首都のリマを中心として、各地に混乱が拡大する事実上の内戦状態で、地方で生活出来なくなった人々がリマなどの大都市に押し寄せ、海岸に近い砂漠にバラックを建て、細々と生活していた。明日の生活もままならない状況のなか、人々はその日その日を、精一杯生きていた。

ただ、そのような時勢のなかでもなぜかクスコ地方は、インカ時代から続くゆったりとした時が流れ、点在する遺跡と相まって比較的平穏なたたずまいを保っ

リマ～クスコ　上空から見た湖

クスコ空港

ていた。

街路で古いタクシーを雇い、クスコの中央、アルマス広場に向かって走り始める。客席の床は長年の腐食で穴があき、地面が飛ぶように見えていた。やがて約３ヶ月の間滞在する宿舎についた。

考えてみると、クスコの標高は富士山山頂よりやや低い程度の3,400m、少し高山病のことを気にして、慣れるまでゆっくりと歩く。やがてクスコのメイン通り Av. ソル（太陽通り）に出る。通りの両側には、行政施設・銀行・ホテル・民芸品店などが立ち並び、大勢の人々が行きかっている。

「カンビオ！カンビオ！」

道角にあるたくさんの両替屋が、両手に厚いインティの札束と電卓を持ち､「両替するよ」と道行く人々に声を掛ける。1991年、当時はものすごいインフレーションだったのである。

黄金の聖堂コリカンチャ

太陽通りを渡ってなだらかな石畳の坂を上ると右手に巨大な黒い石組が見えてくる。重量感溢れる石組の上には、スペインの植民地時代に建てられたサントドミンゴ教会がある。

1986年の大地震の折、この教会は崩壊した。ただ、インカ時代に築かれたという元の黒い石組は、崩れることもなくしっかりと組み合わされた状態であったという。この石組はインカ時代の遺跡で、太陽の神殿コリカンチャの一部であった。

コリカンチャはインカの民、ケチュア族の言語で、コリは黄金、カンチャは囲まれた聖堂を意味する。かつて太陽の光は、黄金の象徴であったという。インカ皇帝による政治、宗教、軍事、経済などの国家中枢がここにあった。

クスコの都は、上空から眺めると全体の形状がピューマの形をしている。コリカンチャは、ピューマの子宮に当たる位置にあり、最も神聖な場所といえる。

内部に入ってゆくと、床全体が石で造られ、中央に広場があり、その周りを回廊がめぐる。一角には、カミソリの刃も入らないほどぴたりと石が組み合わされた石の聖堂がある。太陽、月、星、雷、虹と呼ばれている聖堂である。

堂内の石壁には台形のノッチが設けられて黄金で造られた聖像が安置されていた。広場の中央には黄金で造られた泉より聖なる水が流れて、黄金の小石が広場全体に敷き詰められていたと伝えられている。この中には太陽神を祭る黄金の祭壇があった。現在、この広場の一角にはカントゥータという小さな可憐な赤い花が咲き、昔日の栄華の夢をしずかに語りかけてくるような風情が漂っている。

インカ帝国の支配と神々

インカ皇帝はコリカンチャを御座所として日夜広大な帝国の領土を守護していた。皇帝からのメッセージは、アンデスの東西南北の領地へチャスキと呼ばれる飛脚により伝達されていく。各地に宿場が整備され、多くのチャスキのリレーによってインカ皇帝のメッセージは遠隔の地まで速やかに伝達されていった。

そのためアンデス山脈を東西南北に繋ぐ、チャスキやインカ軍が通行する道路網が張り巡らされた。ケチュア語ではカパックニャンというインカ王道である。インカ帝国はこの道路網を利用して領土を広げていった。現在でもペルー各地にインカ王道の一部が残る。

インカ帝国の宗教は、太陽を神と尊崇する天体信仰で､月､星も同様に信仰の対象であった。また雪､雨､水､稲妻、風などの自然現象、山岳、河川、巨石、大地といった大自然にも精霊や神が宿り、コンドル、ピューマ、蛇などの動物もインカ以前の時代から神格化されてきた。その証がアンデスの遺跡に多く残されている。

しかし、16世紀のスペインの侵略によってインカを

アンデス音楽グループ

コリカンチャ遺跡の石組

太陽の神殿石壁

コリカンチャの広場

代表とするアンデスの宗教は弾圧され、キリスト教に改宗されてしまう。太陽の神殿、コリカンチャに在った黄金の総ては熔かされ、スペインに持ち去られるという略奪を受けた。石組の一部も破壊を受けたが、あまりに硬く重い安山岩のため、これだけは放棄された。仕方なく教会の礎石となったのである。

悲しみのインカの響き

インカとは太陽の御子である皇帝を表す。インカの皇帝は、13代もの間栄華をきわめた。10代皇帝トゥパックユパンキの時代には、北は現在のエクアドルから南はアルゼンチン、チリにまでおよぶ大帝国が打ち立てられ、次代の皇帝ワイナカパックの時代に領土は最大となった。

クスコでは毎年６月24日の冬至の日に、太陽の祭典インティライミが開催される。コリカンチャを基点としてインカ時代の皇帝や一族、将軍や兵士、太陽の乙女、神官に扮した人々が整然と行列を組み、市街を練り歩く。この祭りに集うインカの末裔たちが誇り高い昔に回帰して、コリカンチャに咲く赤い花カントゥータのように血を滴らせる祭典である。

私は、太陽の神殿のベンチに座り、静かに目を閉じて心を澄ますと、一瞬、失われたインカの幻影が黒光りする石組の内より湧き上がってくるような想念にかられた。

街路に出ると、ただ一筋に続くロレト通りがある。小路の両側にはインカ時代の精巧な石組の壁が古色蒼然として、遠近法のように続いている。

やがて道の彼方から聞こえてきたのは、哀しみを帯びた弦の調べだ。近づくと目の不自由な楽師が素朴な作りのハープ、アルパアンディーナを奏でている。そのメロディーは、まるでインカの民の嘆きのように通りに響いていたのだった。

ドレミソラの五音階を基調としたこのメロディーは、スペインによって侵略された人々の深い悲しみを湛えている。今でもクスコに旅すると自然とこの通りに足が向いてしまうのだ。

石の都

ロレト通りの先には、アルマス広場という大きな広

コリカンチャから見たクスコの街

ロレト通りのハープ弾き

場が見えてくる。上空から見るとピューマの心臓に当たる場所である。広場に面してそそり立つ建物はスペインの植民地時代コロニアル様式で建てられた教会コンパーニャヘススや大聖堂カテドラルである。

こうした大きな教会の石組や土台もインカ時代のものである。1781年、この広場でスペイン圧政に敢然と反乱を企てたインカ王族の血を受け継ぐクスコの南方の首長トゥパク・アマルが処刑された事件もあった。

死後、彼の魂はコンドルに変身し、アンデスの天空からインカの民を見守り続けているという伝説も生まれている。現在のアルマス広場はいつもたくさんの人々が憩い、祭りや行事などが賑やかに開かれている。

上空から見るとピューマの頭の部分、クスコの北西の丘陵には、巨石を３層に組み上げた石の要塞サクサイワマンがある。巨石の中には高さ５ｍ、重量350ｔを超える石もあり、400m状にわたって続いている。いかにも難航不落の長大な砦であったことがわかる。高台にあるこの場所からは、クスコの都を一望に眺めることが可能で、軍事的な要塞としても最適な場所であった。しかし1536年、インカ軍とスペイン軍がこの一帯で戦い、結果的にスペイン軍が勝利してインカ軍はさらに北へ撤退することを余議なくされた。

サクサイワマンの巨石群は現在は遺跡として静かにたたずみ、クスコの街を見下ろしている。見学の人々が去った広場の草の上に座り、夕暮れのサクサイワマンを眺めていると、往時の戦いの鬨の声が聞こえてくるようだった。スペインの侵略に最後まで抵抗したインカの人々の魂がこの遺跡には生き続けているのだ。

サクサイワマン遺跡の近くにはケンコと呼ばれる遺跡もある。高さ５ｍもの巨石にはピューマの像が浮き彫りにされている。ピューマは前インカ時代、ペルー北部のチャビン文化の象徴であり、インカにもその影響が見られる。遺跡の地下には神殿状の洞窟があり、儀式が行われていた。

アンデス全域では昔から動物には大きな力があると信じられてきた。コンドルは天空を守り、ピューマは地上を、ヘビは地下を司っていたと伝えられる。

美しい泉

ケンコ遺跡から北にはプカプカラ遺跡がある。プカプカラとは赤い砦という意味をもち、クスコ北方面への監視所的な砦として機能していたといわれ、今でも石壁には赤い色が残っている。

その側には美しい泉で知られるタンボマチャイ遺跡がある。現在でも水源が何処にあるか解っていないが、いつも清水が滾滾と湧き出している。

聞けばインカの王族もクスコからタンボマチャイに行幸して沐浴を楽しんだという。私もこの泉水を両手にすくって飲んでみた。その甘露な味は、遺跡巡りで乾いた喉を潤してくれた。

インカの遺跡を訪ねて歩き回り、夕方再びクスコの中央、アルマス広場に戻ってきた。辺りはすっかり暗くなり、カテドラルも大きな黒いシルエットとなって浮き上がって見える。広場の街路灯にオレンジの光が灯り始める。太陽が沈み、寒くなった広場を人々が足早に家路を急いでいった。

近くの小さなレストラン、カンディーレを訪ねると、主人がにこやかに迎えてくれた。クスコ料理を肴にクスケーニャビールで遺跡の光景を心に流し込む。

グラスを重ねるたび、静謐なインカの古都、クスコの夜は更けていった。

マチュピチュ遺跡への旅

朝霧の中を走る

クスコの夜明け、まだ暗い市場近くのサンペドロ駅から、暁の光を受け列車は６時前に走り出した。

密集する家々の間を通り、勾配のきつい線路を数回のスイッチバックを繰り返しながら、列車はクスコ市

アルマス広場のカテドラル

サクサイワマン遺跡

街を展望する丘陵まで上っていく。茶色の屋根の連なりの彼方に、標高6,384mの霊峰アウサンガテがくっきりと見える。アウサンガテとは山にすむ精霊の意、6,000m級の山など日本人には信じがたい高さに違いない。

やがて車内にはコーヒーの香りが漂い、朝食のハム、チーズ、パンなどが配られ始める。マチュピチュへと向う車窓を流れる高原の風景は、映画のようでさえあって、異国の旅情はいっそう掻き立てられるのだ。渓谷を横切る鉄橋を渡り、列車はオリャンタイタンボの駅へ着いた。構内には茹でたトウモロコシや美味しそうなケーキが並び、民芸品などを商う人々の声が満ちている。

しだいに狭まってくる渓谷沿いを列車は縫うように走る。右手には、その姿を見せることは稀というベロニカ山（5,682m）の秀麗な山容が見えた。列車はマチュピチュを目指す３泊４日のインカトレッキングの出発地点となっている88㎞駅に入る。ここで下車すると、インカ時代の石組の残るコリワイラチーナ遺跡を見ることができる。

緑濃い雲霧林のジャングル地帯に列車が吸い込まれるように入っていく。クスコ市街から比べると標高は1,200mほど低くなり、2,200m程度。高山のイメージがあるが、じつはマチュピチュはクスコより標高は低いのだ。

蛇行する河、ときおりトンネルを抜け、列車はゆっくりと進み続ける。途中の駅では、10才くらいだろうか、男の子が手を振りながら列車を追いかけてくる。人懐っこい笑顔、子供たちの表情はどの国にあっても気持ちを和らげてくれる。

列車に乗り込んでから４時間、マチュピチュ直下の小さな駅、アグアスカリエンテス駅に着いた。ただ、見上げても遺跡の姿は山々に隠れ、まったく見えない。線路の両側には小さなレストラン、宿などが数軒あり、静かな佇まいだ。アグアスカリエンテスとはスペイン語で温泉を意味しており、実際この小さな村の上には温泉があって、村人でにぎわっている。

10時、列車を降り、バスに乗り換えマチュピチュを目指す。昨日クスコで買った水と食料、そしてケーナをリュックに詰めることを忘れない。バスは橋を渡り、いくつもの角を曲がって坂道を上っていく。

片側は急な崖で、樹林の中には野生の蘭が赤とピンクの可憐な花をつけている。アグアスカリエンテスの駅も悠か下界となる。狭路を時折バスが行き違う。周りの山々を覆った朝霧が引き、山頂部が少しずつ晴れてくる。

ワイナピチュ峯が、私の前にその姿を現した。

空中都市

マチュピチュ遺跡は、背後にそびえるワイナピチュ峰に抱かれるように存在する。しかし山麓からは容易にその全貌を確認することは出来ない。

1911年アメリカ、エール大学のハイラム・ビンガムらの探検によって発見されるまで、マチュピチュは標高2,400mの山上の森林の中に眠っていた。

朝一番の列車だったので遺跡入口は人影が少なくとても静かだ。

遺跡に入る。居住区の石組を過ぎて左手の急な斜面を登る。山道は鬱蒼とした樹林帯で、まだ遺跡は見えない。しばらく樹林帯を行き、坂道を登り詰めると平らなテラスに出た。

そこからパノラマのように凄い迫力で迫ってきたのは、マチュピチュだった。自分はこの一瞬のために生きてきたのではないかと、激しい感動に包まれたことを今でも覚えている。その整然とした石造の街は、ワイナピチュ峰の下部に静かに存在していた。朝の太陽の光が幾筋も美しい文様となって降り注ぎ、マチュピチュをさらに神々しく際立たせる。

列車から見たクスコの夜明け

マチュピチュへウルバンバ河

遺跡内には、馬蹄型の精巧な石造りの神殿がある。遺構は巨大な自然石の上部に組み上げられた「太陽の神殿」と呼ばれるものである。東側に２つの窓が開き、正確な石組の構造物である。遺跡の上部からは周囲の山々もはっきりと見える。快晴、ワイナピチュ峰の下部には蛇行するウルバンバ河からの河霧がたなびいている。

遺跡最上部のテラスに座りこむと、石組の陰にはビスカッチャ（鳴きウサギ）のかわいい姿があった。ここから奥へと続くインカ道は蘭などの花の宝庫で、険しい断崖を横切る木の橋などがある。

テラスから石畳の坂道を行くと石造の門に出る。この門からマチュピチュ峰に向かって50分ほどインカ道を登ると峠に至る。ここにも石造りの門が残っており太陽の門と呼ばれている。遺跡の中央部には、自然石が多く露出している石切り場があり、ここでマチュピチュの石材を切り出し、加工していたとする説がある。しかし、遺跡の石材の膨大さと多様さからすれば、おそらく他からも運ばれてきた石も多かったに違いない。

マチュピチュにはインティワタナ（太陽を繋ぎとめる所）と呼ばれる神殿もあり、神官がこの場所で天体の運行を観察して様々な神託を受けていたと考えられている。ここに立つと広大な谷間が一望に見渡せ、悠か彼方にはサルカンタイの山岳（6,271m）が白雪を戴いてそびえていた。

インティワタナを下りた大きな広場には、アルパカが２頭、緑の草をゆっくりと食んでいる。人懐っこいアルパカで、パンチョ、トーマスと呼ばれていた。広場を横切り、「ワイナピチュ」若い峰の方に進むと大きな草葺きの家、側にはパチャママ神殿があった。パチャママとは大地の恵みを与えてくれる地母神で、パチャは大地、ママは母を意味する。私がクスコで求めたパンを食べていると、アルパカのパンチョが近寄ってきた。

ワイナピチュに登る

「マチュピチュ」には年老いた峰という意味があり、「ワイナピチュ」（若い峰の意）へと続く鞍部に遺跡は広がる。

私は、ワイナピチュの山頂を目指す。登山道の入り口に管理小屋があり、係員に大きな荷物を預けて出発である。急峻なワイナピチュの斜面に造られたインカ道は、狭く急な小路で、人ひとりがやっと通れるような道幅で、危険が伴う。ルートは２筋の道があり、右の道は崖になっていて以前に滑落して亡くなった人もあったという。

左の道を注意してゆっくり登っていく。高度も上がり遺跡の居住区や先ほど通ったインティワタナがはるか下方に見える。時折小さな蝶が姿を現し、山道を導くように舞っていく。山道はさらに険しくなり、山頂付近には大岩が折り重なった岩石帯が続く。巨石のトンネルをくぐると、ようやく山頂が見えてきた。喘ぎながら一歩一歩と登る。

麓から１時間、ようやくワイナピチュの頂きに到達した。山頂には大岩があり、その周りをワイナピチュの山麓から飛んできた無数の蝶達が花のように舞っている。こんな山頂部にもインカ石組の遺跡が残り、かつて、神官がここから周りの聖なる山々に祈りをささげていたと伝えられる。

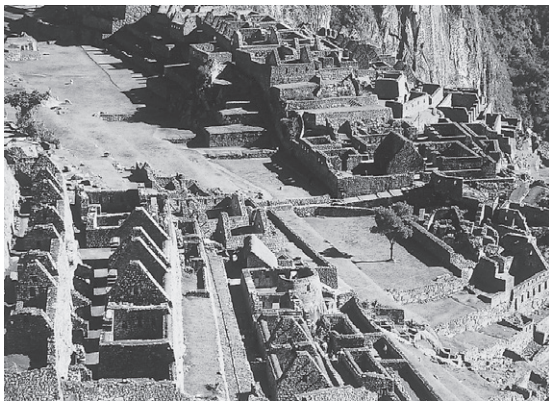
私は、リュックからケーナを取り出し、「太陽の乙女たち」と「コンドルは飛んで行く」を奏でてみた。ケーナの音色は遺跡に響き渡るかのように風に乗って広がっていった。

山頂で遺跡の整備・管理をする人も仕事の手を止めて笑顔で話しかけてくれる。今では信じられないが、1991年当時ペルーを旅する人は少なく、ワイナピチュ山頂には、他に旅人はいなかった。ワイナピチュ山頂の大岩に座ると、心と身体がすべて遺跡に溶け込んでいくかのようだった。

マチュピチュ遺跡

インティワタナ　マチュピチュ

パチャママの神殿　マチュピチュ



広場と居住区　マチュピチュ

ワイナピチュからの下山、足場に気をつけて慎重に下ると、登りでは見えなかったマチュピチュ遺跡の全景が手にとるように見える。高度な土木技術によって二つの山岳鞍部に整然と合理的に形成された構築の極致としか言いようがない。

管理小屋で荷物を受け取り、左側にある居住区を訪れる。石造りの多くの家屋があり、色々な大きさの屋根が続く。この区画には何かしらインカ人の生活の温もりが感じられる。遺跡全体に庶民階級が暮らした街の様な雰囲気がある。居住区内には太陽神に仕えた女性が生活したと言われる大きな家屋があり、その一角には地中から露出した丸石がある。丸石は表面に凹みがあり、その凹みに水を張って鏡として使っていたのではないか、という説がある。

居住区は遺跡の谷側の急な斜面まで続いており、その辺りには小さなアンデネス（段々畑）も見られる。急峻な山岳地帯の隔絶された石の都で、食料と水はすべて自給自足されていたと伝えられる。高山の岩場のため、耕作に用いる土もクスコからマチュピチュまでインカ道を運ばれてきたようだ。

アンデネスでは、ジャガイモ、トウモロコシ、キヌア、ユカ、コカ、マメなどの作物が栽培された。遺跡の中には幾つもの水場が造られており、現在でも豊かに水が流れ続けている。石造りの水路が設けられ、各区画に水が運ばれていた。

豊富な水と食料自給が可能であったので、マチュピチュはインカ帝国がスペインの侵略を受けてからも見つからず、人知れず天険の隠し砦のように存在し続けることができたのではないだろうか。アンデス考古学ではインカ人は文字を持たなかったと考えられているが、いつの日かインカ文字が発見されて、インカ文化を始めとして様々なアンデス文明の成り立ちが明らかになる日が来るのではないかと私は思っている。

今だ、ペルーアンデス奥地にはマチュピチュのような遺跡が数多く眠っているという。これからも私はアンデス音楽を通じて、謎に満ちたアンデスに一生関わっていくことだろう。

参考文献

寺田和夫著　「インカの反乱」1992年　思索社
ミロスラフ・スティングル著、坂本明美訳　「大帝国インカ」1986年　佑学社

ワイナピチュを望む

ワイナピチュ山頂にて

中米には、かつて「マヤ」と呼ばれる文明が存在していました。それはいまから遡ること約1500年以上前、日本でいえば古墳時代から平安時代にあたる時期に最も栄えた文明です。マヤ文明の特徴としては、極めて正確な暦をもっていたこと、漢字に近いシステムを持つマヤ象形文字を使用していたこと、石造ピラミッドなどを建造していた都市文明であったことなどが有名です。また地域全体を統一した王朝はなく、多いときには60～70の王国が各地に存在していました。これは日本の戦国時代が常に続いていたイメージともいえます。

そのかつての王国のひとつがホンジュラスにもあります。それはコパンとよばれる世界遺産にも登録されている遺跡です。マヤ文明の中でも非常に重要な遺跡であると同時に、海外からの観光客も多数訪れるホンジュラス有数の観光地でもあります。コパン以外にも国内には多くの遺跡がありますが、一般に「遺跡＝保存すべき」という認識が低いために、道路工事や農作業などに伴う人為的破壊も抑えきれないのが現状です。こうしたことは日本でも起きていますが、ホンジュラスでは考古学者の数が少ないために、破壊を防ぐための調査があまり実施できていませんでした。そこで、考古学及び文化財保護の研究が進んでいる日本が積極的に協力をしてきました。

※

私は2006年６月から２年間青年海外協力隊考古学隊員として、中米ホンジュラスの国立人類学歴史研究所という、日本の文化庁にあたる機関で働いていました。私の配属されていた文化財局考古部の業務は、遺跡の緊急発掘調査、出土遺物の管理・分析、及び広報業務等多岐に及びます。その他、遺跡の周辺に住んでいるマヤ民族などの人々に対する文化振興も行っています。自文化を良く知り、誇りを持つことによって、自分たちの手で守ろうと意識するようになることが、ひいては文化財の保護にもつながるからです。

研究所の仕事は、日本の文化財行政と基本は同じですが、その実情は大きく異なります。まず考古学者の数が非常に不足しています。ホンジュラスには考古学科のある大学はなく、ホンジュラス人考古学者はアメリカで学位を取った数名だけ。私がいた時はメキシコ人を含む全部で５名の考古学者で全国の遺跡を担当しなければならず、とても現実的な状況ではありませんでした。

また予算が不安定であることもホンジュラスの大きな特徴です。開発途上国の多くの国では文化遺産保護事業の予算を観光収入で賄うことが一般的ですが、ホンジュラスでも同様で、マヤ文明の世界遺産であるコパン遺跡の入場料収入に頼らざるを得ない状況です。私の帰国後ですが、昨年の６月にホンジュラスではクーデターが起きたため観光客が激減してしまい、調査費どころか職員の給料も十分に出ない状況に陥っていた時期があったそうです。

ホンジュラスでは未登録の遺跡も多く残されており、その発見・登録には住民の通報が必要不可欠となりますが、多くの住民に文化財保護の認識はなく、マヤの貴重なピラミッドが潰されてトウモロコシ畑になってしまうことも多々あります。当然ながら文化財保護法にあたる法律は整備されてはいるのですが、機能していないのが実情です。そのため私たち考古学者が農村を巡って地道に広報活動を行う必要もありました。

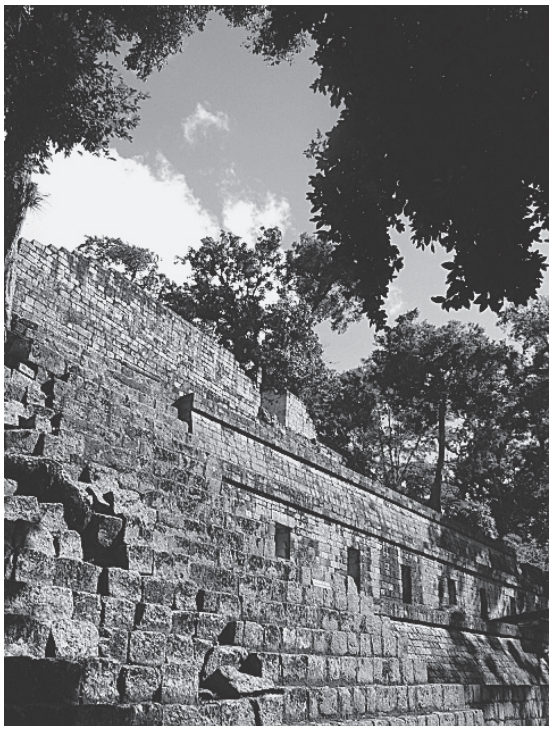
現在私は、外務省で開発途上国の文化振興業務に携わっています。途上国の文化遺産を保護するための支援（発掘機材の供与やユネスコを通じた修復事業等）もその業務に含まれています。日本国内の文化遺産保護に貢献することは当然重要ですが、文化遺産保護の考え方が浸透していない国では遺跡破壊が日本の比ではないスピードで進んでいます。これはその国の人々にとってだけでなく、世界にとっても大きな損失であり、私たちがその保護に貢献することもひとつの責務であると思います。ホンジュラスの例のように、現地だけでは解決できない問題が途上国では山積しています。考古学先進国の日本は、資金面の協力だけではなく、技術協力、人的協力を通じて世界の文化遺産保護に貢献していくことができるのではないかと思います。

コパン遺跡の「球技場」

コパン遺跡の大地に立って

―中米・ホンジュラス共和国―

中里晶子



カリビアンリゾートと並び、ホンジュラスが誇る観光資源。中南米最貧国の１つであるホンジュラスにとっては貴重な収入につながっている。

１　ホンジュラスの大地

平成18年、私は青年海外協力隊の保健師としてホンジュラスの大地を踏み、２年間をこの国で過ごすこととなった。

ホンジュラス共和国は、メキシコの下の下にある中米の小さな国。面積は日本の1/3程度、人口約700万人。中南米でも最貧国の１つといわれる国である。

保健師としての私の仕事は、母子保健に関すること、この国での妊産婦・乳幼児死亡の値は日本とはかけ離れて高く、不衛生な環境や、医療機関不足とそのレベルの低さ、インフラ未整備、そして教育水準の低さから、助かるはずのかけがえのない命が日々奪われているのが現状だった。

しかし､ラテンの人々の多くが､「今が良ければいい」と先のことは考えない陽気な性格なのか（もちろん貯蓄や年金の心配もせず。そんな開き直った人生がうらやましかったが……)、「予防」という概念がほとんどなく、そんな中、私は妊婦学級や衛生教育など、予防に重点を置いた活動を展開することになった。

現在私は、御代田町職員として保健福祉の仕事に携わっているが、ホンジュラスの暮らしの中で何度か訪ねたコパン遺跡について、考古学会の皆さまにご紹介させていただくことにしたい。

２　コパン遺跡

ホンジュラス西部、グアテマラ国境に近いコパンは、マヤ文明の代表的な都市遺跡の１つだ。８世紀頃に壮麗な芸術文化が花開き、林立する石碑や神殿な階段などに数多くの華麗な装飾を残している。階段は「神聖文字の階段」と呼ばれ、72段の階段に2,500以上のマヤ文字でコパンの王朝史が刻まれているもので、スペイン期の新大陸では最大の文字史料と言われている。

そもそもこの地方には紀元前6000年頃から農耕を始め定住するようになった。やがて集落は町となり、紀元前500年前から壮大な神殿の建設が始まっている。またコパンは古代マヤの科学センターとしても知られ、７世紀には１年を345.2420日と算出した。現在使われているグレゴリオ暦の１年は365.2425日だから、驚異的な精度である。コパン王朝は695年に「18ウサギ王」が13代王として即位し全盛期を迎え、コパンの芸術はまさに大輪の花を咲かせた。林立する石碑は、いずれも丸彫りに近い精緻な彫刻を施した見事なもので、その多くに王自らの勇姿が刻まれている。同時に、都市センターの増改築にも力を注ぎ、現在のコパン遺跡の姿はあらかたこの頃確立したものである。

しかし738年、絶頂にあった王が衛星都市のひとつに過ぎなかった他の王に捕えられ斬首されてしまう。王の処刑で権威が地に落ちたことは事実だったが、細々と王位の継承は行われていた。しかし、802年に文字記載は途絶え、822年に即位した王は未完成の祭壇を残したまま、忽然とマヤ史から消え去ってしまい、その背景は謎に包まれている……。

コパン遺跡は畏怖の念を抱かせるような威圧感はなく、彫刻は人物像や神像、鳥獣でありその後のマヤ文明に著名な抽象的な幾何学文様とは異なり人間らしさに満ちている。優れた王の出現により王朝を発展させ、悲惨な死が文明の滅亡にも直結するような、大変人間臭い文明だったといえる。

日本ではほとんど話題にのぼらないホンジュラス国であるが、経済援助という面からは関係が深く、コパン遺跡の復元作業も日本の建設会社が請け負っている。

JICA では毎年コパン市で盛大に日本文化紹介を行っている。外国人観光客も足を止め、その日は日本色に染まる１日となる。

３　異文化と接して

ホンジュラスでの私はといえば、仕事も生活も順風満帆とは言い難く、仕事では口はうまいが約束を守れない？一部のホンジュラス人へのイライラに悩まされ、生活でも熱帯病での入院や強盗被害（２回ともナンパと勘違い。私もおめでたいラテン人の１人……笑）等で辟易していた時期もあった。

そんな時、気分転換が一番！ということでコパン遺跡へ足を運んだ。観光資源が少ないこの国においてコパンは外国人観光客が集まる街。何より治安の良さに感動！また、田舎では好奇の目に晒されることが多少なりともストレスだった私にとって、身も心も解放される場所だった。

真っ青な空に凛と佇む石碑。木々に守られ、堂々と君臨する神殿。雄大で、繊細な遺跡群には圧倒された。同時に王の絶対的な権力と、遣える者たちの王への尊敬や敬意、自然から学ぶ知識や精密な技術、汗や涙を想像し身震いさえした。また考古学隊員からコパン王朝の光と陰、栄華と衰退について深く触れたことも、コパン観光だけでなく私の暮らしにコクと深みを増してくれた。

旅行では、食事がおいしいというような「第一印象」でその土地や旅行を評価することが多いように思える。しかし遺跡が語る悠久の歴史やその時代の人の汗を目の当たりにすることで、もっともっと想像力に溢れたものとなり、旅がより一層深化したものとなるのだろう。歴史の中で、かつて味わった甘い味、渋い味、苦い味、すべてがひっくるめて人間が作り上げられ、その思いを常に反芻しながら先を見つめていく。国づくりや街づくりも同じことだと思う。コパン遺跡や考古学者との出会いから、私は「温故知新」の精神を磨いてもらったように思える。

ホンジュラスの子供たちと筆者

ほとんど丸彫りに近い彫刻。石碑はもともと暦と王朝の記録のために造られ、平板で小さなものだったが、18ウサギ王の時代にはそのような制約から自由に飛翔し立体感溢れる造形美を作り出した。側面にはマヤ文字が施されている。

南太平洋沖にポツンと浮かぶ島、1722年の復活祭の日に確認されたこの島は、イースター島と名付けられた。もっとも、以前から住んでいた島の人々は自らの大地を“ラパヌイ”と呼ぶ。ラパとは島、ヌイとは大きい、つまり大島という意味である。チリ領にあるイースター島だが、「太陽の西、月の東」と呼ばれるように、大陸より孤立した海上にある。

イースター島といえばモアイ、現在1,000体以上ものモアイ像が残されているという。この島でモアイ像がさかんに作られたのは、日本では平安時代にあたる10世紀から17世紀末頃らしい。

島の人々がなぜモアイを作ったか。あまりはっきりとはわかっていないが、神格化された祖先や英雄の姿を現すのだとされている。モアイの大きさは３～５ｍ程度が一般的なようだが、中には10ｍを超す巨大なものまである。初期には小型のモアイが、やがてのっぽで足のないモアイへと変化し、終末期には赤い帽子を被ったモアイ像となった。

島には、ラノララクという石切り場があって、ここには玄武岩の石斧などによって切り出しかけられたモアイがいくつか横たわっている。モアイはここから、木のコロなどを使って、イースター島各地に運ばれていった。

イースター島は火山島であり、信州のように黒曜石の原産地でもある。島の人々は、ガラスのかけらのように鋭い黒曜石を多用し、ナイフを作った。さらに黒曜石は、モアイの眼として埋め込まれていたこともあったらしい。

そのモアイ像も、18世紀になるとまったく製作がなされなくなってしまう。島の人口増や環境変化がその要因と言われ、さらには巨大な石の偶像を倒すモアイ倒し戦争まで引き起こされた。その後、島は次第に荒廃した。

1960年、チリ大地震の津波によって倒れたトンガリキのモアイは、日本のタダノ建設や奈良文化財研究所の技術協力などによって、1995年までに再び復元された。現在イースター島は世界遺産として登録され、多くの人々が訪れる場所になっている。

トンガリキのモアイ像

ラノララクのモアイ像の石切り場

♪　編集後記　♪

少子高齢化という人口減少社会をむかえている今日だが、佐久考古学会の会員数の減少も著しい。

現在の会員は、最盛期の100名を数えた数より、40％減、物故会員や、高齢のため退会される会員が多く、また若い人が地域の学会には所属しないという実情もある。おそらくどの史学会も同様な問題を抱えているにちがいない。

本年は学会設立40周年の年、伝統ある佐久考古学の灯を消さないよう、魅力のある学会運営を模索していかなければなるまい。

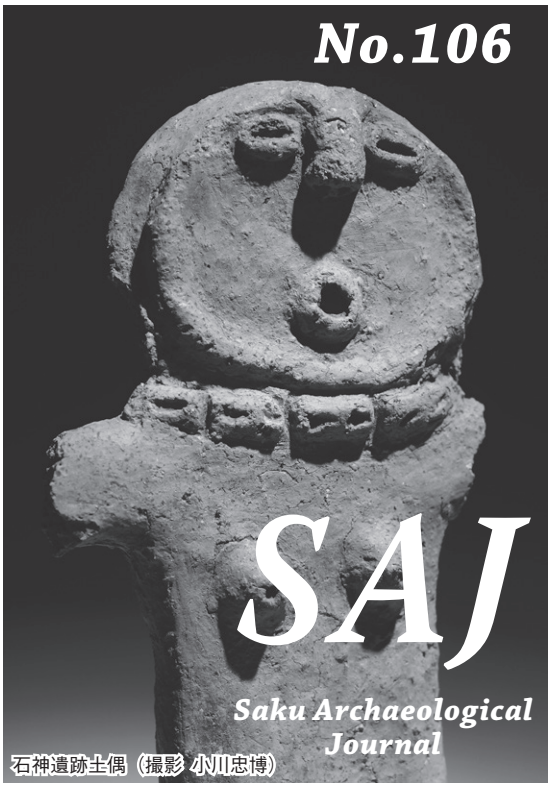
（つつみ）

佐久考古通信　№105

発行所　佐　久　考　古　学　会
〒384-0091 小諸市御影新田1945-6
桜井　秀雄　方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267（22）8536

発行日　2010年６月１日
発行者　藤　沢　平　治
編集者　堤　　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク



石神遺跡土偶（撮影 小川忠博）

佐久考古通信

■ 遺跡と考古学を学ぶためのコミュニケーション誌 ■

2011. 1. 20　佐久考古学会

集成 佐久の縄文土偶

全国30万か所の縄文遺跡から１万5000体あまりが発見されているという土偶。今回は、佐久地方の縄文土偶を集成する。

現在、確認される佐久地方の土偶は、200体ほど。そのうち小破片や部位のわからないものをのぞく主要な土偶112体を集成した。

佐久地方では、縄文時代の前半、すなわち草創期・早期・前期の土偶はこれまで確認されていない。時期的には、中期・後期・晩期の土偶がみられる。もっとも多いのは中期で、後期もそこそこの出土例がある。晩期は氷・石神遺跡などに出土事例が限られる。

集成は小諸市域を桜井秀雄、佐久市域を冨沢一明、南佐久地域を藤森英二、その他を堤隆が行った。

佐久地域の土偶のあり方

信州には、国宝「縄文のビーナス」（中期）や、重文「仮面の女神」（後期）に代表されるような素晴らしい土偶が存在する。2009年に大英博物館で開催された「土偶展」でも、それらは異国の人々を唸らせるような逸品として異彩を放っていた。

しかし、二者はいずれも八ケ岳西南麓に降臨した女神である。一方の佐久地方といえば、頁を繰っていただいておわかりのように、とびぬけた逸品の土偶は存在していないばかりか、あまり土偶作りに熱が入っていない感さえある。

佐久地方の縄文時代で目立つのは、女性をシンボライズした土偶より、男性をシンボライズした石棒であるといえる。佐久穂町北沢の日本一の大石棒の存在に見るように、である。

とはいえ、佐久地方にはどのような土偶が出土しているのかを基礎集成しておくことはきわめて重要な作業であるものと考えられる。

ここでは、その表情や形態・型式の判明する土偶を中心に既報告のなされた資料について集成を行った。図化されていないものについては、写真を転載した。縮尺は、どうしてもわからないもの少数例を除き、1/2で統一した。

各時期の土偶の特徴

土偶が一般に、破壊を前提に製作されていることは、考古学的定説といってもいいだろう。実際、ここで紹介した112例の佐久地方の土偶も、完形は一例もなく、いずれもパーツばかりである。

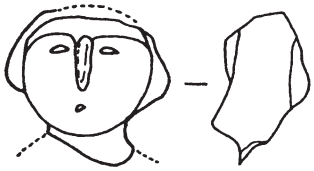
土偶は大きな胸のふくらみなどから女性像とされ、腹の突き出た妊婦を象徴しているとか、女神などと認識されるが、一方で性を超越した存在であるとか、精霊であるとするような見解もみられる。

中期：佐久の縄文中期の土偶では、「カッパ形土偶」の存在がまとまっている。佐久市寄山遺跡で６例（17～22）、御代田町川原田遺跡で１例（47）、小諸市郷土遺跡で４例（64・65・66・68）がある。また、焼町土器と共通する列点刺突文をもつ土偶が郷土遺跡にある（81）。

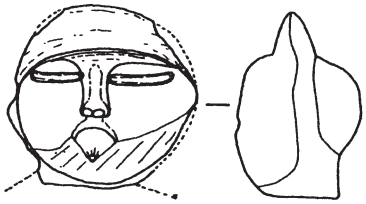
郷土遺跡は、発掘報告書にあるだけでも67例と、佐久地方で最も充実した土偶の出土例があるが、出ベソで、多様な沈線を胴部に刻み、尻の曲線も沈線で誇張されるようなものが多い（76・79など）。また、足部は縦走する並行沈線で埋められるものも多い（84～88）。

また、口が十字に刻まれるやや不気味な顔付の土偶も、佐久市の堀端（１）、平石（２）、中村（37）遺跡などに存在している。

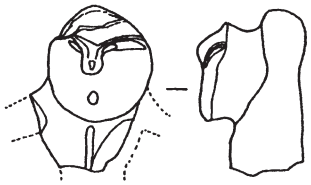
図１　佐久の縄文土偶　〈堀端・平石・東丸山・胡桃沢・浦谷Ｂ遺跡〉（1/2）（１・３以外は佐久市教委蔵）



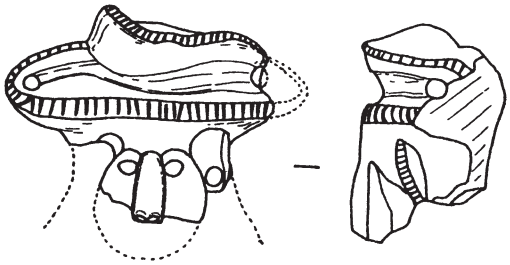
8 浦谷Ｂ遺跡（望月地区）
後期～晩期初頭。頭部
目・鼻・口の表現



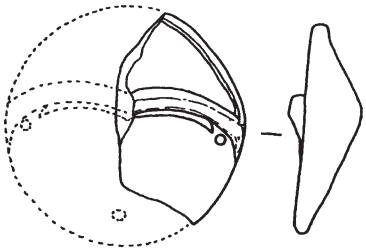
9 浦谷Ｂ遺跡（望月地区）
後期～晩期初頭。頭部。目・鼻・口の表現



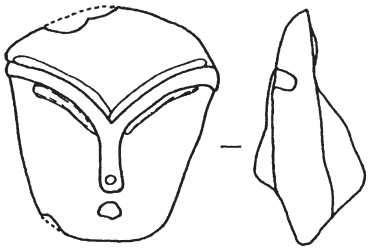
10 浦谷Ｂ遺跡（望月地区）
後期～晩期初頭
頭部。目・鼻・口の表現



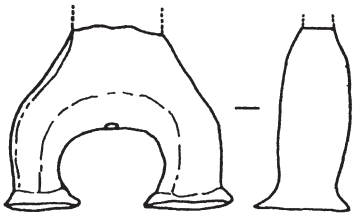
11 浦谷Ｂ遺跡（望月地区）　後期～晩期初頭
頭部。目・鼻の表現



12 浦谷Ｂ遺跡（望月地区）　後期～晩期初頭
頭部。目の表現

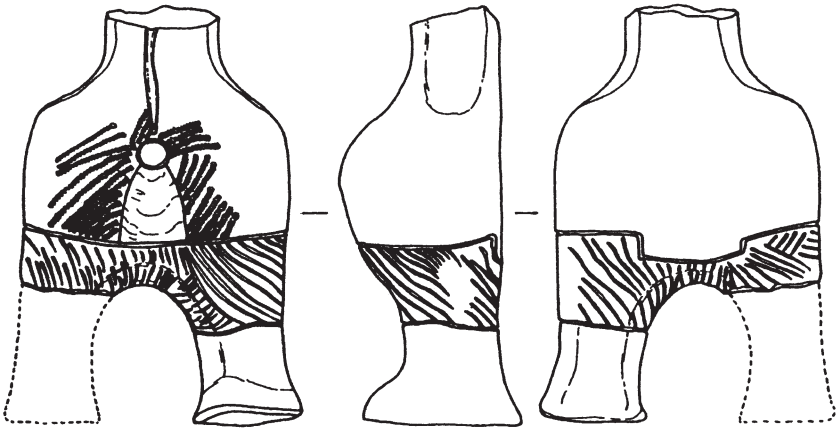


13 浦谷Ｂ遺跡（望月地区）
後期～晩期初頭。頭部
目・鼻・口の表現



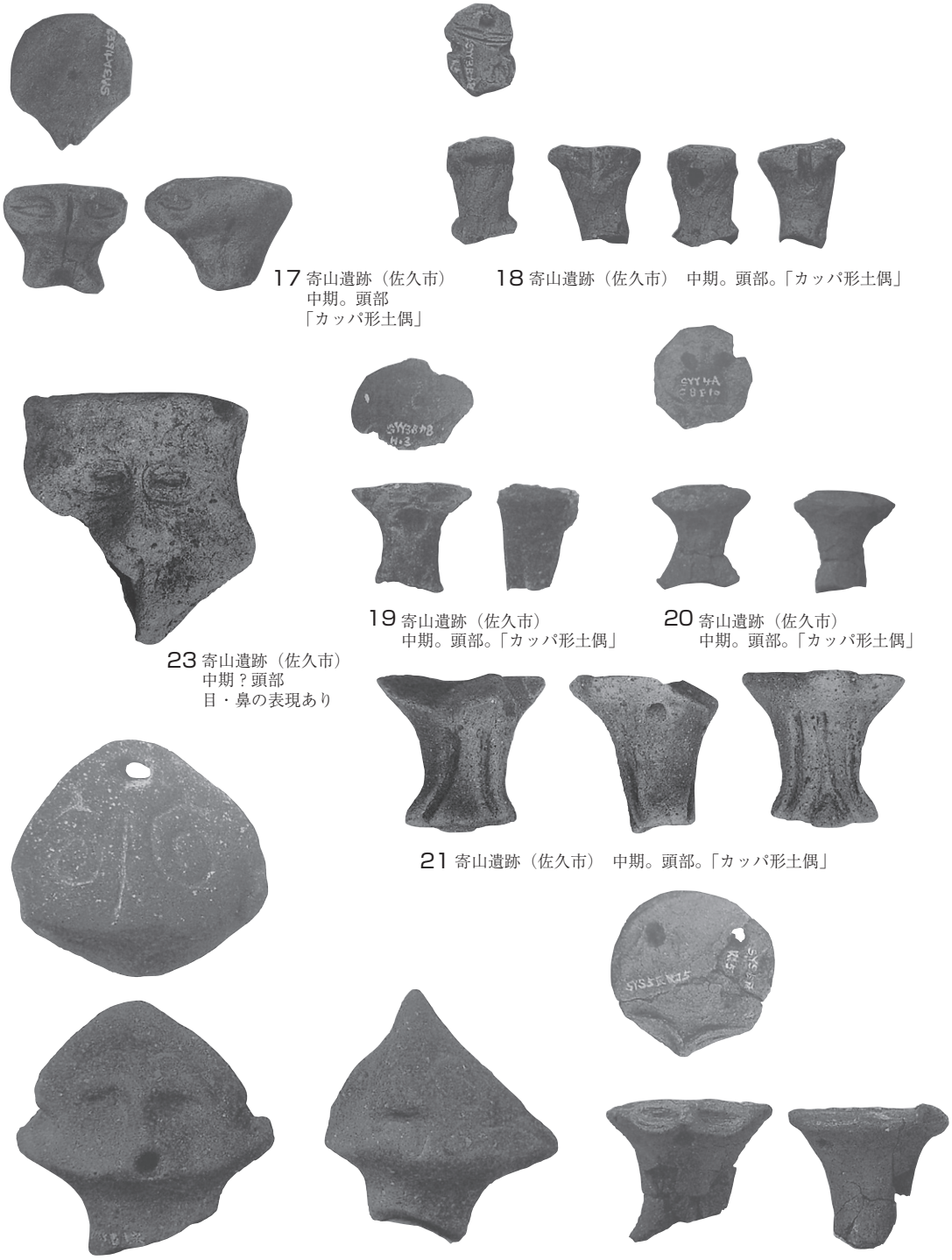
14 浦谷Ｂ遺跡（望月地区）
後期～晩期初頭。脚部。無文

15 浦谷Ｂ遺跡（望月地区）
後期～晩期初頭
脚部。無文



16 浦谷Ｂ遺跡（望月地区）　後期～晩期初頭。胴下半部。ヘソの表現の周囲に縄文施文。沈線でパンツ状の表現

図２　佐久の縄文土偶　〈浦谷Ｂ遺跡〉（1/2）　すべて報告書より転載（佐久市教委蔵）



17 寄山遺跡（佐久市）
中期。頭部
「カッパ形土偶」

18 寄山遺跡（佐久市）　中期。頭部。「カッパ形土偶」

19 寄山遺跡（佐久市）
中期。頭部。「カッパ形土偶」

20 寄山遺跡（佐久市）
中期。頭部。「カッパ形土偶」

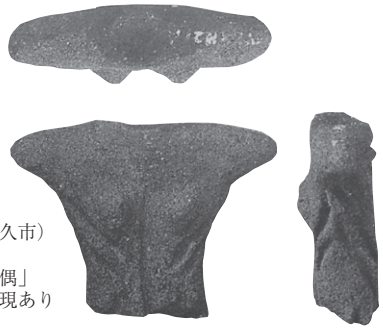
23 寄山遺跡（佐久市）
中期？頭部
目・鼻の表現あり

21 寄山遺跡（佐久市）　中期。頭部。「カッパ形土偶」

24 寄山遺跡（佐久市）　中期。目・鼻・口の表現あり

22 寄山遺跡（佐久市）　中期。頭部
「カッパ形土偶」

図３　佐久の縄文土偶　〈寄山遺跡〉（1/2）　すべて報告書より転載（佐久市教育委員会蔵）



25 寄山遺跡（佐久市）
中期。胴部
「バンザイ土偶」
胸・ヘソの表現あり

26 寄山遺跡（佐久市）　中期。胴部。胸の表現あり

27 寄山遺跡（佐久市）　中期。胴部。胸の表現あり

28 寄山遺跡（佐久市）
中期。胴部。胸の表現あり

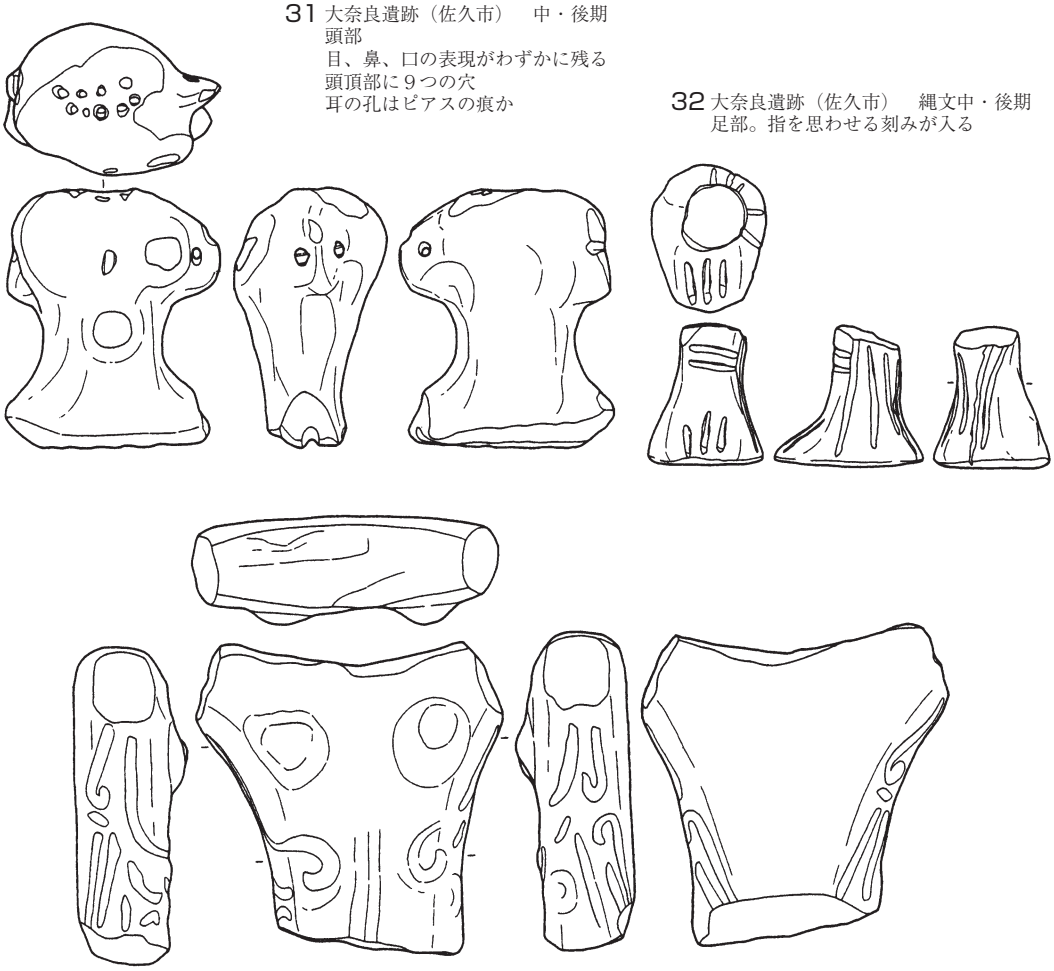
29 寄山遺跡（佐久市）　中期。胴部。胸の表現あり

30 寄山遺跡（佐久市）　中期。胴部下半～脚部。平行沈線で全体を埋める。「出尻土偶」

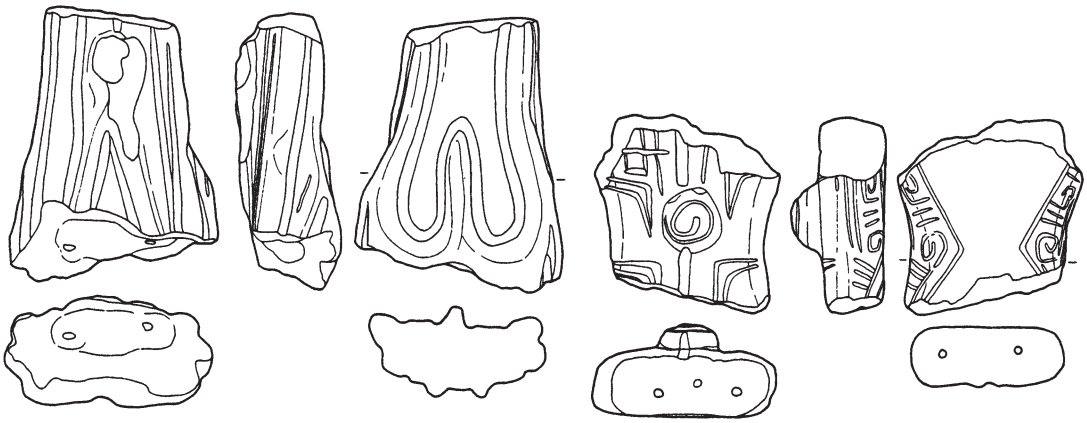
図４　佐久の縄文土偶　〈寄山遺跡〉（1/2）　すべて報告書より転載（佐久市教育委員会蔵）

31 大奈良遺跡（佐久市）　中・後期
頭部
目、鼻、口の表現がわずかに残る
頭頂部に９つの穴
耳の孔はピアスの痕か

32 大奈良遺跡（佐久市）　縄文中・後期
足部。指を思わせる刻みが入る



33 大奈良遺跡（佐久市）　縄文中・後期
胴上半部。「バンザイ土偶」。乳房の表現

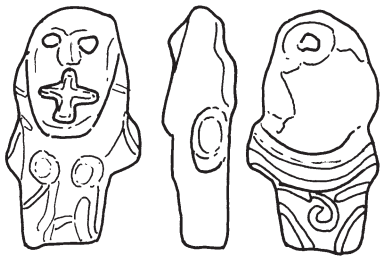


34 大奈良遺跡（佐久市）　縄文中・後期　胴下半部
裏面は臀部の表現。縦に２つ穿孔

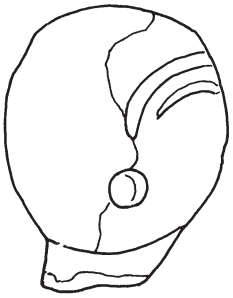
35 大奈良遺跡（佐久市）　縄文中・後期　胴中央部
凸部はヘソか。縦に穿孔

図５　佐久の縄文土偶　〈大奈良遺跡〉（1/2）　すべて報告書より転載（佐久市教育委員会蔵）

36 坪ノ内遺跡（佐久市岸野）　後・晩期？
頭部。『南佐久郡の考古学的調査』より



37 中村遺跡（佐久市岸野）　中期後半
口が十字に割れるタイプ。報告書より



38 館遺跡（佐久穂町）　頭部。後期？
『南佐久郡の考古学的調査』より

39 月夜平遺跡（臼田地区）　上半部。後期。胴体は板状で乳房がある
頭部の付き方は「仮面土偶」に通じる。背中には渦巻き模様
全体がよく磨かれる。『臼田町誌』より

40 月夜平遺跡（臼田地区）　頭部
後・晩期。立体的に表現された眉と鼻
耳飾りを持つ。『臼田町誌』より

41 月夜平遺跡（臼田地区）
大形土偶の脚部か。後・晩期
『臼田町誌』より

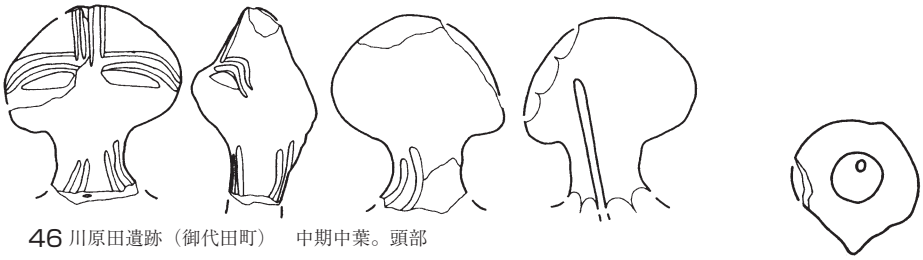
42 月夜平遺跡？（正確な
出土地は不明）ほぼ全身
後期。「山形土偶」類似？
青沼郷土館蔵

43 封地遺跡（佐久穂町）　後・晩期。中空のつくり
上部に眉、鼻、目があり、開いた穴は口、両側の突起は耳にも見える
ただ全体は、東北地方の「亀形土製品」を思わせる
足が二つつくが、立てない。佐久穂町教育委員会蔵

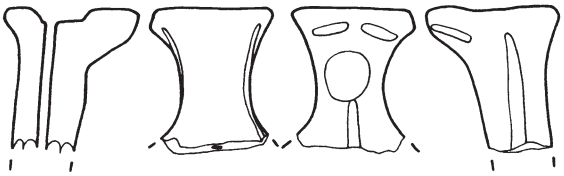
44 大深山遺跡（川上村）
脚部。中期
『南佐久郡誌』より

45 深山口遺跡（川上村）
胴部。後期
『南佐久郡誌』より

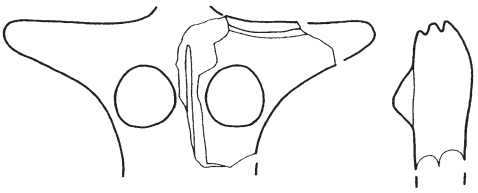
図６　佐久の縄文土偶　〈坪ノ内・中村・館・月夜平・封地・大深山・深山口遺跡〉（42・44・45は縮尺不明、他は1/2）



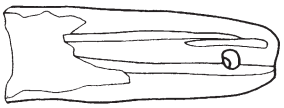
46 川原田遺跡（御代田町）　中期中葉。頭部

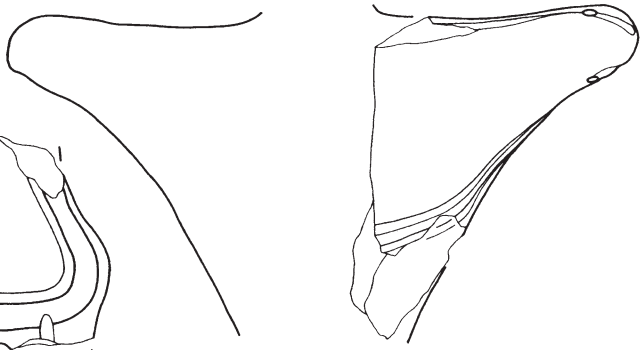


47 川原田遺跡（御代田町）
中期中葉。頭部
「カッパ形土偶」
国重文

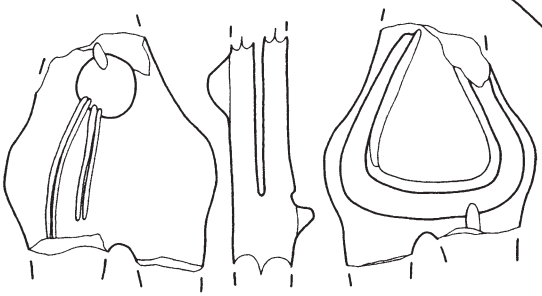


48 川原田遺跡（御代田町）
中期中葉。胸部片側。乳房がつく
国重文

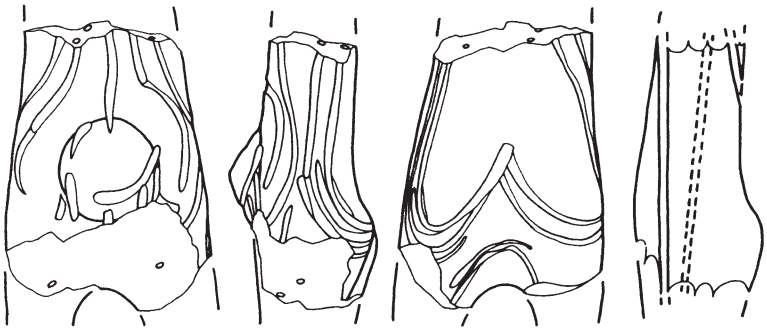




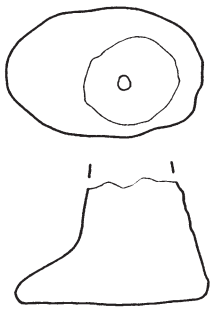
49 川原田遺跡（御代田町）　中期中葉
胸部片側。国重文



50 川原田遺跡（御代田町）　中期中葉。胴部。へその表現

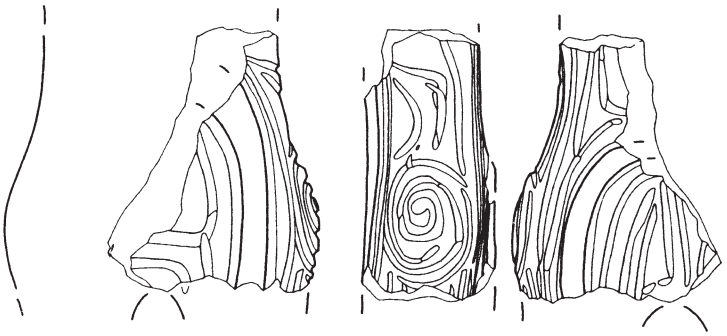


51 川原田遺跡（御代田町）　中期中葉。胴部。へそ・臀部の表現。国重文

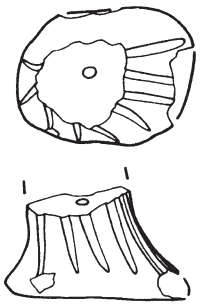


52 川原田遺跡（御代田町）
中期中葉。足部
国重文

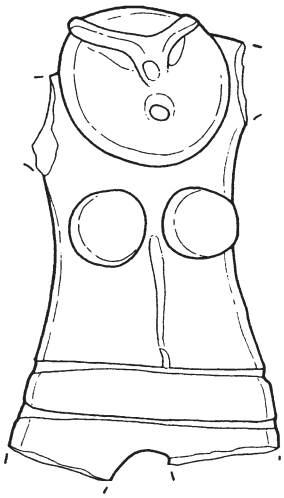
図７　佐久の縄文土偶　〈川原田遺跡〉（1/2）　すべて報告書より転載（浅間縄文ミュージアム蔵）



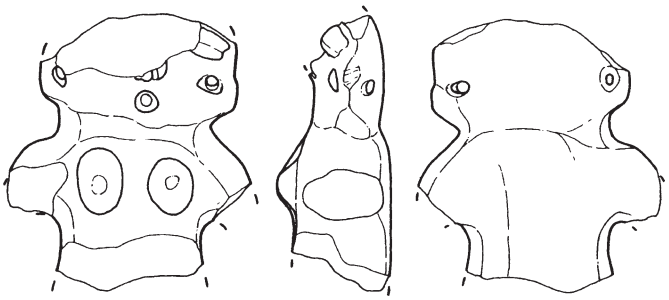
53 川原田遺跡（御代田町）　中期中葉。胴部。国重文



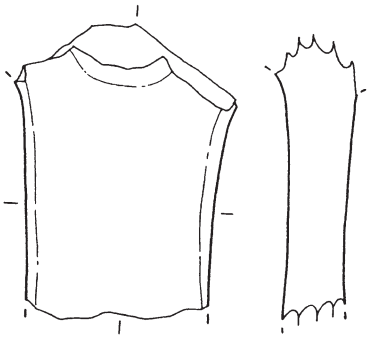
54 川原田遺跡（御代田町）
中期中葉。足部
国重文



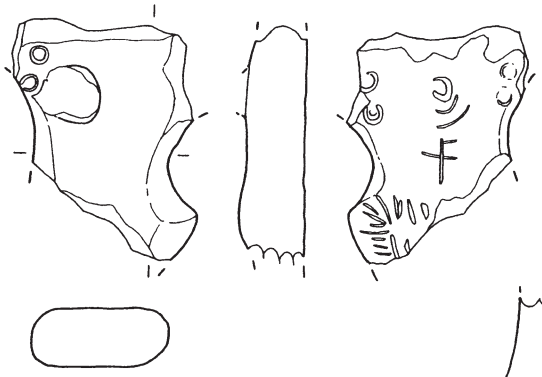
55 宮平遺跡（御代田町）
後期。頭部～胴部
乳房の表現がある



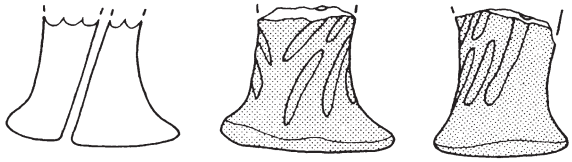
56 宮平遺跡（御代田町）
中期後半～後期
頭部～胴上半部
乳房の表現があり、
耳部に穿孔がみられる



57 宮平遺跡（御代田町）
中期後半～後期
板状の胴部

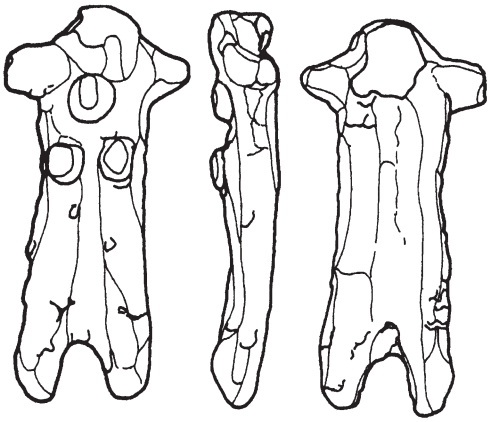


58 宮平遺跡（御代田町）　中期後半～後期
板状の胴部



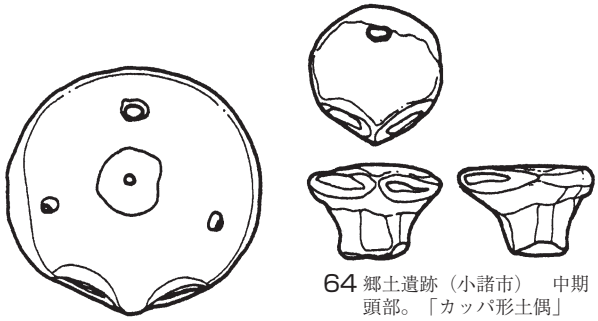
59 宮平遺跡（御代田町）　中期後半～後期。足部。赤彩

図８　佐久の縄文土偶　〈川原田・宮平遺跡〉（1/2）　すべて報告書より転載（浅間縄文ミュージアム蔵）

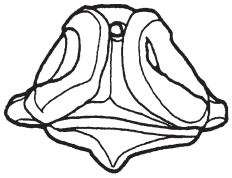


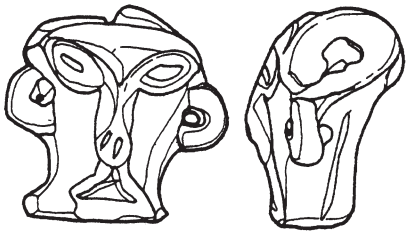
60 郷土遺跡（小諸市）　中期。全身
抽象化が強いが、乳房が強調

61 郷土遺跡（小諸市）　中期後葉。全身
抽象化が強いが、乳房・ヘソが強調

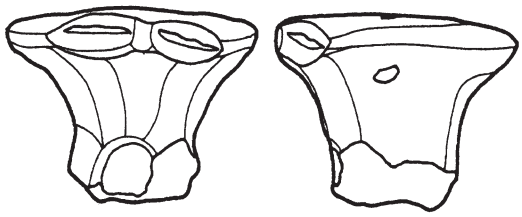


64 郷土遺跡（小諸市）　中期
頭部。「カッパ形土偶」

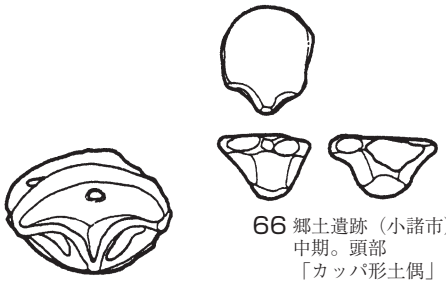




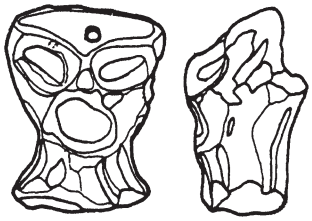
62 郷土遺跡（小諸市）　中期。頭部



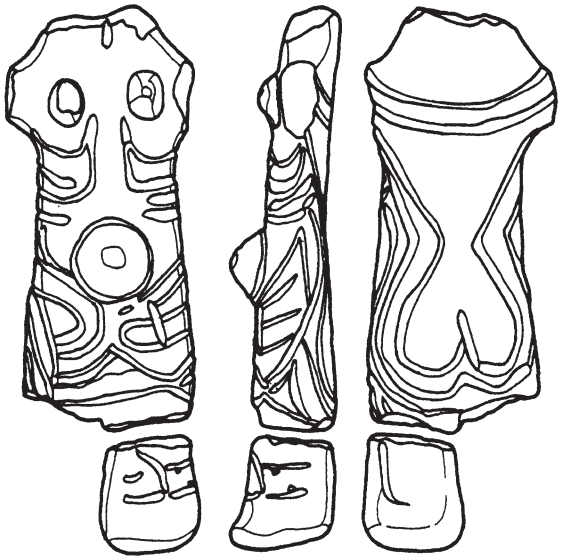
65 郷土遺跡（小諸市）　中期。頭部。「カッパ形土偶」



66 郷土遺跡（小諸市）
中期。頭部
「カッパ形土偶」

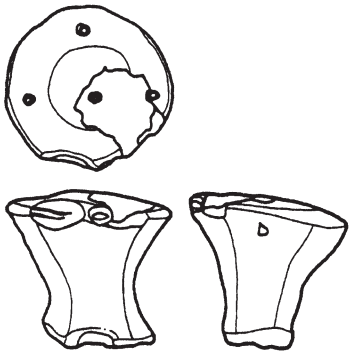


63 郷土遺跡（小諸市）　中期。頭部

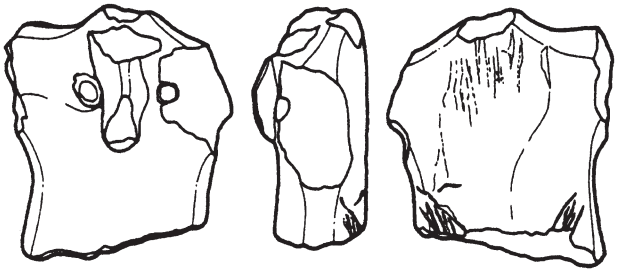


67 郷土遺跡（小諸市）　中期
胴部・脚部。乳房・ヘソ・尻が強調

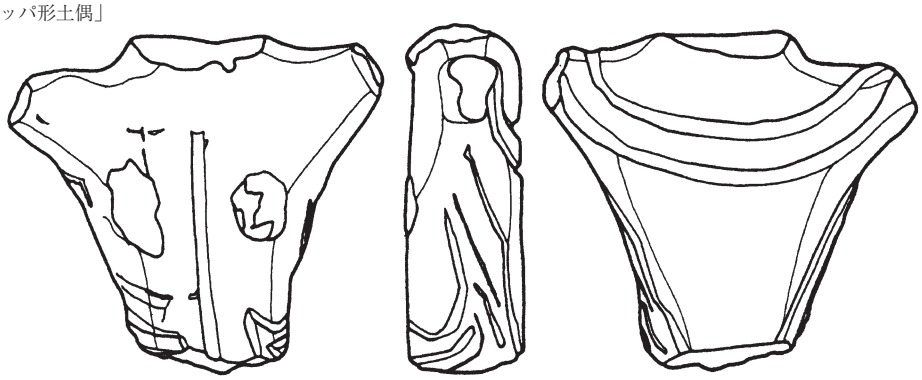
図９　佐久の縄文土偶　〈郷土遺跡〉（1/2）　すべて報告書より転載（長野県立歴史館蔵）



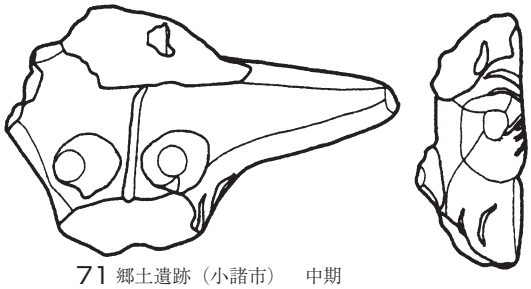
68 郷土遺跡（小諸市）　中期。頭部
「カッパ形土偶」



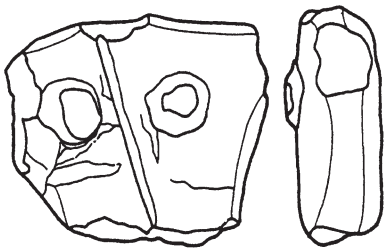
69 郷土遺跡（小諸市）　中期後葉。胸部



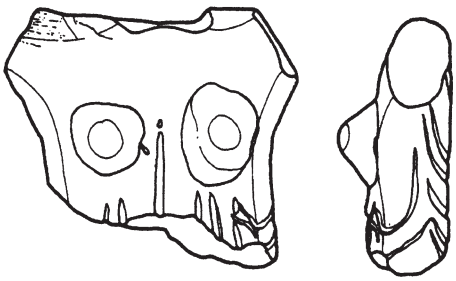
70 郷土遺跡（小諸市）　中期。胴上半部



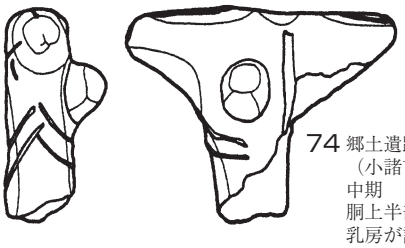
71 郷土遺跡（小諸市）　中期
胴上半部～腕。乳房が誇張される



72 郷土遺跡（小諸市）　中期
胴上半部。乳房が誇張される



73 郷土遺跡（小諸市）　中期
胴上半部。乳房が誇張される



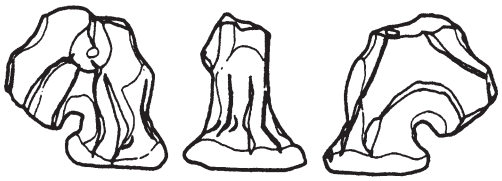
74 郷土遺跡
（小諸市）
中期
胴上半部～腕
乳房が誇張される

75 郷土遺跡（小諸市）　中期
腕。渦巻文、刻み入る

0　10cm

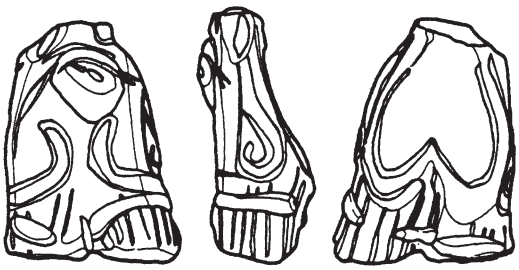
図10　佐久の縄文土偶　〈郷土遺跡〉（1/2）　すべて報告書より転載（長野県立歴史館蔵）

76 郷土遺跡（小諸市）　中期中葉
胴部。表裏に沈線文が細かく入り、ヘソ・尻が強調される

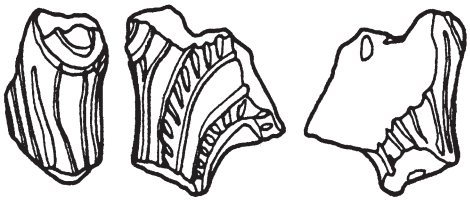


77 郷土遺跡（小諸市）　中期
胴下半部～脚部。ヘソの表現

78 郷土遺跡（小諸市）　中期。胴下半部～脚部。ヘソの表現

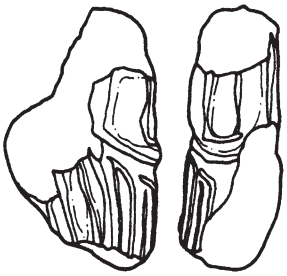


79 郷土遺跡（小諸市）中期中葉。胴部
表裏に沈線文が細かく入り、ヘソ・尻が強調される

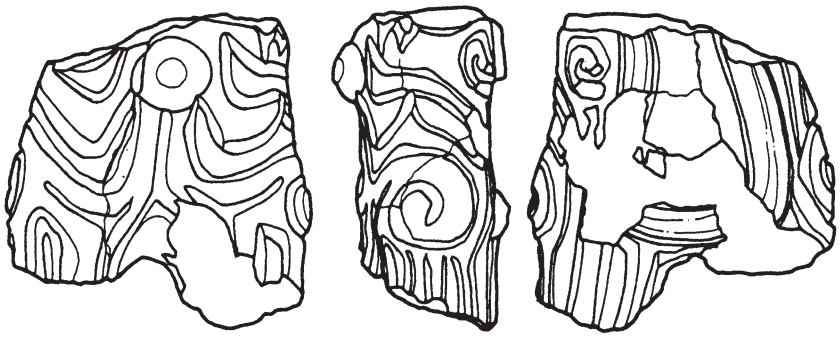


80 郷土遺跡（小諸市）　中期。胴下半部～脚上部

81 郷土遺跡（小諸市）　中期中葉。胴下半部～脚部。焼町土器にみる列点刺突



82 郷土遺跡（小諸市）　中期。胴部

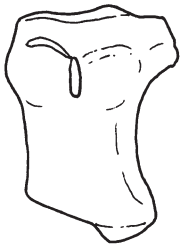


83 郷土遺跡（小諸市）　中期。胴下半部～脚部。ヘソの表現

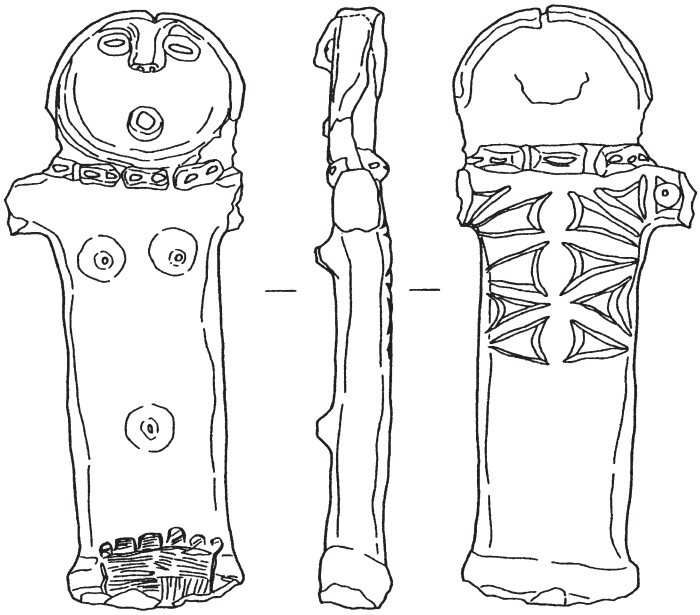
図11　佐久の縄文土偶　〈郷土遺跡〉（1/2）　すべて報告書より転載（長野県立歴史館蔵）

図12　佐久の縄文土偶　〈郷土遺跡〉（1/2）　すべて報告書より転載（長野県立歴史館蔵）

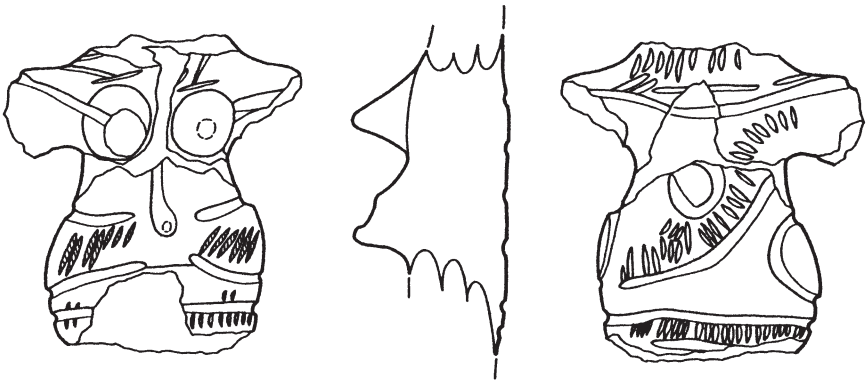
94 久保田遺跡（小諸市）
中期～後期
頭部



95 久保田遺跡（小諸市）
中期～後期
胴部。胸の表現を強調



96 石神遺跡（小諸市）　晩期前半。板状。腕・脚部の欠損
胸・ヘソの表現。ネックレス・パンツ状の表現。表紙・16頁の写真と同品



97 石神遺跡（小諸市）　後期中葉。顔・腕・脚部の欠損。胸の表現。縄文施文

98 石神遺跡（小諸市）　後期。胴部。胸の表現。縄文施文

図13　佐久の縄文土偶　〈久保田・石神遺跡〉（1/2）　すべて報告書より転載（小諸市教育委員会蔵）

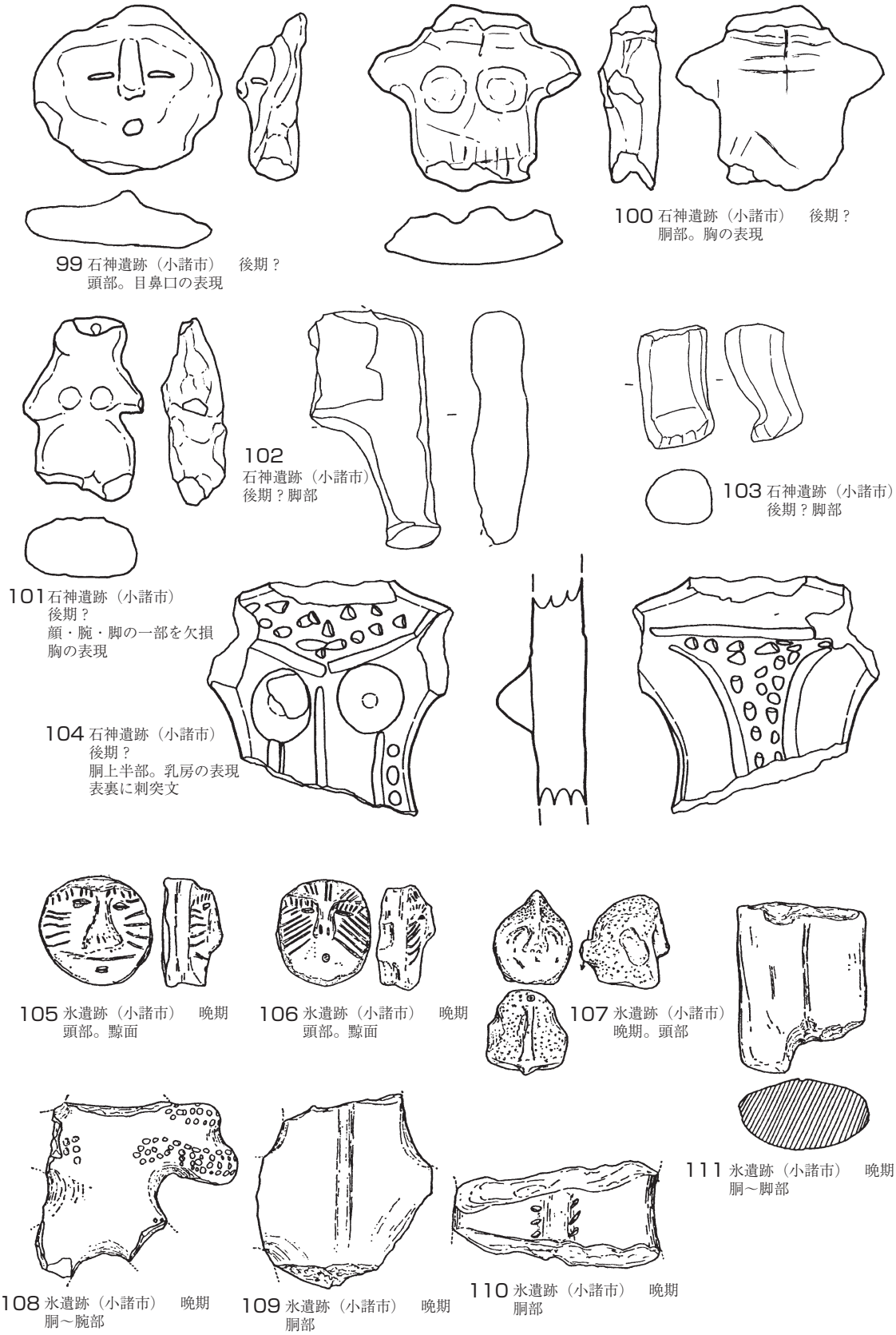
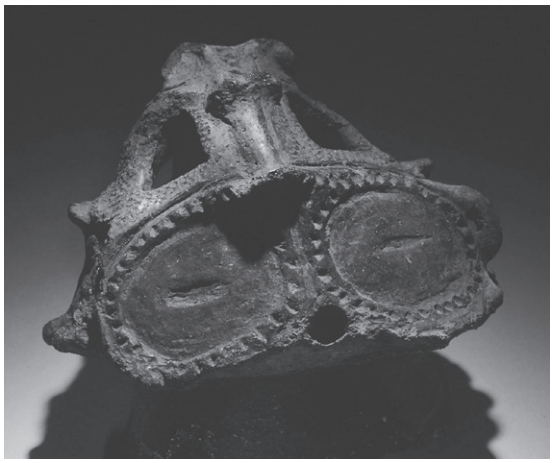


図14　佐久の縄文土偶　〈石神・氷遺跡〉（1/2）　すべて報告書等より転載（99～104 小諸市教委蔵）



112　石神遺跡（小諸市）　遮光器土偶。晩期

後期：後期の土偶では、旧臼田町の月夜平遺跡の「仮面土偶」に相通ずる土偶が良好な資料である（39）。また、豊満な乳房の表現のある御代田町宮平遺跡の土偶（55）も良好な資料といえる。

なお、後期以降の土偶には、中期にはなかった縄文が施文される例がある（16・97・98）。

晩期：土偶の資料はきわめて限られるが、古くからよく知られているのは、タイプサイトである小諸市氷遺跡のものであろう（105～111）。このうち105・106はいわゆる黥面土偶と呼ばれ、顔にイレズミ風表現のあるものである。107はそれとは異なるものかもしれない。108～111は土偶の胴部であるが、多数の沈線が刻まれる中期土偶とは異なり、文様は少ない。

小諸市石神遺跡の板状土偶は遺存状況がよく、首のネックレス風の表現と腰のパンツ状の表現が興味深い晩期前半の資料である（96、右写真）。

遮光器土偶は、小諸市石神遺跡の頭部がよく知られた資料である（本頁112）。黒色に焼成された土偶であるが、本場東北地方のものに比べ粗い作りであり、当地方における模倣品の可能性がある。

96　石神遺跡（小諸市）　晩期前半。板状

土偶の終焉：弥生時代の到来とともに土偶は姿を消すが、中部・関東では弥生文化を受容した直後のわずかな期間のみ土偶型容器が作られる。

弥生時代の土偶型容器は、蔵骨器などとして知られており、佐久地方には佐久市西一本柳遺跡や佐久穂町館遺跡の良好な事例が存在している。ここでは紙幅の関係から取り上げられなかったので、いずれ折りを見て紹介する予定である。

♪　編集後記　♪

縄文人の土偶祭祀の実態がどのようなものであったのか、なかなか答えは見えない。

いずれにせよこの不可思議な人形（ヒトガタ）が、縄文人ばかりでなく、現代人の心をとらえて止まないことは事実だ。大英博物館とはいわないまでも、地域で「土偶展」を開催すると大勢の方々が博物館を訪れる。

それにしても土偶を壊した後、果たして縄文人の願いが叶ったのか、気がかりなところではある。

超少子化の現代、私たちも土偶を製作し多産や人口増を祈ったらどうだろうか。

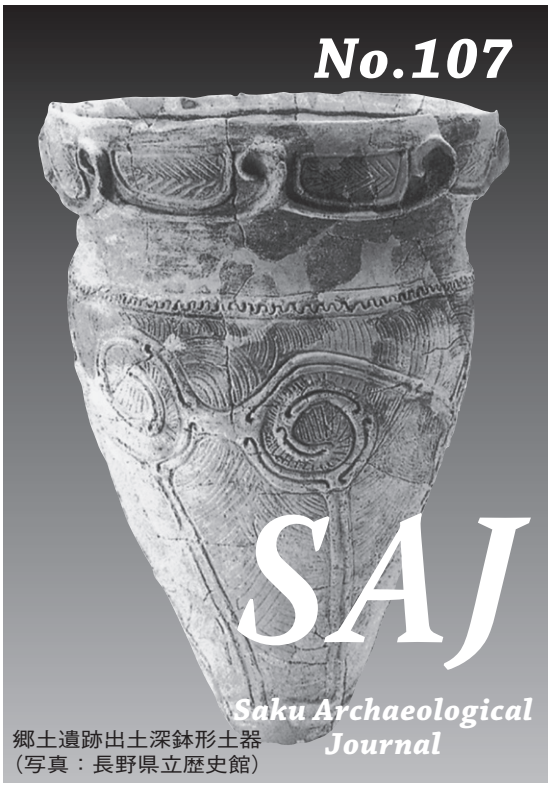
（つつみ）

佐久考古通信　№106

発行所　佐久考古学会
〒384-0091 小諸市御影新田1945-6
桜井秀雄方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267（32）8922

発行日　2011年1月20日
発行者　藤沢平治
編集者　堤　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会シンボルマーク



郷土遺跡出土深鉢形土器
（写真：長野県立歴史館）

佐久考古通信

■ 遺跡と考古学を学ぶためのコミュニケーション誌 ■

2011.4.15　佐久考古学会

特集 郷土式は成立するか

1991年、佐久市吹付遺跡の報告に記された「佐久系土器」という言葉。百瀬忠幸氏は「鱗状短沈線文を地文とする佐久地方に主体的分布をみせる土器」とこれを説明した。百瀬氏が提唱したこの概念が、その後類例を集めながら「郷土式」として認識されようとしている。本号では、この土器を追ってみたい。

★ 目　次 ★

「郷土式土器」―その提唱までの経緯―…桜井秀雄　2
型式論からみた「郷土式」土器……川崎　保　7
郷土式土器の変遷と分布……綿田弘実　11
私が「郷土式」と呼ばなかったわけ…藤森英二　15
本文中に出てくる主な遺跡……16

佐久の縄文中期といえば、「焼町土器」を思い浮かべる人も多いはずだ。浅間山麓から群馬県西部にかけて光を放ったこの土器群は、短期間ではあったが、確かにこの地に咲いた土器文化の華であった。御代田町川原田遺跡では、ついに国重要文化財となっている。

しかし、この華やかな土器芸術も、中期中葉の終わりには、あたかも勝坂式に取り込まれるかのように姿を消す。その後は、関東地方の加曽利E式や、山梨方面に多い曽利式土器が一般的な存在となる。

だが、それからしばらくの後、佐久地域、中でも北部の浅間南麓では、再びこの地に特有の土器が見出されるようになる。

これこそが、当初「佐久系土器」と呼ばれ、さらにはそれを含むかたちで「郷土式」として認識される、本号の主役である。尚、郷土とはもちろん、浅間南麓を代表する小諸市の集落遺跡である。

本号では、この土器をめぐる学史的経緯（桜井論文）、型式をめぐる諸問題（川崎論文）、そしてその消長から分布域（綿田論文）を掲載している。さらに参考文献まで含めれば、現時点での研究の到達点が分かるだろう。

本特集号が、佐久を起点とした土器研究の一助となれば幸いである。

中期中葉　川原田遺跡の「焼町土器」

中期後葉　郷土遺跡の「郷土式土器」
（写真：長野県立歴史館）

「郷土式土器」
―その提唱までの経緯―

桜井秀雄

1．発掘調査始まる！

平成４年の10月、上信越自動車道建設にさきだつ郷土遺跡の発掘調査が始まった。県埋蔵文化財センターへ就職し２年目、私にとっては初めて班長として担当する遺跡であり、やや空回り気味ながらもその意気込みだけは十二分で臨んだ調査であった。

発掘調査は平成４・５・６年と続き、平成７年には整理作業を開始するとともに、用地収用の関係で残った約200㎡の調査を行った。調査がすべて終了したのが佐久インター～小諸インターの供用開始の１カ月前という間際であり、まわりでは舗装工事が進んでいたなか孤島のように取り残された場所の調査であった。現場へ行くには工事車両とともに小諸インターから入らなければならないという得がたい経験もした。

以来、途中２年間の諏訪郡原村教育委員会への出向や他遺跡の発掘調査をはさみ、断続的に整理作業を行い、報告書が刊行されたのは平成12年３月のことであった。足かけ９年間、私はこの郷土遺跡と向き合うことになったわけである。20代半ばから30代前半までのことであり、埋文担当者としても多くを学んだ遺跡である。この間に結婚、長女誕生、自宅建設と人生においての転機とも大きく重なる時期でもあった。

実はこの郷土遺跡は、小諸東中学校に通っていた頃、土器拾いに出かけたことがある思い出深い遺跡でもある。当時の私は考古学への関心はまだあまりなかったが、熱心な考古ボーイであった親友の宮尾彰君らに連れられていったのである。他にも八満の石神遺跡にも一緒に行った記憶がある。ただついていっただけではあるが、私にとって初めて訪れた記念すべき遺跡がこの郷土遺跡ということになったわけである。そんな遺跡をまさか自分が約10年後に掘るようになるとは当時はもちろん夢にも思わなかったが、報告書刊行まで携わることができるとは、本当に幸福な巡り合わせであったと思う今日この頃である。

2．浅間山麓を代表する縄文中期の大集落

郷土遺跡は、昭和９年に八幡一郎氏の著した『北佐久郡の考古学的調査』においてすでに紹介されており、佐久地方でも古くから知られた遺跡のひとつにあげられる。昭和36・40年にはその八幡一郎氏（当時東京教育大学教授）によって学術発掘が行われた。40年の調査で発見された敷石住居跡は上屋で覆って保存され、小諸市史跡に指定されている。この敷石住居跡は全国でも早い時期の発見であり、「敷石住居跡の郷土遺跡」として広く郷土遺跡の名は知られるようになったのである（八幡1934・1982他）。

このように学史的にも著名な郷土遺跡であるため、規模の大きな縄文中期集落であることはある程度予想していた。しかしながら実際に発掘調査に入ってみると、その予想をはるかに超える住居跡などの遺構の数と遺物出土量の膨大さに圧倒される毎日であった。調査の結果、発掘対象面積は約8500㎡であったが、発見された遺構は竪穴住居跡115軒、土坑1125基等を数え、出土した土器・石器等はコンテナでなんと約900箱を超えることになったのである。特に２年目の調査では現場とプレハブがやや離れていたこともあり、軽トラックに午前中１台、午後１台、計２台分の遺物を積んで現場事務所まで運ぶ日も少なくなかった。多量の土器・石器の他、土偶67点（佐久地方で最多、県内の遺跡でも五指に入る多さである）、三角柱状土製品・土鈴などの稀少遺物の出土も少なくなかった。

また縄文時代の他にも古墳１基（郷土古墳群２号墳に比定。８世紀前半）と平安時代（10世紀前半）の竪穴住居跡２軒が確認され、３時代にわたる複合遺跡であることも判明したのである。

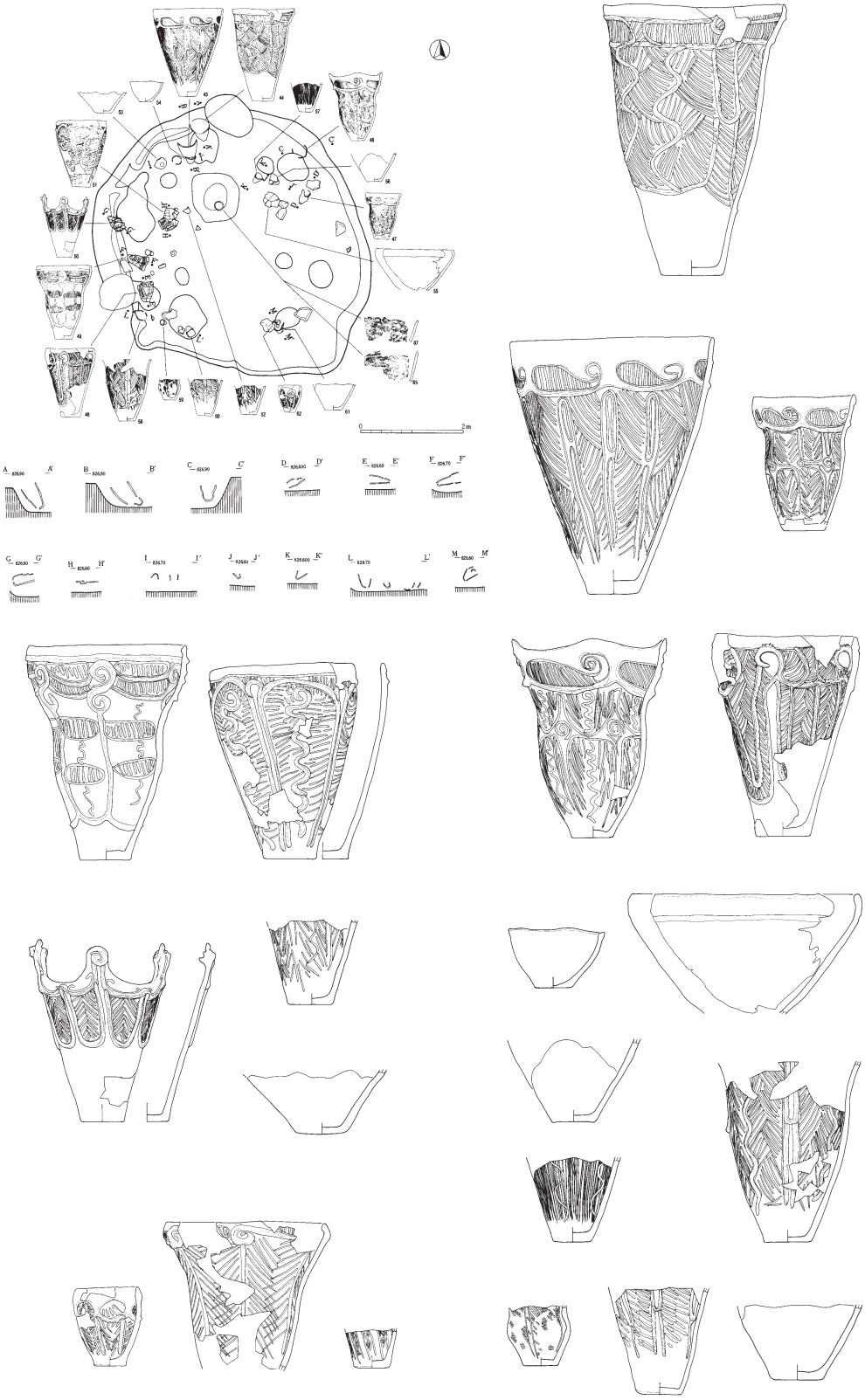
縄文時代は大きく２時期のものがみられた。縄文早期末～前期初頭には竪穴住居跡６軒、土坑４基が検出された。遺構外ではあるが、玦状耳飾りも出土している。そして本遺跡で中心的な時期が縄文時代中期中葉～後期初頭である。竪穴住居跡107軒、土坑462基以上がみつかり、この時期には若干の間隙を挟みながら集落は営まれ続けていたことが明らかとなった。

また平成４・７年度には隣接地を小諸市教育委員会でも発掘調査が行われ、縄文時代中期中葉から後葉の住居跡７軒などが発見されている。

このように浅間山麓を代表する縄文中期の大集落遺跡であることが幾次にもわたる発掘調査によりわかってきたのである。そしてこの高速道路地点が遺跡の中核部分にあたっていたことになる。

3．出土土器の整理

さて、整理作業にあたっては、この膨大な縄文中期中葉～後期初頭の土器をどのように位置づけていくかが最大の問題であった。当時県立歴史館におられた綿田弘実氏（県埋蔵文化財センター）のご指導をあおぎ



14号住居跡　出土土器（土器は１：12、住居跡平面図は縮尺不同）

ながら、私は中期土器を８系統に大別し、時期は10段階に編年することにした。

まず、中期土器の編年軸は井戸尻編年及び加曾利Ｅ式編年（いわゆる東京・埼玉編年）に基づき、以下の10段階に細分した（谷井1982）。

１段階（井戸尻Ⅰ式期並行）、２段階（井戸尻Ⅲ式期並行）、３段階（曾利Ⅰ式・加曾利ＥⅠ式古期並行）、４段階（加曾利ＥⅠ式新期並行）、５段階（加曾利ＥⅡ古期並行）、６段階（加曾利ＥⅡ式中期並行）、７段階（加曾利ＥⅡ式新期並行）、８段階（加曾利ＥⅢ式古期並行）、９段階（加曾利ＥⅢ式新期並行）、10段階（加曾利ＥⅣ式並行）としたのである。

ただし、この段階設定は厳密な土器分析を経たうえで行ったものではない。郷土遺跡ではまとまって土器が出土する住居跡が多くみられたことから、あくまでも出土遺物の一括性などをもとにした時間的な配列である。なかでも７段階にあたる14号住居跡と24号住居跡は非常に一括性が高い出土状態であったため、ここで紹介する。

14号住居跡は、5.5m×5.2mの規模をはかる。報告書で図示した土器は24点に及ぶが、覆土は単層であり、その大部分の土器は床面より数cm程浮いた付近から出土している。これらは完形のものが多く、住居埋没途中のある段階で一括して投棄されたものと理解できる資料である。

24号住居跡は、調査区外にかかる部分もあるため完掘していないが、径８ｍほどの円形を呈するとみられる。大型の石囲炉の３隅に計４点の石棒を樹立し、奥壁には容量約90ℓをはかる大型浅鉢を中心に、胴部中位以下を切断した６個の土器が逆位で伏せられていた。住居廃絶直前もしくは廃絶時に何らかの祭祀行為が行われていたことがうかがえる出土状態であり、同時性が高い資料である。また埋甕も埋設されていた。

この10の段階は、土器様相や集落変遷などの要素からさらにⅠ期（１～３段階）、Ⅱ期（４・５段階）、Ⅲ期（６・７段階）、Ⅳ期（８・９段階）、Ⅴ期（10段階）に大別した。Ⅰ期とⅡ期の間に若干の断絶期があるが、それ以降は後期の称名寺式並行期まで集落は継続する。なお、土器としては堀之内式並行期、加曾利Ｂ式並行期のものもみられる。

４．在地色の強い土器群をどう考えるか？

縄文中期土器の系統としては、Ａ系統：井戸尻式（勝坂式）土器、Ｂ系統：焼町土器、Ｃ系統：加曾利Ｅ式土器、Ｄ系統：曾利式土器、Ｅ系統：連孤文土器、Ｆ系統：唐草文系土器、Ｇ系統：群馬県周辺に主体的に分布する土器（三原田式など）、の７つにまず分類したが、これらにあてはまらない在地色の強い土器の一群も確かに存在している。そこで「沈線文を地文にもち、前述のＡ～Ｇ系統のいずれとも異なり、佐久地方に主体的に分布する極めて在地性の強い土器群」をＨ系統として分類することにしたのであった。

ちなみに、Ⅰ期１段階ではＢ系統（焼町土器）が多数を占めるが、第２段階になると、Ａ系統土器が目立つようになる。Ⅱ期は４段階では遺構数が少なく、５段階ではＣ系統土器とＦ系統土器が主体的にみられる。

さて、このＨ系統の土器についてもう少し詳しく見てみよう。沈線地文をもつ点では松本盆地を中心とした地域でみられる唐草文系土器と共通するが、その一方で加曾利Ｅ式の影響も大きく受けており、いわば唐草文系土器と加曾利Ｅ式土器の折衷タイプとでもいえそうな土器群である。バリエーションもかなり富んでいる。

郷土遺跡では第Ⅱ期５段階から出現し、６～７段階の第Ⅲ期には他系統土器を圧倒して単純相に近い様相を呈するほどになる。鱗状短沈線の地文があらわれはじめ、綾杉状沈線が粗大化してくるようになる。他系統の土器はこのＨ系統土器に圧倒されてしまい、その存在はごく少数となる。

前述の通り、Ｈ系統の土器はＦ系統の唐草文系土器の系譜をもつものと思われるが、この第Ⅲ期の６・７段階となると、もはや唐草文系土器の範疇では説明つかないほど在地化が進んでくる。そのため、このＨ系統土器を唐草文系土器に含めることはできず、別系統土器として理解すべきではないかと考えたのである。

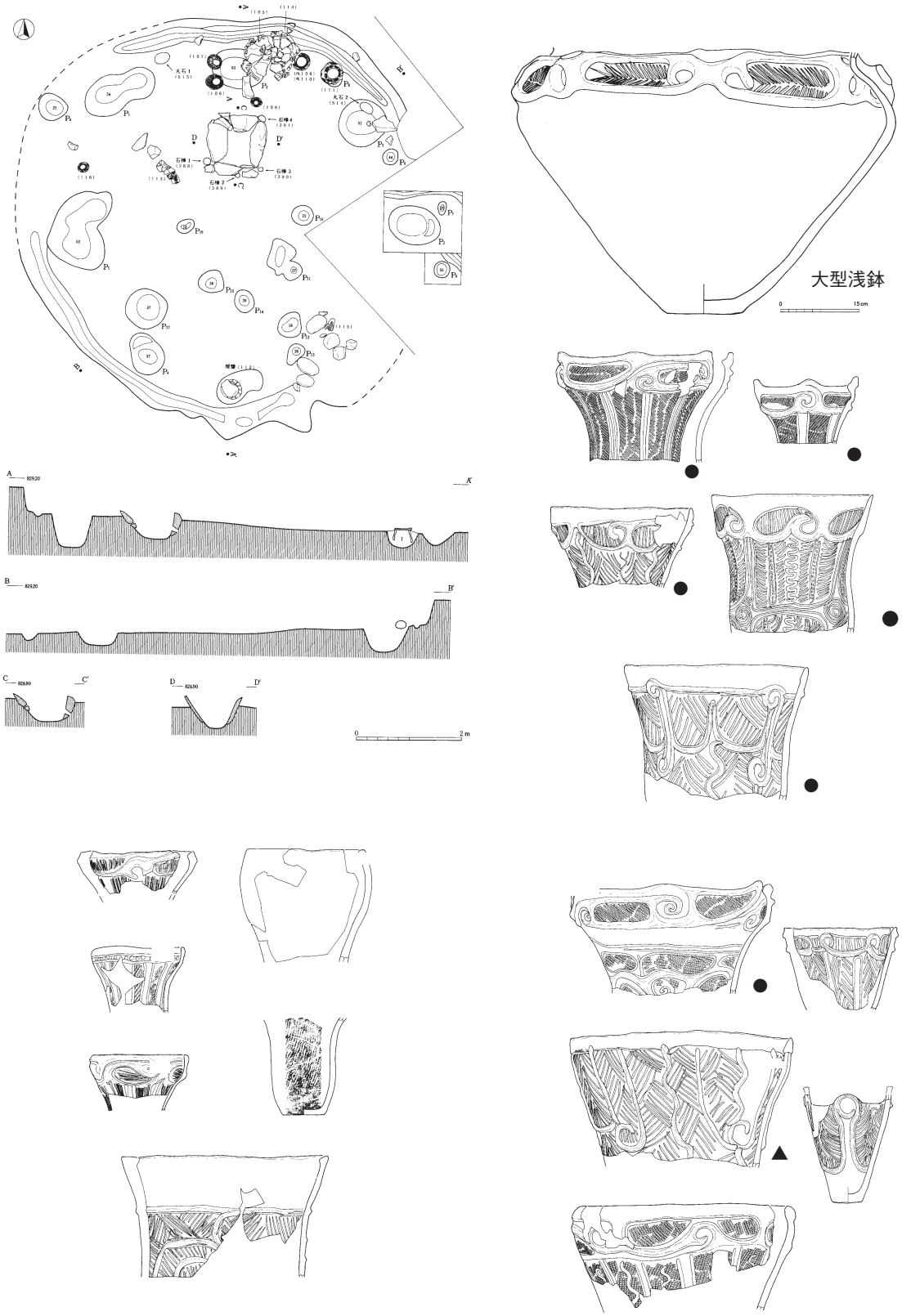
また、６段階では数軒の竪穴住居跡や屋外埋甕がみられるが、７段階になると竪穴住居跡は20軒近くを数え、集落としても急激に増大してくることがわかる。なお、Ⅳ期（８・９段階）になるとＨ系統土器は減少し、Ｃ系統土器（加曾利Ｅ式）が主体を占めるようになる。

集落も８段階では十数軒の住居跡が比定され、土坑数も本期から急増するものの、９段階になると住居跡数は急激に減少する。そして、Ⅴ期（10段階）ではＣ系統土器（加曾利Ｅ式）が単純相を示し、Ｈ系統土器は極めて少なくなっていくのである。

つまりＨ系統土器が主体を占めてくる６～７段階は郷土遺跡の最盛期にあたるわけである。その土器についてみても、独自性・在地性が強くなっていることが指摘できよう。

５．「佐久系土器」との関係

こうした佐久地方にひろくみられる土器については以前より注目されていた。なかでも加曾利ＥⅢ式（郷土遺跡では第Ⅳ期）にみられるこうした土器群に関しては、百瀬忠幸氏によって「（仮称）佐久系土器」が提唱されている（百瀬1991）。百瀬氏によれば「鱗状



24号住居跡　出土土器　（●は床面に逆位で伏せられていた土器、▲は埋甕土器の縮尺は１：12、住居跡平面図は縮尺不同）

短沈線文を地文とする佐久地方に主体的分布をみせる土器」であり、そして「松本平から上伊那地方にかけて分布する唐草文系土器の影響を受けて成立した土器と考えられる」ものだという。

ところで郷土遺跡の所見からすれば、H系統土器の沈線地文は鱗状短沈線文に限られるわけではない。鱗状短沈線文は加曾利EⅢ式期にみられるものであるが、H系統の沈線地文の一側面にすぎないのであり、H系統土器の沈線地文はもう少しひろい範囲を有すると考えられた。これは吹付遺跡の出土土器の大半が加曾利EⅢ式以降のものであることに起因するのであろう。また佐久地方では加曾利EⅠ～Ⅱ式期の遺構の調査例が少なく、そのため土器様相も不明瞭であったことも一因であった。その点、郷土遺跡では加曾利EⅠ～Ⅱ式期における土器の出土量が豊富であり、従来の空白時期を埋める資料を得ることができたといえる一方、従来の「佐久系土器」との間で微妙な差異を生じることにもなったわけである。

6.「(仮称) 郷土式土器」の提唱

このようにH系統土器は在地色が強く、加曾利EⅢ式期の「佐久系土器」をも含む土器系統である。したがってこれもまたひろく「佐久系土器」として包括することも一案かもしれないが、私は躊躇した。

その理由のひとつには、「佐久系土器」が加曾利EⅢ式期の鱗状短沈線文を地文とするものとして理解されている以上、同じ用語を使用することは混乱を招きかねない危惧を私は覚えることがあった。

また、「佐久系」というややあいまいな地域呼称に抵抗を感じていたことも理由のひとつにあげられる。かつて小林眞寿氏（佐久市教育委員会）は浅間山麓とはどこからどこまでの地域を指すのかが明確ではないと指摘し、「佐久系土器」という言葉も再検討するべきではないかと、長野県考古学会平成７年度秋季大会で述べられたことがあり、会場で聞いていた私も小林氏の指摘に同感であった。

そしてなによりも、①八幡一郎氏により既に昭和９年には遺跡として認知され、昭和36・40年の発掘調査により「敷石住居跡の郷土遺跡」として注目されてきたこと、②また郷土遺跡が浅間山麓における縄文時代中期後葉の中核的集落であること、③H系統土器の出土が質・量ともに豊富であること、とりわけ６～７段階ではH系統が他系統を圧倒して単純相に近い様相となること、の３点も踏まえると、この在地色の強いH系統土器について、「郷土遺跡」を標識遺跡とすることも十分可能なのではないかと考えるに至ったわけである（註１）。

ただし、報告書では、土器の分析も十分ではなかったため、あくまでも「H系統土器」として報告し、将来的には「(仮称) 郷土式土器」が成立する可能性を指摘するにとどまってしまった。

7. おわりに

報告書刊行から11年の年月がたった。その後、綿田弘実氏・川崎保氏により、郷土遺跡におけるH系統土器の詳細な検討がなされてきた（綿田2003・2008、川崎2001・2009）。

また関根慎二氏は群馬県での郷土式土器の集成も行い、その様相や分布などをまとめている（関根2008）。

その結果、分布や時期もおさえられるようになり、「郷土式土器」として認知されてきている。一方、現段階では「佐久系土器」を用いるべきであるとの藤森英二氏の意見もある（藤森2007）ように、いまだその呼称には議論もあるが、郷土遺跡の調査・整理を担当し、報告書において「(仮称) 郷土式土器」成立の可能性が高いことを指摘したものとしては、この在地性の強いH系統土器を、「郷土式土器」として理解するのが今後の研究においてもよいのではないかと考えている。

この特集号をひとつの契機として、さらに研究が進むことを期待したい。

（註１）郷土遺跡の学史的位置の重要性については綿田氏からもご教示をいただいた。

川崎　保2001「第３節　鱗状短沈線文土器の編年上の位置」『駒込遺跡』長野県埋蔵文化財センター
川崎　保2009『文化としての縄文土器型式』雄山閣
桜井秀雄2000「第７章　郷土遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19』
関根慎二2008「浅間山を廻る縄文土器」『研究紀要26』群馬県埋蔵文化財調査事業団
谷井彪1982「縄文中期土器群の再編」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団紀要』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
藤森英二2007「「佐久系土器」と呼ばれる土器　主にその呼称について」『佐久考古通信ＮＯ98』
百瀬忠幸1991「第３章第２節　吹付遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書２』長野県埋蔵文化財センター
八幡一郎1934『北佐久郡の考古学的調査』
八幡一郎1982「郷土遺跡」『長野県史考古資料編　主要遺跡（北・東信）』
綿田弘実2003「長野県千曲川流域の縄文中期後葉土器群」『第16回縄文セミナー　中期後半の再検討』
綿田弘実2008「郷土式・圧痕隆帯文・大木系土器」『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会

型式論からみた「郷土式」土器

川崎　保

編集者からの依頼は、筆者の型式論からみて「郷土式」土器が成立するかということであるが、結論から言えば、時間幅、とくに細分、並行関係、分布域などの編年学的研究は今後も十分に行われる必要がある。しかし、山内清男の縄文土器型式設定の要件はおよそクリアしていると思う。ただ、これが学界一般に定着するかどうかは、少し次元の違う問題である。

いずれにせよ、後述するように長野県の中期後葉の「唐草文土器」をめぐる混乱があることを見ても、研究者が共通の標式資料に遡れるような形にどこかでしておいた方が良いと筆者は考える。

本誌において他の執筆者も触れるとは思うが、やはり簡単に「佐久系土器」から「郷土式土器」提唱にいたるまでの研究経過を少しまとめてみたい。

佐久系土器、鱗状短沈線文土器、郷土式土器

百瀬忠幸は佐久市吹付遺跡の出土資料を見て、加曽利Ｅ式土器が主体であるが、縄文で充填する加曽利Ｅ式土器とは異なり、多少湾曲した沈線文で充填する土器の一群をどのように扱うべきか、これを松本盆地や伊那盆地などの唐草文土器とは区別すべきであると考え、「佐久系土器」と呼称したのだろう（百瀬ほか 1991）。

普通の縄文土器の型式名によく見られるような標式遺跡を付与しなかった。型式名として設定することを避けただけでなく、「焼町土器」のように塩尻市「焼町」遺跡＋土器として、「式」をはずすやり方もしなかった。標式遺跡名を冠した型式名を付けなかった理由として考えられるのは、土器型式の要件を満たしていないとしたからだろう。

具体的には①どの程度の時間幅を持っているか明確ではない。②類例の調査が十分でなく、分布範囲も明確ではない。そして③ある程度まとまって出土しているが、これを主体とする遺跡や遺構がないなどの理由があるだろう。

あるいは、今一つ吹付遺跡の位置が佐久盆地でも東端にあり、名称はともかくその分布の中心域は佐久盆地にあるものと予想されたために、将来より良好な資料が主体的に出土する遺跡が発見されたあかつきにその遺跡名を冠すればよいと考えたのであろうか。

筆者は、1991 年に佐久市（当時は浅科村）駒込遺跡で発掘調査を、翌 2000 年に整理作業を行い、報告書を作成する時に、佐久系土器のように、地域名＋系土器という呼称は、混乱を招くという指摘を二三の人からされた。

例えば「縄文時代早期の東海系土器」のように使う時、「縄文時代早期の」という修飾語がなくなると一体何を指しているのかわからなくなるということである。「縄文時代早期」にあたるような時期などについては、前後の文脈で限定されているので、実際それほど混乱はないし、報告書の事実記載は駒込遺跡Ⅱ期Ⅰ群土器といったような分類で（ちょうど平出ⅢＡ類などの呼称法のように）記述するので、報告書の事実記載としては、クリアした。

しかし、報告書のまとめとして、駒込遺跡出土土器資料の佐久地域やその隣接地域との編年的対比において、総称する呼び方はやはり必要である。

長野盆地を中心に分布する中期後葉の在地独特の土器に綿田弘実が「圧痕隆帯文土器」と命名している（綿田 1988）ことを参考にして、文様装飾の形態的特徴を冠して、「鱗状短沈線文土器」ととりあえず呼称することにした（川崎ほか 2001）。こうすれば、具体的に何を指しているかを理解しやすいと考えたからである。

唐草文土器をめぐる混乱

ただ、土器の特徴的な属性で土器群を呼ぶやり方は唐草文土器という例があるが、これには混乱があった。それは標式資料がはっきりしなかったためもある。

土器の文様を「唐草文」と呼んだのは、塩尻市平出遺跡のロ号住居跡の埋甕などの土器であった（以下これを狭義の唐草文土器とする）（平出遺跡調査会編 1955、神村 1999）。

しかし、のちに『井戸尻』（藤森編 1965）で大型渦巻文を有する沈線文地文の土器を「唐草文土器」と呼び、曽利Ⅱ式の一器種のように扱った。『井戸尻』の報告書が一世を風靡しただけにこちらが「唐草文土器」の代表格として認識され、後には縄文や（櫛描）条線ではなく、沈線文が地文として施されるもの全体が「唐草文土器」とみなされるようになっていったようだ（以下こちらを広義の唐草文土器とする）。最初に「唐草文」と呼称された平出遺跡ロ号住居跡の埋甕など、狭義の唐草文土器のことは、標式遺跡として設定されなかったので、そこに戻りようがなく、忘れられていくことになる。

郷土式土器は成り立つ!?

その後の「唐草文土器」が一体なにを指しているかの混乱は、やはりどこかで標式遺跡名を冠した土器型式として提唱されなかった点が大きい（神村 1999）。

佐久系土器が標式遺跡名＋土器へと発展していくには、筆者の問題意識で言えば、まず時間幅の問題が気になった。

一つは百瀬の佐久系土器が実際に示している時間幅と桜井が『郷土遺跡報告書』（桜井ほか 2000）で提唱する仮称「郷土式土器」の時間幅が異なること。さらにその郷土式土器のより細かい段階設定と隣接地域の型式との並行関係が筆者としては理解が十分でなかった点である。

まず前者についてであるが、やはり時間幅の問題で言えば、百瀬が当初「佐久系土器」とした時期のものは郷土遺跡ではあまり出土しておらず、厳密に言えば、佐久系土器＝郷土式ではない。

しかし、駒込遺跡で出土しているいわゆる「佐久系土器」は郷土遺跡で出土している桜井のいわんとする郷土式土器を別系統の土器とは考えにくい。

勿論、最初に発見され、それを型式学的にまとめたという研究史を重視し、あくまで「吹付式土器」とでもすれば良いのかもしれないが、あくまで土器型式編年を扱う人間がよりよく理解できるためということも重視すれば、筆者は郷土遺跡資料の方がより全体を代表しているように思う（少ないが、吹付遺跡出土資料に並行するものもある）。これは次につながる問題でもあるが、編年表の中で遺跡や遺構の一括出土資料を明示すればよいと考えた。

次に、後者の時間幅とくに細分（段階設定）については、層位に裏付けられた遺構などによる一括資料による検証をさらに行う必要が感じられた。

郷土遺跡だけでなく、それ以外の遺跡や遺構の一括資料をもとに検証とした。それが下の表１である。

こうした作業はその後、藤森英二（2005）によっても行われており、遺跡の調査事例が増えていけば、検証作業を繰り返すことによって、確度が増していく。

ちなみに、郷土式土器の段階であるが、郷土遺跡３・４段階の様相はまだ独自の土器型式というような内容を示しているかは、はっきりしていない。およそ郷土遺跡５～10段階の中で、筆者は古中新の三段階に分けてはどうかと思う（図１）。

あと、駒込遺跡の出土資料の分析からわかったことであるが、深鉢形土器と共通する属性をもつ（胎土、色調、手法など）をもつ有

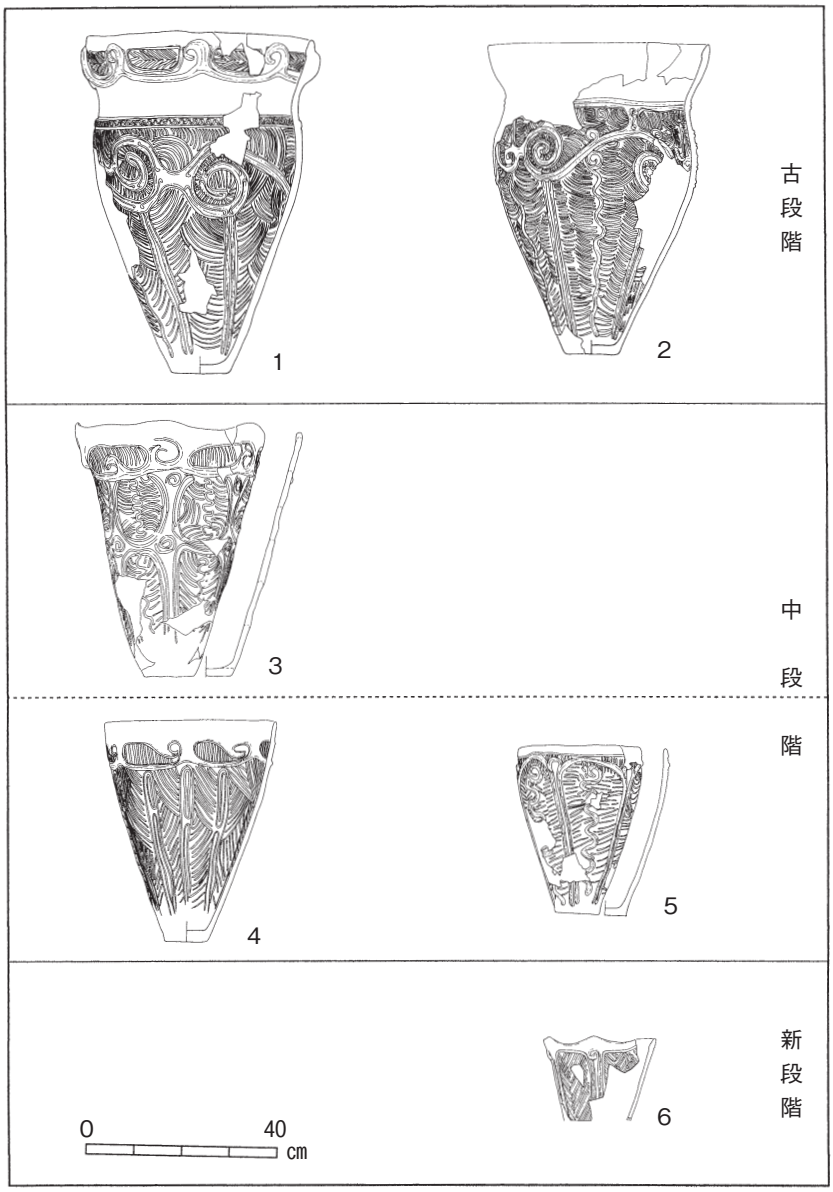


図１　郷土式　有文深鉢形土器の変遷（３ 駒込遺跡、３以外 郷土遺跡出土）

文鉢形土器（図２－１）や無文浅鉢形土器（図２－２）が存在する（川崎ほか 2001）。駒込遺跡出土資料は筆者のいう郷土式中段階の古相が中心であるので、この時期のものと考えた。

まだ共伴関係は、十分に検討していないが、仮に前後にもこうしたセット関係が見られれば（型式成立の要件ではないが）、やはり独自の型式として設定して、研究を進めていく方が、編年や分布の問題も理解しやすいと筆者は考える。

なお、土器型式の空間的把握であるが、実際の分布研究は出土資料の精査と観察を進めていくことに尽きるから、これについては、今後も類例の調査、収集ということになる。

主体か客体か

さて、問題はもう少し違うレベルにもある。地域や遺跡である土器群が主体であるか、客体であるかということがあげられる。山内清男は本来縄文土器の型式は、一定の時間幅と地域を示す装飾形態などの属性でひとくくりにできる土器群を、○○式土器として呼称している（山内 1964）。

型式設定の前提条件ではないが、型式学的研究の中で、追究すべき課題である。地域や遺跡で主体的かどうかは、やはり考えていくべきではある。編年の基軸には、より資料が充実している方を地域や遺跡の編年の基軸とすべきであるからだ。相対年代は地域や遺跡の歴史的変遷を把握する時間軸であり。そのために編年を構築しているのである。地域や遺跡研究を行う上で、有意であるからこそ大別や細分などの区分も存在する。そして、その地域で基軸となった編年をより対比しやすいものと比較研究することになる。

さて、そうした前提を確認し、編年の基軸とするかどうかは別にして、圧倒的多数でなくてもある一定の割合を占めれば、筆者は土器型式として把握した方が良いと考える。その理由を述べる前に、縄文時代の遺跡とくに中期後葉の状況について、今一度確認しておきたい。

異系統土器が共存する縄文時代遺跡の様相

郷土式土器の分布域内だけではないが、明らかに装飾形態が異なる型式や土器群が一つの遺跡でそれぞれ一定の割合を占めることがある。こうしたものの量的な把握（比率）は、中期後葉では千曲市の屋代遺跡群の報告書（寺内ほか 2001）で行われている。

中島庄一は、縄文土器型式や類型はなんらかの人間集団を表しており、こうした現象を一つの集落の中にいくつかの起源を異とする集団が並存（平和共存？）しているために発生したと解釈しているようだ（中島

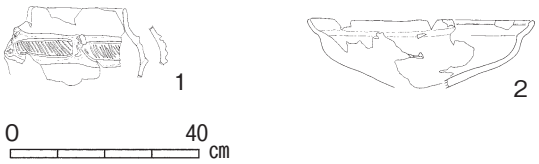


図２　郷土式　有文深鉢形土器と無文浅鉢形土器（ともに駒込遺跡）

1981・2001）。

ここで「ようだ」としたのは、筆者が、かなり以前の中島との「パソコン通信」での議論を通じて得た知識であり、いわゆる学術論文で氏がそれほど明確には断言していないようにも思えるので、筆者の推論としておく（誤解があれば、筆者の責任である）。

筆者は集落内異系統集団同居説（？）には賛同できないが、中島の着目点には敬意を表する。なぜなら、縄文土器型式とは何かという問題を筆者に考えさせる一つの視点になったからである。

これまた推論となるが、中島は弥生土器にも触れる機会が多く、この縄文時代の遺跡における型式の組成の様相に、驚いたのではないか。その一つの理解として集落内に異集団が共存しているようなモデルを氏は作られたのではないか。

筆者は弥生土器研究に詳しくはないのだが、自分の少ない体験からでも、縄文時代の遺跡で割とみられるように、いわゆる在地独特の土器（佐久で言えば郷土式、長野盆地で言えば圧痕隆帯文土器）が圧倒的に多数を占めることはなく、隣接地域にも見られる土器型式、加曽利Ｅ式も多く出土しさらに、量的には少なくないが、広義の唐草文土器、曽利式や大木式まで一定量存在する。こうした様相は、弥生時代の集落遺跡から出土する土器の様相とは異なる。

弥生時代中期後葉の栗林式や後期の箱清水式の時期の集落において、栗林式に拮抗するような隣接地域の土器が一定量（２～３割）出土するようなことはない。

こうした縄文時代と弥生時代の様相の差を、筆者は、集落の中における集団構成の差ではなく、土器の生産、流通の様相の差ととらえるべきと筆者は考える。

弥生時代においても、土器をどこで焼成しているかの痕跡はまだはっきりとは見つかっていないが、中野市栗林遺跡や長野市松原遺跡といった巨大な拠点的集落遺跡には焼成に失敗して歪んだ土器や土器つくりにかかわる道具が出土していることから、こうした拠点的集落で行われていることがうかがえる。

縄文時代の様相の解明は弥生時代より困難であるが、土器焼成に関係する遺物、回転台や焼成粘土塊があるので、おそらくこうした遺物が出土する遺跡周辺で土器を焼成していることが考えられるだろう。そう

してみると縄文時代においても土器焼きは、弥生時代と根本的に違っていたとも思えない（櫛原ほか 2002）。

ただ、問題は焼かれた後のことが決定的に違うのだろう。弥生時代の方が、縄文時代より流通の技術自体は発達していたが、各地の土器を自由に流通させる状況になかったのではないか。

逆に言えば、縄文時代の土器の流通はかなり自由であり、また推測に推測を重ねること（楽しいおしゃべりと揶揄されそうであるが）になるが、隣接地域の土器を一定量受け入れるような理由があったのだろう。

土器型式を考える上では、その理由はともかく、ある遺跡にとってある一定量異系統の土器（装飾形態にかなりヒアタスがある土器の一群）がそれぞれ存在する。それらが供給されて消費されていることをまず考えるべきだろう。

遺跡を調査する側が捉えられる現象面としては、装飾形態が異なる土器群が複数グループ出土することになる。これらはやはりそれぞれ型式名あるいはそれに準じた分類（類型？）をせざるを得ないだろう。

これら異系統の土器群全体を包括して把握したい場合は、例えば、加曽利Ｅ式と郷土式土器などを同時代に共伴している様相を示す概念は、土器型式とは別の概念規定をするべきであろう。

どうしてこのような様相を示すのかは、わかっていない。あるいは複数の人間集団が一つの縄文集落を構成していたことを反映していたのかもしれないし、あるいは筆者が考えているようにこの時代の縄文人の集団が集落遺跡を構成する時には、焼き物（土器）はいろいろな供給源から自分たちの集落遺跡に持ち込んでいる。

本当にどこで焼成しているかは、よくわからないのであるが、流通の段階で一緒に流通していた可能性はあり、結果として消費地である遺跡には、それぞれある程度持ち込まれることになった。

繰り返しとなるが、あくまでそうした土器型式は、あくまで人間が運搬・消費した結果であっても、その分布範囲については、一義的に人間集団を示すという証拠がまだない。

だから、いろいろ人間集団がおりなす文化や歴史について土器型式を駆使して考えたくなる。勿論、現在日本の政治経済文化の中心であるとかは関係ないし、現在の行政区分から同じだから使わなければいけないというものでもない。

あくまで歴史や文化を考えるモノサシとして駆使すればよいのではないか。なお、本稿は、紙幅の関係上、筆者の論に整合的な情報を中心にまとめたきらいがある。拙著（川崎 2009）には、そうではない部分も含めて論じているので、参照いただけたら幸いである。

引用参考文献

神村透 1999「私の姓は唐草文、名は無し」『長野県考古学会誌』90

川崎保ほか 2001『駒込遺跡』長野県埋蔵文化財センター

川崎保 2009『文化としての縄文土器型式』雄山閣

櫛原巧一ほか 2002『土器から探る縄文社会』山梨県考古学協会

桜井秀雄ほか 2000『郷土遺跡』長野県埋蔵文化財センター

寺内隆夫ほか 2001『更埴条里遺跡・屋代遺跡群縄文時代編』長野県埋蔵文化財センター

中島庄一 1981「土器の文様の変化―称名寺式を中心として―」『神奈川考古 12』

中島庄一 2001「称名寺様式の土器文様－土器文様記号論へのアプローチ」『東京考古 18』

平出遺跡調査会編 1955『平出』朝日新聞社

藤森栄一編 1965『井戸尻』中央公論美術出版

藤森英二 2005『大奈良遺跡』佐久市教育委員会

百瀬忠幸ほか 1991『吹付遺跡ほか』長野県埋蔵文化財センター

山内清男 1964『日本原始美術１　縄文式土器』講談社

綿田弘実 1998「北信濃における縄文中期後葉土器群の概観」『研究紀要２』長野県埋蔵文化財センター

曽利	唐草文	加曽利Ｅ 神奈川	加曽利Ｅ 埼玉		郷土遺跡の段階（※）	佐久地方の基準となる遺構	郷土遺跡の基準となる遺構	郷土式	
Ⅰ	Ⅰ	Ｅ1	ＥⅠ	古	3	三田原10住	11住・16住・20住・25住・32住・89住		
Ⅱ	Ⅱ	Ｅ2		新	4	三田原9住・12住	10住・108住		
			ＥⅡ	古	5	宮平Ｊ1住、中村Ｊ10住、平石5住	44住・60住・67住・77住・90住・91住	古段階	
Ⅲ	Ⅲ	Ｅ3		中	6	平石35住？	1住	中段階	古相
				新	7	平石36住、宮平Ｄ11坑、大庭Ｊ1住	24住床直・14住		
Ⅳ			ＥⅢ	古	8	平石7住・9住・30住・41住・42住、宮平Ｊ4住、下吹上2住、岩下37住、中村Ｊ7住・Ｊ9住	6住・39住・106住・121住、1374坑		新相
Ⅴ	Ⅳ	Ｅ4		新	9	吹付4住	72住・118住	新段階	
			ＥⅣ		10	吹付9住、平石2住	104住・123住		

表１　「郷土式」の編年的位置と細分

郷土式土器の変遷と分布

綿田弘実

はじめに

縄文中期後半の長野県では、遺跡数・住居跡が縄文時代全般を通じてピークを迎え、大河川流域や盆地ごとに地域色ある土器群が現れた。中南信に比較して劣勢だった千曲川流域では遺跡急増とともに、上流域の佐久・上田盆地には郷土式、中流域の長野盆地には、圧痕隆帯文土器・大木系・加曽利Ｅ系が組成する屋代遺跡群の土器が出現した。筆者はこれらの土器群を何度か考察し（綿田1999・2003・2007）、まとめて紹介する機会があった（2009、以下『総覧』）。検討の過程では百瀬忠幸氏の論考（百瀬1990・2004）、桜井秀雄氏の郷土遺跡報告と型式提唱（桜井2000）、川崎保氏の分析（川崎2001）、関根慎二氏による群馬県域での考察（関根2008）などから多くの示唆を受けた。本稿では『総覧』に基づき郷土式変遷の概要を紹介し、佐久盆地周辺の分布状況を眺めてみる。

１郷土式土器の特徴

郷土遺跡出土土器は胎土に砂を多く含む。輪積みの粘土帯１段は幅3.0～3.5㎝のものが観察された。器壁の厚さは１㎝前後が多い厚手である。粘土紐貼付による隆帯は、加曽利Ｅ式と比較するとあまりナゾリを施さない印象がある。焼成は良好で、色調は明橙褐色や鈍い黄褐色のものが多い。

鱗状短沈線文土器が現れる図１の１期から４期に相当する郷土報告書掲載の実測個体を計数すると、深鉢185、両耳壺を含む鉢19、浅鉢４、台付鉢・小形壺・釣手土器各１となる。深鉢は加曽利Ｅ式と共通のキャリパー形や括れの緩いバケツ形を主流とする。１期には大形深鉢が屋外埋甕として出土する例が多いが、被熱痕があり転用であろう。深鉢には他に直立気味の無文口縁、内湾口縁などの器形がある。突起や波状口縁は全般的に盛んではない。

２・３・４期の文様には、口縁部に渦巻文、勾玉状文、楕円区画文、弧状区画文、縦Ｓ字状文など、胴部に縦区画する懸垂文、蛇行文、「田」字状文、Ｕ字状文、文様要素として振幅の大きな蛇行沈線、渦巻文、楕円文、地文としての鱗状・綾杉状・重弧状の短沈線文があり、個性を発揮する。

２郷土式の変遷

郷土式土器が分布する佐久盆地は中期後葉初期に遺跡が少なく、曽利式、唐草文系、加曽利ＥⅠ式、三原田式などが見られる。加曽利ＥⅡ式後半と推定される郷土式１期は、地域的・経時的な変容を経たそれらに大木８ｂ式の要素が加わった組成である。佐久、埼玉県北部、山梨県に地域色をもって分布する渦巻文大型深鉢の出現には、関東経由の大木式の関与があろう（百瀬2004）。口縁部の沈線地文は群馬県の加曽利Ｅ式の要素とも見られる。多系統の要素を統合して成立した郷土式は遺跡が多い４期まで、隣接して分布する同じ非縄文施文土器である、唐草文系土器・曽利式土器に対しても独自の主体性を維持する。

『総覧』に掲載した６期区分による変遷段階のうち、2003年当時加曽利ＥⅢ式に並行する２・３・４期の鱗状短沈線文を特徴的に有する土器群を郷土式と捉え、１・５期の土器を除外した（綿田2003）。その理由は、１期については腕骨文や沈線地文が唐草文系土器と類似することと、２期への連続性が明らかにできなかったことによる。課題は依然として残るものの、『総覧』では特徴的な要素の出現期として評価し、１期から説明することとした。

５期以降については、加曽利Ｅ系土器に取って代わられるように減少し、地文に短沈線文が継承されるだけの形骸化した在り方を示すこと、曽利Ｖ式、唐草文系Ⅳ期の土器と近似したものとなることによる。しかし、郷土式の消長を述べる場合、特徴的な要素の消滅過程として位置づけられることは確かである。このように前後時期の様相の不明瞭さや、最盛期における細分などの課題が解決されていないため、「郷土１式」のような固定的な名称を避けた。

加曽利Ｅ系土器が席巻する中期終末の５期と後期初頭の６期については図を省略して郷土式を概観する。主に郷土遺跡出土土器を掲載したが、一括資料がやや少ない４期は他遺跡出土資料を補った。なお、遺跡所在地は報告書刊行時の市町村名で記す。

(1) １期（図１－１～７）

郷土報告の５段階の一部、百瀬論文（百瀬2004）のⅢ期に該当する。胴部に鱗状短沈線文を施す土器が出現している。郷土遺跡の住居跡では、90・91号住居（６・７）が該当するが、個体数が少ない。一括資料ではないが、屋外埋甕２・３・６（１・２・４）と単独土器５・11（３・５）がほぼ同時期と見られる。御代田町宮平遺跡に単独出土の優品がある。いずれも大形土器である。

加曽利ＥⅡ式的な渦巻文の口縁部文様帯と頸部無文帯をもつ土器（１・２・３・７）と、口頸部を無文帯とする土器（４・５）がある。頸部無文帯がない土器（６）も見られる。口唇部内面が内削ぎ状に肥厚する特徴がある。１～４の胴上部には隆帯で横Ｓ字状文、楕円文を配す。５・７の隆帯と、沈線で縦位区画するものがある。地文には重弧状（２・４・６）、綾杉状（３・５）の短沈線、縦位沈線（１・７）、縄文があり、１・７は梯子状に横位沈線を加える。隆帯は２条単位である。90号住居では大木系土器、同時期と思われる60号住居では、加曽利ＥⅡ式と唐草文系土器が伴う。

(2) ２期（図１－８～14）

郷土報告の６段階、百瀬論文のⅣ期に該当する。郷土遺跡１号住居が基準となる。この一括例から屋外埋甕１（８）を同時期とした。屋外埋甕４（11）もこの時期としたが、３期の24号住居に大破片があり、帰属時期は不確実である。

器形は湾曲の緩いキャリパー形である。２条隆帯は８・10の渦巻文に継承される。９・10・12・13は渦巻つなぎ弧文的な口縁部文様帯である。頸部無文帯は消失する。胴部は蛇行・直線状の隆帯で縦区画する10・13・14と、蛇行沈線の12、沈線で「田」字状に区画する８・９があり、10は下端を連結する。地文には鱗状（10・13）と綾杉状（14）短沈線、縄文（８・９・12）がある。１・２期には縄文のみの深鉢が伴う可能性がある。屋外埋甕４（11）は隆帯１条で文様を描くため、同３（４）より後出と考えた。

(3) ３期（図１－15～26）

郷土報告の７段階と８段階の一部、百瀬論文Ⅴ期が該当する。郷土遺跡14・24・76号住居に個体多数の資料がある。

加曽利Ｅ式類似のキャリパー形或いはバケツ形（15～18・21～24）、口縁部無文（19）、唐草文系土器の樽形深鉢に由来する口縁内湾（20・26）、把手付（25）の器形がある。15・16・21～24は口唇部側に幅広い無文部をとる。キャリパー形の胴部文様は沈線が優勢となり、無文部で縦区画する。隆帯の17・18は下端を連結する。キャリパー形以外では、19は隆帯で腕骨文・蛇行文を描き、25・26はＵ字状に区画する。「田」字状文（15・24）は角が丸くなり、先に無文部交点に渦巻文を描くものがある。地文は隆帯の縦区画には鱗状（17・19・26）、沈線区画には綾杉状（15・21～23）短沈線を施す傾向が窺えるが、厳密な規制ではない（16・25）。24号住居では加曽利ＥⅢ式、胴部に渦巻文を描く大木系土器が伴った。

(4) ４期（図１－27～39）

郷土報告の８段階が該当する。39・78・81・106・121号住居など事例は多い。住居一括で多数の個体を出土した例として、佐久市反田遺跡Ｈ１号住居、小諸市三田原11号住居がある。従来佐久地方では、郷土式が見られる時期のなかでも４期の調査事例が圧倒的に多いが、加曽利Ｅ系が郷土式を上回る組成が一般的となる変化が生ずる。

沈線地文土器は減少し、ほとんど緩いキャリパー形かバケツ形となる。口縁部文様は隆帯が低平化し、沈線主導で勾玉状文が分離するもの（35）が現れる。蛇行沈線の振幅は最も大きく（29・35）、渦巻文が拡大した例（31・32・35）が見られる。共伴する口縁部文様帯のない加曽利ＥⅢ式同様に、対向Ｕ字状や縦区画に綾杉状・鱗状などの短沈線地文を施すもの（33・36～39）が増える。

５期は口縁部の隆帯・沈線下を対向Ｕ字状や縦区画、或いは地文のみの加曽利ＥⅣ式にほぼ席巻され、地文に綾杉状短沈線を施すものがある。曽利Ⅴ式・唐草文系Ⅳ期土器と近似してくる。佐久市吹付遺跡４号住居、望月町平石遺跡２号住居が事例となる。

６期は５期と同様なものが更に減少して称名寺式の古い段階まで残る。綾杉状短沈線が細くなるか疎らになる傾向はあるものの、加曽利Ｅ系が供伴しないと識別しにくい。浅科村海戸田Ａ遺跡ＳＱ01遺物集中が事例となる。同遺跡ＳＢ08住居も近い時期であろう。

３分布と地域性

郷土式が主体を占める分布域は、浅間山南麓から千曲川を挟み蓼科山北麓に至る佐久盆地の北佐久郡域である。川上村大深山遺跡は曽利式土器単純相といわれるから、南佐久郡を南下するほど希薄になるのであろう。諏訪盆地では茅野市の上川流域にある聖石・長峯遺跡などで客体的に出土している。黒曜石の流通ルートに関連するのであろうか。距離的に変わりがない松本盆地にはみられない。それを飛び越えた信州新町下中牧遺跡に完形品１例がある。

千曲川を40km足らず下った屋代遺跡群は加曽利Ｅ系をベースに圧痕隆帯文土器・大木系が組成する土器群を持つ。ここで確実な例はＳＢ9003住居の破片と、ＳＫ9071土坑の樽形深鉢だけである。土器に限れば没交渉とも見られ、把手・波状口縁を多用する屋代遺跡群の土器と、それらが低調な郷土式の雰囲気の差も顕著である。

中間に位置する上田盆地では加曽利Ｅ系と伯仲か少数派となる。佐久盆地とは異なり、加曽利Ｅ系と共通のキャリパー形より樽形深鉢が多い。百瀬氏は、「器形や成形は唐草文系土器に近似しつつも、多くの場合横走する窓枠状の口縁部文様帯を欠き、下端部を「Ｕ」字状に連結する隆帯文などを特徴とする」小地域的な在地土器と指摘する（百瀬2004）。

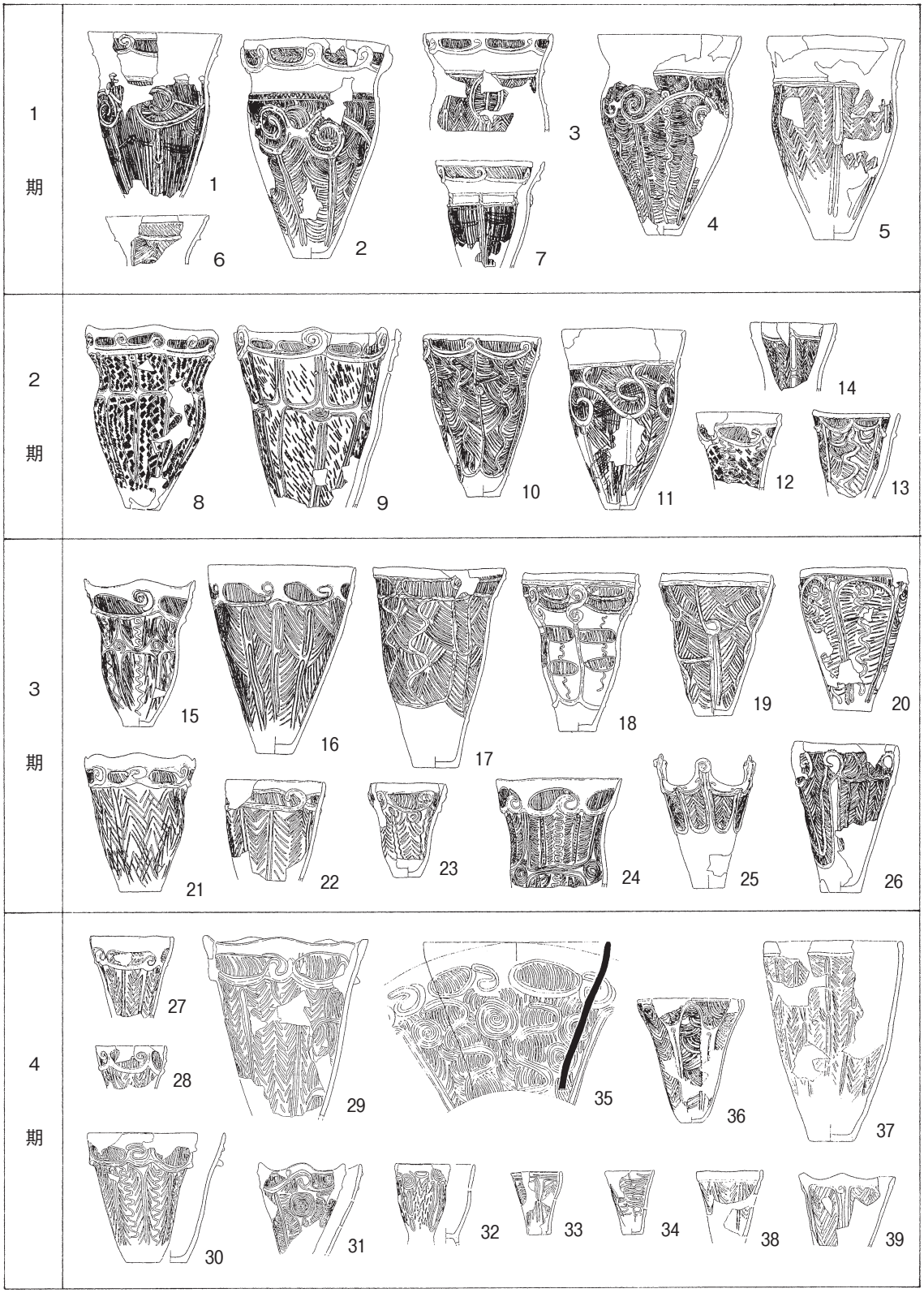


図１　郷土式土器変遷図（１～５：1/20、その他1/15）
１～28・38・39：郷土、29～34：反田、35：平石、36：寄山、37：駒込

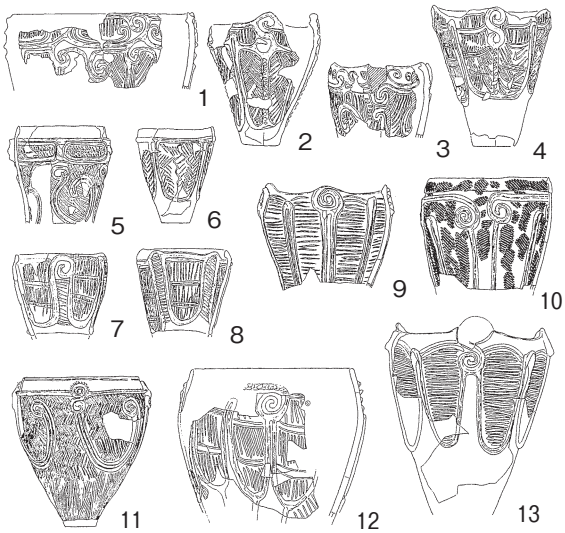


図２　上田・小県地方の唐草文系樽形深鉢(1/15)
１～４：渕ノ上、５～９：八千原、10～13：四日市

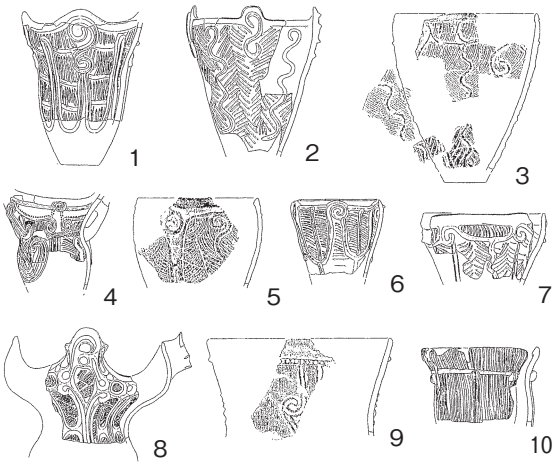


図３　群馬県吾妻川流域の縄文中期後半土器(1/15)
長野原町横壁中村

本場の樽形深鉢からの変容の程度には差があり、いまだ唐草文系土器との判別に迷う場合が少なくない。加曽利ＥⅢ式期に群馬県の横壁中村遺跡など吾妻川流域には、唐草文系土器に由来する仲間でも、上田盆地同様の樽形深鉢だけが選択的に伝わっているように思える。同様の事例は、同じ時期の上越地方の中郷村前原遺跡にも見られる。

関根氏によれば、群馬県西部地域の浅間山北麓吾妻郡域では、加曽利ＥⅡ式期には唐草文系土器が主体的に分布し、同Ⅲ式期には郷土式に移行するという、佐久盆地と通ずる変遷が見られる。佐久盆地を東進した碓氷郡・甘楽郡域でも一定量分布する。長野県側の遺跡を含めて郷土式を主体的にする遺跡分布は、浅間山頂から半径25㎞の円内にほぼ収まるという。浅間山を

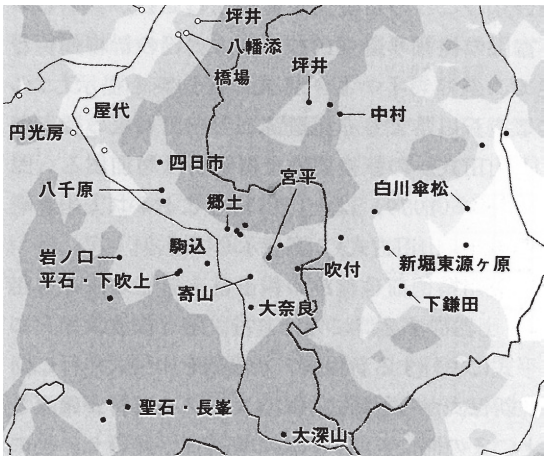


図４　郷土式出土主要遺跡分布図[・](1/150000)

取り巻いて環状に分布する郷土式の領域には、磨製石斧製作遺跡といわれる下仁田町下鎌田遺跡、石棒工房が検出された松井田町西野牧小山平遺跡など、豊富な石材を利用した石器・石製品製作遺跡が見られることから、石工集団の存在も推定されている（関根2008)。

加曽利ＥⅢ式期前後に消長を遂げ、浅間山を廻る直径50㎞圏内に主体的な足跡を残した郷土式土器は、縄文時代史の中で最も短く狭いグループに属す型式であろう。郷土式を表徴とする集団の文化は、今後明らかにすべき興味尽きない課題である。

【主要文献】（年代順）

宇賀神誠司・百瀬忠幸他　1990『四日市遺跡』真田町教育委員会
綿田弘実　1999「千曲川水系における中期末葉縄文土器群」『縄文土器論集』
桜井秀雄他　2000「郷土遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19－小諸市内３－』長野県埋蔵文化財センター
川崎　保他　2001『県単農道整備事業（ふるさと）大田野地区埋蔵文化財発掘調査報告書－浅科村内－駒込遺跡』長野県埋蔵文化財センター
関根慎二・綿田弘実他　2003『第16回縄文セミナー　中期後半の再検討』・『同　記録集』
百瀬忠幸　2004「鱗状短沈線文土器に関する覚書」『異貌』22号
綿田弘実　2007「中部高地における縄文中期末から後期初頭の在地系土器について」『第20回縄文セミナー　中期終末から後期初頭の再検討』・『同　記録集』
関根慎二　2008「浅間山を廻る縄文土器」『研究紀要』26　群馬県埋蔵文化財調査事業団
綿田弘実　2009「郷土式・圧痕隆帯文土器・大木系土器」『総覧縄文土器』

私が「郷土式」と呼ばなかったわけ

藤森英二

まず始めに告白しておくと、今回私は編集者という立場を利用して、桜井、川崎、綿田各氏の論考を一読してから、これを書いている。

繰り返しは避けるが、1991年、百瀬氏が吹付遺跡出土土器の一部を「佐久系土器」と呼び、その後桜井氏はこれを包括するかたちで「(仮称) 郷土式」を提唱。川崎氏、綿田氏もこれを支持している。

そんな中、私も2005年に佐久市大奈良遺跡でこの種の土器を分析する機会を得ていた（藤森2005)。住居址単位で出土土器を並べ、編年の確立されている共伴の加曽利Ｅ式を中心として、土器群の変遷を描こうとした。ここでは郷土式とは呼ばず、百瀬氏の定義した時間幅をやや拡大させ「佐久系土器」と表記している。その後、2007年には本誌でも名称について取り上げたが、ここでもやはり「佐久系土器」と表記した（藤森2007)。

いずれにせよ、私は可能性を認めながらも、一度も「郷土式」とは呼ばなかった。その理由とは何か？

時間的に平行する加曽利Ｅ式と曽利式は、ともに４～５型式に細分され、およそ500年に及ぶ時間幅を持つ、まさに押しも押されもせぬ「型式」である。

ひるがえって、郷土式を見てみると、概ね加曽利Ｅ２段階で唐草文から派生したというコンセンサスはあるようだが、両者の分離は必ずしも明確ではない。その後、少なくとも加曽利ＥⅢ段階では確立し、場所によっては主体的に存在するものの、あるいは加曽利ＥⅣ段階には、すでに姿を消すとされる。短命、である。

視野を広げると、そもそも母体とされる唐草文系土器にも型式名は未だ定着していない（小口1998)。さらにこの時期、西関東の連弧文土器、北信地方の圧痕隆帯文土器（綿田2009）など、どうも加曽利Ｅ式や曽利式の狭間にあって、研究者が「型式」と呼ぶことを躊躇する土器群の存在が割拠している、気がするのである。

短命であることが型式成立の妨げにならないとは理解するが、研究者が型式と呼ぶのに躊躇する理由の一つにもなってはいないだろうか（ただし、唐草文系土器については、本号の川崎論文にうまくまとめられている。なるほど、少なくとも唐草文系土器が型式名を持たなかったのは、タイミングの問題だったのかもしれない。)。

いずれにせよ、その始まりと終わりを捉えること、つまり明確にその土器群の時間幅を捉えることは、型式化へのステップだと、私は感じていたのである。

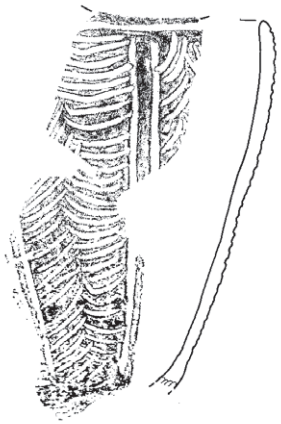
そんな中、2008年に携わった佐久市反田遺跡では、少なくともその終末について、私なりにその姿を見出せた（藤森2008)。図に示した土器は、曽利Ｖ式によく似るが、地文は、特徴的な太い沈線の鱗状文様が施されたものだ。これらが複数個体見られたことで、鱗状沈線文を施すという伝統が、世代を越えて受け継がれていたという感触を得た。それは極く一部ではあっても、加曽利Ｅ式とも曽利式とも違った土器文化が、中期の末期まで息づいていた証拠ではないか。仮にこの段階までの存在が認められれば、型式としての存在はより強固になると思えるのだ。これは、私なりの「郷土式」成立へのささやかな応援歌であった。

ただし、これが確実に中期末まで下るという出土状況は今のところ見えていない。比較対象とした曽利Ｖ式も、加曽利ＥⅢ段階から存在するという見方もある。よって、今のところ浅間山を取り囲んだ土器の血脈が、確実に中期末まで保たれたことを証明は出来ないが、私はその可能性を探っていきたいと考えている。

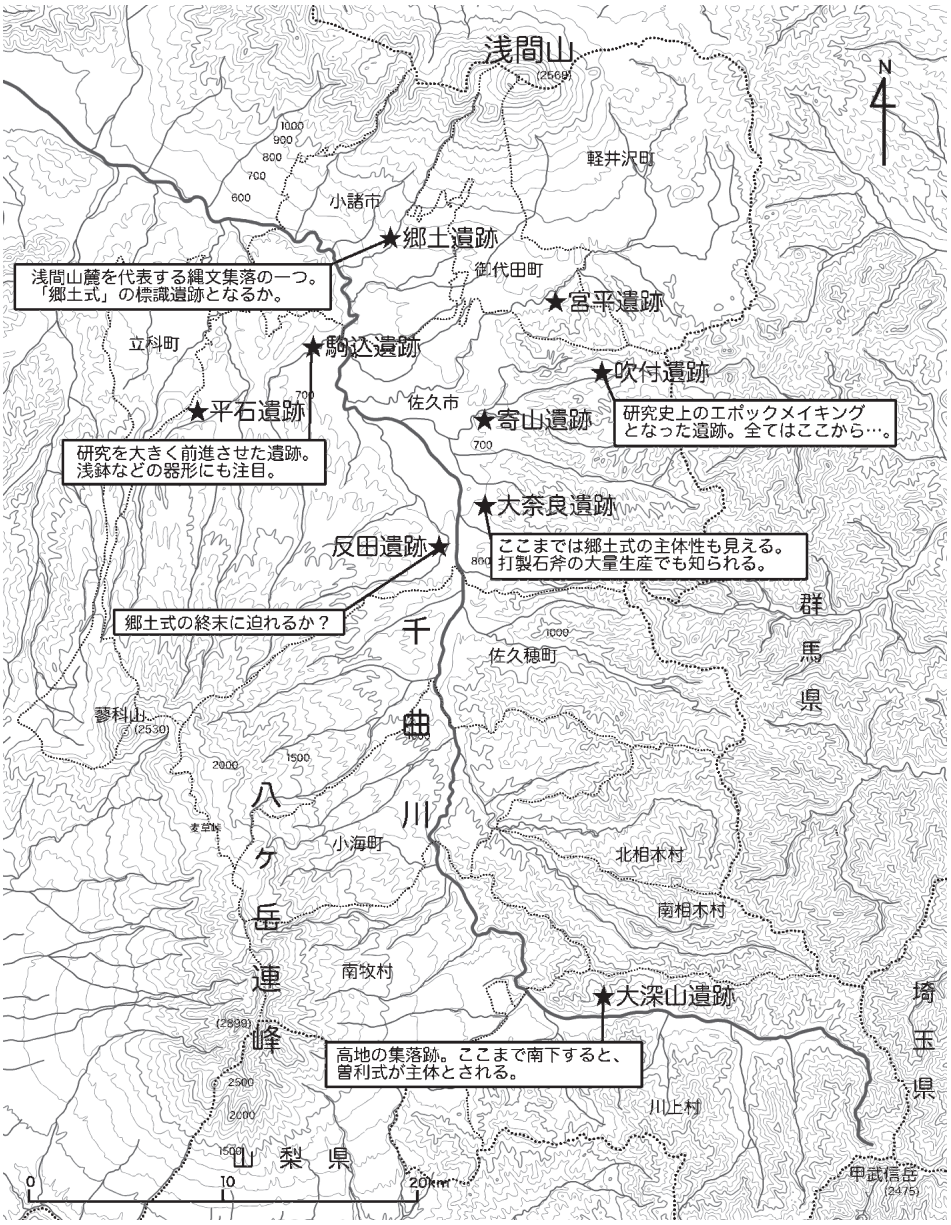
参考文献

小口英一郎1998「「唐草系土器」の再検討－「熊久保式」の提唱と成立段階の検討を中心に－」『信濃』50-7
藤森英二2008「反田遺跡出土の縄文土器について」『小山崎遺跡群　反田遺跡』佐久市教育委員会
綿田弘実2009「郷土式・圧痕隆帯文・大木系土器」『総覧縄文土器』

※紙面の都合で、参考文献は他三氏が挙げられていないものに留めている。ご容赦願いたい。



反田遺跡Ｈ１号住居址出土土器。
太い鱗状沈線文が見て取れる。



本文中に出てくる主な遺跡

♪　編集後記　♪

本会会員でもあられた樋口昇一先生が亡くなる前、こんなメールを下さった。「最後の仕事となる『信州の縄文土器』出版を考えています。Ａ４版で３巻、最初に「中期」、次に「草創期･早期･前期」、最後に「後期・晩期」の予定です。君には「佐久」を担当して貰いたいのですが心積もりしておいてくださいね。」とのことだった。無論、私に佐久の縄文土器をまとめるなどという大役は無理であるが、佐久の土器のヒストリーを意識するようになった。今回３氏の力をお借りし中期後葉に挑んだが、他の時期でも試みていきたい。

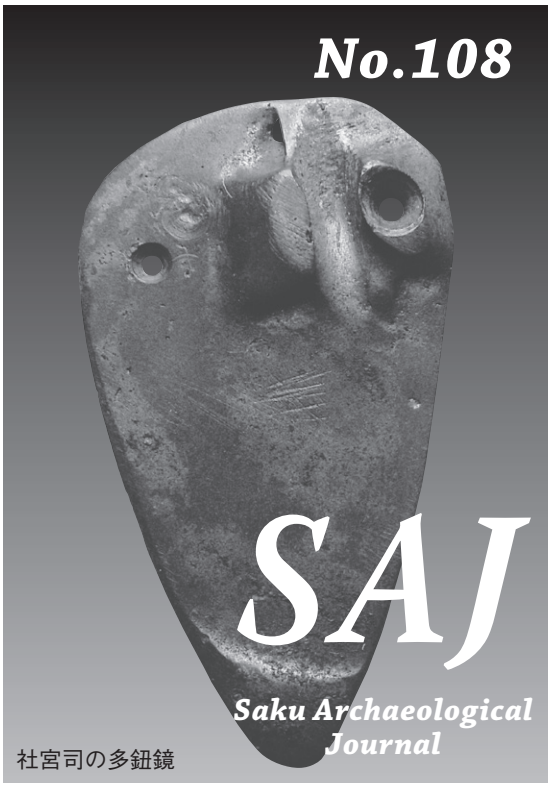
（藤森）

佐久考古通信　№107

発行所　佐　久　考　古　学　会
〒384-0091 小諸市御影新田1945-6
桜井　秀雄　方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267 (32) 8922

発行日　2011年４月15日
発行者　藤　沢　平　治
編集者　藤　森　英　二
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク



社宮司の多鈕鏡

佐久考古通信

■ 遺跡と考古学を学ぶためのコミュニケーション誌 ■

2011.7.15　佐久考古学会

特集 社宮司(しゃぐうじ)・多鈕鏡(たちゅうきょう)の再検討

佐久市原社宮司遺跡から発見された弥生時代の鏡片「多鈕鏡」の再検討に関する論考を特集した。

「多鈕鏡」は、国内では12例のみしか知られていない希少な鏡であり、他はいずれも西日本のみの出土で、なぜ信州佐久の地に遺されたか、大きな謎である。

★ 目　次 ★

社宮司の多鈕鏡……柳田康雄　2
埋納状況の復元……小山岳夫　4
社宮司遺跡出土の多鈕無文鏡をめぐって……小林青樹　7
朝鮮半島からみた社宮司の多鈕鏡……宮里　修　10
社宮司遺跡の多鈕無文鏡によせて……設楽博己　13
社宮司遺跡の多鈕鏡・玉・鉄斧
一括資料を考える……石川日出志　14

戦後間もない昭和25年（1950）前後、佐久市原、現在の野沢南高校の東側にあたる畑で耕作をしていた伴野ひで子さんは、土器の底に納められていた小さな銀色の金属片一片と、25点の管玉、緑色に輝く１点勾玉、錆びた鉄の塊りを掘り出した。

ご主人の伴野稀一郎氏は、当時野沢小学校教員だった白倉盛男氏にこの事実を報告、貴重な発見を予感した白倉氏は、東京大学の八幡一郎氏へ出土品の写真と計測値をすぐに送った。

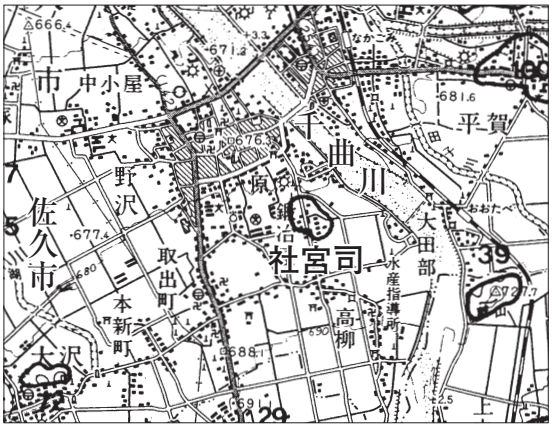
弥生の多鈕鏡が約2000年の歳月を経て地上に現れ、ふたたび人々の注目を浴びることとなった経緯である。この場所は、社宮司遺跡と名付けられた。

社宮司の多鈕鏡・勾玉・管玉　Photo T.Ogawa

昭和27年（1952）に八幡氏が銀板と思しきものとして発表したのち、昭和41年（1966）永峯光一氏は、多鈕細文鏡の可能性が高いという指摘を『信濃』で行った。以降、社宮司遺跡出土の銀色の金属片は、大方に多鈕細文鏡の破片であると認識されてきた。

平成22年（2010）１月～２月、長野県御代田町浅間縄文ミュージアムにおいて社宮司遺跡出土品が公開され、柳田康雄氏、設楽博己氏、宮里修氏、小林青樹氏、深澤太郎氏、石川日出志氏ら何人かの弥生時代研究者が実見に訪れ、その後春成秀爾氏も実見した。

それは44年ぶりの見直し調査ともなり、実見された研究者の見解を、この特集において報告する。



社宮司遺跡の位置（長野県佐久市原）

社宮司遺跡の多鈕鏡

柳田康雄

1．はじめに

多鈕細文鏡・勾玉・管玉・鉄器が土器に納められて出土したという（桐原 1963、永峯 1963）。現在個人所蔵であることから全部は調査できなかったが、今回、浅間縄文ミュージアムのお世話で鉄器と土器以外を観察調査できた。

2．多鈕鏡の観察

多鈕細文鏡とされている破鏡は、長径4.23cm、短径2.4cm の大きさの中に、鈕１個と縁の一部が残っている。厚さは、縁1.85mm、中央最薄部0.85mm、鈕部3.0mm である。破鏡とは、破片となってから二次的に研磨され、マメツしたものをいうが、本例も両面のほぼ全面が研磨されており、金属質も錫分が多く、保存状態が良好である（写真１～６）。

鈕が円鏡の中央にないことから多鈕細文鏡とされている（桐原 1963、永峯 1963）が、わずかに背面の縁内側に鋳肌の原状を残して、出土後の傷があるものの、文様がないことから多鈕無文鏡である。鏡面の破片中央部には、内湾した鏡面の原状が窺える。鈕は通例の多鈕細文鏡（写真７）と同じであったらしいが、実際は写真３のように円孔になっており、現状では上部が研磨されて失われている。鈕上と平坦部に各１個の円孔が穿たれているが、最初に裏面から穿孔され、次に鏡面から若干補正されている。裏面平坦部には、その他に４箇所の未穿孔痕跡がある。また、鈕の傍らには、鋳造時の鬆らしき半円形のアナが見られる。鏡面にも無数の鬆が見られる（写真１・２・５・６）。

なお、鏡片両面の付着物は布である可能性がある。

（國學院大學文学部）

参考文献

桐原　健　1963「信濃国出土青銅器の性格について」『信濃』第18巻第４号

永峯光一　1963「鏡片の再加工と考えられる白銅板について」『信濃』第18巻第４号

写真１　社宮司多鈕無文鏡

写真２　鈕付近穿孔と穿孔失敗痕跡

写真５　鏡面鬆と研磨痕跡

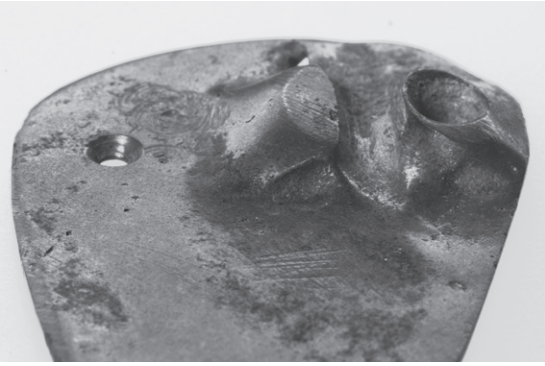


写真３　鈕側面俯瞰

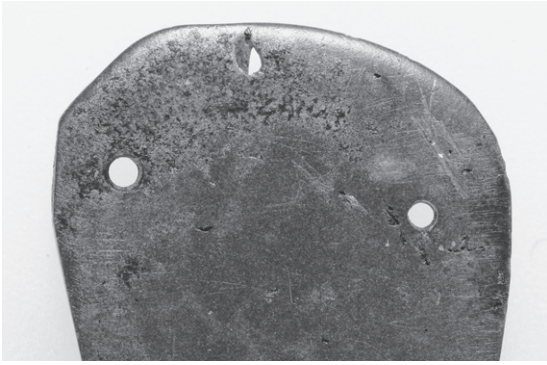


写真６　鏡面穿孔と周縁のマメツ

写真４　鏡片俯瞰

写真７　福岡市吉武高木３号木棺墓
多鈕細文鏡の側面俯瞰

多鈕鏡埋納状況の復元

小山岳夫

１．はじめに

44年ぶりの見直し調査により、細文が刻まれた鏡から無文の鏡へと位置づけが変更され、再び脚光を浴びている佐久市社宮司出土の多鈕鏡に対する地元研究者としての役割は、時期決定の鍵を握る共伴土器の時期判定を行うことと、地元の利を活かして埋納状態を復元することである。以下に若干の考察を試みたい。

２．多鈕鏡の属性

社宮司出土の多鈕鏡は破鏡された破片である。原形は直径約10cm 程度の小型品であったと推定される。仮に均等に分割できたとすれば８～９枚の破片を取ることができる。破片の長さは4.2cm、形状はティアドロップのギターピック状である。割れ口、鏡面、鏡背を丁寧に研磨し、２ヶ所を穿孔して紐で繋いだときには鏡背が正面を向く垂飾に加工している。

詳細は、本誌の柳田康雄氏の論考を参照されたい。

３．共伴遺物

ヒスイの勾玉１点、鉄石英の管玉15点、碧玉の管玉10点、鍛造の板状鉄斧１点とこれについていた不明鉄製品、弥生土器が出土した。ここでは埋納時期を決定の鍵となる土器の観察結果を報告する。

土器の評価のために、平成23年４月30日、佐久市文化財課で、当該の弥生土器の比較のため、西裏遺跡の中期後半・直路遺跡の後期初頭・北一本柳遺跡の後期中頃～後半・下小平遺跡１号周溝墓の後期終末～古墳初頭のいずれも壺・甕を観察した。

まず、中期後半・後期の甕は、いずれも煮炊き機能を重視した口径が広く、底径が狭いスリムな形態で社宮司の土器とは異なる。器の内面は水漏れを少なくとどめるために焼成前の半乾きの段階で木ベラ、竹ベラなどで入念に磨きこむ。社宮司の土器内面は磨きこんだ形跡がない。以上の消去法から社宮司の土器は甕ではなく、壺の可能性が高いと判断できる。

社宮司の壺の形態は後期初頭の壺とは共通する部分もあるが、後期中頃以降の壺とは全く異なる。後期壺の内面は一様に板状工具の深い櫛目調整痕が明瞭に残っている（写真３）。いっぽう、社宮司の壺の内面調整は非常に細かい櫛目というよりも刷毛状の痕跡である（写真１）。観察個体が少ない状態で即断は出来ないが、後期＝吉田・箱清水式土器の壺の内面調整との共通性は少ないように感じられた。

中期後半＝栗林式土器の壺は、後代の吉田・箱清水式土器壺と同様に板状工具の櫛目調整を施すものが多いが、深い櫛目調整痕でなく浅い擦痕を残す調整を施した壺も少数ではあるが存在する（写真２）。社宮司遺跡出土土器の内面調整はこれと近似する。しかし、栗林式土器壺の内面調整は概して平滑で丁寧に施され器肉は薄いのに対し、社宮司の壺はごつごつしており、やや雑な感を受け、器肉も厚い。こうした相違点から中期後半の壺とは断じきれない状況である。

今回観察した栗林式土器は、同型式でも後半段階のものであり、前半段階あるいは栗林式土器の前段階の土器も観察してみなければならない。現段階では当土器は中期後半以前ではないかという漠然とした見解を示すに留まってしまった。今まで多くの研究者が結論を出さなかった土器である。一筋縄で解釈できる土器ではない。

４．埋納状態の復元

社宮司の土器の内面をよく見ると端っこに偏ってサビがついている（写真４）。 そこに鉄斧を乗せるとピタッとはまり、刃を上に向けて立った（写真５・６）。鉄斧が土器の中に立てられていたことはほぼ間違いない。

ヒスイ製勾玉の片面や鉄石英・碧玉製管玉の一部をよく見ると錆がついている。この状況から玉類は鉄斧にくっついていたと考えられる。多鈕鏡片には錆の付着は見られないが、銅という金属の性質が鉄錆の付着を阻止したと考えて良いのであろうか。

いずれにしても多鈕鏡片・玉類は装飾品という共通性をもち、土器とともに一括で掘り出されたことを考えると埋納当時は綺麗につなげられていたと考えて良いと思われる。

ここからは、まったくの想像であるが、埋納された当時の復元を試みた。玉類と多鈕鏡片をややきつめにつないで見ると57cm、約60cm の長さになった。つなぎ方は考古学的な類例を確認したわけではないが、多鈕鏡とヒスイを中心にすえて赤と緑の管玉を組み合わせるときれいに見栄え良くなるのではという私の勝手な想像である（図１）。アクセサリーのデザイナーに再現してもらうのも良いかもしれない。

玉類を繋いだ長さ約60cm が現代人の帽子のサイズである。繋いだままだと頭でひっかかってしまう。首飾りとしてはやや短い、頭をかざるものであった可能性もある。

埋納状況についても想像で再現を試みた。つない

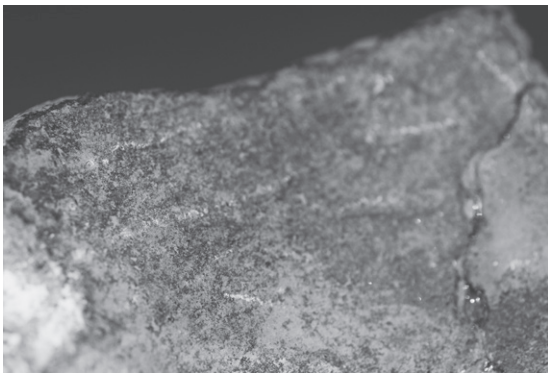


写真１　社宮司遺跡出土壺の内面

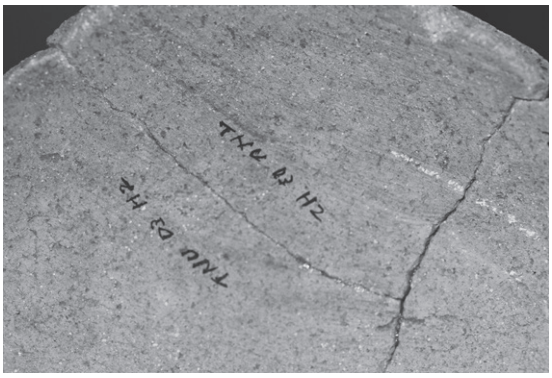


写真２　中期後半壺（佐久市西浦遺跡）の内面

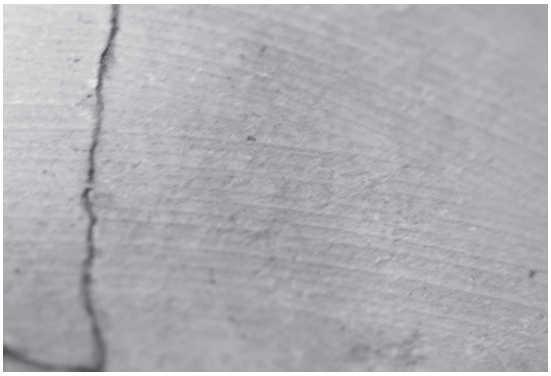


写真３　後期壺（佐久市北一本柳遺跡）の内面

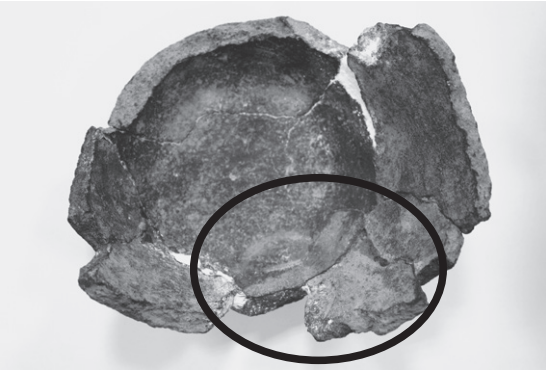


写真４　社宮司出土壺の内面に付着する錆（楕円部）

写真５　壺内に直立する板状鉄斧①

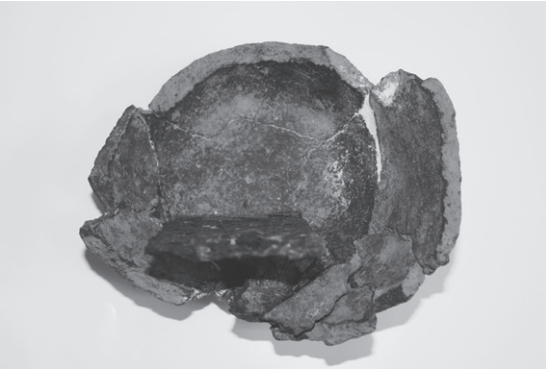


写真６　壺内に直立する板状鉄斧②

写真７　社宮司遺跡の全出土遺物

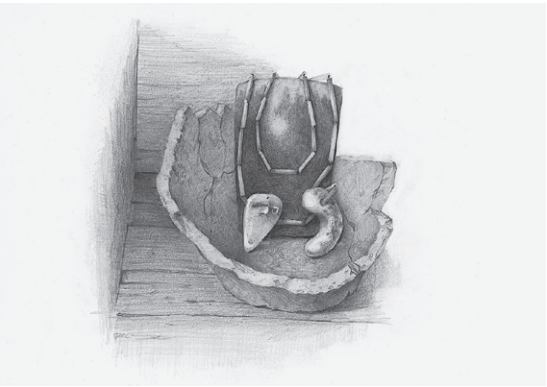


図１　埋納状態の想像復元（森泉智也氏作画）

だ装飾品を二つ折りにして鉄斧に垂れ掛けると綺麗にかけられる。木箱もさほど根拠があるわけではない。60年前の発見当時、これらの鏡片、玉類と土器は、無理なく一括で拾い上げているように思える。ごぼう掘りをしていてスポッと穴が開いたような状態になったのではないかと想像する。土器の周りは何かで覆ってあったのではないかと考え、木箱を再現してみた。

島根県荒神谷遺跡や長野県中野市柳沢遺跡などに代表される銅矛・銅剣・銅戈・銅鐸などの埋納は木箱や皮などに包まないと言われていることを承知した上での復元である。

5．破鏡の意味

社宮司の鏡片は破鏡である。破鏡の定義は、研磨・穿孔など２次加工が確認できることである。2003年時点で国内には161例の破鏡がある。分布の中心は、北部九州にあるが、南は鹿児島・北は東北の山形県まで認められる。東日本では各県に１・２点認められる程度なので点在的な分布である。

国内では最古型式の鏡の破鏡は福岡県福岡市須玖唐梨遺跡出土漢鏡（径10cm の銘帯鏡を破鏡、２ヶ所穿孔）で、漢鏡４期（紀元前１世紀後葉～紀元１世紀初め）以降の前漢末期・王莽時代の鏡から漢鏡７期（２世紀後半～３世紀初め）の後漢後期の鏡が破鏡された。特に弥生時代後期後半、倭国乱をまたぐ２～３世紀という時期に盛んになる。

三国時代の魏で作られた三角縁神獣鏡（日本の前期古墳に埋葬される鏡・景初３年〈239〉～）の破鏡はごく少ないことから、破鏡は弥生時代後期の近畿以西に特徴的な風習であると言われている。

多鈕鏡は国内で12例、海外を含めても115例（本誌宮里論文による）確認されているに過ぎず、再加工品は社宮司以外１例もない。多鈕鏡の生産地である朝鮮にも類例がない。

こういった状況から、社宮司の破鏡は弥生後期まで数回の流転・伝世を経てから近畿以西で破鏡されて佐久の地にいたったという考えが一般的で穏当な解釈であった。ちなみに社宮司の出土品の埋納時期を後期とする見解や論文も多い。

ところが、今回の社宮司の土器の観察結果では、後期埋納の可能性よりも、中期埋納の可能性が出てきている。もし、これが事実であれば社宮司の破鏡は国内最古の破鏡ということになってしまう。長年積み重ねられた破鏡研究の歴史からみれば、非常に不都合な事態になる。

鏡ではないが、ガラス璧など舶載の貴重品の分割は伊都国の存在が有力視される福岡県前原市三雲小路遺跡２号墓でも確認されている。破鏡の上限が、今後の発見でさかのぼってくれることを祈っている。

6．結　語

―長野県佐久地域に多鈕鏡が存在する意味―

社宮司の多鈕鏡片の埋納時期は、土器の観察結果がでるまで一時保留せざるを得ないが、いずれにしても破鏡の情報・知識など弥生時代の信濃では知る由もないので、他の地域で加工されたのちに信濃へもたらされたものと私は考える。

考古学の宿命で、現状未発見であっても新たな発見により分布の空白が埋まることは多々ある。しかし、社宮司例を除くと北部九州と山口県、大阪・奈良県などの近畿地方にしかその存在が認められない多鈕鏡は、今後どんなに調査が進展しても日本列島各地の空白を埋めるとは考え難い。今後、なぜこんな珍品が飛び地的に信濃へもたらされたのかを深く掘り下げ、本年中には稿を改めて考察する予定である。

弥生中期の産物では、弥生時代研究者を驚愕させた中野市柳沢遺跡出土銅戈・銅鐸や大町市海ノ口神社所有の大阪湾型銅戈、千曲市箭塚の細型か中細型の銅剣など過去に出土したシナノの青銅器と併せて考えてみる必要がある。そこからは、弥生時代中期におけるシナノが青銅器の生産地・供給地から特別視された地域であった実像が浮かび上がってくるのではないかと考えている。

ちなみに弥生後期は木島平村根塚遺跡から朝鮮半島南部伽耶産とされる柄に渦巻き模様をもつ鉄剣、兄弟型式の樽式土器文化圏である群馬渋川市有馬遺跡からは長剣が出土している。このため、信濃から毛野の国一帯は倭国乱前夜（紀元２世紀後半）の日本列島にあって丹後や出雲の当時の有力な諸地域と同様に鉄の輸入をめぐって朝鮮半島南部と独自なチャンネルをもつ地域であったと考えることも可能である。

こういった海外との関係も視野に入れながら、今後も信濃の弥生中期（「…分かれて百余国…」『漢書』）～後期（「…倭国乱れ相攻伐して年を歴たり、乃ち共に一女子を立てて王となす。名付けて卑弥呼という…」『魏志倭人伝』）の社会像を考えていきたいと思う。

（佐久考古学会・御代田町企画財政課）

参考文献

岡村秀典1999『三角縁神獣鏡の時代』
佐原　真2005「Ⅰ考古学の方法　１原始・古代の考古資料」『佐原真の仕事１　考古学への案内』
高橋　敏2003「最北の破鏡」『研究紀要』創刊号　山形県埋蔵文化財センター
難波洋三2011「弥生の祭器」『平出博物館紀要』第28集
森岡秀人1994「鏡片の東伝と弥生時代の終焉」『第35回埋蔵文化財研究集会「倭人と鏡」－日本出土中国鏡の諸問題－』の当日追加資料より
宮里　修2008「多鈕細文鏡の型式分類と編年」『考古学雑誌』第92巻第１号

社宮司遺跡出土の多鈕無文鏡をめぐって

小林青樹

1．はじめに

社宮司遺跡は、多鈕鏡の破片とともに、板状の斧、そして多数の管玉と極めて大きい翡翠の勾玉を一緒に壺に納め、土中に埋納した祭祀遺跡である。こうした祭祀遺物は、非日常的で特別なものであると見なされる。しかし、社宮司遺跡で玉類や鉄斧が伴っていたように、祭祀具の対象は本来、日常･非日常の区別がない。おそらく文字をもたない弥生人は、ものだけでなく身の回りの景観や身振りなどにも特別な意味を重ね合わせ、また連想し、祭祀・儀礼の媒体にしたのであろう。

筆者は、最近、こうした特別な意味を連想した対象を「象徴媒体」と呼び､これを媒介として様々な祭祀･儀礼が実践されたと考える。そして、祭祀遺物という括りは、この象徴媒体のうちの「モノ」の総称として用いられる。それでは、今回問題とする社宮司遺跡出土の多鈕鏡には、一体どのような意味を弥生人は連想し、祭祀・儀礼を行ったのであろうか。この問題を考えるためには、社宮司遺跡から出土した多鈕鏡の起源に遡って考える必要がある。

2．社宮司鏡片の起源と系譜

多鈕鏡は、中国東北地方で出現した紐を通す鈕を複数もつ鏡である。この鏡は、その後、朝鮮半島で「多鈕細文鏡」という鏡背の文様が極めて精緻な鏡となり、日本列島に伝播した。

社宮司遺跡出土鏡は、最も東で出土した多鈕鏡である。今回の再検討の結果、筆者と宮里修は、鏡背に文様をもたない特徴を重視して、新たに「多鈕無文鏡」と呼ぶことにした。多鈕無文鏡の類例は、中国の遼東地域と韓半島にあるが例数は少ない。この辺の事情については、宮里修氏の論考に譲る。

今のところ、最古の多鈕鏡は、遼寧省の西部と接する内蒙古自治区の南、夏家店上層文化の代表的遺跡である寧城小黒石溝遺跡98M５墓から出土している鏡で（図１－３）､西周末から春秋初期の頃のものである（内蒙古文物考古研ほか 2007）。

こうした多鈕鏡の鏡背には、三角形の内部に細線を充填するものを基本モチーフとする「三角文系連続Ｚ字文」と筆者が呼ぶ文様が施される（図１－３）。この文様は、新しくなるにつれて次第に崩れていき、韓半島に伝わると三角形を規則的に配置した星形の図形へと変化する（図１－４）。そして、この文様が精緻な細線化を達成して多鈕細文鏡が誕生する。この星形

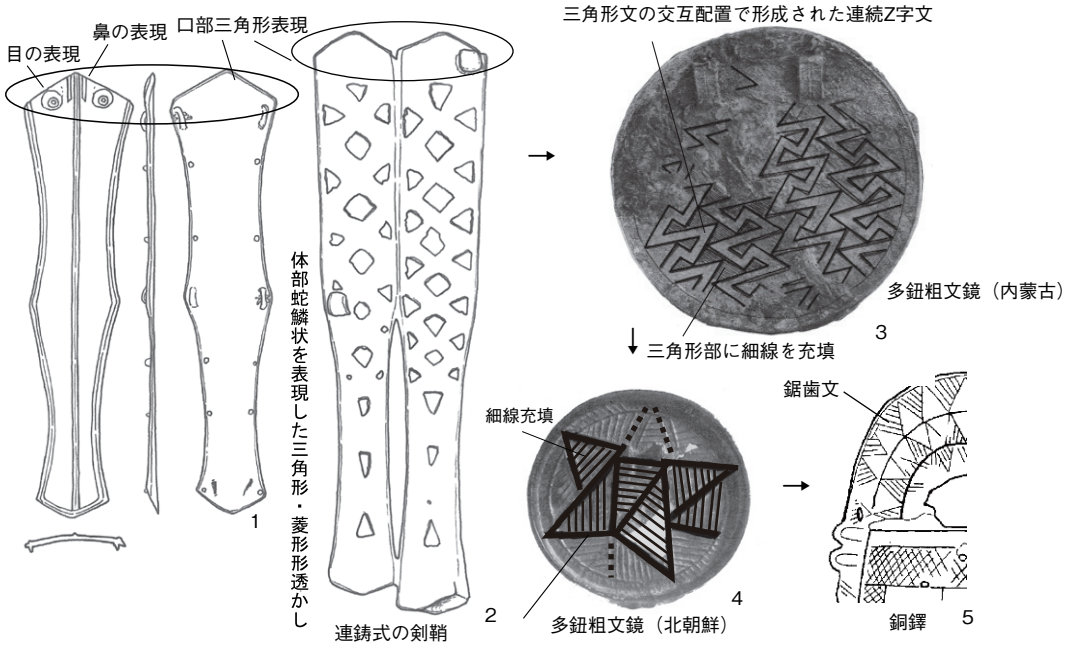


図１　蛇形剣鞘・多鈕鏡・銅鐸（縮尺不同）
［１熱水湯・２必斯営子・３小黒石溝98M5・４伝成川・５弥生銅鐸の鋸歯文］

を形成する個々の三角形（中に細線を充填した）が「鋸歯（きょし）文」であり、この文様は銅鐸・器台・盾など、弥生時代から古代にいたる様々な器物につけられた特殊な文様である。

この三角文系連続Ｚ字文の祖型は、銅製の剣の鞘（さや）の本体の三角形状の透かしに求められ（図１－２）、これが鏡の文様に取り込まれたとき、三角形を左右と上下に交互に配置し、これら三角形の間の隙間の部分がＺ字状の文様が連続するようになった。さらに、三角形透かしの起源は、銅製剣鞘自体をヘビに見立てた例（図１－１）があることから、ヘビの体のウロコやマムシの三角形状の頭部が候補となる。以上のように、多鈕鏡の文様には、三角形をヘビの象徴とみなし、さらに毒で敵を倒すというヘビの意味が重ね合わされている。このような邪悪な対象を避けるものを辟邪（へきじゃ）と呼んでいる。銅鐸が辟邪として機能したという説は、このような文様の意味と関係があろう。

こうした多鈕鏡の用途について甲元眞之は、中国東北地方の民族例のなかに、大形の鏡を服に縫い付けて使い、また小形の鏡は木や枝につり下げて使う例があることから、シャーマンの持ちものであったと考えた（甲元 2006）。先の筆者の文様の意味の推定からみれば、多鈕鏡を身体に取り付けるなどして、太陽の光を反射して悪霊を惑わす辟邪の役割をもったのであろう。光彩を放つ銅鏡の特徴と辟邪の文様は、共に同じ意味として多鈕鏡に重ね合わされ祭祀・儀礼で機能したと推定されるのである。そして、社宮司鏡は文様をもたないが、鏡自体が辟邪の意味をもつと考える。

３．社宮司鏡片にみる「戈形」の象徴的伝統

多鈕鏡の意味はわかったが、社宮司鏡は小破片であり、場合によっては数百年前の鏡である。弥生人が本来の鏡の意味をすべて知りつつ埋納したとは考えられない。鏡が再加工された後、弥生人が新たにこの鏡片にまた特別な意味を連想し、埋納したことが予想される。

あらためて社宮司鏡の形状をよくみると、破片とはいっても、破断面を研ぐ、あるいは鈕の頭を研いで平らにするなど、何らかの形を意識しているのは間違いない。そこで、仮に長軸に垂線を引くと、左右が非対称な形状である。現在、このゆがんだ三角形状の底辺側に３カ所の穴があるが、このうち、１カ所（C）は、元々鋳上がりの悪さによって生じた穴で、ドリル状の鋭い工具で穿孔したのはＡとＢの２つであろう。この２つの穴は、Ｂについてはあえて水平に研いだ鈕の上からあけており、また、Ａにいたっては、この周りに何度も穴をあけようとした箇所が複数ある（D）。もし、この鏡片をペンダントとして使うのであれば、Ｃの穴だけで事足りるわけであり、その他に２箇所も穿孔をあけるこだわりは、装飾品とは関係のない別の意図によるものであると考えたほうがよいだろう。

それでは、こうした穿孔などの特徴は何を示すのであろうか。筆者は、この左右非対称の形と穿孔のあり方は、「銅戈」をイメージしたものであると考える。銅戈といえば、最近多数の銅戈が発見された中野市柳

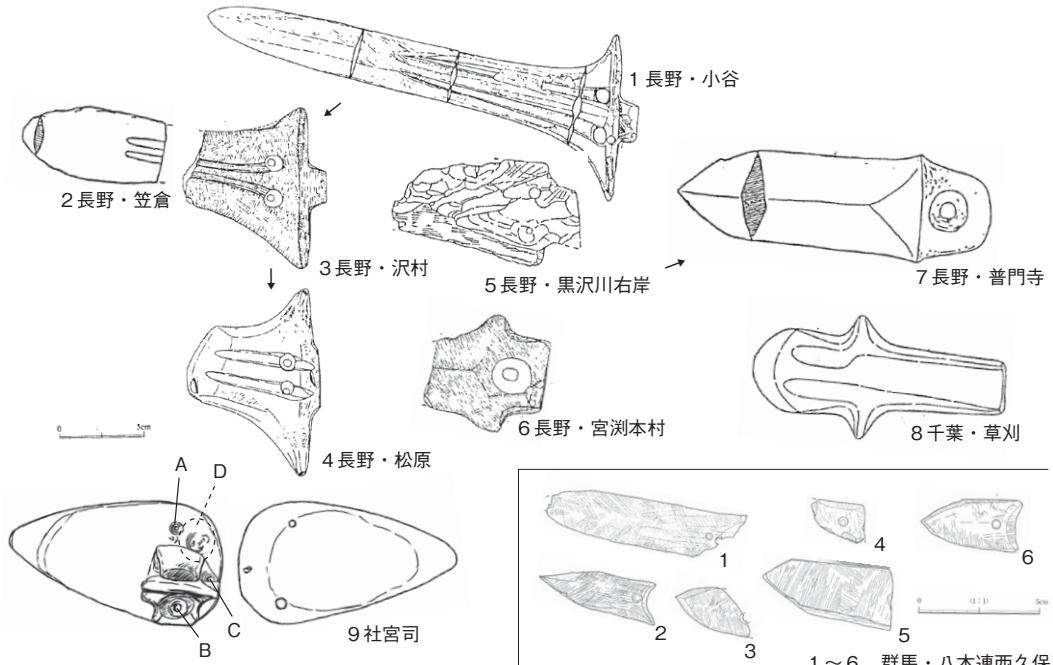


図２　社宮司の多鈕無文鏡片と銅戈・石戈・有角石器
（９：縮尺不動・全長4.2cm）

図３　「戈形」の磨製石鏃

沢遺跡が有名であり、そして、長野県の弥生中期には、この銅戈をモデルに石戈が多数作られた（石川 2010）。戈の本体は左右対称の形状ではなく、また穿と呼ぶ孔を２つもつのが特徴である（図２－１）。おそらく、銅戈、そして石戈の「戈形」の特徴を、破片となった多鈕鏡に重ねて表現した、というのが筆者の解釈である。

戈は、古代中国で最初に登場した武器で、鉤状の形状から辟邪の意味をもち、また弥生時代の武器のうち唯一絵画に表現され、さらに青銅器のなかで最も東方から出土する特別な武器である（小林 2006a）。弥生絵画で、戈のみを取り上げている例は、「戈形」に象徴的な意味があることを示している。

このような解釈が成り立ちうるとすれば、さらに銅戈や石戈の分布する長野県から群馬県にかけて、中期末から後期初めにみられる磨製石鏃とされるものも「戈形」の特徴を表現した可能性がでてくる。主として栗林式土器とその系統の土器分布圏にみられる磨製石鏃とされるものは、穿孔をもち、その起源については金属製鏃模倣説・磨製石鏃説などがあり、用途については漁労具説・祭祀具・威信財説などがある。井上慎也等が指摘するように、確かに、石鏃として矢柄に装着されるとしたら、穿孔は意味がない（井上 2010）。群馬県富岡市八木連西久保遺跡では、石鏃のように基部が凹むものもあるが、戈を彷彿とさせるようなものもある（山武考古学研究所編 1993）（図３－１）。本遺跡からは、銅戈の破片や石戈も採集されており、関連性がありそうである。基部が凹むものは、石鏃の系譜を考えるべきであるという意見もあるだろうが、石川日出志が石戈の分類で示したように（石川 2010）、双孔石戈のうち、富岡市鏑川河底例や長野市松原遺跡例（図２－４）のように、内（柄に差し込む茎部）が極端に縮小あるいは消失したものがあり、戈形の可能性もある。左右の翼の大きさやアンバランスさは、まさに「戈形」の特徴である。

以上から、少なくとも磨製石鏃とされるもののなかには、「戈形」の特徴を表現した「ミニチュア石戈」の可能性のあるものが含まれている可能性がある。これに利用された石材は、キラキラ光る緑泥片岩を使っており、あるいは銅の輝きを意図したものかもしれない。こうした状況がすべて関連性のある出来事であるとすれば、弥生時代の中期後半から後期初等頃に、「戈形」という「戈」の形を連想させるような一定の形状のパターンが銅戈・石戈・ミニチュア石戈など複数のモノに徹底するような象徴の伝統（筆者はこのようなものを「象徴伝統」と呼ぶ）があったのであろう。そして、栗林式土器の分布圏を中心にこの「戈形」の象徴伝統が形成されていたと理解できる。さらに、石川日出志が指摘するように、石戈の影響は、有角石器（図２－８）に引き継がれ、さらに東方にまで及んでいたのであり（石川 2005）、東日本全体に「戈形」の象徴伝統が広がっていたことになろう。社宮司の鏡片は、それ自体稀で貴重な存在であるが、その鏡片を利用した弥生人の祭祀世界の奥深さを物語っているのである。

４．社宮司鏡片埋納の風景

銅戈は、その辟邪としての意味から、西日本および柳沢遺跡までほとんどが埋納された。これと同じような意味のなかで社宮司の埋納も行われたのであろう。なぜ、銅戈を埋納したのかというと、それは辟邪を埋納することよって、自然の脅威などを除く、あるいは封じ込めるためである。社宮司の場合は、たびたび噴火を起こす浅間山、そして洪水となって牙を向く千曲川に畏怖の念を抱き、辟邪の象徴である多鈕鏡をさらに同様な意味をもつ戈の形に再加工して埋納し、自然の脅威を鎮めようとした、というのが筆者の解釈である。戈はマイナスな状況をプラスの状況へと導く役割をもっていたのであり、結果的に山と川の恵みをもたらす山川の神への信仰心の表れでもあり、こうした表裏一体の信仰心が埋納という祭祀行為として実行されたのであろう。

社宮司遺跡周辺を発掘したところ、生活痕跡を見いだせなかったのは、まさにこの地がそうした祭祀を実行する聖なる場であることを示している。なお、多鈕鏡の埋納習俗は、韓半島そして西日本でもみられた伝統であり、それが佐久でも実践されていたわけである。

以上のように、社宮司の鏡片は、極めて小さいものであるが、その鏡に刻まれた歴史は古代中国にまで遡り、そして佐久の弥生人の崇高な自然に対する信仰心を知ることができる貴重な資料である。

（國學院大學栃木短期大学）

主要引用参考文献

石川日出志　2010「東日本弥生時代中期の青銅祭器と模倣石製祭器」『2010年度大学院学内成果報告書』明治大学大学院文学研究科

井上慎也　2010「群馬県における弥生時代後半の石器組成と地域性」『法政考古学』第36集

甲元眞之　2006『東北アジアの青銅器文化』同成社

小林青樹　2006a「弥生祭祀における戈とその源流」『栃木史学』第20号

山武考古学研究所編　1993『八木連西久保遺跡他　群馬県営ほ場整備事業（妙義中部地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

内蒙古文物考古研究所・東北亜歴史財団　2007『夏家店上層文化の青銅器』

朝鮮半島からみた社宮司出土の多鈕鏡

宮里　修

１．多鈕鏡とは

多鈕鏡は紐を結びつける摘みが複数個（主に２個）付いた鏡で、紀元前一千年紀の長い期間、中国東北地方から日本列島（以下、日本）にいたる東北アジア一帯で用いられた。円形で、磨き上げた反射面をもつために鏡と呼ばれてはいるが、くぼんだ反射面は姿見に適さず、一般にはシャーマンの用いる道具であったと考えられている。

多鈕鏡は、現在までに115例が知られている※。地域別にみると中国東北地方に19面、朝鮮半島（以下、朝鮮）に76面、日本に12面がある。また多鈕鏡には、文様の線が太い「多鈕粗文鏡」、文様の線が極めて細い「多鈕細文鏡」、そして文様のない「多鈕無文鏡」がある。これら種類別にみると粗文鏡が43面、細文鏡が59面、無文鏡が11面となる。中国東北地方には粗文鏡のみ、朝鮮には粗文鏡と細文鏡がそれぞれあり、日本はほぼ細文鏡のみがある。こうした地域ごとの特徴は、中国東北地方で誕生した粗文鏡が、朝鮮で独自の細文鏡に変化した後、日本に伝わったという多鈕鏡の歴史を反映している。

筆者は以前、朝鮮の多鈕鏡について文様などを詳しく検討し（宮里 2001・08）、中国東北地方から伝わった粗文鏡が細文鏡へと変化し発展する過程を５つの段階に整理した（図１）。日本で出土した12面の多鈕鏡は、当時の弥生社会に精緻な土製鋳型をつくる技術がないことから、朝鮮で製作されたものが伝わったと考えてよいが、これらは多鈕鏡の５つの段階のうちの第４・５段階にあたる。朝鮮で細文鏡が著しく発展した時期の製品である。弥生社会の側からいえば、多鈕細文鏡は、弥生時代前期末に細形銅剣・銅矛・銅戈などと共に伝わってから中国鏡が本格的に伝来する中期後半まで用いられた。多鈕鏡は日本で製作されなかったため、他の青銅武器のように日本化（大型化）することはなかった。

２．日本出土の多鈕鏡

日本出土の多鈕鏡には、里田原３号甕棺墓（長崎県平戸市）、原の辻遺跡大原地区（長崎県壱岐市）、宇木汲田12号甕棺墓（佐賀県唐津市）、本村籠58号甕棺墓（佐賀県佐賀市）、増田 SJ6242（佐賀県佐賀市）、吉武高木３号木棺墓（福岡県福岡市）、若山遺跡埋納土坑（福岡県小郡市・２面）、梶栗浜石棺墓（山口県下関市）、大県遺跡（大阪府柏原市）、名柄遺跡（奈良県御所市）、そして社宮司遺跡（長野県佐久市）の12面がある。北部九州に集中するのは地理的位置から自然であるが、有明海沿岸にやや偏ることは弥生社会と渡来人の関係を考える上で興味深い。また、北部九州と異なる青銅器文化圏にあった畿内に多鈕鏡が伝わったことも、弥生時代における地域間の関係を考える上でまた興味深い。しかしながら社宮司出土の多鈕鏡は、こうした水準で問題を設定することが難しい特殊な資料である。

社宮司鏡について解決したい問題には伝播経路など様々あるが、ここでは「社宮司出土鏡はいかなる多鈕鏡か」について考えてみる。

３．朝鮮の多鈕無文鏡

社宮司出土の青銅片が多鈕鏡だといえるのは、永峯光一（1966）の復元案で示されたように、鈕が細腰形で且つ鏡縁側に偏ることによるが、多鈕鏡の体系における位置を探るとき、大きな手掛かりとなるのは、文様がないこと、すなわちそれが多鈕無文鏡であるということである。

前述のように多鈕無文鏡には11例がある。地域別の内訳は中国東北地方が５例、朝鮮が５例、そして日本の社宮司鏡である。多鈕鏡115例のうちでは10％に満たない少数派である。

朝鮮出土の多鈕無文鏡には、忠清南道礼山郡東西里石槨墓から出土した１面、平壌市貞栢里遺跡の２面、伝霊岩出土鋳型のうちの１点、慶州市朝陽洞５号木棺墓の１面がある（図２）。

それぞれについて特徴をみていくと、東西里鏡は直径9.4cm で反りがなく、断面半円形の鏡縁は幅が狭く薄い。鈕は双鈕で断面台形、いずれも鈕の鏡縁側が紐ずれにより摩滅している。鈕の側面観は隅丸台形、鈕孔は歪な楕円形で中子は通しで設置された。鏡面は磨き上げられるが、鏡背面にはあばた状の凹凸がひろがり鋳上がりはよくない。東西里鏡は共伴した多鈕粗文鏡によれば多鈕鏡の第２段階にあたる。朝鮮独自の多鈕粗文鏡が形成される段階である。この段階には朝鮮の青銅器は日本に伝わっていない。

貞栢里鏡は同型の２面であり、傷の箇所が一致することから同范鏡と報告された（榧本 1969）。直径は7.4 cm で、鏡面はほぼ平坦、鏡縁は断面三角形で幅が狭く薄い。鈕は双鈕でやや間隔を空けて中軸線上に位置

中国東北地方：次第に幾何学文が崩れる。

第１段階：二重線で文様を描き平行線を充填。次第に縦方向の区画へ。

第２段階：朝鮮独自の粗文鏡誕生。著しく多様化。朝鮮の西半分に分布。日本には伝わらない。

第３段階：細文鏡誕生。粗文鏡も一部残る。日本には伝わらない。

第４段階：細文鏡が多様化。分布が拡大し，日本へ伝わる。

第５段階：細文鏡の組合せが形式化。大型で文様が複雑，中型で文様が簡素，小型三鈕の３種。日本に伝わる。突如消滅する。

図１　多鈕鏡の変遷

（1. 遼寧省本溪市梁家村，2. 遼寧省建平県炮手営子，3. 平壌市新成洞，4. 伝成川郡，5. 祥明大所蔵，6・8. 全州市　如意洞，7. 礼山郡　東西里，9. 伝中和郡，10. 大田市　槐亭洞，11・12. 扶餘郡九鳳里，13. 伝慶尚南道，14. 柏原市大県，15. 唐津市宇木汲田，16. 佐賀市本村籠，17. 襄陽郡　釘岩里，18. 牙山郡　宮坪里，19. 福岡市吉武高木，20. 唐津郡　素素里，21-23. 咸平郡　草浦里，24. 和順郡　白巖里）

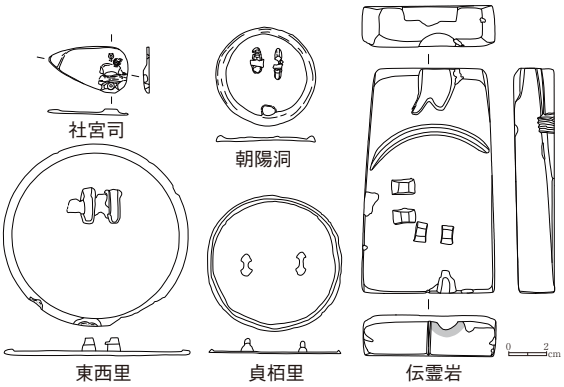


図２　社宮司鏡と多鈕無文鏡

する。鋳放しで銅質も悪いという。貞栢里鏡の鏡縁や鈕の形態は粗文鏡に特有のものであり、中心付近に鈕が位置するのも多鈕鏡第２段階の特徴である。東西里と同じ段階に属するとみてよい。

伝霊岩鋳型鏡は復元径が約８cm で、双鈕と断面半円形の鏡縁により多鈕鏡と判断できる。方向を違える二組の双鈕があるが、いずれも未完に終わっている。鈕は幅の広い細腰形で、現状では鏡面は平坦となる。細文鏡段階には無文鏡が確認されておらず、また細文鏡は土製鋳型で製作されたと考えられるため、伝霊岩鋳型鏡がいかなる製品を意図したものであるのか分からない。伝霊岩鋳型鏡は、逆の面に彫られた有肩銅斧が細形銅剣段階の青銅器であり、また多鈕鏡自体の特徴からも多鈕鏡第３・４・５段階に位置づけられる。日本に伝わった多鈕細文鏡の時期と重なるが、そもそも多鈕無文鏡の事例であるのかがはっきりしない。

朝陽洞５号木棺墓鏡は直径5.3cm で、鏡面はくぼむが縦横軸で反りの程度が大きく異なる。鏡縁は細文鏡に通有の断面半円形である。双鈕は大部分が欠失するが、紐状鈕でアーチ状の側面観であったと推定される。鈕孔は円形で中子は個別に設置された。鏡面は布による補修のため状態が確認できない。鏡背面は粗く凹凸やひび割れがある。下方の鏡縁に接する鏡胎部分には７mm 大の歪な穿孔がある。鏡縁側が摩滅しており紐で結わえ懸垂したことが分かる。朝陽洞鏡について違和感を感じるのは重量の軽さであり、材質が青銅であることも確信できない。朝陽洞鏡は、多鈕鏡の消滅後、多鈕鏡の製作圏外に出現したものである。朝鮮および日本ではこの頃から中国鏡の伝来が本格化する。

中国東北地方もあわせてみると、多鈕無文鏡は多鈕鏡第２段階に集中する傾向がある。第３段階以降の事例は、現状では一般化が困難な特殊例である。

４．謎の社宮司鏡

以上を踏まえて社宮司鏡の特徴を改めて整理してみる。

鏡縁の扁平さはおそらく再加工の結果であるが、いくらか幅がある点において、例示した第２段階の無文鏡とは異なる。より細文鏡に近いともいえるが、粗文鏡でも断面半円形の鏡縁に対応するものがある。

社宮司鏡は銅質が極めて良い。例示した無文鏡はいずれも銅質が悪い。粗文鏡も鋳肌は粗いものが多く、より細文鏡の質に近いといえる。

社宮司鏡の鈕はやや幅広の細腰鈕である。細腰形の鈕は細文鏡段階に定型化するが、社宮司鏡の場合は、鈕の両側縁に細隆起線がなく細文鏡の鈕とは異なる。むしろ粗文鏡段階の細腰鈕に近いが、一方で伝霊岩鋳型鏡の鈕ともよく似ている。

結局のところ、社宮司鏡は多鈕鏡の体系の中にうまく収まらない。現状では未知の多鈕鏡に可能性を求めるほかない。粗文鏡が日本に伝わっていないことを考えると、伝霊岩鋳型鏡から類推される細文鏡段階の無文鏡がひとつの候補となるだろうか。

他方、朝陽洞５号木棺墓は社宮司遺跡と時期的に近い。朝陽洞鏡のような脈絡のなかで製作されたとすると、伝統的な多鈕鏡製作圏外における模倣品ということになる。しかしながら、朝陽洞鏡の特徴は社宮司鏡と大きく異なる。模倣鏡の観点でみれば日本で製作された可能性もあるだろうが、想像の域を出ない。

ここに提示した可能性はいずれもまだ見ぬ資料が頼りである。現状では「類例の増加に期待する」という残念な結論を導くほかない。

（高知県埋蔵文化財センター）

※2008年の集成後、中国遼寧省朝陽市袁台子遺跡の採集品１面、韓国慶尚南道泗川市月城里石槨墓の細文鏡１面、全羅北道完州郡徳洞遺跡の粗文鏡１面、完州郡新豊遺跡の細文鏡７面、済州島倪來洞の細文鏡１面が加わった。

引用参考文献

榧本杜人　1969「陽遂と多鈕細文鏡」『考古学雑誌』第55巻第１号、1－15頁、日本考古学会

永峯光一　1966「鏡片の再加工と考えられる白銅板について」『信濃』第18巻第４号、29－32頁、信濃史学会

宮里　修　2001「多鈕粗文鏡について」『史観』第144冊、65-84頁、早稲田大学史学会

宮里　修　2008「多鈕細文鏡の型式分類と編年」『考古学雑誌』第92巻第１号、1－32頁、日本考古学会

ハングル

国立慶州博物館　2003『慶州 朝陽洞遺跡Ⅱ』国立慶州博物館学術調査報告第13冊

池　健吉　1978「礼山東西里石棺墓出土　青銅一括遺物」『百済研究』第９輯、151－181頁、百済研究所

社宮司遺跡の多鈕無文鏡によせて

設楽博己

1．北信地方と北部九州地方

信濃地方では、弥生中期後半以降、西日本に系譜が求められる青銅器や鉄器などの威信財や実用品が数多くみられるようになる。上田市上田原遺跡の鉄矛、上田市上の平遺跡の巴形銅器、大町市海ノ口諏訪社に伝わる近畿型銅戈、千曲市若宮箭塚遺跡の細形銅剣などである。松本市宮渕遺跡出土銅鐸破片のように三遠地方のものもあるが、巴形銅器や鉄矛などその多くは北部九州に系譜が求められる金属製品であることに加えて、大半が諏訪湖盆よりも北部から出土していることは、伝播経路が日本海域であったことを示唆している。

北部九州方面との交流は、松本市石行遺跡の縞模様のある磨製石剣からわかるように、縄文晩期終末にさかのぼる。土器を焼成する前に赤く塗り、焼成によって吸着させるいわゆるスリップ焼成は西アジアから中国、朝鮮半島に起源が求められる農耕民の土器製作技術であるが、縄文前期の特殊例などを除外すれば、日本列島にその技術が定着するのは北部九州の夜臼式期である。その後縄文晩期末から弥生時代にかけて、スリップ焼成は北部九州から日本海を経由して石川県御経塚遺跡、乾遺跡、新潟県大塚遺跡など北陸地方に伝播した。長野県域ではやはり石行遺跡にみることができ、東海地方にその技術は伝わらないので、信濃地方には北陸地方から及んだとみてよい。

社宮司遺跡は長野県域の北半に位置しており、多鈕無文鏡の来歴も、北部九州との日本海を通じた古くからの交流を背景に理解していく必要がある。この点に関係した、北信地方での二つの興味深い考古事象について考えてみたい。

2．榎田遺跡の磨製石器生産

一つは長野市榎田遺跡の磨製石器生産である。榎田遺跡では、遺跡の裏山500mに産する玄武岩あるいは変輝緑岩という硬質な火山岩を用いて、太型蛤刃石斧や扁平片刃石斧などの大陸系磨製石器を集中生産している。ここで半製品にして近隣の松原遺跡に送り、製品に仕上げるというシステムが成立していた。大きいもので長さ20cm、重さ1400ｇを超えた太型蛤刃石斧も生産され、胡麻斑の入った深く濃い緑色の美しい形をした榎田産磨製石斧はまさにブランド品の風格がある。50km離れた遺跡でも、榎田産太型蛤刃石斧の比率は９割近くであるとともに、その分布は驚くほど広く、千葉県域や静岡県域という直線距離で200kmを超える範囲にまで達する。これらのなかには見たところ未使用品も相当数含まれているようであり、威信財として流通していた可能性も考えられよう。

このような生産体制と製品の広域流通は、栗林式土器文化の人々が独自に考え出したことであろうか。福岡市今山遺跡は太型蛤刃石斧を中心とした石器生産遺跡である。今山に産する玄武岩を用いた長さ20cm、重さ1500ｇに及ぶ製品は、榎田遺跡のそれに近い。流通の範囲は100kmを超え、遠隔地でも今山産製品の比率が高い。今山遺跡が太型蛤刃石斧を限定してつくっているのに対し、榎田遺跡では有角石器や石戈なども生産しているように、生産体制には違いも指摘できる。しかし、原産地直下型の生産遺跡であることや、玄武岩という共通の石材を用いてほぼ似た規格の製品を仕上げ、あるいは今山石斧を凌駕する流通範囲をもつ。この二者の中間にこうした類似度をもつ石器生産遺跡は存在していない。榎田遺跡が今山遺跡を介さずして成立したとは考えにくい。

栗林２式土器になると、壺や鉢形土器の無文化が進むと同時にスリップ焼成による赤彩が著しくなる。北部九州と信濃地方の間にこの傾向は顕著ではない。中期前半からの在地的展開のなかで理解できないこともないが、やはり須玖Ⅱ式土器の影響を評価すべきであろう。このこともまた北部九州と北信地方のつながりを示すものである。

北部九州の磨製石器生産と流通は、権力と結びついて整備された可能性が指摘されている。今山遺跡がその背後にのちの伊都国の領域をひかえ、石庖丁生産を専門とする飯塚市立岩遺跡に前漢鏡を多数副葬した王墓が築かれていることからの推測である。松原－榎田遺跡の領域ではどうだろうか。松原遺跡では礫床木棺墓が20数基検出されているが、規模や副葬品などにほとんど格差はない。しかし、この点を考えるうえで注目すべき例がほかにある。

3．柳沢遺跡の青銅器と礫床木棺墓

中野市柳沢遺跡から５点の銅鐸と８点の銅戈が出土したが、銅戈に北部九州産の中細形が１点含まれていることは、早くから指摘されていた。この事例も北部九州と北信地方のつながりを示すものであるが、ここでは礫床木棺墓に注目したい。

青銅器が出土した地点の西から礫床木棺墓群が検出されたが、ひときわ大きな１号礫床木棺墓を複数の礫床木棺墓が二重に取り巻く。１号礫床木棺墓からは、100点近くの管玉が出土し、副葬品の点においても隔絶性をみせる。墓地の構造は、佐賀県吉野ヶ里遺跡のＳＴ1001墳丘墓を髣髴させ、同時代の近畿地方の墓地よりは、よほど階層化の進行がよくうかがえる。

礫床墓自体は再葬墓の直後に出現するので、在地の系譜から生まれた余地はあるが、伽耶系の鉄剣が出土した木島平村根塚遺跡の弥生後期墳丘墓とも関係をもつと思われる、礫を貼った円形の区画のなかに礫床墓が配置される朝鮮半島の青銅器時代～鉄器時代の墓地との関係性も視野に入れる必要があろう。

（東京大学大学院人文社会系研究科）

社宮司遺跡の多鈕鏡・玉・鉄斧一括資料を考える

石川　日出志

佐久市社宮司遺跡の多鈕鏡片垂飾・ヒスイ製勾玉・板状鉄斧各１点と管玉25（緑色凝灰岩製10・鉄石英製15）点が弥生土器の壺内部から一括出土した事例は、これまで多くの人々が関心を寄せてきた。土器内面には鉄錆が付着し、勾玉頭部形の痕跡が観察でき、勾玉の片面と管玉13点に鉄錆が付着するので、これらが一括資料であることを誰もが確認できる点で、耕作中の偶然の発見ながら第一級の資料といえる。この一括資料への私なりの考えを述べてみたい。

まず、これら資料の所属時期については、弥生後期とする先行研究もあるが、私は中期後半の栗林期とみなす。土器は底部周辺しか現存しないので、栗林式と見たいが、吉田式まで下る可能性もある。時期判断には、長野市光林寺裏山で1902年にヒスイ製勾玉４点・管玉105点（緑色凝灰岩製34・鉄石英製71）・鉄刀１点・鉄剣２点・鉄斧５点（東京国立博物館受入れ数）が発見された事例（本村 1972）と、岡谷市天王垣外遺跡で、1907年に壺の中から玉類385点（うちヒスイ製勾玉66・緑色凝灰岩製管玉152・鉄石英製管玉132・水晶製小玉10の計362点が現存）が出土した事例（戸沢 1973）が参考となる。

天王垣外遺跡では壺の胴部下半が現存し、外面赤彩と下膨れの器形から栗林式土器とみて問題はない。光林寺裏山は出土状態が不明だが、蓋付き無頸壺は栗林式と断じてよい。しかし、鉄斧のうち袋部をもつ４点は明らかに弥生時代後期末～古墳時代中期に下る資料であり、原形が失われた鉄刀と鉄剣も同様に時期が下ると見た方がよい。光林寺裏山の鉄斧のうち板状鉄斧は戦国時代燕系鋳造鉄斧の再加工品である疑いがあるので、これも一括資料に含める。社宮司遺跡で板状鉄斧、光林寺裏山で鉄斧が伴うのは、南関東の事例を勘案すると栗林３期に下る可能性が高い。こうして、この２遺跡と社宮司遺跡が同時期・同類の埋納遺構（副葬品の可能性も排除できないものの）と考える。

さて、社宮司遺跡でもっとも注目されるのは、いうまでもなく多鈕鏡片である。朝鮮半島製の多鈕鏡は、日本列島で12例あるが、無文らしい本例以外はすべて細文鏡で、北部九州に集中し大阪府大県例が最東端であるから、本例は飛び抜けて東方の出土例となる。しかも三角形の破片を研磨して、両面と破断面を研磨し、さらに２か所を穿孔して垂飾に仕上げている。鏡面が凹面をなし、蒲鉾形の縁部内側のカーヴと鈕の位置関係から多鈕鏡であることは疑いない。これをどう解釈するかはもっとも悩ましい。三角形で２孔をもつことから銅戈形と解釈する可能性もあり得るものの、一方で、当時多鈕鏡もしくは銅鏡片と認識されていたのかを疑ってみる冷静さも保持したい。勾玉などの垂飾の範疇で考えるのである。

というのも、共伴した勾玉は弥生定形勾玉（森 1980）と呼ばれるタイプに属し、長さ4.615cm と、弥生時代中期の実例としては最大級の大きさの優品であることに注目したいのである。集成して検討したわけではないが、管見では奈良県唐古・鍵遺跡の中期後半（Ⅳ様式）の長さ4.6cmがもっとも大きい。製作地は糸魚川周辺であろうが、ヒスイ製定形勾玉の製作遺跡はいまだ確認されておらず、これほど大形の製品は出土例が乏しい。ヒスイと白銅質２種の垂飾が石製管玉とセットをなすと考えることもできる。天王垣外遺跡と光林寺裏山よりも資料数は少ないものの、この２種の垂飾の稀少性はそれを補って余りあるとみたい。

次に、多鈕鏡片が鉛同位体比測定で、朝鮮系鉛を原料とすることが判明していることも再確認したい（馬淵 1983）。これまで西日本の弥生時代青銅器では、例えば銅鐸では外縁付鈕１式までは朝鮮系鉛、それ以後は中国華北産鉛が用いられており、中期中頃以後の青銅器はもっぱら黄河中流域の鉛となる。社宮司遺跡の鏡片は朝鮮半島製だから朝鮮系鉛なのは当然とみることもできるが、じつは朝鮮半島では弥生時代中・後期並行期の朝鮮系鉛の利用状態はなお十分明らかではない。少なくとも日本列島で出土する中期後半の資料に朝鮮系鉛を用いた青銅器が稀なことからすれば、この鏡片も中期前半、下っても中期中頃には列島内にもたらされ、いずれかの地で伝世・加工されて、最終的に佐久の地にもたらされたことになる。この鏡は、はたしてどのような一生をたどったのであろうか。

いずれにせよ共伴の管玉は上越や佐渡で製作され、ヒスイ製勾玉は糸魚川周辺で製作されたものが将来されている。北陸から千曲川流域への文物の流れの中に多鈕鏡片や板状鉄斧という西方の新文物が乗る状況は、中野市柳沢遺跡の青銅器群と一脈通じるところがある。

（明治大学文学部）

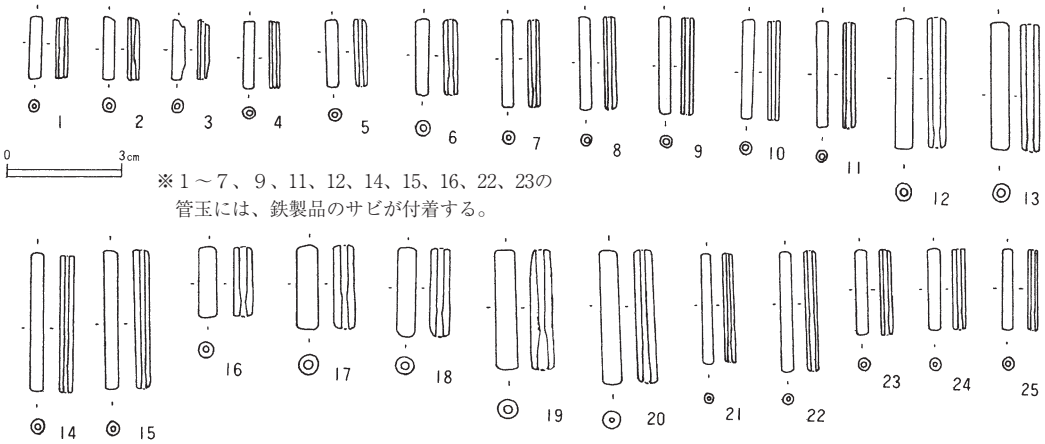
参考文献

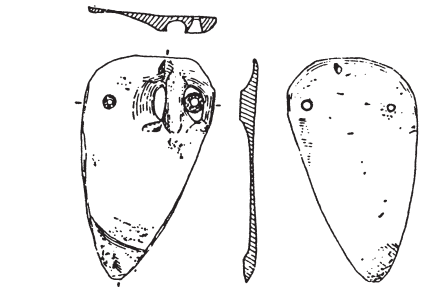
戸沢充則1973「岡谷の遺跡と遺物」『岡谷市史』上巻
馬淵久夫1983「長野県出土青銅器の鉛同位体比測定」『長野県史 考古資料編１－（四）』長野県
本村豪章1972「長野市篠ノ井光林寺裏山出土遺物の研究」『MUSEUM』254
森貞次郎1980「弥生勾玉考」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』

表１　社宮司遺跡出土　管玉計測表

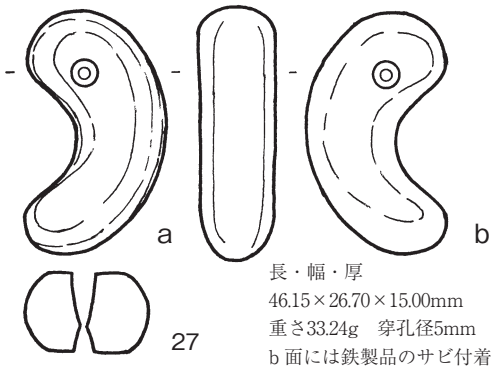
No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
長さ	12.5	13.8	12.3	13.4	13.7	16	18.2	18.9	19.9	20.3	21.7	26.4	25.6	27.8	27.9	14.3	17	18	24.6	26.9	22.1	24.6	17.3	16.5	16.4
径	2.7	2.6	2.7	2.5	2.8	2.9	2.9	2.5	2.8	2.7	2.7	3.8	4.1	2.9	3.1	4.2	4.4	4	4.6	4	2.4	2.6	2.6	2.9	2.5
重さ	0.14	0.14	0.1	0.14	0.16	0.21	0.23	0.17	0.26	0.23	0.23	0.64	0.75	0.41	0.43	0.36	0.55	0.47	0.81	0.81	0.18	0.26	0.19	0.2	0.16

1～15は鉄石英、16～25は碧玉。単位は、mm、g

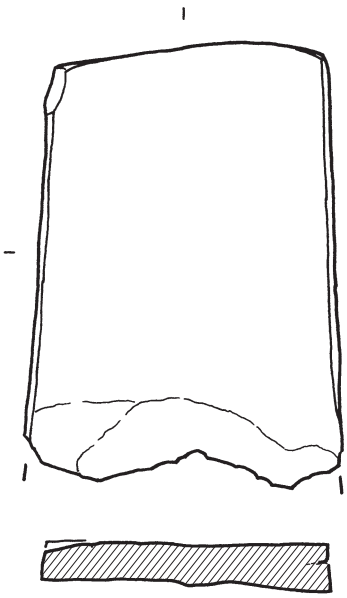


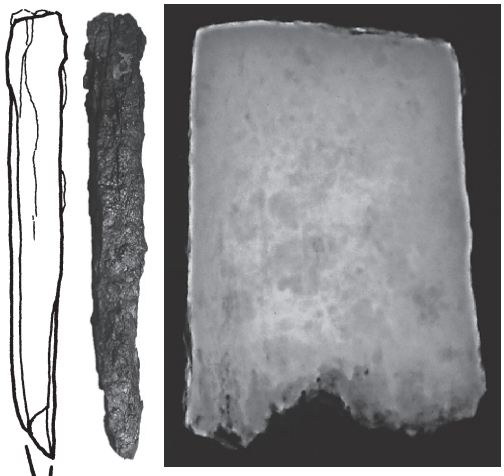


長・幅・厚（紐部）
42.3×24.0×3.0mm
重さ6.73g



長・幅・厚
46.15×26.70×15.00mm
重さ33.24g　穿孔径5mm
b 面には鉄製品のサビ付着





鉄状鉄斧、側面形から片刃と判断される。
素材やサビが板状に剥離し、鍛造品か。
86.5（長）×60.4（幅）×10.8（厚）mm　重196.0g

長・幅・厚
51.8×12.4×4.2mm
重さ8.94g
断面は、レンズ状で
なく、矩形をなす。
板状に剥離される。

図１　社宮司遺跡出土遺物（２/３）

社宮司遺跡の出土遺物

社宮司遺跡の出土遺物は、15-16頁に図示した。

内訳は、鉄石英の管玉15点、碧玉の管玉10点、多鈕鏡片1点、ヒスイの勾玉1点、板状鉄斧1点、細長状鉄製品1点、不明鉄製品1点、弥生壺形土器1点、である。

鉄石英の管玉：１～15の15点が出土した。濃い赤色で、一部は鉄器のサビが付着する玉もある（P15図１）。

碧玉の管玉：16～25の10点が出土した。緑色で、一部は鉄器のサビが付着する玉もある（P15図１）。

多鈕鏡片：詳細は本誌別項に譲るが、九州、畿内を越えた飛び地的分布が社宮司である（図３）。

勾玉：鮮やかな緑色をみせ、ヒスイのなかでも極上のもの。ｂ面には接触していた鉄器のサビが付着する。

板状鉄斧：１点（28）、側面には層理状のクラックが残り、サビも板状に剥離され、鍛造品と考えられる。側面形から片刃鉄斧であろう。

細長状鉄製品：１点（29）。先端がすぼまり始めており、両縁は平坦面をなす。板状に剥がれ、鍛造品だろうか。

鉄製品：１点（未図化）、鉄塊のようなもので、性格不明。

壺形土器：１点。上部の割れ口は、古色をみせ、発見以前の古い段階に割れていたことがうかがえる。

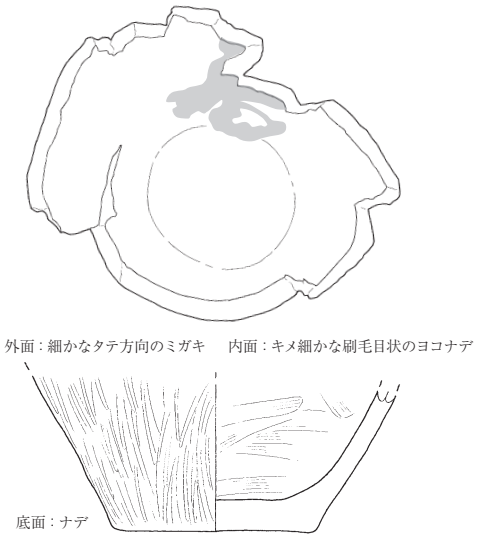


図２　社宮司の壺底部（１/３）
（アミ部は鉄サビ付着部分　底部径８cm、残存高６cm）

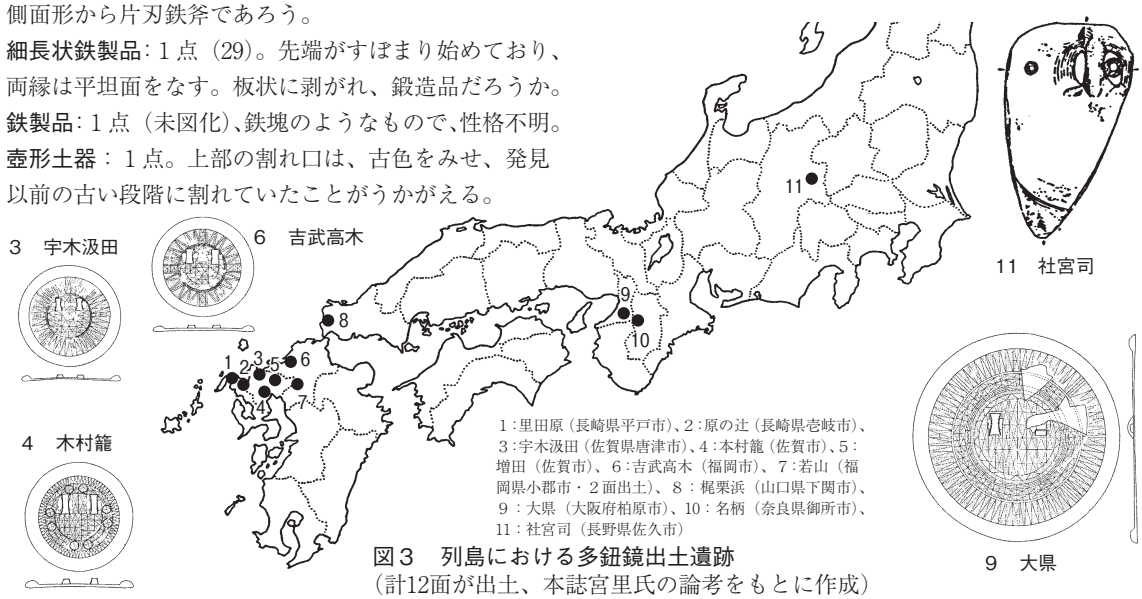


図３　列島における多鈕鏡出土遺跡
（計12面が出土、本誌宮里氏の論考をもとに作成）

♪　編集後記　♪

社宮司遺跡の遺物を発見され、永年大切に保管され、快く展示させてくださる伴野稀一郎さん、ひで子さんに、まずは敬意と御礼を申し上げたい。

佐久平で、どれだけの数と面積、そして予算がかけられ遺跡発掘が行われても、社宮司に優るような遺物は、これまで発見されていない。奇跡というほかない。

また、その重要性を認識され、地方学会の小冊子に、きわめて短時間でご寄稿下さった最先端の研究者の皆様にも厚く御礼を申し上げたい。

それにしても、なぜここに……。社宮司をめぐる謎に興味は尽きない。　（つつみ）

佐久考古通信　№108

発行所　佐　久　考　古　学　会
〒384-0091 小諸市御影新田1945-6
桜井　秀雄　方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267（32）8922

発行日　2011年７月15日
発行者　藤　沢　平　治
編集者　堤　　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク

大正９年12月26日の浅間山噴火(大森房吉博士撮影)

佐久考古通信

■ 遺跡と考古学を学ぶためのコミュニケーション誌 ■

2012.1.26　佐久考古学会

特集　佐久地方の火山・洪水災害

３.11東日本大震災から、早くも一年をむかえようとしている。

佐久考古通信では、過去、佐久地方の人びとが経験した３つの災害を特集することにした。

◆ 888年　千曲川仁和の大洪水（平安時代）
◆ 1108年　浅間山の天仁噴火（平安時代）
◆ 1783年　浅間山の天明噴火（江戸時代）

このたびの未曽有の災害が決して「対岸の火事」ではないことが理解されると思う。

★　目　　次　★

888年　千曲川　仁和の洪水……川崎　保　2
1108年　浅間山　天仁の大噴火……桜井秀雄　4
1783年　浅間山天明３年の大噴火……堤　　隆　7

特集にあたって

八ケ岳、千曲川、そして浅間。

佐久地方を代表するこれらの山河は、美しい自然景観を織りなし、豊かな自然の恵みを与え、いわば風土を形成してきた。

しかし時として過酷な試練を私たちに課してきたことも事実である。

とくに、888年千曲川仁和の大洪水、1108年浅間山の天仁噴火、1783年浅間山の天明噴火などがそれである。このような自然災害は、いったいどのような被災状況を生み出し、先人たちはそこからどう立ち直ってきたのか？

仁和の大洪水は、887年の北八ケ岳の山体崩壊が原因で千曲川が堰き止められ、その約１年後におこったものであることが、最近の年輪年代学の調査などで明らかにされつつある。

また、1108年浅間山の天仁噴火は、軽井沢―御代田そして小諸の一部に「追分火砕流」を流し、火山灰は群馬の田畑を全滅させたが、その記録文書が宮内庁所蔵の『中右記』１点のみで、ナゾの噴火といわれる。

一方、1783年天明の大噴火は、おびただしい古文書が残され、また噴火絵図なども現存して、噴火やその災害状況を詳細にたどることができる。

以下、３つの災害の爪痕をたどってみたい。

天明３年の噴火記録『天明雑変記』全３巻

浅間山の噴火口

小海付近の千曲川

1．はじめに

昨年３月11日にマグニチュード9.0の東北地方太平洋沖地震が発生、大津波と大災害が引き起こされた。

私たち考古学者は、過去の歴史から学ぶことをもっぱらとしているが、現実から学ぶことも非常多い。

これから述べる「仁和の洪水」は記録があり、遺跡にも痕跡が見つかっていたが、こうした未曽有の災害があったと筆者は実感できていなかった。記録を疑い検証するというのは、歴史学や考古学のスタートとしては、間違ってはいないが、そのため、固定観念に由来する懐疑的な態度が、研究の進展を妨げた面があったかもしれない。いずれにせよ、私たち考古学者は、過去から学ぶとともに現代から学ばねばならない。

2．「仁和の洪水」の研究史

1989年から筆者は、長野盆地の低地に位置する長野市川田条里遺跡群や千曲市更埴条里遺跡群の調査に参加した。千曲川やその支流に接した遺跡であったため、縄文時代から近現代に至るまでの、多くの洪水によってもたらされた土砂の堆積を発掘調査で目の当たりにした。地下数mに及ぶ何層もの堆積は、繰り返し発生した洪水災害のすさまじさを、示している。

平安時代の洪水砂層をもたらしたいわゆる「仁和の洪水」もこうした千曲川の洪水災害の一つである。後述するが当時の人びとにとっては深刻な災害だったが、今日私たちが、この災害がまず考古学的そして最終的には歴史の中でいかなる意味を持っているのか、考える手がかりとなっている。

すでに遺跡における「仁和の洪水」研究は半世紀に近い歴史がある。まず簡単に研究史を触れる。考古学からの視点になるので、地質学的研究には、多くの漏れがあると思われるが、お許しいただきたい。

3．遺跡における「仁和の洪水」の研究

長野盆地の古代遺跡を洪水による砂層が広く覆っていることは、昭和40年代の更埴条里の調査によってわかった。千曲市更埴条里の学術調査は、水田地帯にみられる当時現存した条里区画が古代の条里といかなる関係にあるかを明らかにすることを主目的としていた（現在の千曲市の方形区画は圃場整備後の区画であるので、昭和40年代の条里区画は残っていない）。現水田地層の下位を発掘すると古代の水田面とそれを覆う砂層が検出された。

現水田の下に、古代の水田跡が砂に埋もれて残っており、条里区画の研究上非常に大きな意味を持っていた。そして、埋没条里の下限の年代がわかることからこの古代条里区画を埋めた砂が、いつ頃のものか関心がもたれた。砂層におおわれた古代水田跡からは平安時代の土器が出土していたことから、同報告書では、すでにこの砂層は『日本三代実録』、『扶桑略記』や『類聚三代格』などにみられる仁和年間の洪水の痕跡ではないかと指摘されている（『地下に発見された更埴市条里遺構の研究』）。

しかし、砂層の年代決定の根拠とされた出土土器の年代は、当時は灰釉陶器の編年観から、10世紀とされ、古代の水田跡は10世紀以降に砂に覆われたと考えられ、文献でいう仁和の洪水を仁和３年（887）あるいは仁和４年（888）のいずれかにしても、記録と合致しない。平安時代の水田跡を覆う砂層が、「仁和の洪水」によるものかどうかを考古学者は疑問とした。

昭和50年代以降の発掘調査で、この砂層が更埴条里だけでなく、長野盆地一帯にこの砂層が広がることも判明し、未曽有の洪水によるものと推定された。古代の土器編年の年代の基準となっていた灰釉陶器の編年が、年代的に遡ることが明らかになり、「仁和の洪水」を原因とする砂が堆積したとしても年代的には矛盾しなくなった。

こうした中、地質学の立場から河内晋平が、「仁和の洪水」の原因を水蒸気爆発による八ヶ岳の大崩壊であると指摘し、遺跡の在り方や地名などを根拠に菊池清人も、八ヶ岳の崩壊と仁和の洪水の実在を論じた。

これらの記事を、地震や洪水などの災害を歴史叙述上の潤色とし、「仁和の洪水」自体の実在を疑う考え方も依然存在したが、砂層の年代はより仁和年間に洪水があったことをうかがわせる状況になっていく。

仁和年間の洪水の存否から文献上の年代の齟齬について、研究が進展した。河内は、仁和３年（887）と仁和４年（888）の文献の年代の齟齬について、後者の年代を記す『類聚三代格』や『日本紀略』の方が、信憑性の高い文献であり、前者の年代を記す『扶桑略記』は錯誤も多く、仁和３年の南海沖地震と翌年の信濃国の「大山頽崩、巨河溢流、六郡城廬拂地漂流」（大山を八ケ岳、巨河を千曲川、六郡を千曲川流域の信濃

「仁和の洪水」で埋まった砂原遺跡

大月川岩屑なだれ中の埋れ木と光谷拓実の調査

国の郡、佐久、小県、更級、埴科、水内、高井とする）を一連のものとして混同しているとする。

その後も、この砂層の年代を考古学的により細かく限定できるような研究も進んでいく。

西山克己は、長野市篠ノ井遺跡群では洪水砂が覆っていた竪穴住居跡ＳＢ7053から出土した灰釉陶器の椀は光ヶ丘型式（窯式）ないし黒笹90型式であり、それぞれ９世紀後半の年代であり、同様に竪穴住居跡ＳＢ7404からは皇朝十二銭の一つ永和昌寳（835年初鋳）が出土していることから、この洪水砂が仁和年間のものであったとして矛盾しないとする。

鳥羽英継も、千曲市屋代遺跡群や更埴条里遺跡の調査においても、洪水砂が覆う竪穴住居跡ＳＢ9043や第一水田面などから光ヶ丘１号窯式や篠崗４号窯式の灰釉陶器が出土しており、これらの窯式の年代を９世紀第４半期（875～900）に位置付けた。

同じ長野盆地の長野市石川条里遺跡だけでなく、千曲川上流の佐久盆地に位置する佐久市砂原遺跡でも同様の所見は得られている。

砂原遺跡の、砂層におおわれた水田や畑、住居跡の出土遺物の年代はほぼ同じである上に、水田面の状況が田植えの前の耕起作業の段階を示しており、長野盆地と佐久盆地が別の時期の洪水によるのではなく、一連の洪水によるものであることを補強する。平安時代の洪水が長野盆地だけの局地的な現象ではなく、文献に見られるような広域の、六郡（千曲川流域の高井、水内、更級、埴科、小県、佐久が比定される）を襲った可能性が高いことが、調査を行った堤隆や宇賀神誠司によって指摘されている。

ただ、考古学の土器編年などによる相対年代では、ある特定の「一年」を断ずることは非常に難しい。その中で、年輪年代学による年代測定は、木の年輪の成長のパターンから年代を測定するという原理のため、どんな樹種でも可能なわけではなく、年輪年代の標準パターンが作成できるヒノキなどの樹種であることや樹皮そのものやその付近が残っているなどの条件はあるが、木が埋没する年代を特定することが可能である。

しかし、長野盆地の洪水砂の下の遺跡群では木自体は出土するが、大木でかつヒノキなどの年輪年代学の測定対象となるような樹種を遺跡の発掘調査で得ることがなかなかできなかった。

そこで筆者らは、「仁和の洪水」の原因となった可能性が高い大月川岩屑なだれの研究を進めている河内晋平に、大月川岩屑なだれの中に、ヒノキなどの木である程度の大きさがあって、年輪年代の対象となるようなものがある可能性について問い合わせたところ、河内から、かつて放射性炭素14で年代測定を行った際の試料の樹種がヒノキであり、「埋もれ木」としてヒ

ノキが大月川岩屑なだれの中に出てくることが知られていることを教示いただいた。

河内も筆者らの研究に関心を持たれ、年輪年代学の光谷拓実に連絡をとり、共同で年輪年代を測定できるヒノキを探す調査が1998年に始まった。

ヒノキの埋もれ木自体はすぐに得られたが、年輪年代の測定に耐えうる、標準パターンに対照可能なものはなかなか得ることができなかった。しかし、河内の尽力により採取された十数点目の試料により887年秋口であるという成果が出た。

年輪年代の測定結果は新たなる課題を提示した。『扶桑略記』の887年と『類聚三代格』や『日本紀略』の888年の年代の齟齬である。一般的に『扶桑略記』は皇円が編纂した私撰の史書であり、『六国史』には見られない異伝も載せることから注目されるが、誤謬も多いといわれる。

この点は、年輪年代で大月川岩屑なだれの形成年代が明らかになる前にも、『扶桑略記』の日付の７月30日（太陽暦であるユリウス暦に換算すると８月22日）と洪水砂に覆われた遺跡の状況が合致しないことが市川隆之や臼居直之らによって指摘され。『扶桑略記』の信憑性に疑問が呈されていた。

洪水砂の下から出てくる水田跡では、牛馬耕の痕跡（馬鍬などを引いた跡）、人間や牛の足跡、田起こしをしたと思われる土塊などが検出されていた。つまり、洪水砂が水田を襲ったのは、水田面がまだ柔らかい状況であり、仮に平安時代の農事暦が近世以降と大差ないとすれば、８月の段階で水田が、人間や牛の足跡がついたり、耕作痕が残ったりするような状況とは考えにくく、むしろ、『類聚三代格』や『日本紀略』が記録する５月８日（ユリウス暦６月20日）であれば、整合的である。

この点については、887年に八ヶ岳が崩壊し、千曲川を小海付近でせき止め（後述する井上が指摘する「天然ダム」）、翌888年にそれが崩壊し、千曲川流域を洪水が襲った可能性も考えたが、弘化４年（1847）の善光寺大地震の際に、岩倉山が犀川を閉塞し、19日後に決壊したという事例があり、千曲川が上流とは言え、小海付近ではかなりの水量が予想され、河道閉塞がおこっても、それが約300日も堪えうるとは思えず、かといって文献の年代の齟齬をうまく説明できるようなモデルも提示できなかった。

４．研究の新展開　その１ ―天然ダム説

その後も、仁和の洪水に相当する平安時代の遺跡を覆う砂層の類例がいくつも検出、報告された。さらに、災害が地域社会に与えた歴史的意義についての研究の中で長野盆地を事例としても、寺内隆夫によって仁和の洪水が取り上げられた。

こうした中、2009年に井上公夫より、大月川岩屑なだれが千曲川の河道を閉塞し、いわゆる天然ダムを形成し、約300日後に決壊して、大洪水を発生させたという説明が筆者になされた。弘化４年の犀川の河道閉塞では、約20日しか持たなかったが、千曲川上流とはいえ、大月川と千曲川の合流地点である小海町付近でもかなりの水量があり、約300日も河道閉塞（天然ダム）が堪えうるのかということについては、岩倉山は凝灰岩（火山灰が固まった軟質の岩）であるが、八ヶ岳は凝灰岩よりずっと硬い火山岩である。河道閉塞の期間は、せき止めているものの量や硬さなどに左右されるので、一概に一年近くもの間、河道閉塞が必ずしも起きないとは言えないとのことであった。

もし、約300日も千曲川の河道を閉塞されるようなことが可能であるならば、文献の年代の齟齬と考えていたものが、齟齬ではなく、『扶桑略記』は887年の八ヶ岳の崩壊を記録し、『類聚三代格』や『日本紀略』は888年の千曲川の大洪水を記録したものであると理解できる。

井上らは、さらに仁和の洪水砂で埋もれた遺跡があれば、その土層断面から試料を採取し、粒径分析を行い、千曲市教育委員会が調査している屋代遺跡群地之目地点（しなの鉄道屋代高校駅前）で試料を採取することができた。この屋代遺跡群地の目地点および河道閉塞が起こった地点よりさらに上流の南牧村海の口地点でも試料が採取され、町田尚久によって堆積砂の分析が行われた。その結果、粒度組成のパターンより、千曲市屋代遺跡群の砂層はかなり大規模な洪水があったあと、一時沈静化を経て、小洪水が繰り返すというイベントが比較的短時間に発生したことが推測され、一方、南牧村海ノ口地点の堆積物は、中央粒径10ミクロンという分級のよいシルトを主体としていて、断面観察の結果を合わせて、湖成層であることが判明した。

こうした分析成果や地形の分析なども踏まえ、井上は以下のようなモデルを提示した。887年７月30日（ユリウス暦、仁和３年８月22日）「五畿七道の地震」（南海―東海地震）で北八ヶ岳の火山体が激しくゆすられ、大規模な山体崩落が発生した。大量の崩壊物は、大月川「岩屑なだれ」となって流れ下り、千曲川との合流地点である現在のＪＲ松原湖付近で河道を閉塞し、天然ダムを形成した（井上はこの時の湖を「千曲湖１」とする。湛水高130m、湛水量5.8億㎥と推定。）。その後、約300日、この天然ダムは河道を閉塞していたが、翌仁和４年５月８日に決壊し、大洪水を引き起こし、千曲川流域の信濃国六郡に多大な被害をもたらした。この河道の決壊は数回にわたって発生したが、今度は相木川を堰き止め戦国時代ぐらいまで残った「相木湖」

山体が崩壊した北八ケ岳（天狗岳と稲子岳）とそれによってできた松原湖

（推定湛水高30m、湛水量660万㎥）となり、また千曲湖１もすべてがなくなったのではなく、その後約130年後、平安時代後期まで「千曲湖２」（推定湛水高50m、湛水量4100万㎥）として残ったとする。

井上説により、文献の齟齬と思われていたものが、そうではなく、一連のものであるが違う現象を記録していたものであったことがわかってきた。

遺跡の調査結果による水田面の状況も、887年７月30日に八ヶ岳が山体崩落し、千曲川を堰き止め、天然ダムを形成した。さらに888年８月22日に天然ダムが決壊し、いわゆる仁和の洪水と呼ばれる大洪水を引き起こし、佐久盆地や長野盆地の遺跡を砂層が埋めることになったとするとうまく説明できる。今や仁和の洪水の存否や年代の問題だけでなく、その発生原因とプロセスの解明へと研究が進んだのである。

天然ダムの形成と崩壊は井上ら地質学者にとっては想定の範囲内だったが、筆者にとっては、中越地震や中国の四川大地震での実例によって説明されて、はじめて実感できたのである。

５．研究の新展開　その２

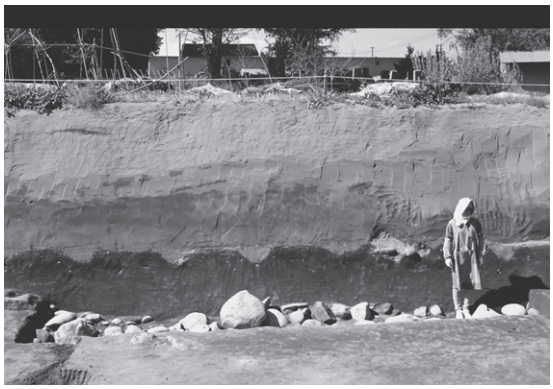
井上の説が提示され、八ヶ岳の崩壊と千曲川の洪水が一連のものである可能性がでてきたわけであるが、問題は887年７月30日の五畿七道大地震（南海道沖の巨大地震）がいかに巨大であっても、それ自体で八ヶ岳を崩壊させるようなことを筆者は考えにくかった。

しかし、３月11日の東北地方太平洋沖地震において、長野県でも大きな揺れを感じたが、直接的な被害はほとんどなかったものの、翌12日に発生した長野県北部と新潟県境付近を震源とする「長野県北部地震」では、栄村で大規模な土砂崩れが発生している。東北地方太平洋沖地震と長野県北部地震の連動のメカニズムは十分解明されていないが、もし平安時代にこうしたことが起こっていたら、連動しているものととらえられておかしくないだろう。『日本三代実録』や『扶桑略記』の記録は、当時の人たちのとらえ方を示しているのではないか。

こうした巨大地震の際には、連動するかのように見える地震があり、その結果八ヶ岳が崩壊するようなことも十分考えるべきだろう。

６．今後の課題 ―まとめにかえて

仁和の洪水の存在やプロセスは解明されつつあるが、まだ様ざまな課題が残っている。



砂原遺跡の洪水砂層　（同報告書より）

ア　大月川岩屑なだれの発生原因

大月川岩屑なだれの原因は、八ヶ岳の水蒸気爆発なのか、井上らが指摘するような南海地震（仁和地震）によるものなのか。地質学などの研究の進展も待たれる。西山の研究に見られるように、遺跡でも地震の痕跡をとらえることは可能な場合があり、今後八ヶ岳に地理的に近い遺跡の調査でも研究の進展が期待される。

イ　千曲湖２、相木湖の存在とその決壊時期について

相木湖ついては、『武藤Ａ絵図』などに記載があるとのことである。しかし、いずれにせよ、これらに関する考古学的な証拠が遺跡に認められるのか。

小海、海の口、海尻といった海（湖）に関する直接的な地名のほかに湊神社（南牧村）といったものの歴史的分析から新たな局面が見いだせるかもしれない。

『長野県市町村誌』の海尻村の項に『扶桑略記』の仁和３年７月30日の記事を載せるとともに『今昔物語』『梅花無尽蔵』に「寛弘八年（1011）辛亥八月三日に信濃国湖やぶれて、千曲川溢流す」とあるとする。菊池や『南佐久郡誌』なども引用するところであるが、記事の原典を確かめたい。事実とすれば、133年後に天然ダムが再崩壊したことになる。

ウ　佐久盆地、長野盆地南部以外の状況

『扶桑略記』などの記述が正しければ、六郡で被害があったということなので、佐久盆地や長野盆地南部以外でも痕跡があるはずである。上田盆地などでも仁和の洪水砂層はがないのだろうか。

エ　大月川岩屑なだれの以外の河道閉塞の地点

井上説によれば、千曲湖１の天然ダム崩壊後、崩壊した岩屑で新たに相木川が閉塞され、相木湖の形成につながったという。千曲川には上田市岩鼻付近など河道閉塞を起こしそうな箇所がいくつかあり、二次的な河道閉塞がおこらなかったか、さらに遺跡の形成にどのような影響を与えたかを解明すべきであろう。

オ　仁和年間以外の八ヶ岳山体崩壊と河道閉塞

大月川上流のカルデラは10億㎥で、仁和三年の大月川岩屑なだれの堆積物の総量は3.5億㎥と想定されている。八ヶ岳の山体崩落は一度だけでなく、数度に及んだ可能性があるという。つまり、仁和年間におこった八ヶ岳の山体崩落、千曲川の河道閉塞、天然ダム形成と崩壊、大洪水といったことが他にもあった可能性がある。

具体的な証拠はまだないが、長野県内には、天然ダムの形成と崩壊、洪水を思わせる多くの伝承が残っている。仁和の洪水のこととも考えられなくもないが、他の時期の似たような千曲川の河道閉塞や洪水を伝えているかもしれない。

カ　災害の政治、社会、文化への影響

屋代遺跡群をはじめとする長野盆地の古代遺跡の調査において、仁和の洪水層の上下で遺跡の様相は大きく変わる。しかし、これはなにも洪水砂層が検出された遺跡や地域の問題だけではない。これらをすべて洪水に起因するものとしてよいかは別であるが、たとえば、日用の食器は還元炎焼成の青黒い焼物（須恵器）から酸化炎焼成の赤茶けた焼物（土師器）に変わる。10世紀に下る瓦窯跡は、きわめて少なく。補修用と思われるもの以外はほとんど知られていないので、瓦の生産やそれを用いた建物の造営は行われなくなっている。奈良時代と平安時代の違いより仁和の洪水があった９世紀後半のそれ以前と以後の差の方が大きい。

政治、社会、文化の変化と災害についての関係は、たえず考えていく必要があるだろう。

限られた紙幅で、意を尽くせない部分もあるが、仮に仁和の地震と洪水が連動していたとすれば、これは千曲川流域や信濃国だけでなく、日本列島における時代の画期となった可能性もある。

例えば、『六国史』（『日本書紀』に始まる官撰の六つの史書）にが仁和３年（887）で終わっていることなども、災害が引き起こした政治、社会、文化の変化との関わりの中でとらえられないであろうか。

いずれにせよ、歴史的災害を単なる年代の指標として捉えるだけでなく、政治、社会、文化との関わりの中で位置づけることこそ、最大の残された課題であると思う。

論文、報告の出典は省略した。下記文献の出典一覧を参照されたい。

井上公夫・川崎保・町田尚久（2010）「八ヶ岳大月川岩屑なだれ－887年の大規模山体崩壊と天然ダム決壊の痕跡」『地理』55巻５号

川崎保（2010）「仁和三年（887）の八ヶ岳崩壊と仁和四年（888）の千曲川洪水」『佐久』60号

井上公夫（2011）「2002年以後に判明した主な天然ダム災害」『日本の天然ダムと対応策』古今書院

天仁噴火の焼け石

1．はじめに

浅間山は数万年以上前に誕生し、黒斑山・仏岩・前掛山の３つの火山の集合からなる。

千曲川右岸の佐久平北部の平坦部の地形は浅間山の噴火によって形成されたといっても過言ではない。佐久市塚原周辺にみられる「流れ山」と呼ばれる残丘は、黒斑山の約23000年前の噴火により発生した塚原土石なだれによるものである。また田切り地形と呼ばれる箱形に切り立ったこの地域独特の地形は噴火により堆積した浅間第１軽石流（約13000年前）、浅間第２軽石流（約11000年前）が浸食されて形成されたものである。

その後も活発な噴火は続いているが、過去2000年間で最大の噴火が、ここでとりあげる「天仁の大噴火」である。

2．浅間山、過去2000年間で最大の噴火

平安時代の末期、天仁元年の７月21日、浅間山が大噴火を起こした。「天仁の大噴火」である。現在の暦では1108年の９月５日にあたる日のことであった。この大噴火について、後の右大臣・藤原宗忠は自らの日記に記した。『中右記』の９月５日の条には以下の記述がある。

左中弁長忠、陣頭において談じて云く、「近日、上野国司解状を進めて云く、『国の中に高山あり、麻間峯と称す。而るに、治暦間より峯の中に細煙を出来す。その後微々なり。今年七月二十一日より猛火山嶺を焼き、その煙天に属し、砂礫国に満つ。煨燼庭に積り、国内の田畠これより已に以って滅亡す。一国の災い此の如き事あらず。』」稀有の怪により記し置くところなり。

（現代語訳）

左中弁藤原長忠が、陣頭において話したことには、「近日、上野国司が解状を進上してきて云うには、『国内に麻間峯という高山があり、治暦年間（1064～69）から細煙が立ちのぼっていたが、その後わずかなものとなっていた。ところが、今年七月二十一日より爆発し、猛火は山嶺を焼き、その噴煙は天にも届かんばかりで、砂礫が国中に降り注いだ。それは、国庁の庭にも積もる有り様で、国内の田畠は既に壊滅し、一国の災害としてはいまだこのようなことは経験したことがない、というものであった。』」そこで、宗忠は、「稀有の怪」ということで記録にとどめたのである（註１）。

これが天仁の大噴火を記した唯一の文献史料である。「その煙天に属し」とあることから、天明の大噴火と同じく、噴煙柱が成層圏に達するほどのプリニ―式噴火であると推測される。そして群馬県方面には相当量の火山噴出物（火山灰や軽石など）が降り積もり、「国内の田畠これより已に以って滅亡す」状態であったことも知られる。まさに「一国の災い此の如き事あらず」という表現が如実に示すような大惨状を引き起こしたのである。

群馬県では浅間山を起源とする火山噴出物の降下軽石が４層確認されており、浅間Ａ～Ｄ軽石層（テフラ）と名づけられている。このうち浅間Ｂ軽石の時期は、かつては天永３年（1112）や弘安４年（1281）説も唱えられていたが、現在ではこの天仁の大噴火によるものとする見解でほぼ一致をみているのである（註２）。

噴火は、以下の経過をたどった。治暦年間（1064～1069年）には浅間山からは細い噴煙があがっていたが、その後は小康状態に落ち着いていたことは『中右記』に記されている。そして、天仁元年（1108）７月21日に大噴火が起きたのである（註３）。噴火によりまず、火山噴出物である軽石（浅間Ｂ軽石）が降下した。つづいて火砕流が、次には溶岩流が流出するに至った。なお、その後も数年以上にわたって、小規模の噴火が続いていたようである。

中央政府に噴火の惨状が報告されたのは９月５日のことである。上野国司による被害報告が、現在の閣議にあたる「陣頭」に出されたのである。つまり被災から１ヶ月半ほどがたって、ようやく報告がなされたわけである。『和名類聚抄』によれば上野国の国府から平安京までの行程は上り29日とある。これは租税を納める際のものであるから下りは14日と短い。駅馬であれば、一日に10駅・約164km以上は進み、九州の太宰府から平安京まで７～８日、東北の多賀城～平安京までは８～13日の日数であったといわれる。この駅馬を使えば数日で都まで到着できたと思われるから、これだけ日数がかかったということは、どれだけ上野国が混乱していたのかを示しているのかもしれない。

3．佐久の被害状況

『中右記』には佐久の被害状況は記されていないが、大地にはその深い爪痕が刻まれている。

佐久の浅間山麓には灼熱の火砕流が襲いかかった

（註４）。「追分火砕流」と呼ばれるもので、御代田町東部から軽井沢町追分あたりまでを飲み込んだ。その一部は小諸市と御代田町の境にある蛇堀川にも流れ下った。この時発生した火砕流は面積約80平方キロメートル、体積６億立方メートルに及び、これは噴出量では天明の大噴火の２倍、記憶に新しい雲仙普賢岳の３倍にもあたるものであった。現在でも平均的な厚さは約８ｍにも及ぶ。火砕流は数百度以上の高温で時速約100㎞というスピードで流れ下ることもあるという。現在、「浅間の焼け石」と呼ばれ、石垣や庭石に使われるのはこの追分火砕流の中の火山岩である。

また、追分火砕流の東側には浅間Ｂ軽石が降下した。軽井沢町峰の茶屋付近では約３ｍ、御代田町楓ヶ丘では約10ｍの堆積をみることができる。

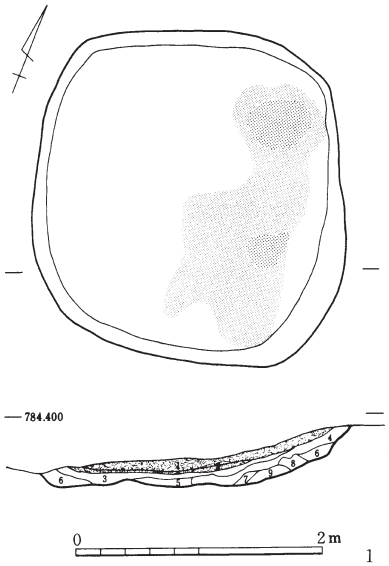
４．遺跡に残された噴火の痕跡

（１）群馬県での事例

浅間Ｂ軽石に覆われた水田遺跡の調査は昭和48年に行われた高崎市の下小鳥遺跡を端緒とし、現在までには平野部全域に及び、80遺跡を超えるという。なかでも前橋市・高崎市近辺では20㎝以上の堆積が確認されている（註５）。この地域は上野国府域に比定されており、『中右記』の「砂礫国に満つ。煨燼庭に積り」という記述と合致する。

（２）佐久での事例

さて、一方の佐久地方では天仁の大噴火の痕跡を知ることができる遺跡は現在のところ、以下の３遺跡のみである。それは佐久地方での被害は浅間Ｂ軽石の降下よりも、火砕流によるものが主体であったことに起因するのである。



御代田町　池尻遺跡　第１号竪穴住居跡
（トーンが追分火砕流堆積物））

①池尻遺跡（御代田町児玉）

新幹線建設に先立ち平成６年に発掘調査が行われた。遺跡は約30～160㎝の追分火砕流に覆われていた。その火砕流の下から、平安時代（11世紀末～12世紀初頭）の竪穴住居跡が発見された。住居が廃絶されてからしばらくたった時点の埋没途中で火砕流に襲われたものと考えられる。追分火砕流の末端部にあたり、火砕流の浸食等の影響が極めて少ない場所であったことが調査においては幸いしたといえる事例である（註６）。

②西駒込遺跡（御代田町塩野）

浅間サンライン建設に先立ち平成３年に発掘調査が行われた。標高約900ｍをはかる浅間山南麓に位置する。約１ｍの追分火砕流が堆積していたが、その下には火砕流に覆われる以前の表土である黒ボク土があり、さらにその下層から縄文時代中期後葉の竪穴住居跡が検出された。竪穴住居跡の覆土に直接火砕流が堆積したものではないが、追分火砕流がそれ以前の土層を削ることなくそのままパックしていたことが判明した稀少な事例である（註７）。

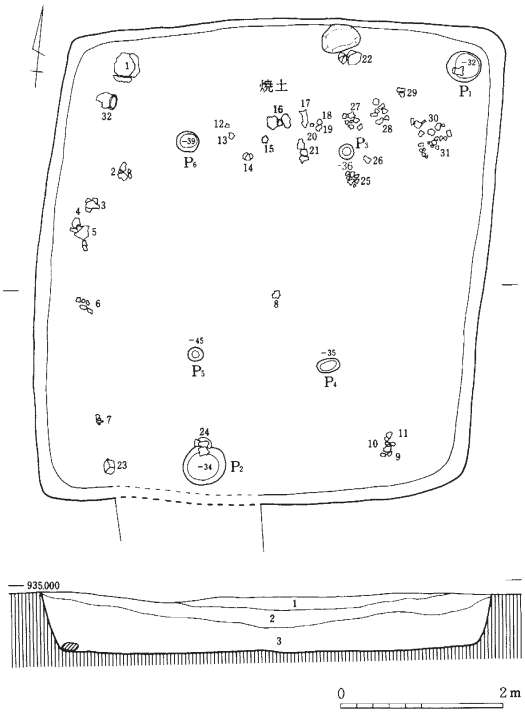
この２遺跡のように、追分火砕流下に古代以前の遺跡が残っている事例は少なくないと思われる。

御代田町　西駒込遺跡
（黒ボク土の上に追分火砕流が堆積している）

③県遺跡（軽井沢町鳥井原）

国道18号線バイパス及び新幹線の建設に伴い２度の発掘調査が行われ、検出された計３軒の住居跡の覆土中に浅間Ｂテフラが堆積していることが確認できた遺跡である。この古墳時代初頭の竪穴住居跡の覆土中位に約20㎝の浅間Ｂ軽石が堆積していたが、このことは住居跡が廃絶されて数百年たっても埋まりきっていないところに天仁の大噴火が起こり、浅間Ｂ軽石が降下したことを示す。平成５年に実施した調査は私が担当したが、当初は古墳時代前期に比定される浅間Ｃテフラではないかとも考えていたため、浅間Ｂテフラであるとの分析結果が届いた時は正直驚いた。浅間Ｂ軽石の存在とともに、人為的に埋めない限りは、住居跡が

完全に埋没するには相当長い年月がかかることを痛感した。県内では他に例を見ない軽石層に覆われた遺跡を調査できたのは得難い体験であり、その情景は今も鮮明に思い出される。（註８）。



軽井沢町　県遺跡　1号竪穴住居跡
（2層が浅間Ｂ軽石層

５．大噴火の影響、そして復興へ

政府は上野国司の上申書を受けた９月５日の午後、「軒廊御卜」という国家的な吉祥判断の占いを行った。これにより凶兆となりうる「怪異」と認定された場合は改元などでその凶事を予防するものだが、この場合には改元には至らなかった。おそらく８月に天仁へ改元して間もなかったからであろうが、この占いの対象になるほど注目される事件であったことがうかがえる。なお、これ以外に政府が行った施策は記録には残っていない。

隣の群馬県では、これ以降、荘園の設立ラッシュとなる。この噴火による荒廃地の再開発を通じた動きによるものであるといわれている。水田の復興も当然行われたが、現在は畠地である場所でもその地下には浅間Ｂ軽石に覆われた水田が存在している事例が発掘調査によりいくつも明らかとされたように、水田としては再開発できずに畠地となったものも少なくなかったようである。中世史家の峰岸純夫氏は現在の群馬県における畑作中心の農業にはこうした背景があるのではないかと述べ、上州でうどんが有名なのも、天仁の大噴火が大きく影響しているとも指摘する（註９）。

佐久ではどうであったか。追分火砕流が襲った地域は、東山道の有力比定ルートであり、長倉駅、長倉牧、塩野牧の有力比定地も含まれる。平均約８ｍにも及ぶその堆積を前にしては、これらの機能は停止せざるをえず、東山道は追分火砕流を避けて迂回し、長倉駅も移転することを余儀なくされたであろう。長倉牧と塩野牧もこの被災地では使用不可能となったはずであり、牧経営の見直しを迫られたにちがいない。ムラは壊滅状態となり、犠牲者は相当数にのぼったであろうが、その実情は火砕流の下に埋もれてしまっているのである。あまりにすさまじい追分火砕流の被害であったため、降下軽石で覆われた水田遺跡が多数検出されている群馬県とは異なり、その具体的な被害状況や復旧の痕跡を探ることは難しい。しかしながら佐久地方でも政治・行政的に大きな変革が迫られ、しいては人々の意識や社会のありかたまで変える時代の大きな画期になったことは間違いないであろう。

11世紀後半には白河上皇による院政が開始されており、時代は古代社会から中世社会へと大きく変わりつつあった。そうしたなかで中世社会へ転換する大きな引き金のひとつとなったのが、この天仁の大噴火であったといえるであろう。

天仁の大噴火から900年がすぎた。記録に乏しい噴火であるだけに、その実態解明において考古学が果たす役割はこれからも少なくないと考えている。浅間山と共生する我々にとって、過去の噴火を知ることは、現在そして将来の防災へのひとつの手がかりを示してくれるであろう。

註１　原文及び現代語訳は『新編　高崎市史　資料編２』から引用した。
註２　浅間Ａ軽石は天明３年（1783）の噴火、浅間Ｃ軽石は古墳時代前期（４世紀中頃）、浅間Ｄ軽石は縄文時代中期（約4500年前）に比定されている。
註３　嘉承３年は、８月３日に「天仁」に改元される。したがって大噴火が起きた７月21日は正確にはまだ嘉承３年になる。
註４　群馬県側にも嬬恋村などの浅間山北麓に火砕流が襲った。
註５　東京都の高島平でも２㎝の浅間Ｂ軽石の堆積が確認されている。
註６　長野県埋文センター1998『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書１』
註７　御代田町教委1993『西駒込・東ニッ石・湧玉遺跡』
註８　註６文献と同じ
註９　峰岸純夫1993「東国を変えた浅間天仁の噴火」『火山灰考古学』所収、古今書院

1783年
浅間山天明３年の大噴火

堤　　隆

１．天明３年の大噴火

「天明の浅間焼け」といわれる噴火は、天明３年５月９日（旧暦4/9）より始まり、３ヶ月を経て、８月５日に終わった（表）。噴火のクライマックスは真夏の８月３・４・５日（旧暦7/6・7/7・7/8）であった。

天明の噴火も天仁元年の噴火パターンと同様、爆発的な「プリニー式噴火」により軽石が火口から噴出し、「吾妻火砕流」とよばれる高温の火砕流が北麓を流れ下り、「鬼押出し溶岩流」が流れ出すというものであった。また、噴出物の一部は「鎌原土石なだれ」となって鎌原村を襲い、さらには吾妻川から利根川になだれ込んで「天明泥流」として大災害をもたらした。

鎌原を襲ったいわゆる「押出し」の実態については、地質学者によって諸説があり、「鎌原火砕流」・「鎌原火砕流／岩屑（がんせつ）流」・「鎌原岩屑なだれ」・「鎌原土石なだれ」などと認識されているが、ここではハザードマップの記載により「鎌原土石なだれ」としておく。

いずれにせよ鎌原村の発掘調査では、建造物や遺物の炭化があまりみられないことなどから「押出し」のすべてが高温ではないことがわかっている。

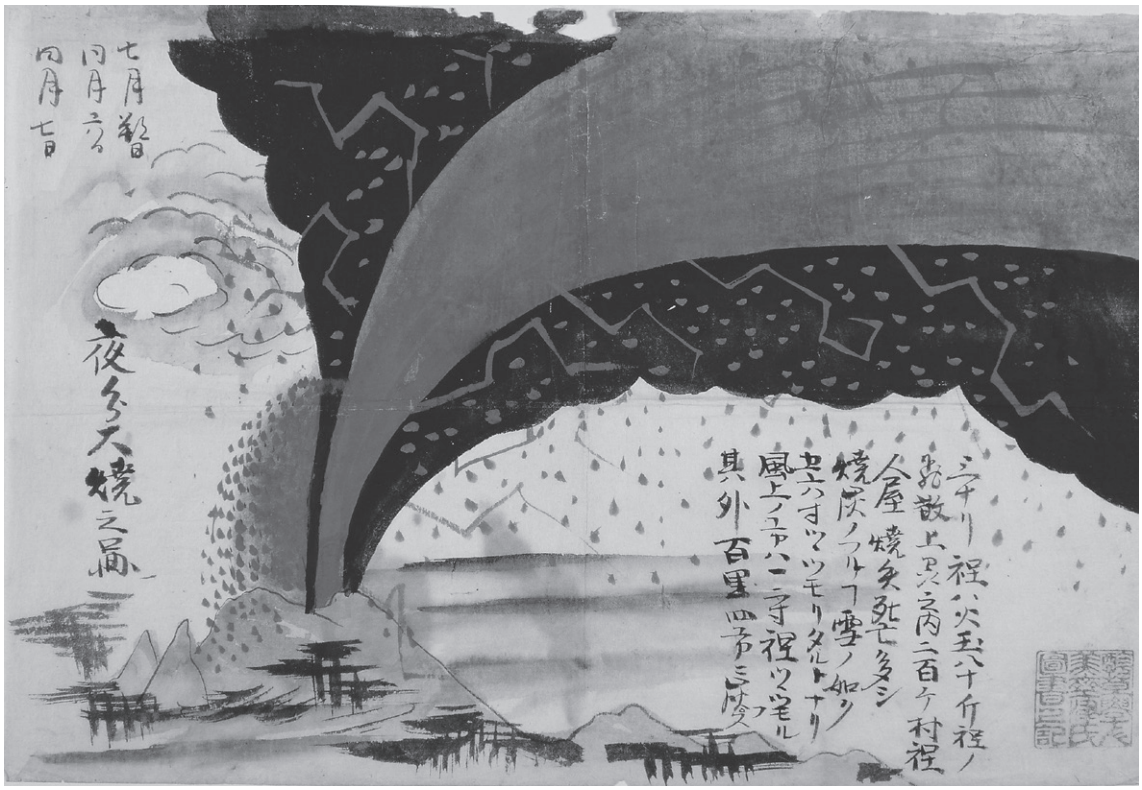
また、近年では「鎌原土石なだれ」（押出し）の原因については山頂噴火と側方噴火の二説による可能性が示されている。「鬼押出し溶岩流」と「鎌原土石なだれ」の前後関係についても、従来「鎌原土石なだれ」の後「鬼押出し溶岩流」が発生したとの見解であったが、「鬼押出し溶岩流」の末端が「鎌原土石なだれ」に変化したとの考え方もある。

２．天明噴火の被害

天明の噴火では、とくに浅間山北麓の群馬県側の被害がいちじるしかった。

鎌原村の被害

浅間山北麓、現在の吾妻郡嬬恋村鎌原にあたる鎌原村では、天明３年には100戸前後の戸数があったもものみられる。８月５日の土石なだれによって、477人が死亡（466人とする記載もある）、生存者は93名あった。両者の合計では570名の人口があったことになる。



天明３年の噴火のクライマックス「夜半の大焼け」　美斉津洋夫氏蔵

浅間山天明３年の噴火の推移

旧暦	新暦	噴火の様子
４月９日	５月９日	噴火がはじまる。噴煙が覆い、大地が鳴り響く。以後、５月25日まで噴火は沈静化をみせる
５月25日	６月24日	ふたたび噴火の開始。午前７時頃から石臼をひくような山鳴が聞こえる
５月26日	６月25日	午前10時頃から正午頃まで、大きな鳴動とともに強い爆発がある
５月27日	６月26日	午前４時頃まで６時頃まで鳴動がある
６月17日	７月16日	夜半に大きく鳴動する
６月18日	７月17日	夜半過ぎはなはだしい地響きがする
６月26日	７月25日	午前８時頃から正午頃まで鳴動するが、煙は薄い
６月27日	７月26日	午後４時頃大きな鳴動があり、煙が東にたなびく
６月28日	７月27日	午後４時頃大きな鳴動があり、煙が東南にたなびく
６月29日	７月28日	正午頃、５月26日よりさらに激しい大爆発があり、煙灰を東に吹き付ける。江戸に降灰があり、家屋戸障子が振動する
７月１日	７月29日	午後３時頃から５時頃まで激しく噴火する
７月２日	７月30日	午後２時頃から８時頃まで激しく噴火する
７月３日	７月31日	激しく噴火。軽井沢から高崎、埼玉県児玉のあたりまで火山灰が降る
７月４日	８月１日	激しく噴火。軽井沢から高崎、埼玉県児玉のあたりまで火山灰が降る
７月５日	８月２日	午後６時頃より夜半まで大焼けとなり、黒煙の中から絶えず電光が発し、前掛山へおびただしく砂石を吹きだし一円の火となる。軽井沢宿や沓掛宿では、猪・鹿・狼などの獣が山から飛び出してきて、パニックとなった。
７月６日	８月３日	朝一度は噴火がやんだが、午後２時頃から夜10時頃にかけて激しく噴火し、牙山も大小火石が雨のように降り、火は裾野にも燃えひろがる。江戸から銚子方面まで火山灰や火山毛が降る
７月７日	８月４日	午後１時頃より４時まで降砂灰がはなはだしく、埼玉県深谷のあたりでも闇夜のようになり、提灯をもたないと行き来できないようになり、震動や雷鳴が強く、戸や障子がはずれる
７月８日	８月５日	午前８時頃より11時頃まで噴火の勢いがもっともはなはだしく、江戸でも午前10時頃から正午頃まで薄暗くなる。この日午前10時過ぎに非常に大きい一大鳴響とともに焼け岩熱泥の大押し出しである泥流が発生した。大噴火の後、北側の火口から「鬼押出し」溶岩が六里ヶ原に流れ出したとされるが、その流下が最後とする見方には異論もある。

「天明雑変記」「日本噴火史」「天明の浅間焼け」「天明三年浅間山噴火史」より作成

馬は200頭のうち170頭が流死した。耕地もその９割以上を失った。

生存者は「天明の生死を分けた15段」などと言伝えられているように、石段を登りきり高台にある観音堂などに逃げ込んだり、他へ出ているものであった。「ひっしほ、わちわち」と恐ろしい音をたてて土石なだれが家屋をなぎ払った記されている。

昭和54年の発掘調査では、現在の石段の下が掘り進められ、150段とも伝えられていた石段が50段である事が確認された。そしてその下段から、石段を登りきれずあえなく土石なだれにのみ込まれ、息絶えた女性二体が生々しく発掘されたのを御存じの方も多いだろう。両名は親子とも姉妹ともみられている。

鎌原土石なだれと天明泥流の被害

鎌原土石なだれは吾妻川に流れ込んで天明泥流となり、未曾有の大惨事を巻き起こした。その被害を被った村は140ケ村、死者は約1500人、流死馬約650頭、被害家屋約2000戸とも推定されている。

８月５日、鎌原土石なだれは発生から５分後には10キロ離れた現在の万座・鹿沢口駅付近に押し寄せ、吾妻川に流れ込んで天明泥流となり、約20分後には川原湯に、約２時間後には70キロ離れた渋川市中村（中村遺跡）に、約３時間後には80キロ離れた前橋城まで到達したという。

泥流は、太平洋へと注ぐ利根川の銚子河口を真っ黒に濁らせ、河岸にはいくつもの死体が流れ着いた。

信濃国の被害

北麓に比べ死者のほとんどなかった長野県の浅間山南麓でも、軽井沢宿では降ってきた高熱の軽石により焼失した家52戸、屋根に積もった軽石の重みでつぶれた家82戸、部分的に壊れた家48軒、本陣破壊３軒の計185軒が被害を受けた。

軽井沢宿では、丈次郎という22歳の若者が、落下してきた茶釜ほどもある火石が首にあたり、あえなく即死した。山からは火に焼かれたイノシシ・クマ・シカ・オオカミなどの獣がとびだしてきた。

こうしたことがきっかけとなって人々はパニックとなり、軽石が降るなか、ふとんや戸、ナベ・カマをかぶっていちもくさんに逃げ出した。

現在の御代田でも広戸・草越・梨沢・久能・面替・

軽井沢宿の焼石降下とパニック　美斉津洋夫氏蔵

鎌原観音堂と生死をわけた15段

児玉・小田井などの住民が、身の毛もよだつ恐ろしさで夜逃げをするさまが古文書に記されている。ただ、小田井宿は軽石の降る方向からはずれていたため、軽井沢宿のような焼失はまぬがれたようである。

３．発掘された天明３年の遺跡

群馬県下では八ッ場ダムの建設にともなって、吾妻川流域の数多くの遺跡が発掘され、天明泥流によって埋没したムラが姿を現している。この調査によって、江戸期の地方での暮らしぶりが明らかになり、江戸考古学の可能性が示された。

東宮遺跡では、有力者の大型民家が発掘され、座敷や湯殿、馬屋、囲炉裏のある板の間、酒蔵と思わせる施設までが発掘されている。また、ここでは当時の繭も発見され、養蚕がさかんだった上州の暮らしの一端を垣間見せてくれる。

天明の噴火について記録された膨大な数の古文書や絵図、発掘された災害遺跡は、いわば災害を忘れず、語り継ぐための記憶装置といえる。

私たちは、200年前の江戸時代の人々からのメッセージに真摯に耳を傾け、災害に備えることが大切なのではないだろうか。

♪　編集後記　♪

「天災は忘れたころにやってくる」

こう言ったのは、科学者で随筆家の寺田虎彦である。

寺田は東京帝国大学地震研究所の創始者のひとりであり、同研究所付属の浅間火山観測所（峰の茶屋）を訪れ、浅間山を観測した。

寺田は浅間山の噴火についてこう述べている。

「あまりに怖がらなかったり、極度に怖がりすぎたりするが、正当に怖がることはなかなか難しい」

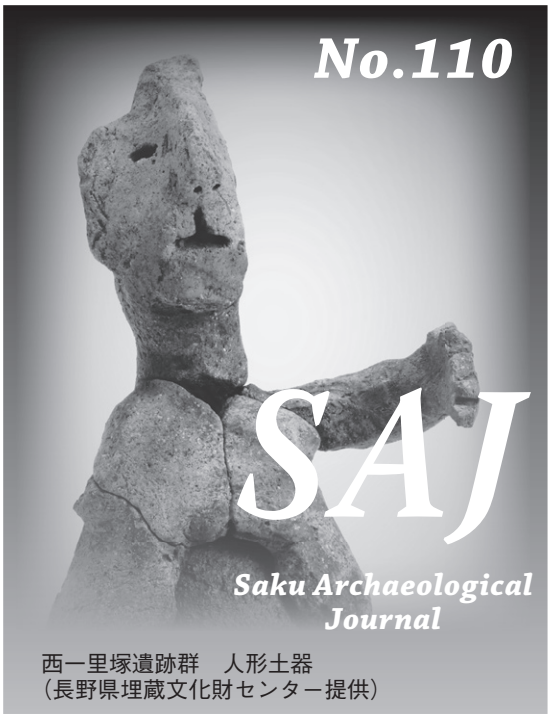
今後の災害については、風評に左右されることなく、過去の災害史に学び、冷静な判断のもとに行動を起こすことがより重要なのであろう。　（つつみ）

佐久考古通信　№109

発行所　佐　久　考　古　学　会
〒384-0091 小諸市御影新田1945-6
桜井　秀雄　方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267（32）8922

発行日　2012年１月26日
発行者　藤　沢　平　治
編集者　堤　　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク



西一里塚遺跡群　人形土器
（長野県埋蔵文化財センター提供）

佐久考古通信

■ 遺跡と考古学を学ぶためのコミュニケーション誌 ■

2012.6.17　佐久考古学会

特集　佐久の弥生顔面

弥生時代には、土偶形容器・人面付土器・顔面付土器・人形土器など、顔を含む人体表現のある造形がみられる。今回は佐久地方で発見された出土品を特集する。

★ 目　次 ★

辟邪の造形……設楽博己　2
館遺跡発見の土偶形容器……小山岳夫　4
西一本柳遺跡出土の人面付土器……冨沢一明　6
西一里塚遺跡群出土の人形土器……櫻井秀雄　8
赤彩された弥生顔面……堤　隆　11
土偶にたどれる系譜、埴輪へつながる要素……12

土偶形容器

頭部が開口し、体部は中空で脚はなく、底面が扁平な土製の立像容器である。再葬と深くかかわる蔵骨器として用いられ、弥生時代前期末から中期前半に集中してつくられたものである。

縄文時代の黥面土偶の系譜を引き、それが消滅する時期を前後した頃にあらわれてくる。全国で約40点の出土をみるが、このうち半数以上が長野県内からの出土であり、山梨県とともに分布の中心となっている。県内では本号で紹介する佐久穂町館遺跡例の他、男女とみられる２体が一対でみつかった上田市腰越の渕ノ上遺跡出土例などが著名である。

人面付土器（顔面付土器）

壷形土器の口縁部に人面が付いたものであり、人面付土器Ａ・人面付土器Ｂに分けられる。顔面付土器との呼称もある。なお顔壷と呼ばれる類型もある。人面付土器Ａは黥面付土器とも呼ばれ、壷の口縁部に沈線文で黥面（いれずみ）を表現した顔をもつものである。弥生時代中期前半からあらわれ、おおむね中期後半までには消滅する。

一方の人面付土器Ｂはこうした黥面装飾がなく、鼻筋が通るなどのより立体的な顔面表現をとるものである。人面付土器Ｂは人面付土器Ａとは異なる系譜からあらわれるようであり、時期的にも弥生時代中期後半に出現し、後期に続いていく。

人形土器

人面付土器・顔面付土器の範疇に入るものだが、西一里塚遺跡群の報告書では人面付土器Ｂのうち、腕など顔以外の人体表現をもち、より立体的な造形を呈するものを人形土器として別類型として分類している。弥生時代中期後半から後期に比定されるものが多いが、千曲市八王子山Ｂ遺跡例は古墳時代前期に比定されており、この時期まで残るようである。群馬県では人物形土器との呼称もある。

私見ではこの人形土器は、Ａ類・Ｂ類に分けられる。人形土器Ａが非異形のやさしい表情であるのに対し、人形土器Ｂは口や耳、鼻などを誇張した異形な様相を呈している。

西一里塚遺跡群№１例は、群馬県有馬遺跡例や小八木志志貝戸遺跡例などと同じく人形土器Ｂとして理解できる。また人形土器は、古墳時代の埴輪へつながるいくつかの要素を有しており、直結するものではないにしてもその原型とでもいえるのではないかと考えられる。西一里塚遺跡群№１例と埴輪との関連性については本号で設楽博己氏が論考されている。

なお、上記の遺物名称は、研究者によりその呼称やその意味するところ、定義が異なっているところがある。本号では、それぞれの執筆者が用いる名称で紹介していく。（櫻井秀雄）

辟邪の造形

東京大学大学院教授　設楽博己

このたび大部な報告書が出版された西一里塚遺跡の顔面付土器は、大変ユニークである。体部はがらんどうで容器としての機能はもっているものの、普通の壺のようにものをすぐに出し入れして使うことはできない。これとよく似た顔面付土器は、群馬県有馬遺跡や小八木志志貝戸遺跡で出土している。これらに共通するのは、顔面の表現が誇張されていることである。西一里塚遺跡の例は、口唇裂を表現している。顔面付土器といえば、再葬墓から出土する顔壺や土偶形容器が思い浮かぶが、これらの表情はイレズミの表現はあっても顔のパーツが誇張されているわけではない。この二者は同じような物体でありながら、ぜんぜん違うものではないだろうか。

有馬遺跡の顔面付土器の特徴は、額に山伏の兜巾のような突起をもち、大きな鼻と大きな耳をもつことであり、口は受け口状に表現されている。両腕は斜め上に挙げていることも特徴的だ。これと同じ特徴をもつものをあげなさいと言われれば、迷うことなく人物埴輪をあげるだろう。それも、盾持人埴輪のなかに同じような表現をとるものがある。盾持人埴輪は、いうまでもなく古墳に立てられたもので、亡き首長あるいは古墳自体を邪悪なものから守る辟邪（へきじゃ）の役目を負っていた。そのために盾をかざすとともに顔の部分を誇張しているのだ。

そんなことを言うと、一方は弥生後期で、一方は古墳中期、ぜんぜん違う時代ではないかとしかられるかもしれない。有馬遺跡の顔面付土器は墓にともなうのだから、再葬墓の顔壺などの系譜を引いたものではないか、という反論もあるだろう。ところが、再葬墓では墓の中に納めた蔵骨器として用いられているのに対して、有馬遺跡のそれは骨を納めるには頭がふさがれていて不便であり、墓の主体部からやや離れた場所にころがっていた。誇張表現を含めて、外敵から墓を守っていたと考えた方がよい。再葬墓のそれらが中期中葉で終わるのに対して、有馬や西一里塚のものは後期である。再葬墓の顔壺からまったく独自に生まれてきたとも言えないだろうが、この間に違う性格をもつように変化していたのではないだろうか。

それでは、どのような背景のもとに盾持人埴輪に近い性格をもつようになっていったのだろうか。福岡県北九州市城野遺跡で、やや下った３世紀の石棺墓が発見されたが、その壁に絵が描いてあった。壁に朱をべったり塗って、その上をヘラの先でなぞるように描いている。その絵はいろいろな意見があるが、人物を描いたものとみて間違いないだろう。それも、盾と戈を持つ人物である。そこでふたたび注目しなくてはならないのが、盾持人埴輪である。

１長野・西一里塚
（『西一里塚遺跡群』より）

２群馬・有馬
（『新弥生紀行』より）

１埼玉・前の山古墳
（『はにわ―形と心』より）

顔面付土器と盾持人埴輪

盾持人埴輪は、盾に戟という武器を表現したものがある。そして誇張した表情をとる場合が多い。頭や額には尖った帽子のようなものをかぶった表現や兜巾をつけたような表現がみられる。こうしたさまざまな特徴を漢代の画像石の人物画と比較した塩谷修さんは、盾持人埴輪は方相氏を表しているのではないか、という大変ユニークな説を発表された〔塩谷修2001「盾持人物埴輪の特質とその意義」『茨城大学考古学研究室20周年記念論文集　日本考古学の基礎研究－茨城大学人文学部考古学研究報告第４冊－』188～215頁、茨城大学人文学部考古学研究室〕。それが正しいとすれば、城野遺跡の人物も方相氏を描いた可能性が高い。

方相氏は周礼にその記述があり、漢代にもずっと存在した一種の呪い師で、墓に入って戈を振り悪霊を退散させる役割を演じる。日本では養老令に同じような記述があり、律令国家の形成にともなって中国の制度が取り入れられたことがわかる。しかし、早くも３世紀にその習俗が中国からとりいれられていたことを示すのが、城野遺跡の絵画ではなかっただろうか。石棺墓の中の被葬者の枕元の壁に描かれていたのが、根拠の一つである。

弥生時代の長野県北部地方は、いろいろな点で北部九州とつながりが強い。柳沢遺跡の中細形銅戈もそうであるし、そのほかにもつながりを示す遺物は枚挙にいとまがない。北部九州には前１世紀以来、中国の文物が流れ込んでいた。その過程でとりいれられた方相氏の習俗が長野県や群馬県域にも及び、つくられたのがこれら辟邪の人物像ではなかったか、というのが私の推論である。

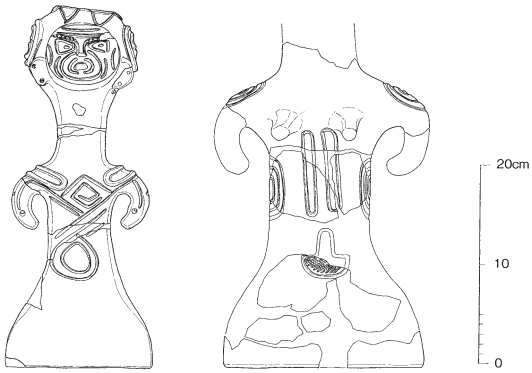
コラム１
土偶形容器にみる「男」と「女」

全国で約40点が発見されている土偶形容器のうち、上田市（旧丸子町）の渕ノ上遺跡例と山梨県岡遺跡例では２体一対での出土をみる。これらの分析から設楽博己氏は男女をつくり分けていることを明らかにした。

乳房の有無や大きさの違いが男女の大きな区別となるが、さらに設楽氏が注目したのは頭部の形である。岡遺跡例でみると大きい方は筒状の頭で、小さい方は髷状の頭である。渕ノ上遺跡例は乳房のない小さい方が筒状である。もう一方は残念ながら頭部を欠損しているが、乳房はある。こうした観察により、設楽氏は筒状の頭は男、髷状の頭は女を表現していることをつきとめたのである。これは『魏志倭人伝』にある､男は「木綿（ゆう）」という楮の皮からつくった繊維を素材にした布でターバンやバンダナのようなものを頭に巻き、女性は髷を結っていたという記述とも符合する。また、こうした男女一体の観念は縄文時代にはなかったものであったという。

さらに設楽氏は、これらの男女像の大きさの変化にも注意を向ける。前期末の渕ノ上遺跡例では女の方が大きいのに対し、それより新しい中期の岡遺跡例では男の方が大きくなり逆転する。設楽氏はここから男女の関係性の変化を読み取っていくのである。

詳しくは設楽氏の論考（設楽2007・2011　引用文献は12頁参照）を参照いただきたい。なかでも河出書房新社刊の2011文献は書店でも入手できるためお勧めである。　（櫻井秀雄）



上田市渕ノ上遺跡の土偶形容器

山梨県岡遺跡の土偶形容器

左が男像
右が女像

館遺跡発見の土偶形容器

小山岳夫

今から35年程前ということだから昭和52年前後のことであろう。草間和幸さんは佐久穂町海瀬館のリンゴ畑をエンジン付きの耕作機で溝掘りをしていたところカチンと石に当たる手ごたえを感じた。炉石の周辺からは良い遺物が出ることを知っていた和幸さんは、耕作機を降りてシャベルで周辺を探った。そしてコロッとした妙な焼き物を拾い上げた。当地域では初めてとなる「土偶形容器」発見の瞬間であった。

発見地は館遺跡と呼ばれ、佐久穂町海瀬地区に所在、大きな水田が営まれるような沖積地は少なく、弥生時代中期後半栗林期以降に大規模集落が展開される佐久盆地の千曲川沿いの平坦部からは若干山間に入り込み十国峠を経て秩父にいたる武州街道（抜井川）沿いの斜面にある。周辺の海抜は830m内外で、現在でもかなり冷涼な地域である。

土偶形容器の頭部はほぼ完存しているが、胴部～底部は破片すら残っていない。頭部の残存長は12.6cmを測る。髪の毛を縛り上げたような筒状の髪型であるため男性像の可能性が高く、魏志倭人伝の記載「男子は皆かぶりものをつけず木綿（ゆう）で頭を巻いており」を髣髴させる風体である。他遺跡では土偶形容器が男女一対でみつかることがあるが、本遺跡では同倭人伝記載の「婦人は髪を折り曲げている」を髣髴させる髷状の頭部をもつ女性像は見つかっていない。耳は左右ともに２孔ずつ穿たれている。

顔面部は頭部前面に空けた間に、仮面上に作った顔面を嵌め込む土偶形容器特有の技法によって制作されたようだが、内面観察では私の眼力不足のため、はっきりとその証拠をつかむことができなかった。また、本例は胴部以下がないため、手の表現の有無や断面の形状が確認できないが、「土偶形容器」と認定して良い資料と考えられる。

目は細い沈線でやや切れ上がったように描き、目じり側が尖っているため切れ長の目に仕上がっている。

鼻は鼻翼や鼻孔の表現はなく、鼻背は粘土紐の貼付けによって上部から鼻尖まで直線的で細く高く表現されている。所謂鼻筋の通った顔立ちである。眉毛部分は鼻の粘土紐貼付け前に同じ高さの粘土紐を貼り付けて、両側に吊り上った状態で表現している。

口は、目よりもさらに短い沈線を引いて小さめに表現している。顎の先端のくぼみは指頭で押しこんで表現している。

顔面全体に沈線によって入墨表現がなされる。両目頭下と鼻尖下に端を発する各２条の沈線が顎の両端まで口を取り囲むように弧状に描かれているほか、耳から目じり付近にかけては、口の周囲とは逆向きの弧状の沈線を２条描いている。額にも２条の弧状の沈線が描かれている。また、眉部分の粘土紐上に左右それぞれ３条の斜状の短線を刻んでいるが、他にもこういった例があることから、これも入墨の表現と見て良いだろう。

以上のような入墨表現は愛知県下橋下遺跡に祖形が求められるようであり、本例はその中でも新しい段階に位置付けられている（設楽　2007）。時期は弥生中期前半（Ⅱ～Ⅲ期）であり、中部日本の土偶形容器としては終焉に近い新しい段階である[注1]。また、この段階からその後の段階までの土偶形容器の顔面には、男女ともに入墨表現が見られる。

本例以降、長野、山梨を中心に東は福島、西は滋賀あるいは兵庫まで分布した土偶形容器は消滅していく運命にあるようだが、本誌で冨沢一明氏が記述している佐久市西一本柳遺跡の人面土器や佐久市西一里塚遺跡出土の人形土器[注2]（櫻井　2012）など中期後半栗林期に位置付けられる資料については、土偶形容器の系譜を継承している可能性があり今後検討を要する。

また、本例よりも後の時代（中期後半～後期）の長野県域の人面を表現した土器を見る限り、男女を問わず入墨表現は消失しているように見える。弥生時代後期に特徴的な黥面絵画は岡山県平野部と瀬戸内を挟んだ香川県の海岸部、愛知県と岐阜県の境目と安城市付近の濃尾平野に集中し、近畿からは一つも出ていない。長野県からも出ていない。資料を集成していない段階ではあるが、弥生中期後半以降～後期にかけて長野県から入墨の風習が消失していたとすれば、長野県の弥生社会は瀬戸内や東海地方とは異なり、近畿地方により近い習俗を有していた可能性も考えなければならなくなる。

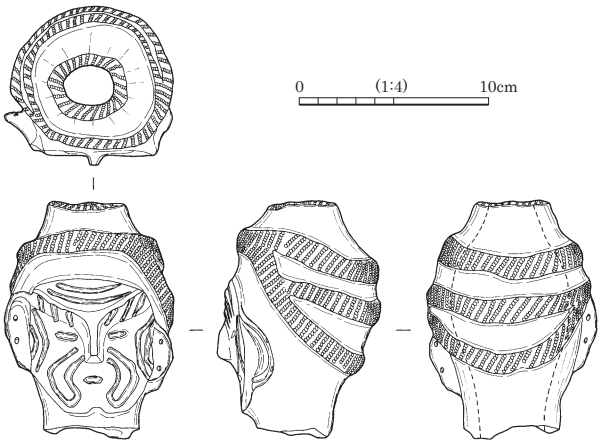
注１　設楽　2007によると土偶形容器は弥生Ⅱ期にいっせいに大方の系列が終焉を迎えるが、関東地方の埼玉県熊谷市池上遺跡や神奈川県小田原市中里遺跡などではⅢ期に新たな系列が生まれるという。

注２　報告書の107図に掲載された人形土器（本号10頁・№２例）は顔面部分を頭部の空間に嵌め込んだ土偶形容器特有の技法で制作された可能性が高く、注目される。

（引用参考文献は12頁に記載。）

所蔵：草間和幸氏　写真撮影：小川忠博　写真はほぼ実物大

館遺跡の土偶形容器



文献：『赤い土器を追う』佐久考古学会1990

館遺跡遠景

西一本柳遺跡出土の人面付土器

冨沢一明

この人面付土器は、平成３年の夏に佐久市岩村田の現在は岩村田高校第２グランドとなっている場所から発見された。今日、グランド周辺は国道141号や都市計画道路が開通し、商業施設が立ち並び活況を呈している。

しかし、これらの開発により発掘調査が行われ、遺跡周辺は弥生時代中期～後期にかけての大集落が展開していることが判明し、特に後期に至っては集落を囲む環濠が幾重にも巡っていることが最近の調査成果で明らかになっている。また中期後半には北陸の小松式土器や福島の二軒屋式土器、後期には群馬の赤井戸式土器や茨城の山王原式土器等、中部高地以外の地域の土器が集落内から発見されており、中・後期を通して他地域と活発な交流を行い、佐久平における中核的な集落であることが予想される。

発見された人面付土器は弥生中期後半に比定される竪穴住居跡の覆土中より出土した。土器の残存長さは12㎝で、首より下の欠損部分は形状より壷胴部へとつづくことが想定される。

形状は頭頂部に径３㎝の穴が作り出されている。顔の表現はまず目がくりぬきで表現され、細長い目の上には二重まぶたか或いは眉を描いたものであろうか弱い線が描かれている。鼻は額から直線的に伸び高く、鼻筋が通る。鼻の穴は表現されていない。口は目と同じく刳り貫かれているが二つの穴で作られている。また耳も片側それぞれに２個の穴があけられている。

目・口・耳を刳り貫いた工具は穴の形状より同一のものと考えられる。耳の片側２穴は多くの人面付土器に共通する表現であるが、縄文時代や古墳時代に比べ弥生時代の耳飾りの出土例は乏しく、片側２穴は装飾以外の意味もあるのだろうか。

頭部には髪の毛の表現であろうか、４本の細い粘土紐をめぐらせ、上端には刻み目を施している。頭頂部に近い１本は全周せずに後頭部で途切れている。また、左頬から下顎にかけてわずかな赤色塗彩が残存する。

西一本柳遺跡出土の人面付土器は、類例のものと比べると顔の表現が写実的で貴重である。その容貌の特徴から渡来系弥生人を表現したものとも考えられている。黒く深いその眼差しに思わず「はっ」と息を呑むような表情は、現在の私たちにその生い立ちを今にも語りかけてくれそうである。

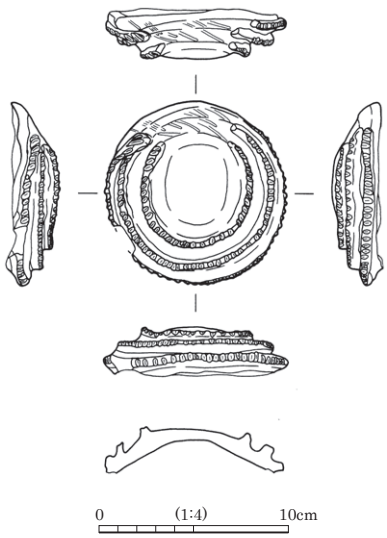
コラム２　人面付土器の蓋（ふた）

平成18・19年度に行われた西一本柳遺跡の第14次調査では、本例（上記の人面付土器）の頭頂部に非常によく似たつくりをもつ蓋が発見された。３列の紐帯が3/4ほど貼り付けられたものである。内面には幅５㎜の外周に沿った円形の欠損痕があり、これはかえりが欠損していると推測できよう。弥生時代中期後半に位置づけられる２５号住居址から出土している。

口径は8.6㎝とやや大きいため、これは本例と合わさるものではないだろうが、同じような人面付土器の蓋である可能性が高いと思われる。おそらく本例と同様に紐帯がない部分が後ろになるのであろう。これとぴったり合わさる人面付土器がまだ地下に眠っているのかもしれない。

（森泉かよ子2010『西一本柳遺跡ⅩⅣ』佐久市教育委員会）

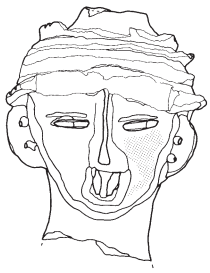
（櫻井秀雄）

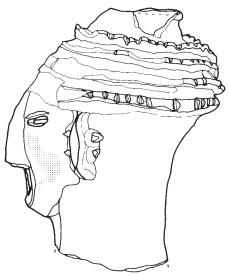


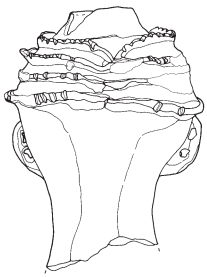
西一本柳遺跡　H25 号住居址出土

西一本柳遺跡の人面付土器

0 (1:4) 10cm







西一本柳遺跡の人面付土器出土地区は、西一里塚遺跡群から1.5kmほど離れている。中佐都小学校へも２kmほどの距離である。

写真提供：佐久市教育委員会
写真撮影：小川忠博
報告書：林幸彦1994『西一本柳遺跡Ⅰ』佐久市教育委員会
写真はほぼ実物大

西一里塚遺跡群出土の人形土器

櫻井秀雄

佐久市平塚から岩村田地籍にひろがる西一里塚遺跡群は、昭和47年以来、数次の発掘調査が行われてきており、弥生時代中後期の集落跡や墓跡などがみつかっている。なかでも昭和48年の調査では千曲川流域では初めてとなる環壕の発見があり、注目を集めてきた遺跡である。そして平成16年から18年には、中部横断自動車道建設に伴う発掘調査が行われ、ここで２点の人形土器が発見されたのである。

人形土器№.１

人形土器№.１は、頭頂と底面がわずかに欠損・剥落しているものの、頭部から底部までの全体像がわかる資料である。現存する全長は28.2cmを測る。胴部の最大径は欠損しているが12cm以上はあると推定できる。

頭部は中実である。頭頂部は盛り上がっており、これは髪形を表現していると思われる。後頭部をみると大部分は剥落しているが頭頂から粘土紐を貼り付けた痕跡がうかがえる。髪を中央で編んで垂らした形を示していると考えられる。

顔面は左側が欠損しているため、鼻・口と右目、右耳が残っている。顔面は上向きであり、30度ほどの角度を有する。顎の一部も欠損する。鼻は高く、鼻筋が弓なりに曲がるいわゆる鷲鼻状である。鼻孔は２ケで約８mmの深さまで穿されている。口は「⊥」状に刻まれている。右目は深く彫り込んで形成されている。右耳は中央やや上側に穿孔を施しているが、この小孔より下側は一部欠損している。こうした小孔と沈線で耳を表現していることがわかる。このように顔のつくりは異形な様相を呈している。また器面調整はやや粗く、鼻と耳は貼り付けていることがよく観察できる。

赤彩の痕跡は右目から鼻の上側、顎・頸部の一部に残されている。頸部では後ろ側にも赤彩が認められている。赤彩は胸部から底部に至るまでその痕跡が認められる。

左腕部は指頭痕がよく残り、指は先端を欠損しているが５本を表現する。右腕は欠損するが、剥落部分は左腕より下側にあることがわかるため、左右の腕の伸びる方向はやや異なっていたと思われる。

胸部～底部は欠損部分が多いが、胸部に開口部が認められる。横幅は約４cmをはかるとみられる。縦幅は下側が欠損しているため不明であるが、割れ口の観察から最大でも約1.5～２cm程度ではないかと推測する。こうした開口部の存在から土偶形容器の系譜を引くものであることがわかる。ただし開口部はものを出し入れするには小さすぎるため、その機能は形骸化していたことがうかがえよう。

頭部、左腕部、胸部～底部はそれぞれ出土地区を異とする。左腕部が溝下層から出土した他は遺構外出土であるが、円形周溝墓・方形周溝墓・木棺墓・土器棺墓等がみられる墓域にあたるため、墓との深い関連性が指摘できよう。また出土地点が分かれていることから意図的に破砕された可能性も否定できない。所産時期は溝の時期や周辺の遺構の状況などから弥生時代後期と考える。

墓域から出土したことに加えて異形な顔の表現を呈していることからすれば、墓もしくは墓域における辟邪・魔除けのような役割が想定できようか。

人形土器№.２

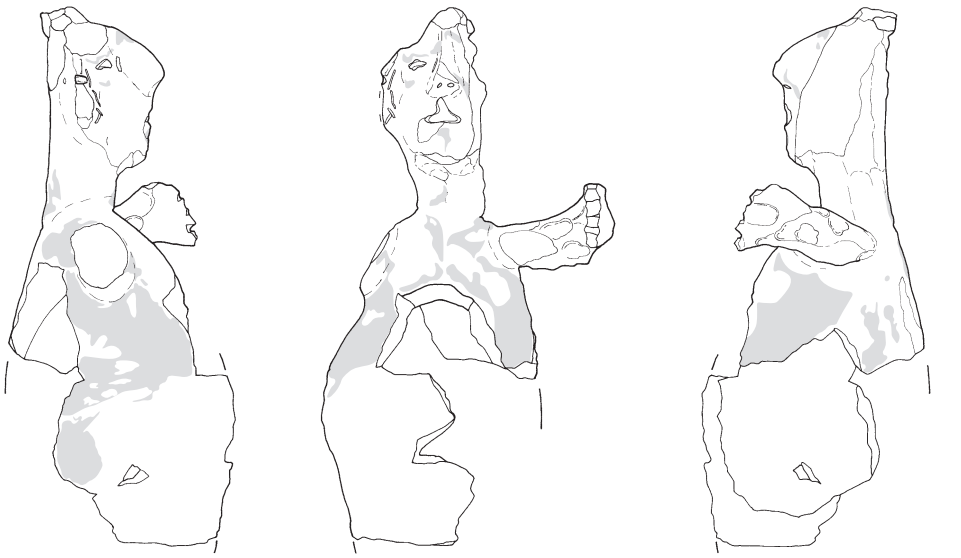
人形土器№.２は頭部の顔面右半部のみが発見されたものである。遺構外からの出土であり、現存する全長は5.6cmを測る。頭部は中空であり、開口部は後頭部側にあることがわかる。耳には２ケの小孔が穿がれている。口も孔で表現している。耳の背後には髪形を表現したとみられる突起が広がっている。これが髷状であるとみれば女性をあらわしていると言えようか。

わずかに剥落した箇所もあるが顔面は扁平であるのが特徴であり、いれずみ等はみられない。のっぺりとした顔である。顔面には酸化鉄の付着が目立っている。内面には指頭痕が明瞭に残る。赤彩は少なくとも残存部分においては認められない。

このように人形土器№.２は、№.１とはおもむきを異とする。№.１のような異形な雰囲気は感じられず、やさしい印象がする造形である。口は小さめとなっている。頭部が中空で開口部が後頭部にあることも№.１と異なる。人形土器のなかでもタイプが違う２者がみられることがわかる。報告書では、異形な様相を呈する№.１を人形土器Ｂ類、非異形な№.２を人形土器Ａ類と分類してみた。両者は形状のみならず、その性格も異なっている可能性がある。

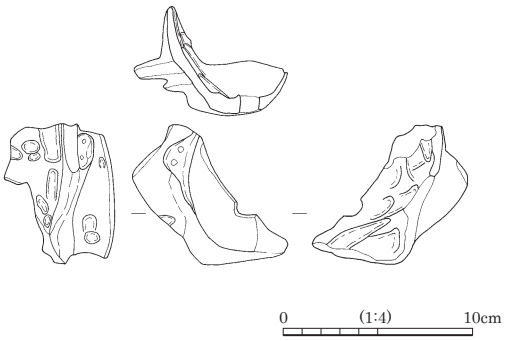
出土場所については、こちらも遺構外からの出土であり、所産時期をうかがい知ることは難しい。周辺の遺構には周溝墓などの墓跡や溝跡、遺物集中などがみられ、弥生時代中期後半から後期に比定される。髷状の頭部や顔面の表現などに土偶形容器の作り方を踏襲しているところ（４頁小山論文参照）がみられることから、№.１例よりも古相である可能性も高い。弥生時代中期後半も含めた時期の範囲でとらえた方がよいと思われる。

西一里塚遺跡群の人形土器No. 1



西一里塚遺跡群の人形土器 No.1

西一里塚遺跡群の人形土器No.２（左：右側面、右：正面）



西一里塚遺跡群の人形土器No.２

No.１のうち、頭部と左腕部を除く胸部以下の部位は整理作業でみつかった。内面に指頭痕が顕著に残る土器の破片がいくつかみられ、そのなかでも、何かが剥がれたような痕跡のあるものに目がとまった。「もしかして付くかも？」となにげなく左腕とあわせてみたところが、なんとぴったり接合したのである。これが人形土器の全体像がよみがえる第一歩であった。

写真提供：長野県埋蔵文化財センター
報告書：櫻井秀雄2012『濁り遺跡　久保田遺跡　西一里塚遺跡群』長野県埋蔵文化財センター
写真は、No.１が約2/3の縮尺、No.２がほぼ実物大

赤彩された弥生顔面
－佐久市中佐都小学校所蔵資料－

堤　　隆

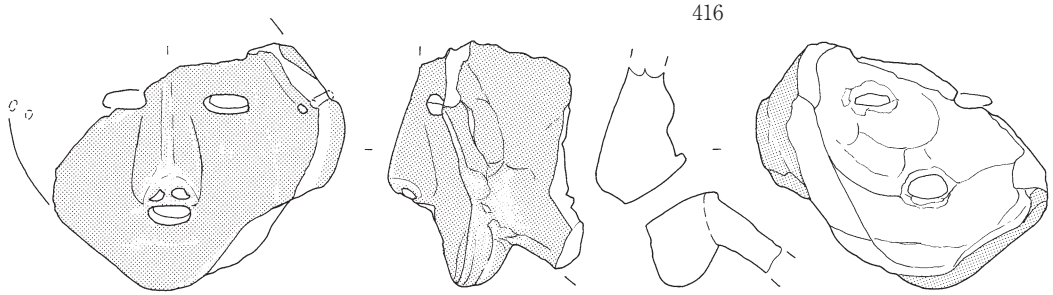
本資料は、佐久市の中佐都小学校のガラスケースに展示されているものである。残念ながら、「土偶・弥生・石キ・学校」と記載があるものの、出土地の記載はない。ただ、いずれにせよ前頁に人形土器の掲載がある西一里塚遺跡群と同じ佐久市中佐都地区出土であることは間違いないものとみられる。

本資料は、赤彩の状況から弥生後期の可能性が高い。弥生の顔面（人面）付土器は、中期にみられる黥面や有髯土器がある一方（人面付土器Ａ）、後期に残り鼻筋の通り黥面などとはならないもの（人面付土器Ｂ）がある（石川 1987、黒沢 1997）。

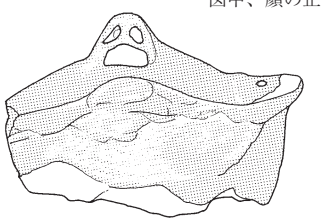
後者のＢには、よく知られた有馬遺跡例（群馬）やひる畑例（神奈川県）があるが、本例もこれらと同様な資料と理解することができよう。

佐久地域では、西一里塚遺跡群の№２例の小破片も、本資料と同様な性格のものと考えてよいかもしれない。一方、本号６・７頁の西一本柳遺跡の中期例が本例に連なる形態と理解してよいか、大方のご教示をいただければ幸いである。

引用文献
石川日出志　1987 「人面付土器」『季刊考古学』19
黒沢浩　1997 「東日本の人面・顔面」『考古学ジャーナル』416



図中、顔の正面写真は実物大、それ以外の写真、および図は 1/2。網点が赤彩部分



本資料は、顔面の残存部の高さ 6.5㎝、幅 7.7㎝、厚さ 5.2㎝を測る。赤彩された顔面部は、表側から、眼の孔、口の孔が穿孔され貫通するが、鼻孔２つは貫通しない。また、向かって右側の耳部には穿孔が２つ観察される。断面の粘土のつなぎ目からは、板状の顔面部を本体に接合したものとみられ、壷状の器体の存在が想定されようか。

中佐都小学校の弥生顔面資料

土偶にたどれる系譜、埴輪へつながる要素

土偶形容器、人面付土器（顔面付土器）、人形土器のなかには、縄文土偶からの系譜を引く要素と古墳時代の埴輪へつながる要素が内包している。

土偶形容器が縄文時代の黥面土偶の系譜を引いていることは設楽博己氏をはじめとする論者により指摘されてきており、それは腕が付けられていることや線刻による黥面表現などからわかる。黥面は中期前半期にみられる人面付土器（人面付土器Ａ）にも施されることがあるが、弥生時代中期後半から出現する人面付土器の一群（人面付土器Ｂ）や人形土器には黥面はみられないため、これらは前代までのものとは系譜を異にするとみられる。しかしながら後者においても開口部が頭部や口、胸部などにみられる。これは再葬に伴う蔵骨器として使用された土偶形容器の開口部のなごりであろう。土偶形容器は骨を入れるために頭頂部に開口部をもつ。一方、西一里塚遺跡群№１例は胸部に開口部がみられるが、ごく小さいため蔵骨器として使用したとは考えられない。機能は土偶形容器とはすでに別ものになっていたとみられるが、開口部が形骸化しながらも残っているのは、土偶形容器の系譜を引くことを示しているといえよう。

また西一里塚遺跡群№１例の口は「⊥」状の表現であるが、これは著名な山梨県黒駒遺跡例などの縄文土偶にもみられる表現である。口に類似した「＋」状をもつ土偶には佐久市岸野の中村遺跡、望月地区の堀端遺跡で出土例がある。また小諸市郷土遺跡では「△」状を呈するものがあるがこれも同様な表現とみたい。

古墳時代の埴輪、特に盾持人埴輪との関連性については、本号において設楽博己氏が指摘されている。

また先述した口の「⊥」状表現は古墳時代の埴輪にも認められている。埼玉県東松山市おくま山古墳の「盾持人埴輪」をはじめ、埼玉県長瀞総合博物館所蔵の「踊る男」埴輪、和歌山県大日山35号古墳の「両面人物埴輪」で、この「⊥」状の表現がみられる。ここからも埴輪とのつながりを見て取りたい。

岩松保氏は京都府温江遺跡出土の人面付土器を考察するなかで、耳などの表現に共通点があることから縄文土偶との関連性を指摘し、さらに埴輪との共通性にも言及している（岩松2011）。

私もとりわけ西一里塚遺跡群№１例など後期のものには、埴輪へとつながる要素が少なくないと考える。そして、設楽氏が指摘するように盾持人埴輪と共通する「辟邪」の性格が色濃く出ていることなどから、前代までの人面付土器などとは一線を画した「プロト（原型）埴輪」とでも言えそうなありかたをしているのではないかと理解している。　（櫻井秀雄）

引用参考文献

岩松　保2011「人面付き土器の系譜（上）（下）」『京都府埋蔵文化財情報115・116号』
春成秀爾1997「身分と地位をあらわす」『歴史発掘④　古代の装い』講談社
設楽博己他1999『新弥生紀行』朝日新聞社
設楽博己2001「男子は大小となく皆黥面文身ー倭人のいでたち」『三国志がみた倭人たち　魏志倭人伝の考古学』山川出版社
設楽博己2007「弥生時代の男女像」『考古学雑誌』第91巻第２号
設楽博己2011「男と女の弥生時代」『列島の考古学　弥生時代』河出書房新社
櫻井秀雄2012『濁り遺跡　久保田遺跡　西一里塚遺跡群』長野県埋蔵文化財センター

♪　編集後記　♪

西一里塚遺跡群から後期の出土例をみたことで、弥生時代の中期前半（館遺跡）、中期後半（西一本柳遺跡）に加えて後期の顔もそろった。中佐都小学校所蔵品も加わった。時期ごとに異なる顔を見比べてみるのも楽しい。変わるところがある一方で、何かつながるところも感じられてくる。用途は当初の蔵骨器から変化していったようだが、不明な点もまだまだ多い。縄文土偶にしても埴輪にしてもその機能にはいまだわからないところが少なくないのは、顔を表現する造形には時代を問わず私たちをとりこにする、そして悩ます何かがあるのであろう。それだけ当時の人々の思いが込められているということなのだろうか。

（さくらい）

佐久考古通信　№110

発行所　佐　久　考　古　学　会
〒384-0091 小諸市御影新田1945-6
櫻　井　秀　雄　方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267（32）8922

発行日　2012年６月17日
発行者　藤　沢　平　治
編集者　櫻　井　秀　雄
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク